

大阪府埋蔵文化財調査報告 2009-3

# 蔀屋北遺跡 I

—なわて水みらいセンター建設に伴う発掘調査—

本文編

大阪府教育委員会

## 『藤屋北遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告2009-3 正誤表

本文編

訂正箇所	誤	正
51頁の上から1行目	土坑C3998	土坑C3837
53頁の下から5行目	第628図11	第628図5
54頁の上から5行目	第628図11	第628図5
71頁の下から5行目	U字形板状土製品(第618図、 U字形板状土製品(第612図、	
82頁の下から7行目(一部削除)	22~24・33~37 33~37	
91頁の下から8行目	第209図26~35	第209図26~37
102頁の上から10行目	カマFB131097	土坑B131097
103頁の上から3行目	土坑B130417	構B130417
103頁の下から1行目	土坑B130417	構B130417
108頁の上から2行目	B18a8	A19j1
108頁の下から14行目	土坑B130417(第42図)	構B130417(第470図)
108頁の下から10行目	土坑B130417	構B130417
131頁の下から11行目	圓盤180~181	圓盤180~182
138頁の上から17~23行目	須恵器蓋	須恵器蓋壺
139頁の上から12行目	須恵器壺	須恵器蓋壺
139頁の下から14行目(追加)	高坏が出土した	高坏、壺、鉢が出土した
140頁の下から1行目(追加)	韓式系土器壺	韓式系土器平底壺
141頁の上から10行目	壺、壺、はそう	蓋壺、意、壺、はそう
141頁の上から16行目	壺	蓋壺
142頁の上から11行目	壺	蓋壺
146頁の上から14~18行目	土坑E090832	ピットE090832
146頁の下から14行目(追加)	須恵器壺蓋	須恵器系土器高坏(22)、 須恵器壺蓋
146頁の下から2行目	土坑E090439	ピットE090439
147頁の上から2行目	土坑E090439	ピットE090439
187頁の上から1行目	圓版243e	圓版243e
192頁の上から13行目(追加)	考えられる	考えられる(第440図)。
200頁の下から11行目	韓式系土器	韓式系土器
201頁の下から5行目	圓版203~208・251a	圓版203~208・249a
202頁の下から14行目	須恵器壺	須恵器壺蓋
202頁の下から7行目	土坑B130417	構B130417
203頁の下から13行目	須恵器壺	須恵器蓋壺
204頁の下から3行目	須恵器壺	須恵器蓋壺
205頁の上から6行目	須恵器壺	須恵器蓋壺
208頁の上から7行目	須恵器壺蓋(537-1~16、 18)	須恵器壺蓋(537-1~16)、陶 質實上蓋壺(537-18)
208頁の上から8行目	須恵器蓋(537-30)	質實上蓋壺(537-30)
217頁の上から1行目	第567図~第563図	第567図~第573図
227頁の下から7行目~228頁の 上から20行目まで(削除)	E調査区路出土地物の 説明	(削除)
237頁の付1 左側上から16行目	土坑B130417	構B130417
241頁の付2 右側下から6行目	土坑E090439	ピットE090439
241頁の付3 右側下から5行目	土坑E090832	ピットE090832

## 総括・分析編

訂正箇所	誤	正
3頁の表3の10つ図面No.	190	186
114頁の第21図の図中	偏表 偏裏	偏表 偏裏
114頁の上から1~6行目	輪尾	輪尻
116頁の上から14~21行目	輪尾	輪尻
121頁の第723図aのキャプション	偏側面	偏側面
165頁の表39表の図面No.	607~2	607~3
243頁の分析資料1の図面番号(追加)	329~26	
284頁の資料番号1999の詳細	右側P3~M3まで連2、P3~M1、右側P2~M2まで連2、P2~P4	

## 図版編

訂正箇所	誤	正
図版186 左上端	(追加)	土坑A1135 七輪器壺
図版204 4段目左	(追加)	構B1950上層 須恵器高坏
図版210 左上端	(追加)	構A429 須恵器高坏
図版212 3段目右	(追加)	大溝E090001中層 須恵器壺身
図版222 右下端	(追加)	大溝F中層 土器器体
図版235 右上端	(追加)	大溝E090001中層 円筒埴輪
図版271 キャプション	(1~3) 下頸骨R, (4) 下頸骨L (1~3) 下頸骨L, (4) 下頸骨R	

## 図面編

訂正箇所	誤	正
21~22頁の第42図の図中	131083が2つある	131081に接するものを131082とする
32頁の第57図の図中	右下の2573	削除
観察表編(CCDに収納)		
訂正箇所	誤	正
3頁の図面170~5の器種	陶質土器飾	陶質土器蓋
4頁の図面170~26~31の器種	土師器	土師質
7頁の図面173~15の遺構No.	2584	2484
10頁の図面175~33の遺構No.	1922	1922
11頁の図面177~15の器種	須恵器裏	土師器裏
15頁の図面182~17~27の遺構種別	土坑	周溝
15頁の図面182~17~27の層位など (追加)	周溝B131101と同じ	
16頁の図面183~6~7の遺構種別	土坑	周溝
16頁の図面183~6~7の層位など (追加)	周溝B131101と同じ	
29頁の図面201~14の遺構種別	落ち込み	土坑
29頁の図面201~16の器種	須恵器高坏	須恵器系土器高坏
33頁の図面205~15の遺構No.	2271, 2272	2771, 2772
35頁の図面207~12の器種	韓式系土器	須恵器壺
38頁の図面211~10の器種	土師器壺	土師器高坏
47頁の図面220~26~27の遺構種別	土坑	ピット
53頁の図面228~33の器種	土師器鉢	土師鉢
53頁の図面229~20~21の遺構種別	溝	ピット
54頁の図面230~8の居住坡等	区画溝	北東
54頁の図面230~9の調査区	A	D
57頁の図面234~1の居住坡等	南西	北東
57頁の図面234~1の調査区	A	D
63頁の図面323~6の備考	(追加)	支脚
65頁の図面325~4の遺構種別	溝	井戸
82頁の図面347~21の器種	土師器口鉢部	土師器口鋸部?
82頁の図面347~21の遺構種別	ピット	土坑
93頁の図面427~1の器種	土師器鉢	土師器體
110頁の図面494~8の備考	外側格子タキ	外側平行タキ
111頁の図面496~29の遺構種別	溝	ピット
128頁の図面537~18の器種	須恵器蓋	陶質土器蓋
128頁の図面537~30の器種	須恵器体	陶質土器体
128頁の図面537~45~47の備考(追加)	下層、下層、陶質土器?	下層、下層、陶質土器?
134頁の図面545~15~17の器種	土師器	土師質
154頁の図面572~21の備考	瓦底須恵器	瓦質須恵器
136頁の図面575~3~5の器種	韓式系土器質土器	韓式系土器質土器
164頁の図面506~3の居住坡等	北東	区画溝
164頁の図面606~3の遺構種別	土坑	溝
164頁の図面607の遺物No	1~1	1
164頁の図面607の遺物No	1~2	2
164頁の図面607の遺物No	2~1	3~1
164頁の図面607の遺物No	2~2	3~2
170頁の図面626~7~地区的名	B19~h7	B19~e5
171頁の図面630~14の遺構・層名	ピットC2359	掘立C7のピットC2359
180頁の個体番号D028の遺構・層名	ピットD1004	掘立D1のピットD1004
180頁の個体番号D052の遺構・層名	カマドD1421	窓穴D21のカマドD1421
181頁の個体番号E013の遺構・層名	ピットE090708	窓立E10のピットE090708
187頁の図面638~06の遺構名	落ち込みC3224	土坑C3224
191頁の上から10番目の歯石の遺構名	土坑C4746	井戸C4777
194頁の上から2番目の西向合葬の遺構名	ピットA1613	井戸A1614
193頁の図面番号641~9の図版削除	252	
195頁の図面番号646~4の遺構名	ピット5090524	溝B090524
195頁の図面番号646~4の地区名	B19~d5	B19~e4
	257~5~1	257~7~1
	257~5~2	257~7~2

# 蔀屋北遺跡 I

—なわて水みらいセンター建設に伴う発掘調査—

本文編

大阪府教育委員会



a. 遺跡遠景（東上空から）



b. 遺跡遠景（西上空から）



a. 北東居住域（C調査区）全景



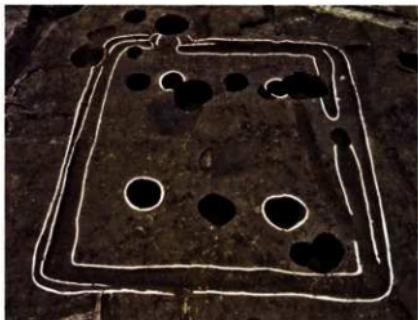
b. 据立柱建物 C 1

井戸C2476  
c. 上部 井筒  
d. 下部 井桁  
e. 同





a. 北東居住域 (B 調査区) 全景



b. 竪穴住居 B 2



c. 井戸 B 131000



a. 北東居住域（D 調査区）全景



b. 井戸 D 474 遺物出土状況



c. 同上 細部



a. 南東居住域（A調査区）全景



b. 井戸 A 494 遺物出土状況



c. 同左（細部）



a. 南西居住域（A調査区）全景



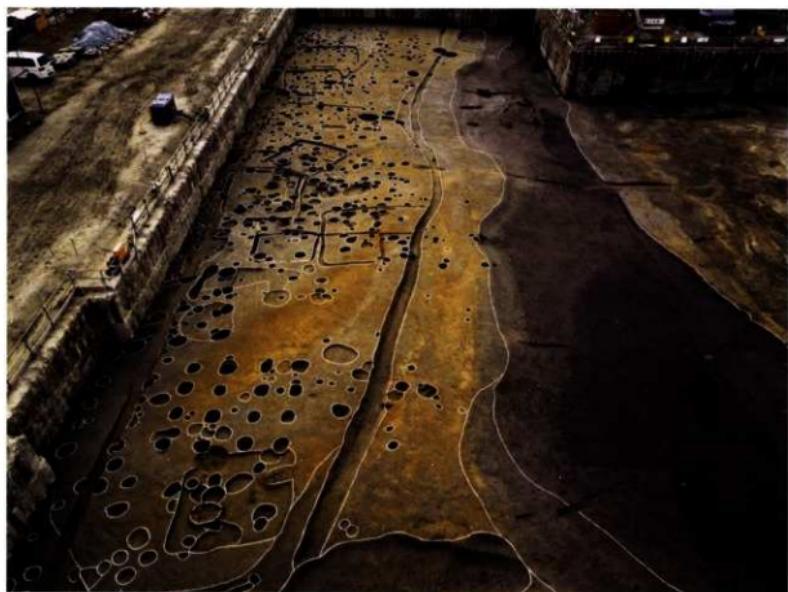
b. 製塙土器土坑 A 1135 (試掘部)



c. 同上 断面



a. 南西居住域（A 調査区）馬埋葬土坑 A 940



a. 南西居住域（E調査区）全景



b. 井戸 E 090806



c. 同左 遺物出土状況



a. 北西居住域（D調査区）全景



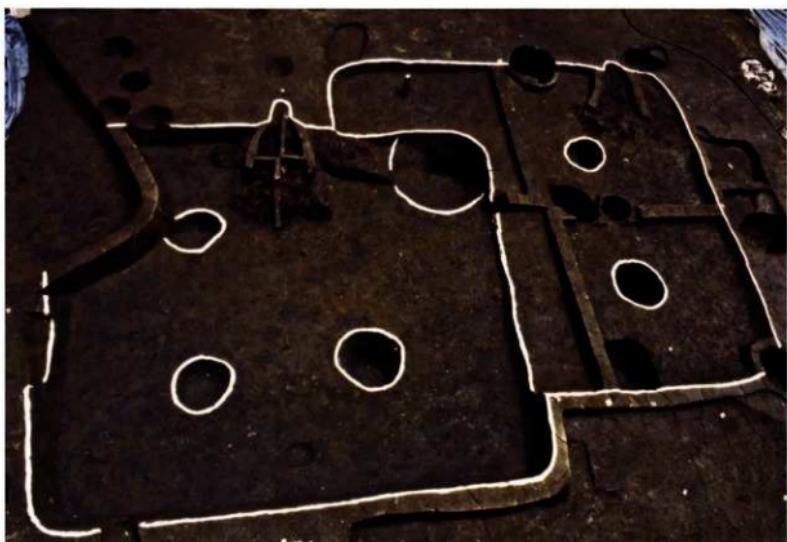
b. 同上 竪穴住居群



a. 西居住域（F調査区）全景



b. 同上 竖穴住居群



a. 穫穴住居 F935 (左)・1134



b. 穫穴住居 F935 カマド



a. 区画溝 B130240 全景



b. 区画溝 B130670 遺物出土状況



a. 区画溝 A950 全景



b. 同上 遺物出土状況



a. 大溝 H 11 輪あぶみ出土状況



b. 大溝 D 900 遺物出土状況



a. 大溝 E090001 全景



b. 同上 鐘・轡 出土状況



a. 大溝 F 中層



b. 同上 鞍 出土状況



a. 木製鞍 上：表面 下：裏面



b. 木製輪鎧



鍼轡



U字形板状土製品



韓式系土器 移動式カマド



土師器長胴壺の変遷



韓式系土器・土師器壺の変遷



韓式系土器斜格子タタキ



韓式系土器格子タタキ



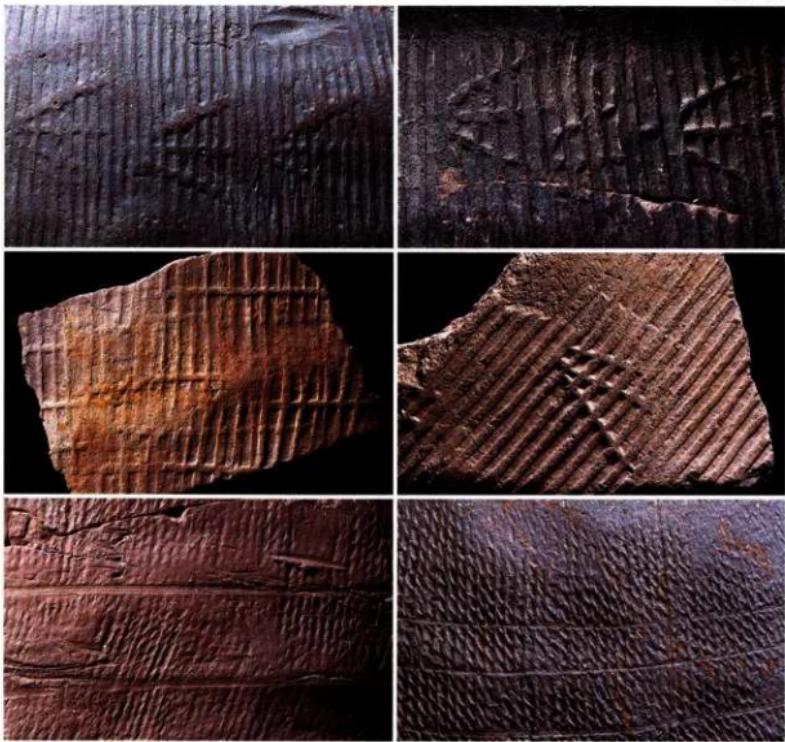
黒色研磨土器



土師器高坏の変遷



陶質土器



韓式系土器

上：鳥足文タタキ  
中：単線横走集線文タタキ  
下：網席文タタキ

韓式系土器

上・中：鳥足文タタキ  
下：網席文タタキ



滑石製模造品と玉類



左上：ガラス玉  
左下：ト骨  
右下：鹿角製品



## 序 文

大阪府教育委員会が平成13年度より実施しました、なわて水みらいセンター建設に伴う藤屋北遺跡の発掘調査は、当初の予想を上回る多大な成果を得られつつ、平成21年度を以って完了するに至りました。

平成13年度から実施しました各主要施設建設予定地の発掘調査につきましては、年度毎に概要を報告しておりますが、この度その集大成となる発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

藤屋北遺跡が所在する地域は、古墳時代中期から馬の飼育が行われた牧場である「河内の牧」が存在した地とされた地域ですが、今回の一連の調査成果によって古墳時代中期から後期にかけての一大集落跡の存在が明らかとなり、検出された遺構や出土した遺物から、当地が朝鮮半島から移り住んだ馬飼い集団が営んだ集落と判明し、日本書紀にも記載が認められる河内の牧の実態が明らかになってきました。

藤屋北遺跡の発掘調査も、開始以来9年が経過し、ようやく終息を迎えたが、さらに今後の周辺地域における調査成果を加えることによって、「河内の牧」の実態がさらに明確なものになってゆくでしょう。

最後になりましたが、長期間に及ぶ調査に際しまして、地元住民の方々および関係各位に多大なご協力をいただきましたことを深く感謝いたしますとともに、今後とも本府の文化財保護政策に一層のご理解とご協力を賜りますようお願いいたします。

平成22年3月

大阪府教育委員会事務局  
文化財保護課長 野口 雅昭

## 例　　言

1. 本書は、大阪府教育委員会が寝屋川流域下水道事業なわて水みらいセンター建設に先立って実施した、四條畷市砂・部屋に所在する部屋北遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大阪府都市整備部の依頼を受けた大阪府教育委員会が、文化財保護課調査第一グループの担当で、平成11年度および平成12年度に実施した試掘調査の結果をふまえ、主要施設建設予定地を対象として、平成13年度から平成19年度まで逐次実施した。  
遺物整理作業は文化財保護課調査管理グループが担当し、現地調査と並行して平成21年度まで実施した。各年度の調査対象地、調査担当、整理担当は以下の通りである。

調査地区	調査面積	調査期間	現地担当者	整理担当者
H地区	60m <sup>2</sup>	H13. 4. 2～H13. 6. 7	宮崎泰史	山田隆一、林日佐子、小浜 成
A調査区	5,400m <sup>2</sup>	H13. 5. 25～H15. 3. 29	山上 弘	山田、林、小浜
C調査区	5,713m <sup>2</sup>	H14. 5. 7～H16. 1. 5	藤田道子	林、小浜、藤田道子
B調査区	5,400m <sup>2</sup>	H15. 4. 16～H16. 7. 28	岩瀬 透	竹原伸次、林、藤田
AB-E調査区	1,800m <sup>2</sup>	H16. 6. 1～H16. 9. 27	堀江門也	竹原、林、藤田
AB-W調査区	1,800m <sup>2</sup>	H16. 6. 1～H16. 9. 27	堀江	竹原、林、藤田
D調査区	2,010m <sup>2</sup>	H16. 12. 9～H17. 12. 17	宮崎	林、藤田
E調査区	3,140m <sup>2</sup>	H17. 1. 5～H18. 1. 20	岩瀬	三宅正浩、藤田
D-2調査区下層	880m <sup>2</sup>	H18. 1. 25～H18. 2. 20	岩瀬	三宅、藤田
F調査区	2,000m <sup>2</sup>	H18. 9. 9～H19. 9. 15	岡田 賢	三宅、藤田

3. 調査の実施にあたっては、大阪府都市整備部下水道室、大阪府東部流域下水道事務所をはじめ、四條畷市教育委員会、地元の砂・部屋自治会など、多くの方々のご協力を得た。
4. 部屋北遺跡発掘調査に係わる写真測量は、以下の業者に委託して実施し、撮影フィルムは各受託業者が保管している。

委託年度	調査区	委託名	受託業者
平成13年度	A調査区	写真測量	(株) ウエスコ
	A調査区	写真測量（その2）	(株) かんこう

平成14年度	C調査区	写真測量（その3）	(株)ワールド
平成15年度	B調査区	写真測量（その4）	(株)日建技術コンサルタント
	D調査区	写真測量（その5）	(株)国土開発センター
平成16年度	E調査区	写真測量（その6）	(株)アコード
平成17年度	F調査区	写真測量（その7）	(株)かんこう

5. 本書に掲載した現場写真は主に各調査担当が撮影したが、現場写真の一部と遺物写真の撮影は有限会社阿南写真工房に委託した。

6. 調査の際に出土した鉄製品、鹿角製品、木製品、馬骨等の保存処理、ならびに各種分析を、以下の業者に委託して実施した。

(保存処理)

年度	事業名	受託業者
13年度	遺物保存処理（讃良郡条里）	元興寺文化財研究所
14年度	馬埋葬土壌取り上げ	元興寺文化財研究所
	木製品保存処理	元興寺文化財研究所
	鉄製品保存処理	元興寺文化財研究所
15年度	遺物保存処理	元興寺文化財研究所
	遺物保存処理（その2）	元興寺文化財研究所
	馬埋葬土壌保存処理	京都科学
	馬埋葬土壌取り上げ	元興寺文化財研究所
	遺物保存処理（その3）	元興寺文化財研究所
16年度	馬埋葬土壌用展示ケース	京都科学
	木製品保存処理（その4）	吉田生物研究所
17年度	木製品保存処理（その5）	大阪市文化財協会
	木製品保存処理（その6）	吉田生物研究所
18年度	鉄製品・鹿角製品保存処理	京都科学
	木製品保存処理（その7）	京都科学
	鞍保存処理及びレプリカ	京都科学
	木製品保存処理（その8）	吉田生物研究所
19年度	鉄・鹿角製品保存処理（その2）	京都科学
20年度	木製品保存処理（その9）	吉田生物研究所

## (分析)

年度	事業名	受託業者
14年度	C14年代測定	パリノ・サーヴェイ
	珪藻分析	パリノ・サーヴェイ
15年度	種実同定分析	パリノ・サーヴェイ
	花粉分析	パリノ・サーヴェイ
	井戸栓衝種鑑定・DNA鑑定	パリノ・サーヴェイ
	C14年代測定	元興寺文化財研究所
16年度	樹種鑑定	パリノ・サーヴェイ
	樹種鑑定（その2）	パレオ・ラボ
	植物珪藻体分析	古環境研究所
	微細堆積相分析	パリノ・サーヴェイ
17年度	樹種鑑定（その3）	パリノ・サーヴェイ
18年度	樹種鑑定（その4）	パリノ・サーヴェイ
	種実同定分析	パレオ・ラボ
	漆塗膜分析	パリノ・サーヴェイ
	土壤分析	古環境研究所
19年度		
20年度	ガラス玉蛍光X線分析	パレオ・ラボ
	製塙土器付着物の珪藻分析	パレオ・ラボ

7. 本調査の調査番号は、平成13年度（01001・H地区、01007・A調査区）、平成14年度（02007・A調査区、C調査区）、平成15年度（03001・C調査区、B調査区、03046・D調査区）、平成16年度（04001・B調査区、04002・D調査区、04005・A B拡張区、04054・E調査区）、平成17年度（05001・E調査区、05030・F調査区、05059・D-2調査区下層）、平成18年度（06002・F調査区）である。

8. 調査にあたっては、以下の方々よりご指導・ご教示をいただきました。記して感謝の意を表します。

安部みき子、池田 研、諫早直人、井上喜代志、林 永珍、大竹弘之、小野山節、北野 重、木下 壴、金 大煥、金 武重、權 五榮、櫻井敬夫、佐野喜美、塙山則之、鹿野 墓、白

石太一郎、積山 洋、徐 賢珠、高松雅文、田中清美、千賀 久、西原雄大、野島 稔、橋本俊範、濱田延充、坂 靖、菱田哲朗、別所秀高、増田 啓、松井 章、松田順一郎、真鍋成史、丸山真史、光谷拓実、村上 始、柳本照男、山内紀嗣、山口誠治、吉井秀夫（敬称略）

9. 本書の執筆は主に各調査担当者および岡本敏行（調査第1グループ主査）が分担したが、分析編の動物遺存体については安部みき子氏および丸山真史氏に、蔀屋北遺跡の自然環境分析等を辻本裕也氏・辻 康男氏および別所秀高氏に、出土須恵器の蛍光X線分析を三辻利一氏に執筆をお願いし、出土ガラス玉の蛍光X線分析、木製漆塗り鞍の漆塗膜分析については、分析報告書の報文を転載した。

本書の編集は岩瀬、藤田、宮崎、藤永正明（調査第1グループ総括主査）が担当した。

10. 本書は300部作成し、一部あたりの単価は27,797円である。

## 凡 例

1. 本書で用いた座標値は日本測地系（平面直角座標第VI系）であるが、遺構全体図には世界測地系座標値をも併記している。また、標高は東京湾標準潮位（T.P.）で示した。北は座標北を示す。なお、X・Y座標値の単位はmで表示している。
2. 遺構の検出地区を表す際に、例えば、本来の正式な地区名がI6-12-A18-j5の場合、全調査区に共通する部分を省略し、A18j5というように記述している。
3. 検出遺構の表記方法は、調査区ごとに異なっていたため、一部の調査区で使用していた遺構の種類のアルファベット表記（S B、SKなど）を漢字表記（竪穴住居、土坑など）に統一し、遺構番号の前に調査区表示を付した。また、複数の遺構で構成されている竪穴住居や掘立柱建物などの場合は、構成する柱穴ごとに番号を付すとともに、竪穴住居D 1あるいは掘立柱建物B 1などのように、建物単位で新たに簡素化した番号を付している。
4. 古墳時代中・後期の遺構については、調査成果を基に設定した居住域ごとに調査区を超えて説明している。なお、本文で居住域ごとに説明を加えた遺構が多いため、付表1～付表5として、本文編の巻末に各遺構の掲載頁を一覧表で示している。
5. 図面については本文編、図面編、総括編の3編に分散して掲載しているが、図面（挿図）番号は通し番号を付している。したがって図面編と総括編の図面（挿図）番号は1から始まるものではない。  
各編に掲載した図面（挿図）は以下の通りである。なお、分析編に掲載された挿図・写真等については章毎に独自の番号を付し、その標記方法も統一したものではない。  

本文編掲載 第1図～第14図、図面編掲載 第15図～第694図、  
総括編掲載 第695図～第745図
6. 挿図（図面）の遺物番号と写真図版の遺物番号は一致しているが、図版にのみ掲載しているものは、この限りではない。
7. 木製品の木取りについては、断面図内に木目を模式的に図示している。
8. 須恵器の型式編年は、大阪府教育委員会「陶邑III」によっているが、他の編年案との対応

については本文編の巻末に付表6として対照表を掲載している。

9. 土器実測図の断面については、須恵器は黒塗り、黒色研磨土器は網掛け、韓式系土器、須恵器系土器、土師器は白抜きとした。
10. 観察表編はCD-ROMに収納して本文編の文末に添付している。閲覧にはAdobe ReaderあるいはMicrosoft Excelが必要です。
11. 遺物の色調は、小山正忠・竹原秀雄編「新版標準土色帖」第5版に準拠し、JIS記号で表示している。また、土層断面の色調に関しては一部使用されていない調査区があるが、あえて統一を図らなかった。

## 目 次

## (本文編)

序文

例言

凡例

目次

第1章 調査に至る経緯と調査経過.....	山上 弘・岩瀬 透.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	山上.....	1
第2節 調査経過と調査の方法.....	岩瀬.....	3
第2章 遺跡の位置と環境.....	岡田 賢.....	9
第1節 遺跡の位置と地理的環境.....		9
第2節 歴史的環境.....		12
第3章 調査の成果.....		17
第1節 層序.....	岩瀬.....	17
第1項 A・B・C調査区.....		17
1. A調査区.....		17
2. B調査区.....		18
3. C調査区.....		22
第2項 D調査区.....		25
第3項 E調査区.....		31
第4項 F調査区.....		32
第5項 H地区.....		35
第6項まとめ.....		37
第2節 繩文時代～古墳時代前期の遺構と遺物.....	山上・岩瀬.....	38
第1項 繩文時代の遺物.....	山上.....	39
第2項 弥生時代前期の遺物.....	岩瀬.....	39
第3項 弥生時代中期の遺構と遺物.....	岩瀬.....	40
第4項 弥生時代後期～古墳時代前期の遺物.....	岩瀬.....	45
第3節 古墳時代中期～後期の遺構と遺物.....	宮崎泰史・藤田道子・山上・岡田・岩瀬.....	46
第1項 北東居住域の遺構と遺物.....		46
第2項 南東居住域の遺構と遺物.....		113
第3項 南西居住域の遺構と遺物.....		119
第4項 北西居住域の遺構と遺物.....		150
第5項 西居住域の遺構と遺物.....		185
第6項 各居住域を区画する溝の遺構と遺物.....		200
第7項 集落西限の大溝と出土遺物.....		206
第4節 古代～中世の遺構と遺物.....	岡本敏行・岩瀬.....	228

第1項 飛鳥時代～奈良時代の遺構	228
第2項 平安時代前・中期の遺構	229
第3項 平安時代後期～鎌倉時代の遺構	229
第4項 古代～中世の遺物	230
付表	237
観察表編（CD-ROMに収納）	

（総括・分析編）

総括編

第1章 蔵屋北遺跡古墳時代出土土器と遺構の検討	藤田	1
第2章 古墳時代中・後期の遺物について		
第1節 増輪	岩瀬	103
第2節 石製品・玉類	山上	103
第3節 鉄製品	岩瀬	107
第4節 鋼冶関連遺物	岩瀬	112
第5節 骨角製品	宮崎	113
第6節 木製品	岡田	124
第3章「讃良の牧」の形成と展開	岩瀬	145
第4章 蔵屋北遺跡出土のU字形板状土製品について	藤田	153

分析編

第1章 蔵屋北遺跡周辺の古環境解析	辻本裕也・辻 康男	189
第2章 蔵屋北遺跡にみられる弥生時代以降の遺跡形成	別所秀高	207
第3章 蔵屋北遺跡出土ガラス等玉類の螢光X線分析	パレオ・ラボ	214
第4章 蔵屋北、鬼虎川遺跡出土硬質土器の螢光X線分析	三辻利一	233
第5章 蔵屋北遺跡出土の動物遺体	安部みき子	249
第6章 蔵屋北遺跡出土の魚類遺存体	丸山真史	325
第7章 蔵屋北遺跡出土漆塗り木製品の漆塗膜自然科学分析	パリノ・サーヴェイ	335

## 図 面 目 次

## (本文編掲載)

第 1 図	部屋北遺跡の位置	1
第 2 図	試掘調査区の位置	3
第 3 図	調査区位置図	6
第 4 図	調査地付近の地区割概念図	7
第 5 図	部屋北遺跡とその周辺遺跡	8
第 6 図	明治期の地形における部屋北遺跡とその周辺	10
第 7 図	部屋北遺跡周辺の地形環境	11
第 8 図	A調査区土層断面図	15・16
第 9 図	B・C調査区土層断面図	19・20
第 10 図	C調査区土層断面図	23・24
第 11 図	D調査区土層断面図	27・28
第 12 図	E調査区土層断面図	29・30
第 13 図	F調査区土層断面図	33・34
第 14 図	H地区土層断面図	36

## (図面編掲載)

第 15 図	D調査区下層弥生時代中期遺構面全体平面図(1/200)	1
第 16 図	竪穴住居(弥生) 1 0 0 平面図・土層断面図(1/67)	2
第 17 図	掘立柱建物(弥生) 1 平面図・土層断面図(1/67)	2
第 18 図	方形周溝墓(弥生) 1 7 平面図・土層断面図(1/60)	3
第 19 図	方形周溝墓(弥生) 1 7 周溝内遺物出土状況平面図・断面図(1/40)	3
第 20 図	土坑(弥生) 2 8 平面図・上層断面図(1/40)	4
第 21 図	土坑(弥生) 2 8 遺物出土状況平面図・断面図(1/40)	4
第 22 図	土坑(弥生) 3 4 遺物出土状況平面図・断面図・土層断面図(1/20)	4
第 23 図	土坑(弥生) 3 6 平面図・土層断面図(1/30)	5
第 24 図	土坑(弥生) 3 6 遺物出土状況平面図・断面図(1/30)	5
第 25 図	上坑(弥生) 9 平面図・土層断面図(1/30)	5
第 26 図	上坑(弥生) 9 遺物出土状況平面図・断面図(1/30)	5
第 27 図	溝(弥生) 3 7 遺物出土状況平面図・断面図・土層断面図(1/40)	6
第 28 図	溝(弥生) 6・溝(弥生) 7 2 平面図(1/60)	7
第 29 図	溝(弥生) 7 2 遺物出土状況平面図(1/25)	7
第 30 図	溝(弥生) 7 2 遺物出土状況断面図(1/25)	7
第 31 図	溝(弥生) 6 土層断面図(1/20)	7
第 32 図	包含層(A・E・F調査区)出土繩文土器・弥生式土器	8
第 33 図	遺構(D調査区下層)出土弥生式土器	9
第 34 図	遺構(D調査区下層)出土弥生式土器	10
第 35 図	遺構・包含層(D調査区下層)出土弥生式土器	11
第 36 図	遺構・包含層(A・F調査区)出土弥生式土器	12
第 37 図	弥生時代中期遺構・遺構面(D調査区下層・F調査区)出土木製品	13
第 38 図	弥生時代中期遺構面(F調査区)出土木製品	14
第 39 図	古墳時代遺構面全体平面図・配置図	15・16
第 40 図	北東扇住城遺構平面図その1(C調査区)(1/200)	17

第41図	北東居住域遺構平面図その2 (C調査区) (1/200)	19・20
第42図	北東居住域遺構平面図その3 (B・C調査区) (1/200)	21・22
第43図	北東居住域遺構平面図その4 (D調査区) (1/100)	23・24
第44図	北東居住域遺構平面図その5 (D調査区) (1/100)	25
第45図	竪穴住居C 1 6 9 3 平面図・土層断面図・柱穴断面図(1/80)	26
第46図	竪穴住居C 1 6 9 3 カマド平面図(1/20)	26
第47図	住居下層土坑C 2 4 0 5 遺物出土状況図・断面図(1/40)	26
第48図	竪穴住居C 2 4 8 4 平面図・土層断面図(1/80)	27
第49図	竪穴住居C 2 4 8 4 住居カマド検出状況平面図(1/20)	27
第50図	竪穴住居C 3 3 3 3 平面図・土層断面図(1/80)	28
第51図	竪穴住居C 3 2 1 7 平面図・土層断面図・柱穴断面図(1/80)	28
第52図	竪穴住居C 3 7 6 7 平面図・土層断面図・柱穴断面図(1/80)	29
第53図	竪穴住居C 3 8 8 8・C 4 0 4 0 平面図・土層断面図・柱穴断面図(1/80)	30
第54図	竪穴住居C 3 7 7 0 平面図・土層断面図・柱穴断面図(1/80)	30
第55図	竪穴住居C 3 8 4 0 平面図・土層断面図・柱穴断面図(1/80)	31
第56図	竪穴住居C 3 8 1 8 平面図・土層断面図・柱穴断面図(1/80)	31
第57図	竪穴住居C 2 4 4 0 平面図・土層断面図(1/80)	32
第58図	竪穴住居C 2 4 4 0 内遺構C 2 5 7 3 遺物出土状況図・土層断面図(1/10)	32
第59図	竪穴住居B 2 平面図・土層断面図・柱穴断面図(1/80)	33
第60図	カマドB 1 3 1 3 0 0 平面図・断面図(1/40)	33
第61図	カマドB 1 3 1 3 0 1 平面図・断面図(1/40)	33
第62図	カマドC 1 5 6 0・C 1 5 5 9・C 1 5 5 7 平面図・土層断面図(1/20)	34
第63図	掘立柱建物C 1 平面図・断面図(1/80)	35
第64図	掘立柱建物C 1 出土柱材尖測図その1(1/8)	36
第65図	掘立柱建物C 1 出土柱材実測図その2(1/8)	37
第66図	掘立柱建物C 1 北側土器溜り遺物出土状況平面図・土層断面図(1/20)	38
第67図	掘立柱建物C 2 平面図・断面図(1/80)	39
第68図	掘立柱建物C 3 平面図・断面図(1/80)	39
第69図	掘立柱建物C 4 北平面図・断面図(1/80)	40
第70図	掘立柱建物C 4 南平面図・断面図(1/80)	40
第71図	掘立柱建物C 5 東平面図・断面図(1/80)	41
第72図	掘立柱建物C 5 西平面図・断面図(1/80)	41
第73図	掘立柱建物C 4 南柱穴C 1 5 7 3 硬板出土状況図・平面図・断面図(1/20)	42
第74図	掘立柱建物C 4 南柱穴C 1 5 7 3 出土硬板実測図(1/4)	42
第75図	掘立柱建物C 5 西南縁溝C 2 2 7 6 下駄出土状況図(1/20)	42
第76図	掘立柱建物C 5 西南縁溝C 2 2 7 6 出土下駄実測図(1/4)	42
第77図	掘立柱建物C 6 平面図・断面図(1/80)	43
第78図	掘立柱建物C 8 平面図・断面図(1/80)	43
第79図	掘立柱建物C 7 平面図・断面図(1/80)	44
第80図	掘立柱建物C 7 周縁溝C 2 4 2 2 西半部遺物出土状況図・土層断面図(1/30)	45・46
第81図	掘立柱建物C 7 周縁溝C 2 4 2 2 東半部遺物出土状況図・土層断面図(1/30)	47・48
第82図	掘立柱建物C 1 0 平面図・断面図(1/80)	49
第83図	掘立柱建物C 1 1 平面図・断面図(1/80)	49
第84図	掘立柱建物C 1 3 平面図・断面図(1/80)	50
第85図	掘立柱建物C 2 0 平面図・断面図(1/80)	50
第86図	掘立柱建物C 1 7 平面図・断面図(1/80)	51

第87図	掘立柱建物C18平面図・断面図(1/80)	51
第88図	掘立柱建物C11柱穴C4001礎板出土状況図(1/20)	52
第89図	掘立柱建物C11柱穴C4001出土櫛(礎板に転用)実測図(1/5)	52
第90図	掘立柱建物C17柱穴C3848礎板出土状況図(1/20)	52
第91図	掘立柱建物C17柱穴C3848出土下駄(礎板に転用)実測図(1/4)	52
第92図	掘立柱建物C20柱穴C4403礎板出土状況図(1/20)	53
第93図	掘立柱建物C20柱穴C4384礎板出土状況図(1/20)	53
第94図	掘立柱建物C20柱穴C4392礎板出土状況図(1/20)	53
第95図	掘立柱建物C20柱穴C4372礎板出土状況図(1/20)	53
第96図	建物外ピットC4517礎板出土状況図(1/20)	53
第97図	掘立柱建物C20柱穴出土礎板実測図(1/8)	53
第98図	掘立柱建物C9平面図・断面図(1/80)	54
第99図	掘立柱建物C14平面図・断面図(1/80)	55
第100図	掘立柱建物C12平面図・断面図(1/80)	56
第101図	掘立柱建物C19平面図・断面図(1/80)	56
第102図	掘立柱建物C21平面図・断面図(1/80)	57
第103図	掘立柱建物C25平面図・断面図(1/80)	57
第104図	土坑C1922遺物出土状況平面図・土層断面図(1/30)	58
第105図	掘立柱建物C3柱穴C3840出土柱材実測図(1/8)	59
第106図	掘立柱建物C8柱穴C1549・C3774出土柱材実測図(1/8)	59
第107図	掘立柱建物C21柱穴C2517・C2516・C2513・C2486柱出土 状況平面図・断面図(1/20)	59
第108図	掘立柱建物C21柱穴C2517・C2516・C2513・C2486出土 柱材実測図(1/8)	59
第109図	掘立柱建物C15平面図・断面図(1/80)	60
第110図	掘立柱建物C30平面図・断面図(1/80)	60
第111図	掘立柱建物C22北平面図・断面図(1/80)	61
第112図	掘立柱建物C22南平面図・断面図(1/80)	61
第113図	掘立柱建物C28平面図・断面図(1/80)	62
第114図	掘立柱建物C21平面図・断面図(1/80)	62
第115図	掘立柱建物C23平面図・断面図(1/80)	63
第116図	掘立柱建物C35平面図・断面図(1/80)	63
第117図	掘立柱建物C31平面図・断面図(1/80)	64
第118図	掘立柱建物C32平面図・断面図(1/80)	64
第119図	掘立柱建物C16平面図・断面図(1/80)	65
第120図	掘立柱建物C16柱穴C4643・3751出土柱材・礎板実測図(1/8)	65
第121図	掘立柱建物C34平面図・断面図(1/80)	66
第122図	掘立柱建物B2平面図・断面図(1/80)	67
第123図	掘立柱建物B3平面図・断面図(1/80)	67
第124図	掘立柱建物B4平面図・断面図(1/80)	68
第125図	掘立柱建物B5平面図・断面図(1/80)	68
第126図	掘立柱建物B7平面図・断面図(1/80)	69
第127図	掘立柱建物B8平面図・断面図(1/80)	69
第128図	掘立柱建物D13平面図・断面図(1/80)	70
第129図	掘立柱建物D12平面図・断面図(1/80)	71
第130図	掘立柱建物D14平面図・断面図(1/80)	71

第131図	井戸C 2 5 4 9 平面図・立面図(1/20)	72
第132図	井戸C 2 5 4 9 井戸枠部材実測図(1/20)	73
第133図	井戸C 2 4 7 6 平面図・立面図(1/20)	74
第134図	井戸C 2 4 7 6 下部井戸枠部材実測図	75・76
第135図	井戸C 2 4 7 6 上部井戸枠部材実測図(1/20)	77
第136図	井戸B 1 3 1 0 0 0 平面図・立面図(1/20)	78
第137図	井戸B 1 3 1 0 0 0 井戸枠部材実測図(1/20)	79
第138図	井戸C 2 7 5 6 平面図・土層断面図(1/20)	80
第139図	井戸D 4 7 4 1層遺物出土状況平面図(1/30)	81
第140図	井戸D 4 7 4 土層断面図(1/40)	81
第141図	井戸D 4 7 4 4層遺物出土状況平面図(1/30)	82
第142図	井戸D 4 7 4 5層遺物出土状況平面図(1/30)	83
第143図	井戸D 4 7 4 6層遺物出土状況平面図(1/30)	84
第144図	周溝墓B 1 3 1 1 0 1 平面図・土層断面図(1/150)	85
第145図	周溝墓B 1 3 1 1 0 1 内部検出主体部平面図・土層断面図(1/30)	85
第146図	周溝墓B 1 3 1 2 5 0 平面図・土層断面図(1/100)	86
第147図	溝C 2 3 3 1 平面図・土層断面図(1/90)	87
第148図	土坑C 4 0 8 3 平面図・土層断面図(1/60)	87
第149図	土坑C 2 4 1 5 平面図・土層断面図(1/60)	88
第150図	土坑C 3 4 8 5・C 3 4 8 6 平面図・土層断面図(1/60)	88
第151図	土坑C 2 1 9 8 平面図・土層断面図(1/30)	89
第152図	土坑C 2 2 0 5 平面図・土層断面図(1/30)	89
第153図	土坑C 4 1 5 9 平面図・土層断面図(1/30)	90
第154図	土坑C 3 3 4 2 平面図・土層断面図(1/30)	91
第155図	土坑C 2 9 2 7 平面図・土層断面図(1/30)	91
第156図	土坑C 4 7 7 3 平面図・断面図(1/20)	92
第157図	土坑C 2 0 6 3 平面図・土層断面図(1/10)	92
第158図	土坑C 3 0 1 6 平面図・断面図(1/20)	92
第159図	土坑C 2 4 0 1 上部土器群(1/40)	93
第160図	土坑B 1 3 0 3 5 7 平面図・断面図(1/60)	94
第161図	土坑B 1 3 1 0 9 7 平面図・断面図(1/30)	94
第162図	土坑B 1 3 1 0 0 1 平面図・断面図(1/30)	95
第163図	土坑B 1 3 1 0 0 2 平面図・断面図(1/30)	95
第164図	土坑B 1 3 0 7 6 4 平面図・断面図(1/30)	96
第165図	土坑B 1 3 1 1 0 3 平面図・断面図(1/30)	96
第166図	土坑B 1 3 0 9 6 5 平面図・断面図(1/30)	96
第167図	土坑B 1 3 0 7 6 5 平面図・断面図(1/30)	96
第168図	北東居住域D-2調査区ピット平面図・断面図(1/20)	97
第169図	溝D 4 9 5 遺物出土状況平面図・断面図(1/40)	98
第170図	北東居住域出土土器(1) 穫穴住居	99
第171図	北東居住域出土土器(2) 穫穴住居・上坑	100
第172図	北東居住域出土土器(3) 穫穴住居	101
第173図	北東居住域出土土器(4) 穫穴住居・土坑	102
第174図	北東居住域出土土器(5) 挖立柱建物	103
第175図	北東居住域出土土器(6) 挖立柱建物	104
第176図	北東居住域出土土器(7) 挖立柱建物	105

第177図	北東居住城出土土器 (8)	掘立柱建物・カマド・溝	106
第178図	北東居住城出土土器 (9)	井戸	107
第179図	北東居住城出土土器 (10)	井戸	108
第180図	北東居住城出土土器 (11)	井戸	109
第181図	北東居住城出土土器 (12)	溝・周溝墓	110
第182図	北東居住城出土土器 (13)	周溝墓	111
第183図	北東居住城出土土器 (14)	周溝墓・土坑	112
第184図	北東居住城出土土器 (15)	土坑	113
第185図	北東居住城出土土器 (16)	土坑	114
第186図	北東居住城出土土器 (17)	土坑	115
第187図	北東居住城出土土器 (18)	土坑	116
第188図	北東居住城出土土器 (19)	土坑	117
第189図	北東居住城出土土器 (20)	土坑・土器だまり	118
第190図	北東居住城出土土器 (21)	土坑	119
第191図	北東居住城出土土器 (22)	土坑	120
第192図	北東居住城出土土器 (23)	土坑	121
第193図	北東居住城出土土器 (24)	建物周囲溝	122
第194図	北東居住城出土土器 (25)	建物周囲溝	123
第195図	北東居住城出土土器 (26)	建物周囲溝	124
第196図	北東居住城出土土器 (27)	建物周囲溝・土坑	125
第197図	北東居住城出土土器 (28)	土器群	126
第198図	北東居住城出土土器 (29)	土器群	127
第199図	北東居住城出土土器 (30)	土器群	128
第200図	北東居住城出土土器 (31)	北東谷部	129
第201図	北東居住城出土土器 (32)	北東谷部・土坑・溝・ピット・南東谷・包含層	130
第202図	北東居住城出土土器 (33)	南東谷部	131
第203図	北東居住城出土土器 (34)	土坑・ピット・包含層	132
第204図	北東居住城出土土器 (35)	土坑・ピット・包含層	133
第205図	北東居住城出土土器 (36)	土坑・ピット・溝・落ち込み・包含層	134
第206図	北東居住城出土土器 (37)	落ち込み・ピット・溝	135
第207図	北東居住城出土土器 (38)	土坑・ピット・包含層	136
第208図	北東居住城出土土器 (39)	土坑・包含層	137
第209図	北東居住城出土土器 (40)	溝・ピット・包含層	138
第210図	北東居住城出土土器 (41)	溝・土坑・ピット・包含層	139
第211図	北東居住城出土土器 (42)	落ち込み・ピット・包含層	140
第212図	北東居住城出土土器 (43)	土坑・包含層	141
第213図	北東居住城出土土器 (44)	落ち込み・土坑・ピット・包含層	142
第214図	北東居住城出土土器 (45)	土坑・ピット・包含層	143
第215図	北東居住城出土土器 (46)	土坑・ピット・包含層	144
第216図	北東居住城出土土器 (47)	包含層	145
第217図	北東居住城出土土器 (48)	ピット・包含層	146
第218図	北東居住城出土土器 (49)	溝・ピット・包含層	147
第219図	北東居住城出土土器 (50)	溝・落ち込み・ピット・包含層	148
第220図	北東居住城出土土器 (51)	ピット・包含層	149
第221図	北東居住城出土土器 (52)	ピット・包含層	150
第222図	北東居住城出土土器 (53)	溝	151

第223図	北東居住域出土土器 (54) 溝	152
第224図	北東居住域出土土器 (55) 土坑	153
第225図	北東居住域出土土器 (56) 土坑	154
第226図	北東居住域出土土器 (57) 上坑	155
第227図	北東居住域出土土器 (58) 土坑	156
第228図	北東居住域出土土器 (59) 溝・土坑	157
第229図	北東居住域出土土器 (60) 土坑・ピット	158
第230図	北東居住域出土土器 (61) 掘立柱建物・土坑・ピット	159
第231図	北東居住域出土土器 (62) 井戸	160
第232図	北東居住域出土土器 (63) 井戸	161
第233図	北東居住域出土土器 (64) 井戸・土坑	162
第234図	北東居住域出土土器 (65) 溝・包含層	163
第235図	北東居住域出土土器 (66) 自然流路	164
第236図	南東居住域遺構平面図 (A調査区) (1/200)	165
第237図	竪穴住居 A 1 平面図・土層断面図(1/80)	166
第238図	竪穴住居 A 2・A 3・A 4 平面図・土層断面図(1/80)	166
第239図	掘立柱建物 A 1 平面図・断面図(1/80)	167
第240図	掘立柱建物 A 2 平面図・断面図(1/80)	167
第241図	井戸 A 4 9 4 平面図・断面図・遺物出土状況平面図(1/20)	168
第242図	井戸 A 4 9 4 井戸枠部材実測図(1/20)	169
第243図	井戸 A 5 4 2 平面図・断面図(1/20)	170
第244図	井戸 A 7 6 7 平面図・断面図(1/20)	171・172
第245図	井戸 A 6 7 6 平面図・断面図(1/20)	171・172
第246図	井戸 A 5 9 0 平面図・断面図(1/20)	171・172
第247図	井戸 A 6 9 5 平面図・断面図(1/20)(1/10)	173
第248図	土坑 A 4 3 5 遺物出土状況平面図・土層断面図(1/30)	174
第249図	南東居住域出土土器 (1) 竪穴住居・掘立柱建物・土坑・井戸	175
第250図	南東居住域出土土器 (2) 井戸	176
第251図	南東居住域出土土器 (3) 井戸	177
第252図	南東居住域出土土器 (4) 井戸	178
第253図	南東居住域出土土器 (5) 土坑	179
第254図	南東居住域出土土器 (6) 土坑・溝・ピット	180
第255図	南西居住域遺構平面図その1 (A調査区) (1/200)	181・182
第256図	南西居住域遺構平面図その2 (A・B調査区) (1/200)	183
第257図	南西居住域遺構平面図その3 (E調査区) (1/200)	184
第258図	南西居住域遺構平面図その4 (E調査区) (1/200)	185
第259図	竪穴住居 B 1 平面図・土層断面図・柱穴断面図(1/80)	186
第260図	竪穴住居 B 1 のカマド平面図・断面図(1/20)	186
第261図	竪穴住居 A 5・A 6 平面図・土層断面図(1/80)	187
第262図	竪穴住居 A 5 のカマド平面図・断面図(1/20)	187
第263図	竪穴住居 E 0 8 0 1 2 0 平面図・土層断面図・柱穴断面図(1/80)	188
第264図	住居内カマド E 0 8 0 1 1 9 検出状況平面図・断面図(1/20)	188
第265図	住居内カマド E 0 8 0 1 1 9 完掘状況平面図・断面図(1/20)	188
第266図	竪穴住居 E 1 平面図・土層断面図・柱穴断面図(1/80)	189
第267図	竪穴住居 E 1 のカマド E 0 9 0 6 0 0 検出状況平面図・断面図(1/20)	189
第268図	竪穴住居 E 1 のカマド E 0 9 0 6 0 0 完掘状況平面図・断面図(1/20)	189

第269図	豎穴住居E 2 平面図・柱穴断面図(1/80)	190
第270図	豎穴住居E 3 平面図・柱穴断面図(1/80)	190
第271図	豎穴住居E 4 平面図・土層断面図・柱穴断面図(1/80)	191
第272図	豎穴住居E 4 のカマド E 0 9 0 6 0 1 検出状況平面図・断面図(1/20)	191
第273図	豎穴住居E 4 のカマド E 0 9 0 6 0 1 完掘状況平面図(1/20)	191
第274図	豎穴住居E 5 平面図・土層断面図(1/80)	192
第275図	豎穴住居E 5 のカマド E 0 9 0 7 1 9 完掘状況平面図・土層断面図(1/20)	192
第276図	豎穴住居E 6 平面図・土層断面図(1/80)	193
第277図	豎穴住居E 6 のカマド E 0 9 0 7 2 0 検出状況平面図・土層断面図(1/20)	193
第278図	豎穴住居E 6 のカマド E 0 9 0 7 2 0 完掘状況平面図(1/20)	193
第279図	豎穴住居E 7 平面図・土層断面図(1/80)	194
第280図	豎穴住居E 7 のカマド E 0 9 0 6 0 3 検出状況平面図・土層断面図(1/20)	194
第281図	豎穴住居E 7 のカマド E 0 9 0 6 0 3 完掘状況平面図(1/20)	194
第282図	豎穴住居E 8 平面図・土層断面図(1/80)	195
第283図	豎穴住居E 9 平面図・土層断面図・柱穴断面図(1/80)	195
第284図	豎穴住居E 8 のカマド E 0 9 0 4 4 2 平面図・土層断面図(1/25)	196
第285図	豎穴住居E 8 のカマド E 0 9 0 4 4 2 完掘状況平面図(1/25)	196
第286図	掘立柱建物B 1 平面図・断面図(1/80)	197
第287図	掘立柱建物A 3 平面図・断面図(1/80)	197
第288図	掘立柱建物E 1 平面図・断面図(1/80)	198
第289図	掘立柱建物E 2 平面図・断面図(1/80)	198
第290図	掘立柱建物E 3 平面図・断面図(1/80)	199
第291図	掘立柱建物E 4 平面図・断面図(1/80)	199
第292図	掘立柱建物E 5 平面図・断面図(1/80)	200
第293図	掘立柱建物E 6 平面図・断面図(1/80)	200
第294図	掘立柱建物E 7 平面図・断面図(1/80)	201
第295図	掘立柱建物E 8 平面図・断面図(1/80)	201
第296図	掘立柱建物E 9 平面図・断面図(1/80)	202
第297図	掘立柱建物E 1 0 平面図・断面図(1/80)	202
第298図	掘立柱建物E 1 1 平面図・断面図(1/80)	203
第299図	井戸A 1 5 0 1 平面図・断面図(1/20)	204
第300図	井戸A 1 6 1 3 平面図・断面図(1/20)	205
第301図	井戸E 0 9 0 4 5 1 平面図・断面図(1/30)	206
第302図	井戸E 0 9 0 5 5 3 平面図・断面図(1/30)	206
第303図	井戸E 0 9 0 8 0 5 平面図・断面図(1/30)	207・208
第304図	井戸E 0 9 0 8 0 6 平面図・断面図(1/30)	209・210
第305図	井戸E 0 9 0 8 0 5 井戸枠部材（船材転用）実測図(1/20)	211
第306図	井戸E 0 9 0 8 0 6 井戸枠部材（船材転用）実測図その1(1/20)	212
第307図	井戸E 0 9 0 8 0 6 井戸枠部材（船材転用）実測図その2(1/20)	213
第308図	馬埋葬土坑A 9 4 0 平面図・断面図(1/15)	214
第309図	土坑A 6 5 5 馬骨出土状況平面図・土層断面図(1/20)	215
第310図	土坑A 1 3 4 5 馬骨出土状況平面図・土層断面図(1/20)	215
第311図	土坑A 1 1 3 5 遺物出土状況平面図(1/30)	216
第312図	土坑A 1 1 3 5 土層断面図(1/20)	217
第313図	土坑A 1 6 5 4 遺物出土状況平面図・土層断面図(1/20)	218
第314図	土坑B 1 3 0 5 6 7 遺物出土状況平面図・土層断面図(1/30)	219

第315図	土坑A 1 3 5 7 平面図・断面図(1/30)	219
第316図	土坑A 1 6 3 2 遺物出土状況平面図・断面図(1/15)	220
第317図	土坑A 1 6 3 9 遺物出土状況平面図・断面図(1/15)	220
第318図	土坑A 1 3 9 3 遺物出土状況平面図・断面図(1/15)	221
第319図	土坑A 1 1 6 5 遺物出土状況平面図・断面図(1/15)	221
第320図	土坑E 0 9 0 4 4 7・溝E 0 9 0 4 4 6 遺物出土状況平面図・断面図 ・土層断面図(1/40)	222
第321図	土坑A 1 3 9 4・溝A 1 1 8 9 遺物出土状況平面図・断面図(1/30)	223
第322図	溝A 1 2 3 1 遺物出土状況平面図・断面図(1/40)	224
第323図	南西居住城出土土器(1) 穫穴住居	225
第324図	南西居住城出土土器(2) 穫穴住居・掘立柱建物・井戸	226
第325図	南西居住城出土土器(3) 井戸	227
第326図	南西居住城出土土器(4) 井戸	228
第327図	南西居住城出土土器(5) 井戸	229
第328図	南西居住城出土土器(6) 土坑	230
第329図	南西居住城出土土器(7) 土坑	231
第330図	南西居住城出土土器(8) 土坑	232
第331図	南西居住城出土土器(9) 土坑	233
第332図	南西居住城出土土器(10) 土坑	234
第333図	南西居住城出土土器(11) 土坑	235
第334図	南西居住城出土土器(12) 土坑	236
第335図	南西居住城出土土器(13) 土坑	237
第336図	南西居住城出土土器(14) 土坑・馬埋葬土坑・ピット	238
第337図	南西居住城出土土器(15) 土坑	239
第338図	南西居住城出土土器(16) 土坑	240
第339図	南西居住城出土土器(17) 土坑	241
第340図	南西居住城出土土器(18) 土坑	242
第341図	南西居住城出土土器(19) 土坑・溝	243
第342図	南西居住城出土土器(20) 溝	244
第343図	南西居住城出土土器(21) 溝	245
第344図	南西居住城出土土器(22) 溝	246
第345図	南西居住城出土土器(23) 溝	247
第346図	南西居住城出土土器(24) 溝	248
第347図	南西居住城出土土器(25) 溝・土坑・ピット	249
第348図	南西居住城出土土器(26) 土坑・溝	250
第349図	南西居住城出土土器(27) 土坑・ピット	251
第350図	北西居住城遺構平面図(D調査区)(1/200)	253・254
第351図	竪穴住居D 1 平面図・断面図(1/80)	255
第352図	竪穴住居D 1 のカマド D 1 6 4 5 平面図・断面図(1/20)	255
第353図	竪穴住居D 2 平面図・断面図(1/80)・土層断面図(1/50)	256
第354図	竪穴住居D 2 のカマド D 1 4 3 5 平面図・断面図(1/20)	257
第355図	竪穴住居D 3 のカマド D 1 6 4 6 平面図・断面図(1/20)	257
第356図	竪穴住居D 3 平面図・断面図(1/80)・土層断面図(1/50)	258
第357図	竪穴住居D 4 平面図(1/80)・土層断面図(1/50)	259
第358図	竪穴住居D 4 のカマド D 1 4 6 9 平面図・断面図(1/20)	260
第359図	竪穴住居D 5 のカマド D 1 6 4 7 平面図・断面図(1/20)	260

第360図	豎穴住居D 5・D 8平面図(1/80)・土層断面図(1/50)	261
第361図	豎穴住居D 8のカマドD 1 5 7 3平面図・断面図(1/20)	262
第362図	豎穴住居D 9平面図・土層断面図(1/80)	263
第363図	豎穴住居D 1 0・D 1 1平面図・上層断面図(1/80)	263
第364図	豎穴住居D 1 2・D 1 3平面図・断面図(1/80)	264
第365図	豎穴住居D 1 3のカマドD 9 3 5平面図・断面図(1/20)	264
第366図	豎穴住居D 1 4平面図・断面図(1/80)	265
第367図	カマドD 1 4 2 7平面図・断面図(1/20)	265
第368図	カマドD 1 5 6 9平面図・断面図(1/20)	265
第369図	豎穴住居D 1 5平面図・断面図(1/80)・土層断面図(1/50)	266
第370図	豎穴住居D 1 5のカマドD 1 4 3 4平面図・断面図(1/20)	267
第371図	豎穴住居D 1 6平面図・土層断面図(1/80)	268
第372図	豎穴住居D 1 6のカマドD 1 0 5 1平面図・断面図(1/20)	268
第373図	豎穴住居D 1 8平面図・断面図・土層断面図(1/80)	269
第374図	豎穴住居D 1 8のカマドD 1 5 3 4平面図・断面図(1/20)	270
第375図	豎穴住居D 1 9平面図・断面図(1/80)・土層断面図(1/50)	271
第376図	豎穴住居D 1 9のカマドD 1 1 0 3平面図・断面図(1/20)	272
第377図	豎穴住居D 2 0のカマドD 1 1 1 4平面図・断面図(1/20)	272
第378図	豎穴住居D 2 0平面図・断面図(1/80)・土層断面図(1/50)	273
第379図	豎穴住居D 2 3平面図・断面図(1/80)・土層断面図(1/50)	274
第380図	豎穴住居D 2 3のカマドD 1 4 8 4平面図・断面図(1/20)	275
第381図	豎穴住居D 2 1のカマドD 1 4 2 1平面図・断面図(1/20)	275
第382図	カマドD 1 1 4 0平面図・断面図(1/20)	275
第383図	豎穴住居D 2 5平面図・断面図・土層断面図(1/80)	276
第384図	豎穴住居D 2 5のカマドD 1 5 9 8平面図・断面図(1/20)	277
第385図	豎穴住居D 2 7・D 2 8・D 2 9平面図・断面図・上層断面図(1/80)	278
第386図	掘立柱建物D 1平面図・断面図(1/80)	279
第387図	掘立柱建物D 2平面図・断面図(1/80)	280
第388図	掘立柱建物D 3平面図・断面図(1/80)	281
第389図	掘立柱建物D 4平面図・断面図(1/80)	282
第390図	掘立柱建物D 5平面図・断面図(1/80)	282
第391図	掘立柱建物D 6平面図・断面図(1/80)	283
第392図	掘立柱建物D 7平面図・断面図(1/80)	283
第393図	掘立柱建物D 8平面図・断面図(1/80)	284
第394図	掘立柱建物D 9平面図・断面図(1/80)	285
第395図	掘立柱建物D 1 5平面図・断面図(1/80)	285
第396図	掘立柱建物D 1 0平面図・断面図(1/80)	286
第397図	掘立柱建物D 1 1平面図・断面図(1/80)	287
第398図	掘立柱建物D 1 6平面図・断面図(1/80)	288
第399図	掘立柱建物D 1 7平面図・断面図(1/80)	288
第400図	掘立柱建物D 1 8平面図・断面図(1/80)	289
第401図	掘立柱建物D 1 9平面図・断面図(1/80)	289
第402図	井戸D 6 4 3平面図・断面図(1/20)	290
第403図	井戸D 9 5 2平面図・断面図(1/20)	291
第404図	井戸D 1 2 8 1平面図・断面図(1/20)	292
第405図	土坑D 7 0 1平面図・土層断面図(1/20)	293

第406図	土坑D 4 8 0 平面図・土層断面図(1/20)	293
第407図	土坑D 6 0 7 平面図・土層断面図(1/40)	294
第408図	土坑D 6 4 0 平面図・土層断面図(1/40)	294
第409図	土坑D 5 9 9 平面図・土層断面図(1/40)	294
第410図	土坑D 1 6 1 7 平面図・断面図(1/40)	295
第411図	北西居住域D調査区ピット平面図・断面図(1/10) 土坑平面図・断面図(1/20)	296
第412図	北西居住域D調査区ピット平面図・断面図(1/10)	297
第413図	北西居住域D-1調査区ピット土層断面図(1/10)	298
第414図	溝D 9 8 6 遺物出土状況平面図・断面図(1/40)	299
第415図	北西居住域出土土器(1) 壺穴住居	300
第416図	北西居住域出土土器(2) 壺穴住居	301
第417図	北西居住域出土土器(3) 壺穴住居	302
第418図	北西居住域出土土器(4) 壺穴住居	303
第419図	北西居住域出土土器(5) 挖立柱建物・カマド・井戸・土坑	304
第420図	北西居住域出土土器(6) 井戸	305
第421図	北西居住域出土土器(7) 土坑	306
第422図	北西居住域出土土器(8) 土坑	307
第423図	北西居住域出土土器(9) 土坑	308
第424図	北西居住域出土土器(10) 土坑	309
第425図	北西居住域出土土器(11) 溝	310
第426図	北西居住域出土土器(12) 溝	311
第427図	北西居住域出土土器(13) 溝	312
第428図	北西居住域出土土器(14) 土坑・ピット・溝	313
第429図	北西居住域出土土器(15) 溝・包含層	314
第430図	西居住域遺構平面図(F調査区)(1/200)	315
第431図	壺穴住居F 1・F 1 1 平面図・土層断面図(1/80) 壺穴住居F 1のカマドF 9 8 7 平面図・断面図(1/20)	316
第432図	壺穴住居F 2 平面図・土層断面図(1/80) 壺穴住居F 2のカマドF 9 6 5 平面 図・断面図(1/20)	317
第433図	壺穴住居F 3・F 4・F 5 平面図・土層断面図(1/80) 壺穴住居F 4のカマド F 9 1 6 平面図・断面図(1/20)	318
第434図	壺穴住居F 3のカマドF 1 0 3 3 平面図・断面図(1/20) 壺穴住居F 1 2のカマド F 1 0 6 8 平面図・断面図(1/20)	319
第435図	壺穴住居F 7・F 1 2 平面図・土層断面図(1/80) 壺穴住居F 7のカマドF 9 3 1 平面図・断面図(1/20)	320
第436図	壺穴住居F 8・F 1 9・F 9 平面図・土層断面図(1/80) 壺穴住居F 8のカマド F 1 1 3 3 平面図・断面図(1/20)	321
第437図	壺穴住居F 9のカマドF 1 1 0 5 平面図・断面図(1/20) 壺穴住居F 1 0 平面図・ 土層断面図(1/80) 壺穴住居F 1 0のカマドF 1 1 1 7 平面図・断面図(1/20)	322
第438図	壺穴住居F 1 3 平面図・土層断面図(1/80) 壺穴住居F 1 3のカマドF 9 8 2・ F 9 8 3 検出状況・土層断面・完掘状況(1/20)	323・324
第439図	壺穴住居F 1 4・F 1 6 平面図・断面図(1/80) 壺穴住居F 1 6のカマド F 1 3 0 3 平面図・断面図(1/20)	325
第440図	西居住域カマド平面図・断面図(1/20)	326
第441図	掘立柱建物F 1 平面図・断面図(1/80)	327
第442図	掘立柱建物F 2 平面図・断面図(1/80)	327

第443図 挖立柱建物F 4 平面図・断面図(1/80) .....	328
第444図 挖立柱建物F 3 平面図・断面図(1/80) .....	328
第445図 挖立柱建物F 6 平面図・断面図(1/80) .....	329
第446図 挖立柱建物F 5 平面図・断面図(1/80) .....	329
第447図 挖立柱建物F 7 平面図・断面図(1/80) .....	330
第448図 挖立柱建物F 8 平面図・断面図(1/80) .....	330
第449図 挖立柱建物F 9 平面図・断面図(1/80) .....	331
第450図 挖立柱建物F 1 0 平面図・断面図(1/80) .....	331
第451図 井戸F 8 0 6 平面図・土層断面図(1/20) .....	332
第452図 井戸F 8 5 5 平面図・上層断面図(1/20) .....	332
第453図 井戸F 9 4 4 平面図・土層断面図(1/20) .....	333
第454図 井戸F 1 1 6 8 平面図・土層断面図(1/20) .....	334
第455図 井戸F 6 9 0 平面図・土層断面図(1/20) .....	335
第456図 井戸F 6 2 7 平面図・土層断面図(1/20) .....	336
第457図 土坑F 1 1 2 0 検出状況平面図・土層断面図・先掘状況平面図(1/15) .....	337
第458図 土坑F 6 7 9 平面図・断面図(1/30) .....	337
第459図 溝F 1 0 7 5 (北)・F 1 0 6 2 (南) 遺物出土状況平面図(1/30) .....	338
第460図 溝F 6 3 4 平面図・土層断面図(1/30) .....	339
第461図 溝F 6 3 3 平面図・土層断面図(1/30) .....	339
第462図 溝F 7 2 4 平面図(1/30) .....	339
第463図 西居住城出土土器 (1) 竪穴住居 .....	340
第464図 西居住城出土土器 (2) 竪穴住居 .....	341
第465図 西居住城出土土器 (3) 井戸 .....	342
第466図 西居住城出土土器 (4) 井戸・土坑・溝 .....	343
第467図 西居住城出土上器 (5) 溝 .....	344
第468図 西居住城出土上器 (6) 溝・土坑 .....	345
第469図 調査区西半部大溝・区画溝平面図・断面図・区割り配置図(1/800) .....	346
第470図 調査区南東部区画溝平面図・断面図・区割り配置図(1/300) .....	347
第471図 調査区南東部区画溝平面図(1/300) .....	348
第472図 区画溝B 1 3 0 6 7 0 遺物出土状況平面図(1/40) .....	349
第473図 区画溝B 1 3 0 2 4 0 遺物出土状況平面図その1(1/40) .....	350
第474図 区画溝B 1 3 0 2 4 0 遺物出土状況平面図その2(1/40) .....	350
第475図 区画溝B 1 3 0 2 4 0 遺物出土状況平面図その3(1/40) .....	351
第476図 区画溝B 1 3 0 2 4 0 遺物出土状況平面図その4(1/40) .....	352
第477図 区画溝A 9 5 0 遺物出土状況平面図その1(1/40) .....	353・354
第478図 区画溝A 9 5 0 遺物出土状況平面図その2(1/40) .....	355・356
第479図 区画溝A 9 5 0 遺物出土状況平面図その3(1/40) .....	357
第480図 区画溝B 1 3 0 2 4 0・B 1 3 0 6 7 0・A 9 5 0 土層断面図(1/80) .....	358
第481図 区画溝出土土器 (1) B 1 3 0 2 4 0 最上層・上層 .....	359
第482図 区画溝出土土器 (2) B 1 3 0 2 4 0 上層 .....	360
第483図 区画溝出土土器 (3) B 1 3 0 2 4 0 上層 .....	361
第484図 区画溝出土土器 (4) B 1 3 0 2 4 0 上層・中・下層 .....	362
第485図 区画溝出土土器 (5) B 1 3 0 2 4 0 中・下層 .....	363
第486図 区画溝出土土器 (6) B 1 3 0 2 4 0 中・下層 .....	364
第487図 区画溝出土土器 (7) B 1 3 0 6 7 0 .....	365
第488図 区画溝出土土器 (8) A 9 5 0 上層 .....	366

第489図	区画溝出土土器 (9)	A 9 5 0 上・中層	367
第490図	区画溝出土土器 (10)	A 9 5 0 上層	368
第491図	区画溝出土土器 (11)	A 9 5 0 下層	369
第492図	区画溝出土土器 (12)	A 9 5 0 下層	370
第493図	区画溝出土土器 (13)	A 9 5 0 下層	371
第494図	居住域外溝出土土器		372
第495図	居住域外遺構出土土器		373
第496図	区画溝出土土器 (14)	東西方向溝群	374
第497図	区画溝出土土器 (15)	A 4 2 8	375
第498図	区画溝出土土器 (16)	A 4 2 8	376
第499図	区画溝出土土器 (17)	A 4 2 9	377
第500図	区画溝出土土器 (18)	A 4 3 4 A 4 2 9 A 9 0 0	378
第501図	区画溝 E 0 9 1 0 0 6 遺物出土状況平面図・土層断面図・出土状況断面図(1/40)		379
第502図	区画溝 F 6 2 5 (北側)・F 6 1 3 (南側) 遺物出土状況平面図(1/40)		380
第503図	谷F 2・流路F 5 2 9 土層断面図		381
第504図	区画溝出土土器 (19)	E 0 9 1 0 0 6 E 0 9 0 0 6 0	382
第505図	区画溝出土土器 (20)	F 8 5 6 F 6 2 5	383
第506図	区画溝出土土器 (21)	F 6 2 5	384
第507図	谷出土土器 谷F 2		385
第508図	大溝F 上層遺物出土状況平面図(1/40)		386
第509図	大溝F 上層遺物出土状況平面図(1/40)		387
第510図	大溝F 中層遺物出土状況平面図(1/40)		388
第511図	E・F 調査区 谷・大溝土層断面図(1/90)		389
第512図	大溝D 9 0 0 2層遺物出土地点(1/100)		390
第513図	大溝D 9 0 0 3層遺物出土地点(1/100)		390
第514図	大溝D 9 0 0 5層遺物出土地点(1/100)		391
第515図	大溝D 9 0 0 6層遺物出土地点(1/100)		391
第516図	大溝D 9 0 0 土層断面図(1/40)		392
第517図	大溝H 1 1 1層遺物出土地点(1/80)		393
第518図	大溝H 1 1 2層遺物出土地点(1/80)		394
第519図	大溝H 1 1 3層遺物出土地点(1/80)		395
第520図	大溝H 1 1 4層遺物出土地点(1/80)		396
第521図	大溝H 1 1 5層および5層下位遺物出土地点(1/80)		397
第522図	H地区北側土層図及び大溝H 1 1上層断面図(1/40)		398
第523図	大溝H 1 1 土層断面図(1/40)		398
第524図	大溝出土土器 (1)	E 0 9 0 0 0 1	399
第525図	大溝出土土器 (2)	E 0 9 0 0 0 1	400
第526図	大溝出土土器 (3)	E 0 9 0 0 0 1	401
第527図	大溝出土土器 (4)	E 0 9 0 0 0 1	402
第528図	大溝出土土器 (5)	E 0 9 0 0 0 1	403
第529図	大溝出土土器 (6)	E 0 9 0 0 0 1	404
第530図	大溝出土土器 (7)	E 0 9 0 0 0 1	405
第531図	大溝出土土器 (8)	E 0 9 0 0 0 1	406
第532図	大溝出土土器 (9)	E 0 9 0 0 0 1	407
第533図	大溝出土土器 (10)	E 0 9 0 0 0 1	408
第534図	大溝出土土器 (11)	E 0 9 0 0 0 1	409

第535図 大溝出土土器 (12)	E 0 9 0 0 0 1	.....	410
第536図 大溝出土土器 (13)	E 0 9 0 0 0 1	.....	411
第537図 大溝出土土器 (14)	E 0 9 0 0 0 1	.....	412
第538図 大溝出土土器 (15)	E 0 9 0 0 0 1	.....	413
第539図 大溝出土土器 (16)	E 0 9 0 0 0 1	.....	414
第540図 大溝出土土器 (17)	E 0 9 0 0 0 1	.....	415
第541図 大溝出土土器 (18)	E 0 9 0 0 0 1	.....	416
第542図 大溝出土土器 (19)	E 0 9 0 0 0 1	.....	417
第543図 大溝出土土器 (20)	E 0 9 0 0 0 1	.....	418
第544図 大溝出土土器 (21)	E 0 9 0 0 0 1	.....	419
第545図 大溝出土土器 (22)	E 0 9 0 0 0 1	.....	420
第546図 古墳時代前期流路出土土器 (1)	.....	.....	421
第547図 古墳時代前期流路出土土器 (2)	.....	.....	422
第548図 古墳時代前期流路出土土器 (3)	.....	.....	423
第549図 古墳時代前期流路出土土器 (4)	.....	.....	424
第550図 谷出土土器 (1) 谷F 1	.....	.....	425
第551図 谷出土土器 (2) 谷F 1	.....	.....	426
第552図 大溝出土土器 (23)	F 大溝	.....	427
第553図 大溝出土土器 (24)	F 大溝	.....	428
第554図 大溝出土土器 (25)	F 大溝	.....	429
第555図 大溝出土土器 (26)	F 大溝	.....	430
第556図 大溝出土土器 (27)	F 大溝	.....	431
第557図 大溝出土土器 (28)	F 大溝	.....	432
第558図 大溝出土土器 (29)	F 大溝	.....	433
第559図 大溝出土土器 (30)	F 大溝	.....	434
第560図 大溝出土土器 (31)	F 大溝	.....	435
第561図 大溝出土土器 (32)	F 大溝	.....	436
第562図 大溝出土土器 (33)	D 9 0 0	.....	437
第563図 大溝出土土器 (34)	D 9 0 0	.....	438
第564図 大溝出土土器 (35)	D 9 0 0	.....	439
第565図 大溝出土土器 (36)	D 9 0 0	.....	440
第566図 大溝出土土器 (37)	D 9 0 0	.....	441
第567図 大溝出土土器 (38)	H 1 1	.....	442
第568図 大溝出土土器 (39)	H 1 1	.....	443
第569図 大溝出土土器 (40)	H 1 1	.....	444
第570図 大溝出土土器 (41)	H 1 1	.....	445
第571図 大溝出土土器 (42)	H 1 1	.....	446
第572図 大溝出土土器 (43)	H 1 1	.....	447
第573図 大溝出土土器 (44)	H 1 1	.....	448
第574図 大溝出土土器 (45)	H 1 1	.....	449
第575図 大溝出土土器 (46)	H 1 1	.....	450
第576図 大溝出土土器 (47)	H 1 1	.....	451
第577図 大溝出土土器 (48)	H 1 1	.....	452
第578図 大溝出土土器 (49)	H 1 1	.....	453
第579図 大溝出土土器 (50)	H 1 1	.....	454
第580図 大溝出土土器 (51)	H 1 1	包含層	455

第581回	出土遺物	埴輪(1)	H 11・E 090001	456
第582回	出土遺物	埴輪(2)	E 090001	457
第583回	出土遺物	埴輪(3)	F大溝	458
第584回	出土遺物	移動式カマド(1)		459
第585回	出土遺物	移動式カマド(2)		460
第586回	出土遺物	移動式カマド(3)		461
第587回	出土遺物	移動式カマド(4)		462
第588回	出土遺物	移動式カマド(5)		463
第589回	出土遺物	移動式カマド(6)		464
第590回	出土遺物	移動式カマド(7)		465
第591回	出土遺物	移動式カマド(8)		466
第592回	出土遺物	移動式カマド(9)		467
第593回	出土遺物	移動式カマド(10)		468
第594回	出土遺物	移動式カマド(11)		469
第595回	出土遺物	移動式カマド(12)		470
第596回	出土遺物	移動式カマド(13)		471・472
第597回	出土遺物	移動式カマド(14)		473・474
第598回	出土遺物	移動式カマド(15)		475
第599回	出土遺物	移動式カマド(16)		476
第600回	出土遺物	移動式カマド(17)		477
第601回	出土遺物	移動式カマド(18)		478
第602回	出土遺物	移動式カマド(19)		479・480
第603回	出土遺物	移動式カマド(20)		481・482
第604回	出土遺物	移動式カマド(21)		483
第605回	出土遺物	移動式カマド(22)		484
第606回	出土遺物	U字形板状土製品(1)		485
第607回	出土遺物	U字形板状土製品(2)		486
第608回	出土遺物	U字形板状土製品(3)		487
第609回	出土遺物	U字形板状土製品(4)		488
第610回	出土遺物	U字形板状土製品(5)		489
第611回	出土遺物	U字形板状土製品(6)		490
第612回	出土遺物	U字形板状土製品(7)		491
第613回	出土遺物	U字形板状土製品(8)		492
第614回	出土遺物	U字形板状土製品(9)		493
第615回	出土遺物	U字形板状土製品(10)		494
第616回	出土遺物	U字形板状土製品(11)		495
第617回	出土遺物	U字形板状土製品(12)		496
第618回	出土遺物	U字形板状土製品(13)		497
第619回	出土遺物	U字形板状土製品(14)		498
第620回	出土遺物	U字形板状土製品(15)		499
第621回	出土遺物	U字形板状土製品(16)		500
第622回	出土遺物	U字形板状土製品(17)		501・502
第623回	出土遺物	勾玉		503
第624回	出土遺物	子持ち勾玉		503
第625回	出土遺物	石製紡錘車		504
第626回	出土遺物	土製紡錘車		505

第627図	出土遺物	劍形石製模造品・鏡形石製模造品	506
第628図	出土遺物	石製管玉	506
第629図	出土遺物	土玉	506
第630図	出土遺物	双孔円板（1）	507
第631図	出土遺物	双孔円板（2）	508
第632図	出土遺物	双孔円板（3）	509
第633図	出土遺物	双孔円板（4）	510
第634図	出土遺物	砾石（1）	511
第635図	出土遺物	砾石（2）	512
第636図	出土遺物	砾石（3）	513
第637図	出土遺物	砾石（4）	514
第638図	出土遺物	砾石（5）	515
第639図	出土遺物	砾石（6）	516
第640図	出土遺物	砾石（7）	517
第641図	出土遺物	鉄製品（1）	518
第642図	出土遺物	鉄製品（2）	519
第643図	出土遺物	鉄製品（3）	520
第644図	出土遺物	鉄製品（4）	521
第645図	出土遺物	鉄製品（5）	522
第646図	出土遺物	鍛冶関連遺物	523
第647図	出土遺物	骨角製品（1）	524
第648図	出土遺物	骨角製品（2）	525
第649図	出土遺物	骨角製品（3）	526
第650図	出土遺物	骨角製品（4）	527
第651図	出土遺物	木製品（1）	528
第652図	出土遺物	木製品（2）	529
第653図	出土遺物	木製品（3）	530
第654図	出土遺物	木製品（4）	531
第655図	出土遺物	木製品（5）	532
第656図	出土遺物	木製品（6）	533
第657図	出土遺物	木製品（7）	534
第658図	出土遺物	木製品（8）	535
第659図	出土遺物	木製品（9）	536
第660図	出土遺物	木製品（10）	537
第661図	出土遺物	木製品（11）	538
第662図	出土遺物	木製品（12）	539
第663図	出土遺物	木製品（13）	540
第664図	出土遺物	木製品（14）	541
第665図	出土遺物	木製品（15）	542
第666図	出土遺物	木製品（16）	543
第667図	出土遺物	木製品（17）	544
第668図	出土遺物	木製品（18）	545
第669図	出土遺物	木製品（19）	546
第670図	出土遺物	木製品（20）	547
第671図	出土遺物	木製品（21）	548
第672図	出土遺物	木製品（22）	549

第673図	出土遺物 木製品 (23)	550
第674図	出土遺物 木製品 (24)	551
第675図	出土遺物 木製品 (25)	552
第676図	出土遺物 木製品 (26)	553
第677図	出土遺物 木製品 (27)	554
第678図	出土遺物 木製品 (28)	555
第679図	出土遺物 木製品 (29)	556
第680図	出土遺物 木製品 (30)	557
第681図	出土遺物 木製品 (31)	558
第682図	出土遺物 木製品 (32)	559
第683図	出土遺物 木製品 (33)	560
第684図	出土遺物 木製品 (34)	561
第685図	出土遺物 木製品 (35)	562
第686図	出土遺物 木製品 (36)	563
第687図	各調査区検出の奈良時代遺構全体図	564
第688図	各調査区検出の平安時代前・中期遺構全体図	565 - 566
第689図	各調査区検出の平安時代後期～鎌倉時代遺構全体図	567 - 568
第690図	出土上器 古代以降 (1)	569
第691図	出土土器 古代以降 (2)	570
第692図	出土土器 古代以降 (3)	571
第693図	出土土器 古代以降 (4)	572
第694図	出土錢貨拓影	573

(総括編)

第695図	韓式系土器 壺・甕の分類	5
第696図	韓式系土器 平底鉢の分類	6
第697図	韓式系土器 甌の分類	8
第698図	韓式系土器 鍋の分類	10
第699図	韓式系土器 羽釜の分類	10
第700図	韓式系土器 移動式カマドの分類	12
第701図	U字形板状土製品の分類	14
第702図	土師器 高坏の分類	16
第703図	土師器 高坏の型式の代表例	18
第704図	小型製塙土器の代表例	18
第705図	土師器 鉢の型式の代表例	19
第706図	須恵器系土器の代表例	19
第707図	土師器 甕の分類	21
第708図	須恵器 時期別・器種別の出土量	30
第709図	陶質土器・韓式系土器平底鉢 変遷図 (1/8)	39
第710図	甌・長胴甌 変遷図 (1/10)	40
第711図	鍋・羽釜 (1/10)・移動式カマド・U字形板状土製品 変遷図	41
第712図	土師器 高坏 変遷図 (1/8)	42 - 43
第713図	土師器 鉢 変遷図 (1/8)	44
第714図	須恵器系土器 (1/8)・製塙土器 変遷図	45
第715図	居住域全体図 (1/800)	47 - 48
第716図	高屋北1期の遺構全体図 (1/800)	63 - 64

第717図	茆屋北2・3期の遺構全体図 (1/800)	65・66
第718図	茆屋北4期の遺構全体図 (1/800)	67・68
第719図	茆屋北5期の遺構全体図 (1/800)	69・70
第720図	北東居住域 茅屋北5期の遺構変遷図 (1/800)	72
第721図	木枝太刀の部品組合せ模式図	114
第722図	鹿角各部の名稱 (左側の内側面)	114
第723図	X線写真 鹿角製品	121
第724図	讃良の牧推定範囲	150
第725図	讃良の牧関連遺跡における馬骨出土地点	151
第726図	U字形板状土製品破片出土分布図	155
第727図	U字形板状土製品突帯形状I タイプ 破片出土分布図	155
第728図	U字形板状土製品突帯形状II タイプ 破片出土分布図	156
第729図	U字形板状土製品突帯形状III タイプ 破片出土分布図	156
第730図	U字形板状土製品突帯形状IV タイプ 破片出土分布図	157
第731図	U字形板状土製品突帯形状V タイプ 破片出土分布図	157
第732図	U字形板状土製品各部名称	158
第733図	U字形板状土製品各型式の代表例	164
第734図	U字形板状土製品大井部幅と全体幅の関係	165
第735図	C調査区出土U字形板状土製品破片出土分布図	168
第736図	U字形板状土製品個体1 C 破片出土分布図	168
第737図	U字形板状土製品個体2 C 破片出土分布図	168
第738図	U字形板状土製品個体7 C 破片出土分布図	169
第739図	U字形板状土製品個体8 C 破片出土分布図	169
第740図	U字形板状土製品個体10 C 破片出土分布図	169
第741図	U字形板状土製品個体11 C 破片出土分布図	170
第742図	U字形板状土製品個体13 C 破片出土分布図	170
第743図	U字形板状土製品個体14 C 破片出土分布図	170
第744図	U字形板状土製品個体15 C 破片出土分布図	171
第745図	U字形板状土製品個体20 C 破片出土分布図	171
第746図	U字形板状土製品個体21 C 破片出土分布図	171

## (分析編)

## 第1章

図1	遺跡位置図	189
図2	茆屋北遺跡の層序と地形	190
図3	茆屋北遺跡の耕作土の土壤微細構造	193
図4	茆屋北遺跡古環境変遷図	195
図5	茆屋北遺跡および周辺遺跡における大型植物化石（木本・草本）の時代別産状	197・198
図6	茆屋北遺跡周辺の主要花粉変遷	202
表1	大溝H-11埋土から産出した大型植物化石	201

## 第2章

図1	茆屋北遺跡の位置と周辺の地形分類	207
図2	茆屋北遺跡の堆積柱状図	209
図3	発生時代以降の流路跡、ロウブおよびシート状堆積地形の模式分布図	210
図4	LOC.5付近の地層断面	211

図5 LOC.11にみられた弥生時代後期～古墳時代前期の開析流路断面	211
図6 LOC.3付近にみられた飛鳥時代～鎌倉時代の地層断面	212
図7 扇状地先端にみられる地形発達と耕作地および居住域の関係を示す模式図	213
<b>第3章</b>	
図1 玉類の蛍光X線分析結果（1）	221
図2 玉類の蛍光X線分析結果（2）	222
図3 玉類の蛍光X線分析結果（3）	223
図4 玉類の蛍光X線分析結果（4）	224
図5 玉類の蛍光X線分析結果（5）	225
図6 玉類の蛍光X線分析結果（6）	226
表1 分析対象資料	219
表2 半定量分析結果	220
図版1 分析対象資料写真（1）（透過光下）	227
図版2 分析対象資料写真（2）（C27,D5-2,F1は落射光下、他は透過光下）	229
図版3 分析対象資料写真（3）（H20は落射光下、他は透過光下）	231
<b>第4章</b>	
第1図 全試料の両分布図判別図	234
第2図 判別図	235
第3図 陶邑産と推定された須恵器の両分布図	236
第4図 産地不明となった資料の両分布図	237
第5図 土器胎土分析資料（1）	239
第6図 土器胎土分析資料（2）	240
第7図 土器胎土分析資料（3）	241
第8図 土器胎土分析資料（4）	242
表1 蔊屋北遺跡、鬼虎川遺跡 出出土器の分析データ	238
表2 蔊屋北遺跡、鬼虎川遺跡 土器胎土分析資料一覧	243・244
写真1 土器胎土分析資料	245
写真2 土器胎土分析資料	247
<b>第5章</b>	
図1 5世紀から6世紀における哺乳類・鳥類・爬虫類の出土骨片数	253
図2 5世紀から6世紀における哺乳類・鳥類・爬虫類の最小個体数	254
図3 5世紀から6世紀における動物遺体出土遺構	255・256
図4 土坑A940出土の埋葬馬 骨格部位の名称	264
図5 5世紀から6世紀におけるウマの推定年齢	269
表1 蔊屋北遺跡出土の動物遺体の種名表	250
表2 哺乳類の出現頻度表	251
表3 各時期における哺乳類・鳥類・爬虫類の出土骨片数	253
表4 各時期における哺乳類・鳥類・爬虫類の最小個体数	254
表5 土坑A940出土のウマ（A-2718）の計測値と比較資料の計測値	266
表6 ウマの推定体高	267
表7 ウマの推定年齢	268
表8 時期ごとのウマの推定年齢	269
表9 ウマ頭骨の計測値	272・273

表10 上肢の計測値（ウマ・ウシ・シカ）	274
表11 指骨の計測値（ウマ・シカ・ウシ）	274
表12 下肢の計測値（ウマ・イノシシ）	275
表13 イヌの下顎骨の計測値	276
表14 イヌの頸椎・胸椎の計測値	277
表15 イヌの腰椎・肩甲骨の計測値	278
表16 イヌの上腕骨・桡骨・中手骨の計測値	279
表17 イヌの寛骨・歯牙の計測値	280
表18 イヌの大腿骨・中足骨・基節骨・末節骨、イヌ科の中節骨の計測値	281
表19 鹿屋北遺跡A調査区出土動物遺存体同定結果一覧	282～285
表20 鹿屋北遺跡B調査区出土動物遺存体同定結果一覧	286～287
表21 鹿屋北遺跡C調査区出土動物遺存体同定結果一覧	288～290
表22 鹿屋北遺跡D調査区出土動物遺存体同定結果一覧	291～293
表23 鹿屋北遺跡E調査区出土動物遺存体同定結果一覧	294～301
表24 鹿屋北遺跡F調査区出土動物遺存体同定結果一覧	302・303
表25 鹿屋北遺跡H地区出土動物遺存体同定結果一覧	304～322
写真1 イヌのX線写真	323

## 第6章

図1 H地区大溝H11出土の魚類遺存体	329
表1 魚類遺存体種名表	325
表2 C調査区出土魚類遺存体	329
表3 D調査区大溝D900出土魚類遺存体	329
表4 E調査区出土の魚類遺存体	329
表5 H地区大溝H11出土の魚類遺存体	330

## 第7章

図1 漆塗膜のFT-IRスペクトル	338
図2 漆塗膜の蛍光X線分析結果	339
図3 漆塗膜のX線回折図	340
図版1 漆断面（1）	343
図版2 漆断面（2）	345

## 写 真 図 版 目 次

## (本文編掲載)

原色図版1 a. 遺跡遠景（東上空から）	b. 遺跡遠景（西上空から）
原色図版2 a. 北東居住域（C調査区）全景	b. 摺立柱建物C1 c～e. 井戸C 2 4 7 6
原色図版3 a. 北東居住域（B調査区）全景	b. 竪穴住居B2 c. 井戸B 1 3 1 0 0 0
原色図版4 a. 北東居住域（D調査区）全景	b. c. 井戸D 4 7 4 遺物出土状況
原色図版5 a. 南東居住域（A調査区）全景	b. c. 井戸A 4 9 4 遺物出土状況
原色図版6 a. 南西居住域（A調査区）全景	b. c. 製塩土器土坑A 1 1 3 5（試掘部）
原色図版7 a. 南西居住域（A調査区）馬埋葬土坑A 9 4 0	

- 原色図版8 a. 南西居住域（E調査区）全景 b. 井戸E 0 9 0 8 0 6 c. 同 遺物出土状況  
 原色図版9 a. 北西居住域（D調査区）全景 b. 同 竪穴住居群  
 原色図版10 a. 西居住域（F調査区）全景 b. 同 竪穴住居群  
 原色図版11 a. 竪穴住居F 9 3 5 (左)・1 1 3 4 b. 竪穴住居F 9 3 5 カマド  
 原色図版12 a. 区画溝B 1 3 0 2 4 0 全景 b. 区画溝B 1 3 0 6 7 0 遺物出土状況  
 原色図版13 a. 区画溝A 9 5 0 全景 b. 同 遺物出土状況  
 原色図版14 a. 大溝H 1 1 輪あぶみ出上状況 b. 大溝D 9 0 0 遺物出土状況  
 原色図版15 a. 大溝E 0 9 0 0 0 1 全景 b. 同 鏡・轡 出土状況  
 原色図版16 a. 大溝F 中層 b. 同 鞍 出上状況  
 原色図版17 a. 木製轡 b. 木製輪鎧  
 原色図版18 鏡轡 U字形板状土製品  
 原色図版19 韩式系土器 移動式カマド  
 原色図版20 土師器長胴甕の変遷 韩式系土器・土師器瓶の変遷  
 原色図版21 韩式系土器斜格子タタキ・格子タタキ 黒色研磨土器 土師器高壺の変遷  
 原色図版22 陶質土器 韩式系土器（鳥足文タタキ・單線横走集線文タタキ・繩帶文タタキ）  
 原色図版23 滑石製模造品と玉類 ガラス玉 ト骨 底角製品

#### (写真図版編掲載)

##### 遺構

##### 遺跡遠景（航空写真）

- 図版1 a. (垂直)  
 図版2 a. (西上空から) b. (東上空から)  
 図版3 a. (南上空から) b. (北西上空から)

#### 弥生時代中期の遺構（D-2調査区下層）

- 図版4 a. 遺構面全景（東から） b. 竪穴住居1 0 0 (南から)  
 図版5 a. 方形周溝墓1 7 (南東から) b. 同 西周溝内遺物出土状況 (北から)  
 図版6 a～c. 方形周溝墓1 7 南西コーナー付近遺物出土状況 d. 土坑2 8 遺物出土状況  
 e. 土坑3 4 遺物出土状況

#### 弥生時代中期の遺構（D-2調査区下層・F調査区）

- 図版7 a・b. D-2調査区土坑3 6 遺物出土状況 c. F調査区断ち割り 弥生中期組み合わせ鏡  
 d. F調査区断ち割り 弥生中期壹

#### 古墳時代中・後期の遺構 北東居住域（C調査区）

- 図版8 a. 東部全景（北東から） b. 西部全景（南西から）  
 図版9 a. 東部全景（北西から） b. 西部全景（北東から）  
 図版10 a. 竪穴住居群（西から） C 1 6 9 3 (右) C 2 4 8 4 (左)  
 b. 竪穴住居C 1 6 9 3 (北から) c. 竪穴住居C 1 6 9 3 のカマド（西から）  
 図版11 a. 西部 竪穴住居集中部（西から） b. 竪穴住居C 3 3 3 3 (東から) c. 竪穴住居C 3 2 1 7 (東から) d. 竪穴住居C 2 4 4 0 (北から) e. 同 住居内ピットC 2 5 7 3 遺物出土状況  
 図版12 挖立柱建物C 1 および柱穴・柱根  
 図版13 挖立柱建物C 2・C 3 および柱穴・柱根  
 図版14 挖立柱建物C 4～C 7 および柱穴・柱根  
 図版15 挖立柱建物C 8・C 1 1・C 1 8・C 3 0 および柱穴・柱根・礎板

- 図版16 挖立柱建物C 9 および柱穴・柱根・礎板  
図版17 挖立柱建物C 1 2 および柱穴・礎板  
図版18 挖立柱建物C 1 4 および柱穴・礎板  
図版19 挖立柱建物C 1 5 および柱穴・礎板  
図版20 挖立柱建物C 1 9 および柱穴・礎板  
図版21 挖立柱建物C 2 1・C 2 2北・南・C 1 6 および柱穴・柱根・礎板  
図版22 挖立柱建物C 1 0・C 1 3・C 1 7・C 2 0 および柱穴・柱根・礎板  
図版23 挖立柱建物C 2 3・C 3 5 および柱穴・礎板  
図版24 挖立柱建物C 2 5 および柱穴・礎板  
図版25 a. カマドC 1 5 6 0 (南から) b. カマド群全景 c. カマドC 1 5 5 9(南から)  
d. 挖立柱建物C 1 北側土器溜 e. カマドC 1 5 5 7(南東から)  
図版26 a～e 井戸C 2 4 7 6  
図版27 a～e 井戸C 2 4 7 6 下部  
図版28 a～f 井戸C 2 5 4 9  
図版29 a～e 井戸C 2 5 4 9 下部  
図版30 a. 建物周開溝C 2 4 2 2 西半部(西から) b・c. 同 東半部(西から)  
d. 土坑C 2 2 1 0 (北西から)  
図版31 a. 東部東端 溝C 2 3 3 1 と土坑群(北東から) b. 土坑C 2 2 0 3 (北から)  
c. 土坑C 2 1 9 8 (北から) d. 土坑C 2 2 0 5 (東から) e. 土坑C 2 2 0 0  
図版32 a. 土坑C 4 1 5 9 (北西から) b. 土坑C 3 4 8 5・C 3 4 8 6 (南から)  
c. 十坑C 2 4 1 5 (南西から)  
図版33 a. 土坑C 4 0 8 3 (中央)・C 4 0 8 7 (手前)(南西から) b. 土坑C 2 9 2 7 (西から)  
c. 土坑C 3 3 4 2 (東から)  
図版34 a. 土坑C 3 0 1 6 (南から) b. 土坑C 4 7 7 3 (南から)  
c. 土坑C 2 7 0 0 (南東から) d. 土坑C 4 2 4 3 内甕出土状況(南から)  
図版35 a. 北東谷 b. 北東谷内舟形木製品出土状況 c. 南谷 d. h 2 区土器集積

#### 古墳時代中・後期の遺構 北東居住域 (B調査区)

- 図版36 a. B調査区西部全景(北から) b. B調査区東部全景(北から)  
図版37 a. 穴住居B 2 (南から) b. 挖立柱建物B 2 (南から)  
図版38 a. 挖立柱建物B 3 (南東から) b. 挖立柱建物B 4 (南東から)  
図版39 a. 挖立柱建物B 5 (南から) b～e. 挖立柱建物B 5 柱穴  
図版40 a. 挖立柱建物B 8 (北西から) b～e. 挖立柱建物B 8 柱穴  
図版41 a. 井戸B 1 3 1 0 0 0 b. 同 井戸枠内掘削後 c. 井戸枠1 d. 井戸枠2  
図版42 a. 周溝墓B 1 3 1 1 0 1 (北東から) b. 同 主体部(東から)  
図版43 a～d. 周溝墓B 1 3 1 1 0 1 周溝内遺物出土状況(南側周溝)・同部分拡大  
周溝墓B 1 3 1 1 0 1 周溝内遺物出土状況(東側周溝)・同部分拡大  
e. 周溝墓B 1 3 1 2 5 0 (北から)  
図版44 a～d. 土坑B 1 3 0 7 6 4 遺物出土状況 e. 土坑B 1 3 0 9 6 5 遺物出土状況(東から)  
図版45 a. 土坑B 1 3 1 0 0 1 遺物出土状況(東から)  
b. 土坑B 1 3 1 0 0 2 遺物出土状況(南から)

#### 古墳時代中・後期の遺構 北東居住域 (D-2調査区)

- 図版46 a. 調査区全景(東から) b. 同(完掘)  
図版47 a. D-2区東部近景(北から) b. 同 完掘  
図版48 a. 井戸D 4 7 4 4層掘削(南西から) b. 同 拡大 c. 4層遺物出土状況(北西から)

d. 同部分拡大（北東から） e. 4層下位（南西から）

図版49 a. 井戸D 4 7 4 5層遺物出土状況（南東から） b. 同（南西から） c. 同（北西から）  
d. 同（南東から）

図版50 a. 井戸D 4 7 4 6層遺物出土状況（南西から） b. 溝D 4 9 5（北東から）  
c. 同遺物出土状況（北西から）

#### 古墳時代中・後期の遺構 南東居住域（A調査区）

図版51 a. 居住域全景（北東から） b. 同（南東から）

図版52 a. 居住域全景（北から） b. 竪穴住居A 1・2・3・4（南東から）

図版53 a. 竪穴住居A 1（北東から） b. 同（北東から） c. 同 部分拡大

図版54 a. 竪穴住居A 2 b. 竪穴住居A 3 c. 竪穴住居A 4

図版55 a. 捜立柱建物A 2 b~f. 井戸A 4 9 4

図版56 a~d. 井戸A 4 9 4 e~g. 井戸A 5 4 2

図版57 a・b. 井戸A 5 9 0 c・d. 井戸A 6 7 6 e・f. 井戸A 6 9 5

図版58 a~d. 井戸A 6 9 5 e. 土坑A 4 3 5

#### 古墳時代中・後期の遺構 南西居住域

図版59 a. B調査区居住域全景（南東から） b. A調査区居住域全景（北東から）

図版60 a. A調査区居住域北半（南西から） b. 同 遺構集中部（西から）

図版61 a. A調査区居住域南半（西から） b. E調査区居住域全景（北から）

#### 古墳時代中・後期の遺構 南西居住域（B調査区）

図版62 a. 竪穴住居B 1 3 0 4 7 5（西から） b. 同 カマド

c. 土坑B 1 3 0 5 6 7 製塙土器出土状況 d. 同（細部）

#### 古墳時代中・後期の遺構 南西居住域（A調査区）

図版63 a. 竪穴住居A 5（南西から） b. 竪穴住居A 5（南西から） c. 竪穴住居A 6（南西から）

図版64 a~e. 井戸A 1 5 0 1

図版65 a~e. 井戸A 1 6 1 3 d・e. 土坑A 6 5 5

図版66 a~e. 馬埋葬土坑A 9 4 0

図版67 a. 馬埋葬土坑A 9 4 0（完掘） b. 馬埋葬土坑A 1 3 4 5 c. 同（馬上下顎骨出土状況）

d. 土坑A 1 6 3 2

図版68 a~b. 土坑A 1 1 3 5 c~h. 土坑A 1 1 3 5（試掘部1層・2層・土層断面）

図版69 a・b. 土坑A 1 6 5 4 c・d. 土坑A 1 8 0 0 e. 溝A 1 2 3 1

#### 古墳時代中・後期の遺構 南西居住域（E調査区）

図版70 a. 居住区全景（北から） b. 竪穴住居E 3（東から）

図版71 a. 竪穴住居E 4（西から） b. 竪穴住居E 5（東から） c. 竪穴住居E 5 カマド

図版72 a. 竪穴住居E 6（北から） b. 竪穴住居E 7（南東から）

図版73 a. 竪穴住居E 8（東から） b. 捜立柱建物E 1（東から）

図版74 a. 捜立柱建物E 4（北から） b. 捜立柱建物E 5（西から）

図版75 a. 捜立柱建物E 7（東から） b. 捜立柱建物E 8（東から）

図版76 a. 井戸E 0 9 0 4 5 1（南から） b. 同 遺物出土状況（南から）

図版77 a. 井戸E 0 9 0 8 0 5・E 0 9 0 8 0 6（南から）

b. 井戸E 0 9 0 8 0 5検出状況（南東から）

図版78 a・b. 井戸E 0 9 0 8 0 5 摘剤状況 c. 井戸E 0 9 0 8 0 6 摘出状況（北から）

図版79 a・b. 井戸E 0 9 0 8 0 6 挖削状況 c. 同井戸枠下土坑掘削状況

## 古墳時代中・後期の遺構 西居住域 (D調査区)

図版80 a. D-1調査区居住域全景 (西から) b. 西部遺構密集域 (南東から)

図版81 a. D-1調査区居住域全景 (北から) b. D-2調査区西部居住域全景 (北から)

図版82 a. D-1調査区居住域全景 (最終面 南から) b. 同居住域全景 (最終面 北東から)

図版83 a. D-1調査区居住域全景 (最終面 北から) b. D-1調査区豊穴住居密集域 (南から)

図版84 a. 豊穴住居D 1・D 2 (南から) b. カマドD 1 6 4 5 (豊穴住居D 1 南から)

c・d. カマドD 1 4 3 5 (豊穴住居D 2 南から) e. 同 (完掘)

図版85 a. 豊穴住居D 3 (南東から) b. カマドD 1 6 4 6 (南西から)

図版86 a. 豊穴住居D 4 (南西から) b. 同カマドD 1 4 6 9 検出状況

c. 同住居床面土器出土状況

図版87 a. 豊穴住居D 8 (南から) b. 豊穴住居D 5 のカマドD 1 4 6 7 (南東から)

c・d. 豊穴住居D 8 のカマドD 1 5 7 3 (南西から)

図版88 a. 豊穴住居D 1 5 (東から) b~e. 豊穴住居D 1 5 のカマドD 1 4 3 4 (東から)

図版89 a. 豊穴住居D 1 9・D 2 0 (南から) b. 豊穴住居D 1 8 のカマドD 1 5 3 4 (南西から)

図版90 a. 豊穴住居D 1 5~1 9 (南から) b・c. カマドD 1 1 0 3 (豊穴住居D 1 9 c. 南東から)

d. カマドD 1 1 1 4 (豊穴住居D 2 0 南西から)

e. カマドD 1 0 5 1 (豊穴住居D 1 6 西から)

図版91 a. 豊穴住居D 2 5 (北から) b~d. 豊穴住居D 2 5 のカマドD 1 5 9 8 (西から)

図版92 a・b. カマドD 9 3 5 (a 東から b 西から) c. 豊穴住居D 2 3 のカマドD 1 4 8 4 (南東から)

d. カマドD 1 5 6 9 (東から) e. 豊穴住居D 2 0 のカマドD 1 1 1 4 (南から) f. カマドD 1 1 4 0 (北から)

図版93 a. 豊穴住居D 2 7~2 9 (北東から) b. 挖立柱建物D 1 (北から)

図版94 a. 挖立柱建物D 2 (南から) b. 挖立柱建物D 3・D 4 (北から)

図版95 a. 挖立柱建物D 9 (北東から) b. 挖立柱建物D 1 0 (北から)

図版96 a. ピットD 8 5 7 碓板 (掘立柱建物D 1 0) b. ピットD 9 3 1 (掘立柱建物D 1)

c. ピットD 9 3 6 碓板 d. ピットD 9 6 7 碓板 (掘立柱建物D 1 8)

e. ピットD 9 6 5 (掘立柱建物D 1 8) f. ピットD 1 2 4 4 碓板

g. ピットD 1 5 3 8 (豊穴住居D 2 0) h. ピットD 1 6 1 4

図版97 a. ピットD 1 6 6 4 (豊穴住居D 1 4) b. ピットD 1 6 6 6 c. ピットD 1 8 6 8

d. ピットD 1 8 9 1 碓板 (掘立柱建物D 8) e. 井戸D 6 4 3 上層 f. 同 下層断面

g. 底部遺物出土状況

図版98 a. 井戸D 1 2 8 1 下層 (北西から) b. 同中・下層 c. 同中層の木製品

d. e. 同最下層の上器

図版99 a. 井戸D 9 5 2 最下層 (西から) b. 土坑D 4 8 0 c・d. 土坑D 9 2 6 (c 東から d 西から)

e・f. 土坑D 1 6 1 7 (e 東から f 南から)

図版100 a. 溝D 9 8 6 (東から) b~e. 溝D 9 8 6 遺物出土状況

図版101 a. 溝D 1 0 3 6 (西から) b. 溝D 1 0 9 7 (北から) c. 土坑D 6 7 9 (北から)

## 古墳時代中・後期の遺構 西居住域 (F調査区)

図版102 a. 全景 (垂直)

図版103 a. 全景 (東から) b. 居住区全景 (西から)

図版104 a. 豊穴住居F 1 完掘 (南東から) b. 同 カマド検出状況 c. 同 カマド完掘

d. 同 中央の炭化物層 e. 同 土器出土状況

図版105 a. 豊穴住居F 2・3・4・5 b. 豊穴住居F 2 (南東から)

- 図版106 a. 穴住居F 2・3・4・5重複状況（北から） b. 穴住居F 2カマド  
c. 同 紡錐車出土状況 d. 穴住居F 3カマド e. 穴住居F 4カマド
- 図版107 a. 穴住居F 1 2（左）7（右） b. 穴住居F 7カマド c. 穴住居F 1 2カマド検出状況  
d. 同 完掘状況
- 図版108 a. 穴住居F 1 2床面製塙土器出土状況 b. 同 砥石出土状況 c. 穴住居F 8・1 9  
d. 穴住居F 8カマド
- 図版109 a. 穴住居F 1 0完掘（南から） b. 同 カマド（北から） c. 同 土器出土状況
- 図版110 a. 穴住居F 9（北から） b. 穴住居F 1 3・1 1・1の重複（北東から）
- 図版111 a. 穴住居F 1 4 b. 穴住居F 1 6（南から） c. d. 同 カマド
- 図版112 a. 掘立柱建物F 1 b. 掘立柱建物F 2
- 図版113 a. 掘立柱建物F 7 b. 掘立柱建物F 8・9
- 図版114 a. 井戸F 6 9 0 b. 同 底部遺物出土状況
- 図版115 a. 井戸F 9 4 4遺物出土状況 b. 同 底部遺物出土状況 c. 同 ザル出土状況
- 図版116 a. 井戸F 1 1 6 8断面 b. 同 遺物出土状況 c. 土坑F 1 1 2 0遺物検出状況  
d. 同 完掘および土器の復元 e. 同 鳥足文土器の復元近影
- 図版117 a. 溝F 6 3 3 b. 溝F 6 3 4 c. 溝F 1 0 6 2西半 d. 溝F 1 0 6 2東半
- 図版118 a. 溝F 1 0 7 5遺物出土状況 b. 流路F 6 2 5遺物出土状況 c. ピットF 1 0 1 2  
製塙土器出土状況 d. ピットF 1 2 6 9製塙土器出土状況 e. 同 細部

#### 古墳時代中・後期の遺構 北東居住域～南西居住域の区画溝（B調査区）

- 図版119 a. 区画溝B 1 3 0 2 4 0全景（南から） b～e. 同 遺物出土状況
- 図版120 a～h. 区画溝B 1 3 0 2 4 0中・下層遺物出土状況
- 図版121 a～d. 区画溝B 1 3 0 2 3 6遺物出土状況 e～h. 区画溝B 1 3 0 6 7 0遺物出土状況

#### 古墳時代中・後期の遺構 南東居住域～南西居住域の区画溝（A調査区）

- 図版122 a. 区画溝A 9 5 0（北から） b. 同 土層断面 c. d. 同 遺物出土状況
- 図版123 a. 区画溝A 9 5 0遺物出土状況 b. 同（西から） c. 同 U字形板状土製品  
d. 区画溝A 4 2 9（東から） e. 同 溝内遺物出土状況（南西から）
- 図版124 a. 区画溝A 4 2 8全景（北西から） b. 同（南東から） c. 同 上層断面
- 図版125 a. 谷F 2 6世紀水田（北から） b. 同（西から）

#### 古墳時代中・後期の遺構 大溝（H地区）

- 図版126 a. 全景（南東から） b. 全景（北東から）
- 図版127 a. b. 1層遺物出土状況
- 図版128 a. 2層（南から） b～e. 2層遺物出土状況
- 図版129 a. 3層（南から） b. 3層 木製輪轂出土状況
- 図版130 a～d. 3層遺物出土状況 e. 4層（南から） f. 5層（南から） g. 5層（北から）
- 図版131 a～d. 5層下位遺物出土状況 e. 土層断面 f. 5層下位全景（南から）

#### 古墳時代中・後期の遺構 大溝（D調査区）

- 図版132 a. 大溝D 9 0 0 2層遺物出土状況（西から） b. 同 3層遺物出土状況（西から）  
c. 同 2層（馬下顎骨 西から） d. 同 3層（木鉤 東から）
- 図版133 a. 大溝D 9 0 0 5層遺物出土状況（西から） b. 同 土器  
c. 同 6層遺物出土状況（南から）  
d. 6層近景（北から） e. 同 6層 斧柄（東から）

古墳時代中・後期の遺構 大溝（F調査区）

- 図版134 a～c. 上層遺物出土状況  
図版135 a～h. 上層遺物出土状況  
図版136 a～c. 中層遺物出土状況  
図版137 a～g. 中層遺物出土状況（a 鞍出土状況）

古墳時代中・後期の遺構 大溝（E調査区）

- 図版138 a. 全景（南東から） b～e. 上層遺物出土状況  
図版139 a～d. 中層遺物出土状況（e 鏡響出土状況）  
図版140 a～d. 下層遺物出土状況

飛鳥・奈良時代の遺構

- 図版141 a. D-2調査区水田面第9c層上面（7世紀 東から） b. C調査区流路上手（西から）  
図版142 a. E調査区奈良時代遺構面（南から）  
b. E調査区掘立柱建物E080001（南から）

平安時代前・中期の遺構

- 図版143 a. E調査区平安時代前期遺構面（南から） b. 溝E080001遺物出土状況（南から）  
c. 同 細部（南から）  
図版144 a. D-1調査区水田面第8層上面（南から） C調査区水田面（南東から）  
図版145 a. C調査区木桶1（北から） b. C調査区木桶2（南から）  
図版146 a. C調査区木桶3（南から） b. C調査区木桶4（南から）

平安時代後期～鎌倉時代の遺構

- 図版147 a. C調査区第4面掘立柱建物（東から） b. D-2調査区水田7c層上面（北から）  
図版148 a. D-1調査区6層上面井戸D422検出状況（東から） b. 同下部（東から）  
図版149 a. D-1調査区6層上面烟・ピット（南から） b. D-2調査区井戸D350（南から）

八丁堤道

- 図版150 a. B調査区（西から） b. E調査区（北から）

遺物

- 図版151 弥生時代前期包含層出土土器  
図版152 弥生時代中期集落出土土器  
図版153 北東居住域出土土器（1） 井戸  
図版154 北東居住域出土上器（2） 井戸  
図版155 北東居住域出土上器（3） 井戸  
図版156 北東居住域出土上器（4） 井戸・竪穴住居  
図版157 北東居住域出土土器・上製品（5） 竪穴住居・カマド・土坑  
図版158 北東居住域出土土器（6） 周溝  
図版159 北東居住域出土土器（7） 周溝・土坑  
図版160 北東居住域出土土器（8） 土坑  
図版161 北東居住域出土土器（9） 土坑  
図版162 北東居住域出土土器（10） 土坑  
図版163 北東居住域出土土器（11） 土坑  
図版164 北東居住域出土土器（12） 土坑

- 図版165 北東居住城出土土器 (13) 土器群  
図版166 北東居住城出土土器 (14) 井戸・土器だまり・溝  
図版167 北東居住城出土土器 (15) 落ち込み・土坑・包含層  
図版168 北東居住城出土土器 (16) 土坑・溝・包含層  
図版169 北東居住城出土土器 (17) 移動式カマド  
図版170 北東居住城出土土器 (18) 挖立柱建物C 1柱材  
図版171 北東居住城出土土器 (19) 挖立柱建物礎板  
図版172 北東居住城出土上器 (20) 製塙土器  
図版173 北東・南西居住城出土土器 (21) 製塙土器  
図版174 南東居住城出土土器 (1) 挖立柱建物・竪穴住居・井戸  
図版175 南東居住城出土土器 (2) 井戸  
図版176 南東居住城出土土器 (3) 井戸  
図版177 南東居住城出土土器 (4) 井戸  
図版178 南西居住城出土土器 (1) 井戸  
図版179 南西居住城出土上器 (2) 井戸  
図版180 南西居住城出土土器 (3) 井戸  
図版181 南西居住城出土土器 (4) 井戸  
図版182 南西居住城出土土器 (5) 井戸・溝  
図版183 南西居住城出土土器 (6) 土坑  
図版184 南西居住城出土土器 (7) 土坑  
図版185 南西居住城出土上器 (8) 土坑  
図版186 南西居住城出土土器 (9) 土坑  
図版187 南西居住城出土土器 (10) 土坑  
図版188 南西居住城出土土器 (11) 土坑  
図版189 南西居住城出土土器 (12) 製塙土器  
図版190 北西居住城出土土器・土製品 (1) 竪穴住居  
図版191 北西居住城出土土器 (2) 竪穴住居  
図版192 北西居住城出土土器 (3) 竪穴住居  
図版193 北西居住城出土上器 (4) 井戸  
図版194 北東・北西居住城出土土器 (5) 竪穴住居・井戸・土坑  
図版195 西居住城出土土器 (1) 竪穴住居  
図版196 西居住城出土土器 (2) 竪穴住居  
図版197 西居住城出土土器 (3) 竪穴住居・溝  
図版198 西居住城出土土器 (4) 井戸・土坑  
図版199 西居住城出土土器 (5) 井戸  
図版200 西居住城出土上器 (6) 溝  
図版201 区画溝出土上器 (1)  
図版202 区画溝出土土器 (2)  
図版203 区画溝出土土器 (3)  
図版204 区画溝出土土器 (4)  
図版205 区画溝出土土器 (5)  
図版206 区画溝出土土器 (6)  
図版207 区画溝出土土器 (7)  
図版208 区画溝出土土器 (8)  
図版209 区画溝出土土器 (9)  
図版210 区画溝出土土器 (10)

- 図版211 区画溝出土土器（11）  
図版212 大溝出土土器（1）  
図版213 大溝出土土器（2）  
図版214 大溝出土土器（3）  
図版215 大溝出土土器（4）  
図版216 大溝出土土器（5）  
図版217 大溝出土土器（6）  
図版218 大溝出土土器（7）  
図版219 大溝出土土器（8）  
図版220 大溝出土土器（9）  
図版221 大溝出土土器（10）  
図版222 大溝出土土器（11）  
図版223 大溝出土土器（12）  
図版224 大溝出土土器（13）  
図版225 大溝出土土器（14）  
図版226 大溝出土土器（15）  
図版227 大溝出土土器（16）  
図版228 大溝出土土器（17）  
図版229 大溝出土土器（18）  
図版230 大溝出土土器（19）  
図版231 古墳時代前期流路出土土器（1）  
図版232 古墳時代前期流路出土土器（2）  
図版233 古墳時代前期流路出土土器（3）  
図版234 出土遺物 塗輪（1）  
図版235 出土遺物 塗輪（2）  
図版236 出土遺物 U字形板状土製品（1）  
図版237 出土遺物 U字形板状土製品（2）  
図版238 出土遺物 U字形板状土製品（3）  
図版239 出土遺物 U字形板状土製品（4）  
図版240 出土遺物 U字形板状土製品（5）  
図版241 出土遺物 U字形板状土製品（6）  
図版242 出土遺物 U字形板状土製品（7）  
図版243 出土遺物 石製品（1） 着玉・勾玉・子持勾玉・劍形模造品・鏡形模造品  
図版244 出土遺物 石製品（2） 紡錘車  
図版245 出土遺物 上製品（1） 紡錘車  
図版246 出土遺物 石製品（3） 双孔円板・有孔円板  
図版247 出土遺物 石製品（4） 双孔円板  
図版248 出土遺物 石製品（5） 白玉・土玉  
図版249 出土遺物 石製品（6） 磨石  
図版250 出土遺物 石製品（7） 磨石  
図版251 出土遺物 石製品（8） 磨石  
図版252 出土遺物 鉄製品（1） 鐸・斧  
図版253 出土遺物 鉄製品（2） 曲柄刀子  
図版254 出土遺物 鉄製品（3） 刀子  
図版255 出土遺物 鉄製品（4） 整・鍼轡・環状金具  
図版256 出土遺物 鉄製品（5） 釣針・鎌

- 図版257 出土遺物 鉛滓
- 図版258 出土遺物 土製品 ふいごの羽口・土鍤
- 図版259 出土遺物 ニホンジカ肩甲骨（ト骨）
- 図版260 出土遺物 鹿角製刀劍装具 痴頭・鞘尾
- 図版261 出土遺物 骨角製品
- 図版262 出土遺物 鹿角製加工品・ヒョウタン
- 図版263 出土遺物 編み物 箕
- 図版264 出土遺物 動物遺存体 ウマ 頭蓋骨（1）
- 図版265 出土遺物 動物遺存体 ウマ 頭蓋骨（2）
- 図版266 出土遺物 動物遺存体 ウマ 頭蓋骨（3）・上顎臼齒列
- 図版267 出土遺物 動物遺存体 ウマ 頭蓋骨・椎骨・上肢骨
- 図版268 出土遺物 動物遺存体 ウマ 下肢骨・中手骨・中足骨
- 図版269 出土遺物 動物遺存体 ウマ・ウシ
- 図版270 出土遺物 動物遺存体 ニホンジカ・イノシシ
- 図版271 出土遺物 動物遺存体 イヌ 下顎骨
- 図版272 出土遺物 動物遺存体 イヌ
- 図版273 出土遺物 動物遺存体 哺乳類・両生類・爬虫類
- 図版274 出土遺物 動物遺存体 トリ・貝・カニ
- 図版275 出土遺物 動物遺存体 サカナ
- 図版276 出土遺物 木製品（1） 錫・鎌柄・豎杵
- 図版277 出土遺物 木製品（2） 橫槌・エブリ
- 図版278 出土遺物 木製品（3） 鋸柄把手・反柄・鋸・一本木鋸・柄
- 図版279 出土遺物 木製品（4） 橫槌・大足・木鍤
- 図版280 出土遺物 木製品（5） 木鍤
- 図版281 出土遺物 木製品（6） 目盛板・斧柄・斧柄未製品・刀子柄
- 図版282 出土遺物 木製品（7） 朴・紡錘車・挿入部留具・縫打具・カセカケ（支え木）
- 図版283 出土遺物 木製品（8） タタリ（台）
- 図版284 出土遺物 木製品（9） 槽
- 図版285 出土遺物 木製品（10） 槽
- 図版286 出土遺物 木製品（11） 槽・コップ形容器・盤・箱側板・曲物底板
- 図版287 出土遺物 木製品（12） 椅子・椅子脚・鞘・柄頭
- 図版288 出土遺物 木製品（13） 粱尻・柄装具・刀形・鎌形・剣形
- 図版289 出土遺物 木製品（14） 舟形・衣笠腕木・輪鍤
- 図版290 出土遺物 木製品（15） 鞍（後輪）
- 図版291 出土遺物 木製品（16） サシバ形・ササラ状木製品・杓子状木製品・横杓子
- 図版292 出土遺物 木製品（17） 磬板・琴柱・筑状弦楽器
- 図版293 出土遺物 木製品（18） 下駄・背負子・火鑓臼
- 図版294 出土遺物 木製品（19） アカ取り
- 図版295 出土遺物 木製品（20） 紙側板・竜骨
- 図版296 出土遺物 木製品（21） 建築部材・柱・垂木・扉・井桁・杭
- 図版297 出土遺物 木製品（22） 有頭棒・用途不明品
- 図版298 出土遺物 木製品（23） 用途不明品
- 図版299 出土遺物 木製品（24） 用途不明品・板材・加工残材
- 図版300 出土遺物 木製品（25） 用途不明品
- 図版301 出土遺物 木製品（26） 盖・タタリ・用途不明品・大足
- 図版302 出土遺物 木製品（27） 下駄・木鍤・目盛板

- 図版303 出土遺物 木製品 (28) 曲物底板・曲物側板・槽  
 図版304 出土遺物 木製品 (29) 斧串  
 図版305 出土遺物 木製品 (30) 梯子・建築部材・杭  
 図版306 出土遺物 木製品 (31) 木縫・板材  
 図版307 出土遺物 木製品 (32) 軸側板・曲柄又鍛・木鍊・舟形  
 図版308 出土遺物 木製品 (33) 槽・縦横棒・橋  
 図版309 出土土器 古代以降 (1)  
 図版310 出土土器 古代以降 (2)  
 図版311 出土土器 古代以降 (3)  
 図版312 出土土器 古代以降 (4)  
 図版313 山土土器 古代以降 (5)  
 図版314 出土土器 古代以降 (6)

## 表 目 次

### (本文編掲載)

第1表 八丁堀道出土錢貨計測表	235
付表1 北東居住域 遺構掲載頁一覧	237
付表2 南東居住域 遺構掲載頁一覧	240
付表3 南西居住域 遺構掲載頁一覧	241
付表4 北西居住域 遺構掲載頁一覧	242
付表5 西居住域 遺構掲載頁一覧	244
付表6 穴住居遺構番号新旧対照表	244
付表7 須恵器編年対照表	245

### (総括編掲載)

第2表 陶質土器一覧表	3
第3表 瓦質土器・黑色研磨上器一覧表	3
第4表 韓式系土器壺・甕 口縁部の形状と外面に残るタタキの種類の関係	5
第5表 韓式系土器平底鉢 全体の形状・口縁部の形状と外面に残るタタキの種類・調整との関係	6
第6表 韓式系土器壺 口縁部・底部・蒸気孔の形状と外面に残るタタキの種類・調整との関係	8
第7表 韓式系土器甕 口縁部・底部・把手の形状と外面に残るタタキの種類・調整との関係	10
第8表 韓式系上器羽釜 口縁部・甕の形状と外面に残るタタキの種類・調整との関係	10
第9表 移動式カマド 掛け口・庇・焚口左右の突帯の形状と外面調整の関係	12
第10表 U字形板状土製品 宽帯の形状とコーナーの曲がり方の関係	14
第11表 土師器高杯の種類と接合技法の関係	16
第12表 土師器中小型 大きさ指數別の出土個体数	23
第13表 小型製塙土器 主要遺構からのタイプ別出土量・個数集計表	25・26
第14表 陶質土器・韓式系土器・土師器・須恵器系土器・製塙土器消長表	27・28
第15表 現地調査時の大溝の遺構No.・層序と蔀屋北編年との関係	49

第16表	区画溝と各居住域との対応関係	49
第17表	豎穴住居一覧表	53・54
第18表	豎穴住居 時期別・居住域別棟数集計表	54
第19表	豎穴住居 建物規模別棟数集計表	54
第20表	掘立柱建物一覧表	56・57
第21表	掘立柱建物 時期別・居住域別棟数集計表	57
第22表	掘立柱建物 時期別・居住域別床面積集計表	57
第23表	掘立柱建物 建物プラン・規模別棟数集計表	58
第24表	井戸一覧表	60
第25表	龍屋北3期の各居住域の属性	74
第26表	龍屋北5期の各居住域の属性	74
第27表	龍屋北遺跡総括表	77
第28表	韓式系土器 壺・甕一覧表	78・79
第29表	韓式系土器 平底鉢一覧表	80～82
第30表	韓式系土器・土師器 瓢一覧表	83・86
第31表	韓式系土器・土師器 鍋一覧表	87
第32表	韓式系土器・土師器 羽釜一覧表	88
第33表	韓式系土器・土師器 移動式カマド	89～91
第34表	土師器 高环一覧表	92～94
第35表	土師器 鉢一覧表	95～97
第36表	土師器 大型壺・長胴甕一覧表	98・99
第37表	須恵器系土器一覧表	100～102
第38表	出土鉄製品時期別一覧	111
第39表	U字形板状土製品法量一覧表	165
第40表	U字形板状土製品觀察表	174～186

## 観察表目次(CD-ROMに収納)

表1	土器・土製品觀察表	1～168
表2	ガラス玉・琥珀玉觀察表	169
表3	玉類・紡錘車・双孔円板・有孔円板觀察表	170～174
表4	滑石製臼玉觀察表	175～186
表5	砥石觀察表	187～190
表6	鐵石・台石觀察表	191～192
表7	鉄製品觀察表	193
表8	鍛冶関連遺物觀察表	194～196
表9	骨角製品觀察表	197
表10	木製品觀察表	198～204

## 第1章 調査に至る経緯と調査経過

### 第1節 調査に至る経緯

大阪府土木部（当時）では、北河内地域に位置する寝屋川流域のうち、北部地域では、昭和40年度から流域下水道事業に着手し建設を進めている。近年の都市化による人口増加と生活様式の向上により、汚水量が増加の一途をたどり、処理能力の強化により生活環境の改善と公共用水域の水質保全を図るために、なわて水みらいセンターが計画された。

寝屋川北部流域では、計画処理区域面積 6,725ha、計画処理人口 750,000 人の汚水処理を「鴻池水みらいセンター」、「なわて水みらいセンター」の2箇所の処理場で行なうように計画されている。なわて水みらいセンターでは、寝屋川北部流域下水道計画に基づき、1日当たり 152,000 m<sup>3</sup> の汚水の高度処理を行う。このうち、76,000 m<sup>3</sup>/日対応の水処理施設を早期供用を目指して事業を開始した。



第1図 葛屋北遺跡の位置

## 第1回調査 確認調査

なわて水みらいセンター計画地の北半部は、讃良郡条里遺跡として周知されているため、平成11年4月、土木部長（当時）から遺跡の取り扱いについて協議を受け、包含層の有無とその形成時期、遺構面の枚数と深度を明らかにするため確認調査を実施した。

調査は平成12年3月13日に着手し、4月11日に終了した。当初水処理施設予定地内に5m×5mのA地区と3m×50mのB地区の2箇所の調査区を設定した。調査途中仮設道路予定地に3m×3mにC・D地区の2箇所の調査区、合計193m<sup>2</sup>の調査区を設定した。A地区では平安時代中期の屋敷地、B地区では鎌倉時代の坪境水路を検出した。またA・C・D地区では、条里遺構の下から新たに古墳時代の集落を検出した。溝、土坑の他、柱穴には当時の柱が多数遺存し、保存状態の良好な古墳時代遺構面の存在が明らかとなった。

確認調査の結果、讃良郡条里遺跡の範囲である水処理施設北半部は発掘調査の実施が必要であり、遺跡範囲外の南部については、計画地南側へ向けて、遺構面が広がることが判明したため、さらに試掘調査が必要である旨、土木部長（当時）に回答した。

## 第2回調査 試掘調査

平成12年11月、土木部長（当時）から試掘調査の依頼を受け、前回調査で確認された遺跡の南側への広がりと深度を把握することを目的に試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は、平成12年11月8日に着手し、12月19日に終了した。当初、水処理施設予定地内の南半部に5m×5mのE地区を設定した。また盛土除去に伴う先行工事を実施するため、旧表土と調査対象遺構面の高さを確認するため、F・G地区を設定した。E地区の調査により14面の遺構面が確認され、特に古墳時代の遺構面から検出された土坑から、夥しい量の製塙土器、須恵器、土師器が出土した。

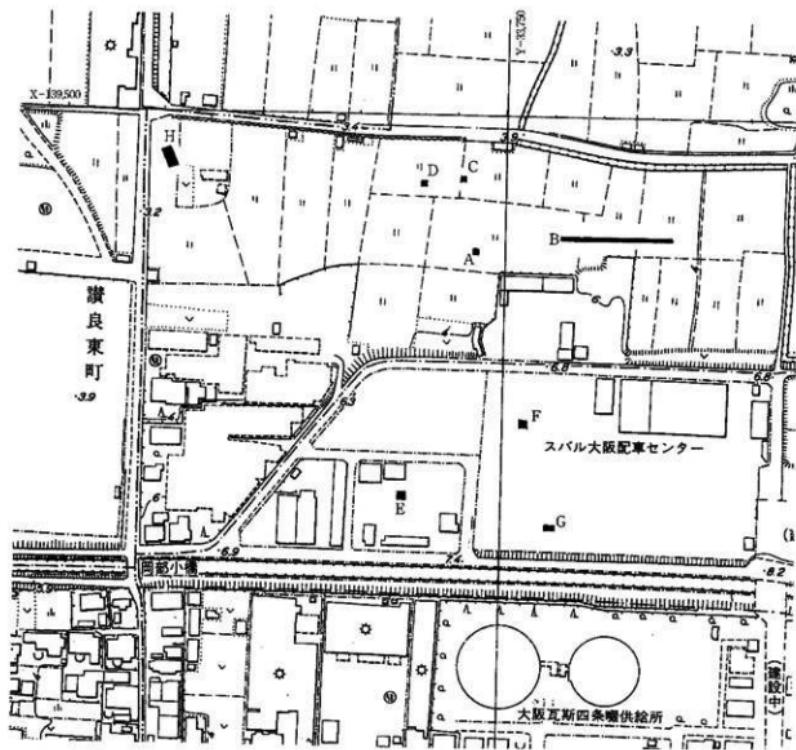
この結果、なわて水みらいセンター計画地全体に、条里制にかかる遺構はもちろんのこと、古墳時代中期の遺構面が全面に展開していることが判明したため、本体工事建設に先立ち発掘調査が必要である旨、土木部長（当時）にて回答した。

讃良郡条里遺跡の南側へ展開することが明らかとなった当該地区は、条里制遺構のほか古墳時代に特徴を持つ遺跡として把握することが適当と判断されたため、予定地全体を「藤屋北遺跡」として新たに周知することとなった。

## 立坑部の調査

なわて水みらいセンターに流入接続する門真寝屋川直送幹線下水管渠の発進立坑が予定地の北西隅に建設されることとなった。発進立坑部の発掘調査は、平成13年4月2日に着手し、6月6日に終了した。6m×10mの豊坑をH地区として設定した。当調査区でも古墳時代の遺構面から溝が検出され、木製輪鏡をはじめ、U字形土製品、鹿角製品、滑石製白玉、多孔円板等多彩な遺物の出土があった。

以上の確認調査、試掘調査等の結果に基づき、平成13年3月土木部長（当時）から教育長あて、



第2図 試掘調査区の位置

寝屋川流域下水道事業に伴う埋蔵文化財包蔵地の調査について依頼があり、「寝屋川流域下水道なわて水環境保全センター水処理施設土木工事」を端緒として部屋北遺跡の発掘調査に着手することになった。

なお、水処理施設発掘調査着手以前と以後の調査区名を区別するため、上記3調査の調査区にはA～H地区の名称を与えた。(水みらいセンター各施設に伴う調査区はA～F調査区として報告。)

## 第2節 調査経過と調査の方法

### 第1項 調査経過

調査は、平成11年度と平成12年度の、二度に及ぶ試掘調査の結果を受け、主要施設建設部分の全城を対象として、平成13年度より平成19年度にかけて順次実施された。なお、水処理

施設については、対象面積が約 17,200 m<sup>2</sup>と膨大なため、北端部、中央部、南端部に調査区を三分割し、調査区ごとに実施した。各年度の調査経過は以下の通りである。

#### 平成 13 年度

平成 13 年度は、建設予定地内の二ヶ所で発掘調査を実施した。

敷地内の北西端部付近にあたる地点で門真寝屋川直送幹線下水管渠兼造工事が計画され、発進立坑部分（H 地区・対象面積約 60 m<sup>2</sup>）の発掘調査を、調査第一グループが宮崎泰史を現地担当者として平成 13 年 4 月 2 日から同年 6 月 7 日までの期間で、また、なわて水みらいセンター水処理施設建設予定地のうちの南端部分（A 調査区・約 5,400 m<sup>2</sup>）の発掘調査を、山上 弘を現地担当者として平成 13 年 5 月 25 日から平成 15 年 3 月 29 日までの期間を費やして実施した。遺物整理は調査管理グループが山田隆一、林日佐子、小浜 成を担当者として、現地調査と並行して実施した。

#### 平成 14 年度

平成 14 年度は、建設予定地内の二ヶ所で発掘調査を実施した。

平成 13 年度より引き続き、A 調査区の調査を平成 15 年 3 月 29 日まで実施し、完了するとともに、水処理施設建設予定地のうちの北端部分（C 調査区・約 5,700 m<sup>2</sup>）の発掘調査を、藤田道子を現地担当者として平成 14 年 5 月 7 日から平成 16 年 1 月 5 日までの期間を費やして実施した。遺物整理は山田隆一、林日佐子、小浜 成を担当者として、現地調査と並行して実施した。

#### 平成 15 年度

平成 15 年度は、建設予定地内の二ヶ所で発掘調査を実施した。

平成 14 年度より引き続き、C 調査区の調査を平成 16 年 1 月 5 日まで実施し、完了するとともに、水処理施設建設予定地のうちの中央部分（B 調査区・約 5,400 m<sup>2</sup>）の発掘調査を、岩瀬透を現地担当者として平成 15 年 4 月 16 日から平成 16 年 7 月 28 日までの期間を費やして実施した。遺物整理は竹原伸次、林日佐子、藤田道子を担当者として、現地調査と並行して実施した。

#### 平成 16 年度

平成 16 年度は、建設予定地内の五ヶ所で発掘調査を実施した。

平成 15 年度より引き続き、B 調査区の調査を平成 16 年 7 月 28 日まで実施し、完了するとともに、水処理施設建設工事作業ヤード部分（AB-E 調査区・約 1,500 m<sup>2</sup>、AB-W 調査区・約 1,500 m<sup>2</sup>）の発掘調査を、堀江門也を現地担当者として平成 16 年 6 月 1 日から平成 16 年 9 月 27 日までの期間で、ポンプ棟・沈砂池棟部分（D 調査区・約 2,010 m<sup>2</sup>）の発掘調査を、宮崎泰史を現地担当者として平成 16 年 12 月 9 日から平成 17 年 12 月 17 日までの期間で、急速ろ過池部分（E

調査区・3,140 m<sup>3</sup>）の発掘調査を、岩瀬 透を現地担当者として平成 17 年 1 月 5 日から平成 18 年 1 月 20 日までの期間を費やして実施した。遺物整理は竹原伸次、林日佐子、藤田道子を担当者として、現地調査と並行して実施した。

#### 平成 17 年度

平成 17 年度は、建設予定地内の三ヶ所で発掘調査を実施した。

平成 16 年度より引き続き、D 調査区の調査を平成 17 年 12 月 17 日まで、E 調査区の調査を平成 18 年 1 月 20 日まで実施し、完了するとともに、断ち割り調査によって下層に遺構が確認された沈砂池棟部分（D - 2 調査区下層・880 m<sup>3</sup>）の発掘調査を、岩瀬 透を現地担当者として平成 18 年 1 月 25 日から平成 18 年 2 月 20 日までの期間を費やして実施した。遺物整理は三宅正浩、藤田道子を担当者として、現地調査と並行して実施した。

#### 平成 18 年度

平成 18 年度は、建設予定地内の一ヶ所で発掘調査を実施した。

管理棟・発電機棟部分（F 調査区・2,000 m<sup>3</sup>）の発掘調査を、岡田 賢を現地担当者として平成 18 年 9 月 25 日から平成 19 年 9 月 15 日までの期間を費やして実施した。遺物整理は三宅正浩、藤田道子を担当者として、現地調査と並行して実施した。

#### 平成 19 年度

平成 19 年度は、建設予定地内の 1 箇所で発掘調査を実施した。

平成 18 年度より引き続き、F 調査区の調査を平成 19 年 9 月 15 日まで実施し、完了した。これをもってなわて水みらいセンター主要施設建設に伴う発掘調査は終了した。遺物整理は三宅正浩、藤田道子を担当者として、現地調査と並行して実施した。

#### 平成 20 年度

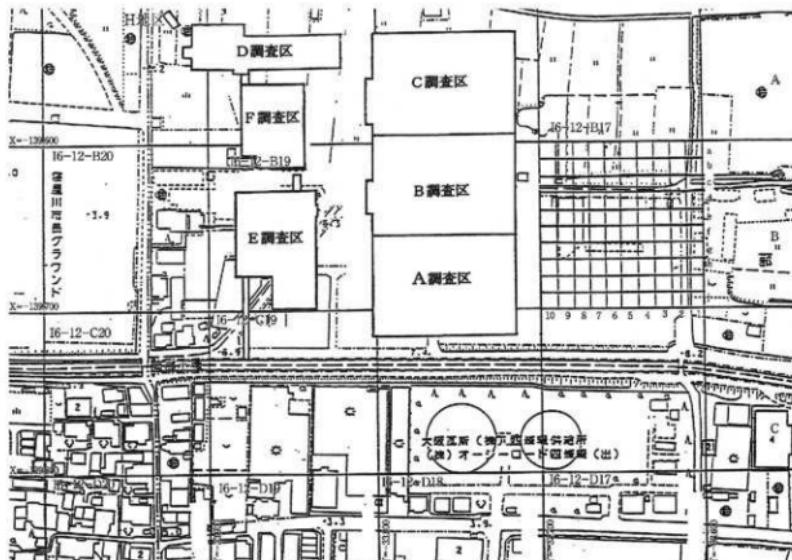
遺物整理を三宅正浩、藤田道子を担当者として実施し、それと並行して各調査担当者によって報告書作成作業を実施した。

#### 平成 21 年度

各調査担当者によって報告書作成作業を実施し、本報告書の刊行をもってすべての作業が完了した。

### 第2項 調査の方法

なわて水みらいセンター建設の第 1 期工事は、水処理施設、機械施設、砂ろ過施設など多く施

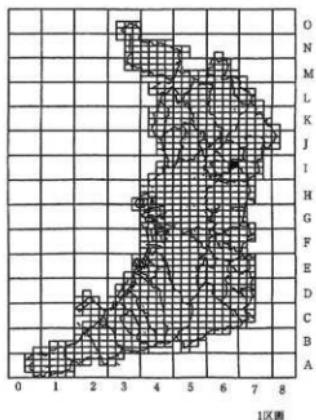


第3図 調査区位置図

設が建設され、完成までに10年を要する事業である。事前発掘調査は、各施設の建設の順序に従つて実施したため、完了までに7年を要した。そのため、調査を円滑に進め、調査の一貫性を保つために、初年度（平成13年度）に建設予定地全体を網羅する地区割りを設定した。調査区の地区割は1/25000地形図（都市計画図）を基本（東西2km、南北1.5km）として、この地図を300等分し、100m四方の区画を設定する。この区画は南北方向のアルファベットと東西方向のアラビア数字で表現し、南北に北から南へA～Oの15列、東西に東から西へ1～20の20列で、表示する場合は南北を優先する。さらに100m区画を100等分して10m四方の区画を設定し、この区画は南北方向のアルファベットと東西方向のアラビア数字で表現し、南北に北から南へa～jの10列、東西に東から西へ1～10の10列で、表示する場合は南北を優先する。10m単位のメッシュは、国土座標の整数値に合致するものである。一連の調査で用いた座標値は日本測地系（平面直角座標第VI系）であるが、遺構全体図には世界測地系座標値をも併記している。調査対象地は、16-12-A18～20、16-12-B18～19、16-12-C18～19の7区画に跨って所在する。

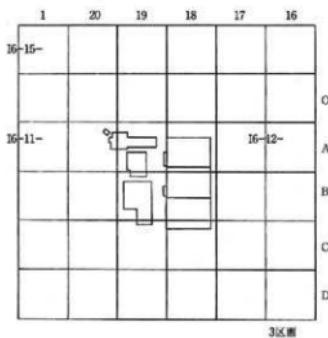
掘削に際しては、盛土、整地上および表土層をバックホウを用いた機械掘削によって除去し、その下層からは1層ごとに人力掘削した。また、調査の迅速化と省力化を図るために、遺構面ごとにヘリコプターによる写真測量を行い、10m単位のメッシュを基準として平面図を作成した。現地で作成した図面類もこれに習っている。

検出した遺構の表記方法については、調査区によって差異が生じていたため本報告で統一する



13	14	15	16
9	10	11	12
5	6	7	8
1	2	3	4

2区画

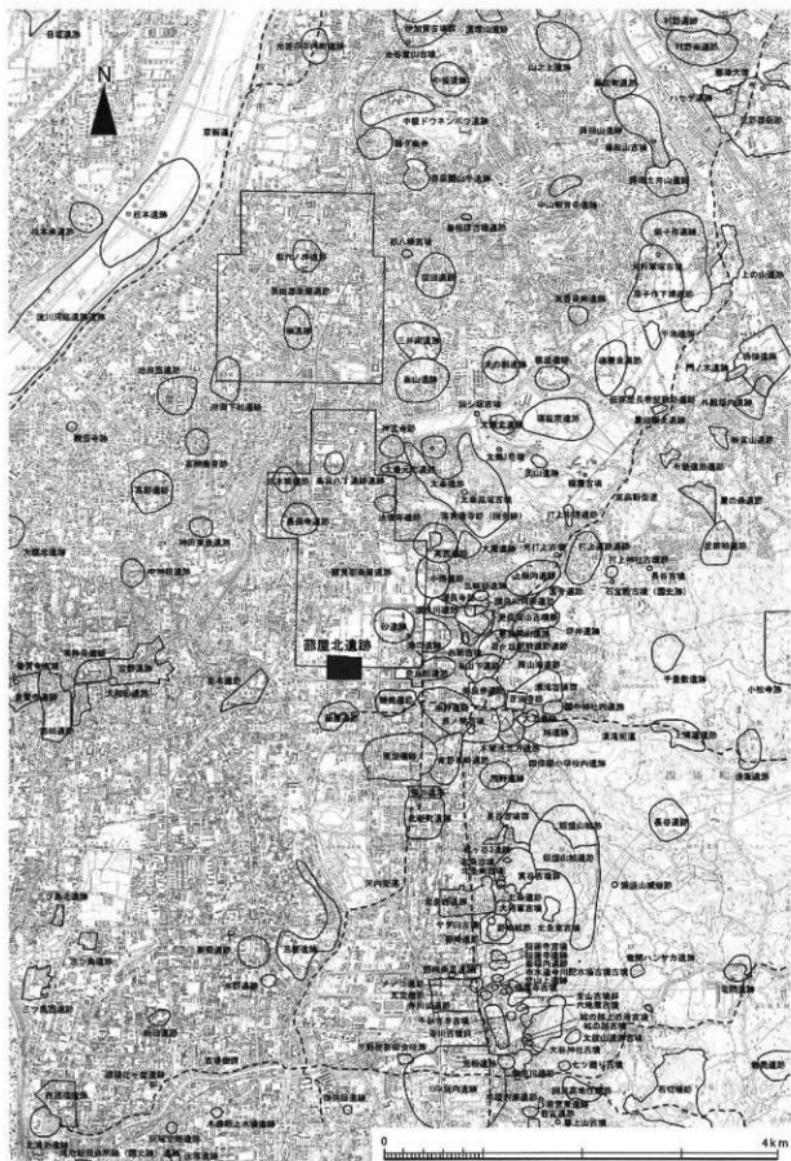


a							
b							
c							
d							
e							
f							
g							
h							
i							
j10	9	8	7	6	5	4	3

4区画

第4図 調査地付近の地区割概念図

ことを考慮したが、検出された遺構の数があまりにも膨大であり、表記を統一することでかえつて混乱を招くことが懸念されたため、今回は、調査区によっては使用していた遺構の種類のアルファベット表記（S B、S Kなど）を漢字表記（竪穴住居、土坑など）に変換することと、遺構番号の前に調査区表示を記号で付すことのみを統一した。したがって、たとえばA調査区のS K 1 6 3 2は土坑A 1 6 3 2、C調査区の井戸2 5 4 9は井戸C 2 5 4 9などと表記されている。また、複数の遺構で構成されている遺構（掘立柱建物など）の場合は、構成する柱穴ごとに番号を付すとともに、掘立柱建物B 1などのように、建物単位で新たに番号を付している。



第5図 萩屋北遺跡とその周辺遺跡 ((財) 大阪府文化財センター2007「讃良郡条里遺跡V」  
より転載・一部改変)

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

藤屋北遺跡（第5・6図）は、弥生時代から江戸時代までの遺構が連続的に確認される複合遺跡であり、現在の地形においては河内平野の北東部の標高約3～6mの氾濫原に位置している（第7図、別所2006）。

この氾濫原から遺跡の東方に南北に連なる生駒山地にかけては、そこから西流する讚良川、岡部川、清瀧川などの河川によって形成された複合扇状地が発達し、その複合扇状地から低地部にかけては、これらの河川によって形成された自然堤防が顕著にみられる。本遺跡は、上記氾濫原に形成された自然堤防上に立地する。

本遺跡の各時代の遺構変遷は後段にて触れるが、弥生時代から連綿と続く遺構面のあり方と、調査と合わせて行った古環境の復元的な研究によって、本遺跡における地形の変遷過程が明らかにされている（井上2006）。

それは、かつて梶山彦太郎・市原実両氏によって、河内平野の変遷過程が明らかにされて（梶山・市原1972）以降において、発掘調査が多く実施され、古環境復元に関する所見が多数蓄積されている河内平野南部に対し、平野北半部においても、本遺跡や第二京阪道路建設に伴う発掘調査等において、ようやく蓄積され始めた新たな所見（井上2007・2008、辻・辻本2006・2009、一瀬2005など）の一つと位置付けることができる。本遺跡については、「総括・分析編」においてこの詳細が明らかにされている（辻・辻本「藤屋北遺跡の自然科学分析」）。

ここではその概略について簡単に触れ、遺跡の地理的な環境の変遷を確認しておきたい。

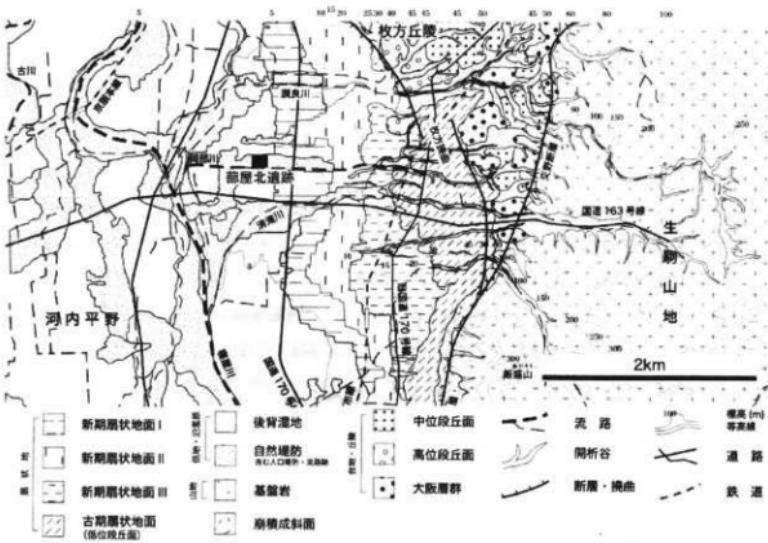
本遺跡は、縄文海進期（7200～6300年前頃）には内湾の浅い海域であったが、縄文時代前期中葉頃（6000～6300年前）以降、河川の堆積作用により徐々に陸化が進んでくる。この時期には三角州が発達し始め、縄文時代中期前葉（5300～5600年前頃）には、三角州平野となり、河川氾濫原が広がる。これ以降縄文時代後期にかけては、現在の寝屋川の旧流路による土砂堆積と、生駒山地から下流する河川による堆積が複雑に影響しあう状況であり、陸域と水域の分布は複雑であったようだ。

縄文時代後期前葉（4000～4300年前頃）に堆積環境が安定し、弥生時代中期にかけて断続的に土壌帯を形成していく。本遺跡では弥生時代前期の土器等もみられるが、中期前葉～中葉にかけて微高地上に形成された集落跡を検出しており、その南側の低地部分では、土壤分析結果等から水稻栽培を行っていたと考えられる。

弥生時代後期～古墳時代前期にかけては、洪水の流入が多くなり不安定な氾濫原の堆積環境となるが、古墳時代中期～後期には再び安定した堆積環境となり、先の時期に形成された自然堤防



第6図 明治期の地形における藤原北遺跡とその周辺（大日本帝国陸地測量部発行 明治44年発行「吹田」「大阪東北部」「星田」、大正8年発行「生駒山」より作製）



第7図 蔵屋北遺跡周辺の地形環境（別所2006より、一部改変）

上に集落が展開する。この古墳時代中～後期の集落跡は、本遺跡を最も特徴付けるもので、馬の飼育と関連の深い集団により形成されたと考えられている他、朝鮮半島との密接なつながりも多く指摘されてきた<sup>(注2)</sup>。

この時期の集落跡は、細い帯状の自然堤防上に形成されており、その間は湖沼的な水域や湿地や湿原的な環境が展開していたと考えられている。

古墳時代中期～後期における集落は、近年第二京阪道建設に伴う発掘調査が行われた讃良郡条里遺跡における、同時期の集落展開のあり方と同様に（（財）大阪府文化財センター 2008・2009 など）、西を南北に走る旧寝屋川と、生駒山地から西流する讃良川、岡部川によって挟まれた逆「コ」の字形の水路に囲まれたような構造の地形に形成されていることが注目される（一瀬 2005）。これにより、巨視的には河内湖の最奥部において、南北・東西方向を河川によって囲まれたような地形に形成されている集落とみることができ、その大きな区画の中で、間に低湿地を挟みながら存在する複数の自然堤防上に立地している集落ということができる。なお、このような地形環境のあり方は、明治期の地形からも読み取ることができる（第6図）。

古墳時代後期～飛鳥時代以降は、自然堤防間に低湿地が河川堆積物により埋没していく一方で、これを母材とした耕作土が、水田面として広範囲に検出される。中世段階においては、一部クレ

バススプレーなどの洪水堆積物により形成された自然堤防上に、集落跡が検出されている。また中世以降では、岡部川の天井川化により、本遺跡は南からの土砂供給をうけながら、現地表面付近まで堆積が進む。近世には堆積土砂を利用して島畠を形成するが、一貫して三角州平野部における耕作地であり続ける。

## 第2節 歴史的環境

本節では、主に本遺跡周辺に存在する遺跡について縄文時代～中世にかけて概観する。

**旧石器時代** 四條畷市域では讚良川河床遺跡や岡山南遺跡でハンドアックスやナイフ形石器が、寝屋川市域では高宮遺跡付近でナイフ形石器等が多数検出している。

**縄文時代** 四條畷市域では、田原遺跡において早期の押型文土器が出土している。枚方丘陵部の交野市神宮寺遺跡、枚方市穂谷遺跡でも、早期の押型文土器が出土している。また寝屋川市高宮遺跡では、北白川下層式、大歳山式土器が出土している。

中期に属する寝屋川市讚良川遺跡では、堅果類の貯蔵穴が検出され、土器の他に獸骨や貝類が出土している。さらに大阪外環状線の東側である同市讚良郡条里遺跡03-1(5区)では、北白川C式期の土器が集中的に検出されている。

後期では四條畷市砂遺跡、同市更良岡山遺跡等がみられる。更良岡山遺跡ではヒスイ製石斧や大型彫刻石棒などをはじめ多量の土器や石器が出土しており、その内容から北陸地方との関連が注目される。

晩期では、寝屋川市長保寺遺跡、讚良郡条里遺跡03-1(8区)などで土器等が出土しているほか、同市小路遺跡、高宮遺跡などでも遺物が確認されるほか、更良岡山遺跡では当該時期の土坑墓が複数検出されている。

**弥生時代** 前期では四條畷市雁屋遺跡、田原遺跡で土器が出土している他、寝屋川市高宮八丁遺跡では、土器や木器等多量な遺物が出土しており、当該時期の拠点的な集落の様相をうかがっている。また讚良郡条里遺跡でも前期に属する土器が、突帯文土器と共に伴して出土している。このあたりは高宮八丁遺跡や本遺跡においても確認されている。また本遺跡の南方では、大東市中垣内遺跡でも前期に属する遺物が出土している。

中期になると遺跡数は増加し、雁屋遺跡では方形周溝墓が多数検出されている。また本遺跡でも集落域が検出されている。寝屋川市域では、大尾遺跡において方形周溝墓群が、太秦遺跡において集落が検出されている。枚方丘陵では枚方市交北城ノ山遺跡で中期前葉から中葉にかけての集落跡と墓域が検出され、同市田ノ口山遺跡では中期末頃の集落跡が検出されている。また枚方市星ヶ丘遺跡では中期から後期にかけての集落と墓域が検出されている。

一方本遺跡と旧寝屋川を挟んで西側では旧淀川水系の流路による土砂堆積によって三角州が発達していた。門真市大和田遺跡では中期の小型銅鐸が3個体出土している。また同市古川遺跡で

は方形周溝墓が検出されている。また先の中垣内遺跡でも方形周溝墓が確認されている。

後期では、讃良郡条里遺跡03-1(1区、4区)において後期末から古墳時代初頭の集落跡が検出されている。また打上中道遺跡でも後期の集落が考えられている。また雁屋遺跡でも集落跡が検出されている。枚方丘陵部では、田ノ口山遺跡、北山遺跡、長尾西遺跡等が存在し、鷹塚山遺跡では、集落跡が検出されており、小型仿製鏡が出土している。

**古墳時代** 前期に属する古墳等は、本遺跡周辺では小路遺跡から前方後方形周溝墓、方形周溝墓が検出されている他、四条畠市忍岡古墳がみられる。また枚方丘陵部では交野市森古墳群などがある。

中期では、本遺跡の他に高宮遺跡や長保寺遺跡で集落跡が検出されている。四条畠市域では中野遺跡、奈良井遺跡、鎌田遺跡など本遺跡と同様に輪式系土器、馬の飼育に関連する性格を有する遺跡が確認されている。同様の様相は讃良郡条里遺跡でも確認されている。当該期の古墳としては、高宮遺跡付近では寝屋川市太秦高塚古墳や尾支群が確認されており、本遺跡周辺では四條畠市墓ノ堂古墳や清滝古墳群、更良岡山古墳群がみられる。旧寝屋川の西側では、大庭北古墳群、普賢寺古墳、梶古墳群がみられる。

後期においても本遺跡では集落跡が検出されている。また長保寺遺跡や讃良郡条里遺跡、高宮遺跡においても集落跡が検出されている。当該期の古墳は、本遺跡東方の生駒山麓に清滝古墳群や更良岡山古墳群、三味頭古墳などが確認される。また本遺跡の北東部では、太秦古墳群や打上古墳群が存在する。

**古代** 生駒山麓に古墳時代後期に展開した古墳群の位置関係は、古代に至って寺院の配置関係に置き換わる。河内国讃良郡では太秦廃寺、高宮廃寺、讃良寺、正方寺が建立された。これらは眼下にゆるく傾斜した低平で広大な平野部を一望できる場所に立地しており、この順に北から配されている(一瀬2005)。

低地部では高宮遺跡や大尾遺跡では、整然と並ぶ大型総柱掘立柱建物が検出されており、高宮廃寺との関連が想定されている。讃良郡条里遺跡では古代の掘立柱建物が複数検出されている。小路遺跡では自然流路より墨書き土器や絵馬等が検出されている。四條畠市木間池北方遺跡でも自然流路から土馬や墨書き土器等の祭祀遺物が多数出土している。

讃良郡条里的施行は、発掘調査によると奈良時代後期にはこれに伴うとみられる畦畔が検出されていることから、この時期に比定されると考えられている。

寝屋川の西側では、門真市橋波口遺跡で集落跡が検出されている。また普賢寺遺跡では寺院跡とみられる遺構が検出され、銅製仏具が出土している。また古川上流部と寝屋川が近接する辺りでは、寝屋川市高柳遺跡があり、平安時代の掘立柱建物跡が多数検出されている。さらに高柳遺跡の北東部には高柳廃寺がある。

**中世** 本遺跡では自然堤防上に集落跡を検出しており、その周囲の低地部分で水田耕作を行ったことが判明している。本遺跡の東に位置する巣本遺跡でも微高地上に形成された集落跡を検出

している。また門真市宮野遺跡では「茨田堤」との関連が注目される木組み遺構などが検出され、普賢寺遺跡では寺院関連の遺構が検出されている。枚方丘陵部に比べ寝屋川流域の低地部においては、中世に属する遺構が検出された遺跡の数は多くはない。

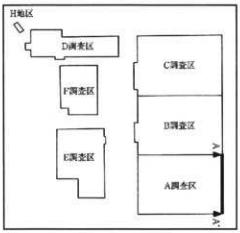
中世城館跡としては、生駒山麓では飯森山、野崎城、田原城跡などが、平野部でも三箇城が築かれており、今後その内容の把握が期待される。

註1 「総括・分析編」辻・辻本「藤屋北遺跡の自然科学分析」参照。

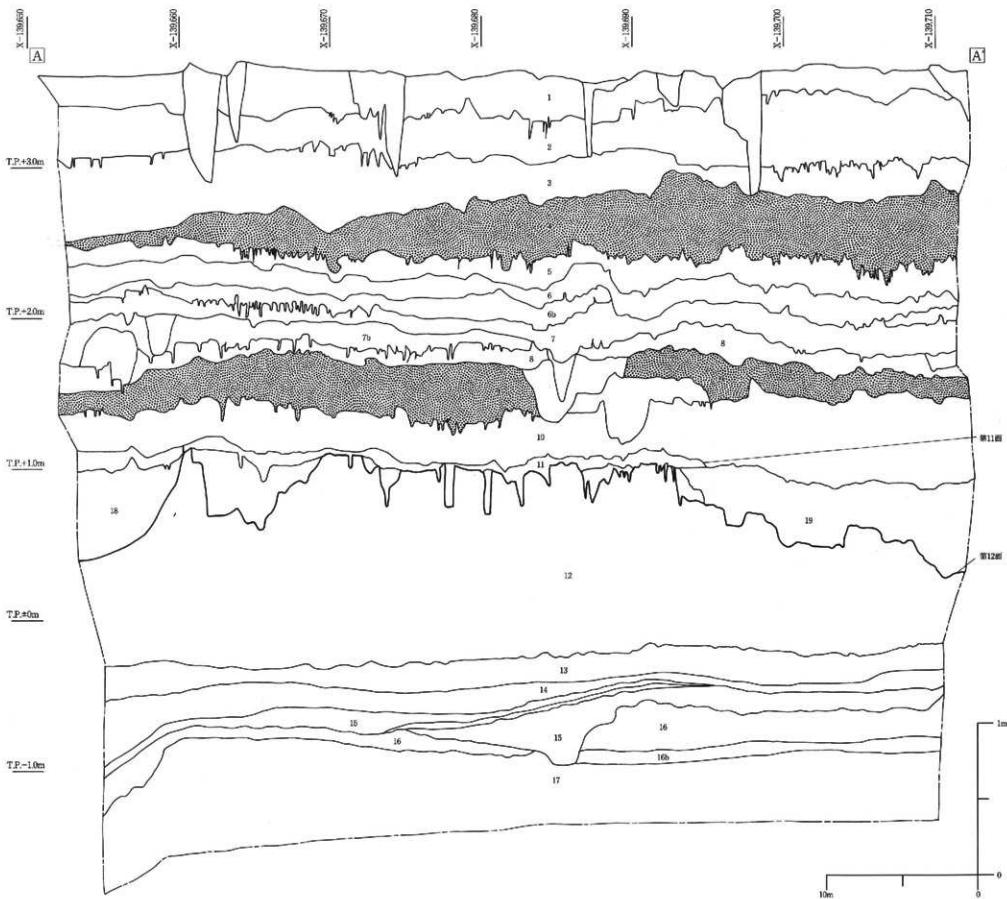
註2 本遺跡における既往の調査成果の概要である「藤屋北遺跡発掘調査概要」I～VIIを参照。

### 参考文献

- 一瀬和夫 2005 「河内平野変遷に関する覚書—北半の旧石器から古代像—」『古代学研究』169号 38～48頁  
古代学研究会
- 井上智博 2007 「5000年前の人々が見た北河内－海・川・森そしてムラー」『歴史シンポジウム資料 河内湾から肥沃な平野に－北河内平野の形成を考える－』寝屋川市教育委員会
- 井上智博 2008 「位置と環境」「讃良郡条里遺跡VI」(財)大阪府文化財センター調査報告書173集 7～11頁
- 梶山彦太郎・市原実 1972 「大阪平野の発達史」「地質学論集」7 101～112頁 日本地質学会
- (財)大阪府文化財センター 2008 「讃良郡条里遺跡VII」大阪府文化財センター調査報告書第182集
- (財)大阪府文化財センター 2009 「讃良郡条里遺跡IX」大阪府文化財センター調査報告書第188集
- 辻康男・辻本裕也 2006 「藤屋北遺跡における自然科学分析」「藤屋北遺跡発掘調査概要IV」25～37頁 大阪府教育委員会
- 辻康男・辻本裕也 2009 「古環境分析」「讃良郡条里遺跡IX」331～364頁 (財)大阪府文化財センター調査報告書第188集
- 別所秀高 2006 「藤屋北遺跡における古環境分析の実践」「藤屋北遺跡発掘調査概要IV」21～24頁 大阪府教育委員会



- 1 10YR4/4(暗青色)粘土
- 2 10YR4/4(暗青色)砂土
- 3 7.5GYV/4(深緑色)粘土
- 4 2SGV/6(黄赤色地+リープトクと2SY6/4(淡青色)砂の互層)
- 5 7.5SY3/1(リープトク地)粘土
- 6 7.5GY4/4(黄赤色)粘土
- 6b 7.5SY8/2(深紅色地)粘土
- 7 10Y3/1(赤褐色地)粘土
- 7b 10Y4/4(リープトク地)粘土
- 8 7.5SY6/4(リープトク地)粘土
- 9 2SY5/3(淡青色)-2SY5/3(淡青色)中粒砂
- 10 7.5SY3/1(リープトク地)礫混粘土
- 11 5GY4/4(黄赤色)砂質粘土
- 12 2SY4/4(黄赤色地)5SY4/2(リープトク)
- 13 2SY3/1(黒色)粘土, ジンタウの植物遺体を多量に含む
- 14 BY3/1(リープトク地)粘土, リーナジウの植物遺体を含む
- 15 2SY4/4(黄赤色地)砂質粘土
- 16 2SY4/4(黄赤色地)砂質粘土, 2SY3/1(黒色)リーナジウの植物遺体を含む
- 16b 2SY3/2(黒褐色)粘土
- 17 2SY4/4(暗青色)粘土, ジンタウの植物遺体を含む



第8図 A調査区土層断面図

## 第3章 調査の成果

### 第1節 層序

本調査には複数の調査担当者が係わっており、個別に報告された概要報告書を比較した結果、土層に付された土色名等がそれぞれ微妙に異なることが判明した。担当者によって付された土色名等に差異が生じる結果となっているが、広大な範囲を調査しており、地区によって対応する同時期のベース層が異なることも想定される。したがって今回本報告書をまとめるにあたっては、あえて土層の統一を図らずに調査区毎の層序を記し、そのうえで各調査区間の遺構面の対照を行うこととした。

#### 第1項 A・B・C調査区

A・B・C調査区は水処理施設建設部分である。水処理施設は、南北約180m、東西約90mの広大な施設であるため、調査区をA（南側）・B（中央部）・C（北側）に三分割して実施した。

##### 1. A調査区（第8図）

A調査区では、T.P.1.0m付近で検出した古墳時代中・後期の遺構面までを全面調査の対象深度としていたが、それ以下の層序と遺構の有無を把握するため、トレーナーを設定してT.P.-1.0mの深度まで調査した。なお、旧地表面の標高はT.P.4.7～5.8m付近にあったが、試掘調査の結果を踏まえて、盛土および近・現代にかかる堆積層を、T.P.3.6mまで機械で除去した。

T.P.-1.0m付近で検出した第17層暗灰黄色シルト質粘土（2.5Y4/2）から縄文時代後期の土器片が少量出土した。一連の調査で検出された遺物のうち、最も前出のものと認められる遺物である。調査区東端部に設定したトレーナーの北端部で北側へ大きく落ち込む状況が認められた。

第16層黄灰色シルト質粘土（2.5Y4/1）を間に挟んだ上層のT.P.-0.7m付近に、第15層黒色粘土（5Y2/1）が堆積する。植物遺体を含み、内部から弥生時代前期新段階の土器が出土している。

第14層オリーブ黒色粘土（5Y3/1）を間に挟んだ上層のT.P.-0.4m付近に、第13層黒色粘土（2.5Y3/1）が堆積する。植物遺体を大量に含み、内部から弥生式土器が少量出土した。

第13層の上には、第12層灰色～灰オリーブ色シルト（7.5Y4/1・5Y4/2）が堆積する。上面が第12層の遺構面となる層で、古墳時代中・後期の遺構が検出された。T.P.1.0m付近にある。内部からは古墳時代前期の土器がごく少量出土した。

第12層の上には、第11層灰色砂混じり粘土（5Y4/1）が堆積する。上面が第11層の遺構面となる層で、古墳時代後期の遺構が検出された。内部からは古墳時代以前の土器が出土した。

第11層の上には、第10層オリーブ黒粘土（7.5Y3/2）が堆積する。Ca班を多く含む層で、

上面が第10遺構面のベースとなる。足跡と畦畔が検出された。内部からは古代以前の土器が出土した。

第10層の上には、第9層黄褐色～淡黄色砂（2.5Y5/3・2.5 Y 8/3）が堆積する。上面が第9遺構面のベースとなる。階段状に形成された耕作面が検出された。内部からは古代以前の土器が出土した。

第9層の上には、第8層灰色細砂混じり粘土（5Y4/1）が堆積する。上面が第8遺構面のベースとなる。足跡と畦畔が検出された。

第8層の上には、第7層オリーブ黒色粘土（10Y3/1）が堆積する。上面が第7遺構面のベースとなる。足跡が検出された。

第7層の上には、第6層オリーブ黒色砂混じり粘土（7.5Y3/2）が堆積する。上面が第6遺構面のベースとなる。

第6層の上には、第5層オリーブ黒色粘土（7.5Y3/1）が堆積する。上面が第5遺構面のベースとなる。足跡が検出された。内部からは中世以前の土器がごく少量出土した。

第5層の上には、第4層黃灰色粘土（2.5GY6/1）と淡黃灰色砂の混土（2.5Y8/4）が堆積する。上面が第4遺構面のベースとなる。東西方向の大畦畔、畦畔、足跡などが検出された。大畦畔の南側はT.P.2.8m、北側はT.P.2.6～2.8m付近にある。内部からは中世以前の土器がごく少量出土した。

第4層の上には、第3層暗緑灰色粘土（7.5GY4/1）が堆積する。上面が第3遺構面のベースとなる。足跡と畦畔が検出された。内部からは中世の土器がごく少量出土した。

第3層の上には、第2層暗青灰色粘土（5BG4/1）が堆積する。上面が第2遺構面のベースとなる。南北方向の畦畔、島畠、足跡などが検出された。

第2層の上には、第1層暗青灰色粘土（10BG4/1）が堆積する。上面が第1遺構面のベースとなる。南北方向の畦畔、島畠、足跡などが検出された。T.P.3.6m付近にあり、近世の遺構面である。

## 2. B調査区（第9図）

B調査区では、先行したA調査区およびC調査区の調査結果に基づいて、南半部ではT.P. 0.5m、北半部ではT.P.1.2m付近の古墳時代中・後期の遺構面までを全面調査の対象深度としていたが、それ以下の層序と遺構の有無を把握するため、トレチ子を設定してT.P. - 1.0mの深度まで調査した。旧地表面の標高はT.P.5.8m～7.0m付近にあったが、試掘調査とA調査区およびC調査区の結果とを踏まえて、T.P.3.1m～3.25mまで機械で除去した。

まず、T.P. - 1mで検出した黒褐色粘土上面の縄文時代対応面から、T.P. - 0.5m付近で検出した暗灰黄色粘土状面の弥生時代中期対応面までは、ほぼフラットな自然堆積層が続く。

その上には、C調査区の西半部からB調査区の北西半部にかけて、河川の氾濫で堆積したと思われる砂層によって自然堤防が形成されており、その上面から弥生時代後期の遺物が出土してい

X-139,600

X-139,600

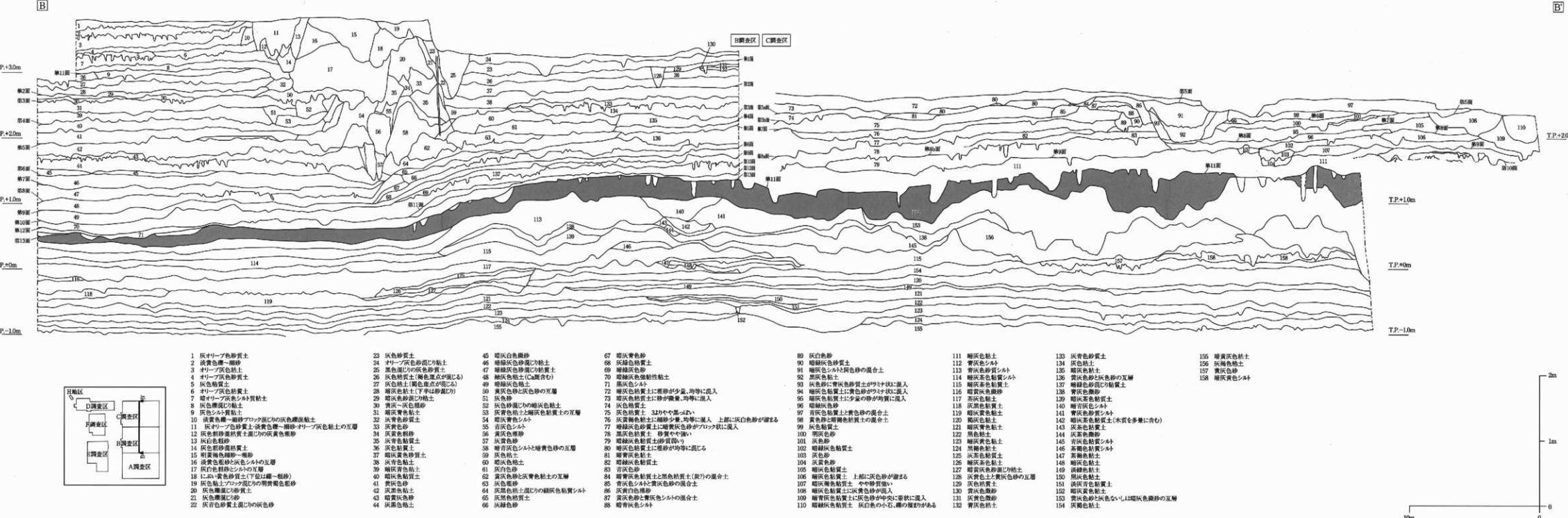
X-139,600

X-139,600

X-139,600

X-139,600

X-139,600



第9図 B・C調査区土壌断面図

る。この地形はB調査区中央から南方へ、あるいはC調査区中央から東方へと、概ね10mで8%の比高差を持って傾斜し、その後は緩やかに下った後にわずかに上昇する。

その上には、青灰色シルトが地形に沿って覆うような状態で堆積し、上面が第13遺構面のベースとなる。標高は低位地がT.P.0.6m付近、自然堤防上の高位地がT.P.1.4m付近にある。ほぼ全域で古墳時代中・後期の遺構が検出されたが、高位地で特に集中する状況を呈していた。

その上には、第13面を覆うように黒灰色シルトの堆積がみられた。層厚は全体的に薄いが、特に高位地では0m～0.1mと極薄である。これに対して傾斜面や低位地では比較的厚く堆積が見られた。上面が第12遺構面のベースとなる。標高は低位地がT.P.0.7m付近、自然堤防上の高位地がT.P.1.5m付近にある。古墳時代後期の遺構が検出されており、基本的には第12面が後期の遺構面といえるが、後期の遺構が中期の遺構とともに第13面で検出される傾向が、特に層厚の薄い高位地で強く認められた。また、この層は古墳時代中期の遺物包含層となっており、掘削時に遺物が大量に出土した。

その上には、暗緑色粘質土の堆積がみられた。この層は調査区の北東半部の低地でのみ確認された層で、層厚0.3m弱と比較的厚い。上面が第11遺構面のベースとなる。標高はT.P.0.9m付近にある。7世紀の小区画水田が検出された。この層は古墳時代後期の遺物包含層となっている。

その上には、暗緑色強粘性粘土の堆積がみられた。この層は地形に沿って覆うように調査区全域に堆積しており、層厚0.2m～0.3m弱と比較的厚い。上面が第10遺構面のベースとなる。標高は低位地がT.P.0.9m付近、自然堤防上の高位地がT.P.1.6m付近にある。8世紀の小区画水田が検出された。

その上には、まず北半部の高位地に暗緑灰色の砂が薄く堆積し、その後、地形に沿って全域を覆うように暗緑灰色の粘土が堆積している。明確な遺構は検出されなかったが、両隣の調査区との関わりから上面を第9遺構面とした。出土遺物から8世紀後半に比定できる。標高は低位地がT.P.1.0m付近、自然堤防上の高位地がT.P.1.7m付近にある。

その上には、まず地形に沿って覆うように北半部の高位地に灰緑色粘質土が堆積し、その後、中央部から南側にカルシウム斑を含む緑灰色粘土が堆積する。その際中央部が0.5mの幅で盛り上がり、東西方向の土手を形成する。土手の頂部と両側裾部との比高差は、北側が0.1m、南側が0.4mを測った。南半部の標高はT.P.1.1m付近にあり、それまでの自然地形による傾斜面を、土手を築いて意図的に段を形成することによって、より効果的な土地利用を図ったものと考えられる。北半部の標高はT.P.1.9m付近にあり、土手北裾部はT.P.1.3m付近にある。上面が第8遺構面のベースとなる。

その上には、土手の南側の低位地にのみ暗緑灰色の粘質土が堆積する。層厚0.1m～0.15mと薄く、土手を超えるまでには至らない。標高はT.P.1.2m付近にあり、上面が第7遺構面のベースとなる。この段階では、土手の北側には新たな土層の堆積が認められなかった。

その上には、土手の南側の低位地にのみ暗緑灰色粘土が堆積する。層厚は0.2m内外で、標高

はT.P.1.3m付近にある。上面が第6遺構面のベースとなる。この段階でも、土手の北側には新たな上層の堆積は認められなかった。

その上には、まず地形に沿って覆うように北半部の高位地に灰緑色砂が薄く堆積し、その後、調査区全域に灰黒色粘土が厚く堆積する。調査区中央には、東西方向に走る幅2.5mの大畦畔が認められ、その南側はほぼフラットで、標高はT.P.1.9m付近にある。一方、北端部はT.P.2.2m付近にあり、そこから中央に向かって約0.3mの比高差を持って緩やかに傾斜する。上面が第5遺構面のベースとなる。11世紀の条里水田が検出された。

その上には、北半部は暗灰色砂質土が薄く堆積し、その上面が第4遺構面のベースとなり、畦畔などが検出された。中央部では灰色粗砂が堆積し、その上面が第4遺構面のベースとなる。南半部では黄灰色砂を挟んで暗灰色砂質土が堆積し、その上面が第4遺構面のベースとなる。この段階でほぼフラットとなり、標高はT.P.2.2m付近にある。調査区の中央部、第5面で大畦畔が検出された直上に、東西方向に走る幅10m、最大高0.8mの堤状の構造物を検出した。堤は砂とシルトを盛り上げて形成され、杭を打ち込んで補強されている。讃良郡条里遺跡の一角の坪境に当たる里道と考えられる。出土遺物から、第4面は11世紀後半に比定される。

その上には、北半部は暗灰色粘土が堆積し、その上面が第3遺構面のベースとなる。中央部では灰青色粘土が堆積し、その上面が第3遺構面のベースとなり、南半部では黄灰色砂を挟んで暗灰色粘土が堆積し、その上面が第3遺構面のベースとなる。標高は南側がT.P.2.6m付近、北側がT.P.2.3m付近にあり、南側が高い。中央部には堤状の里道がみられるが、里道は幅13m、最大高1.2mを測り、南側が拡張されていることがわかった。

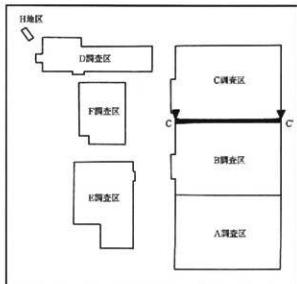
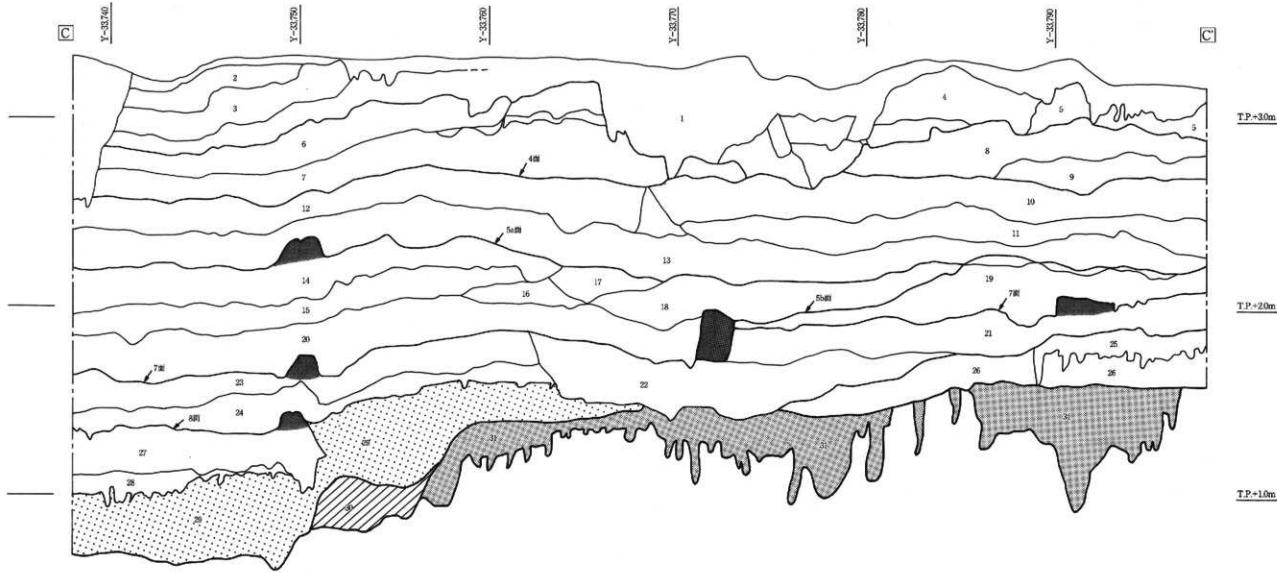
その上には、北半部は灰色粘土、灰青色砂質土、灰青色粘土が順に堆積し、灰青色粘土上面が第2遺構面のベースとなる。中央では灰青色粘土が堆積し、その上面が第2遺構面のベース、南半部では灰色砂を挟んで暗灰色砂混じり粘土が堆積し、その上面が第2遺構面のベースとなる。この段階で里道の両側はほぼフラットとなり、標高はT.P.2.7m付近にある。里道は同位置にあり、幅13m、最大高1.2mと変化はみられない。

その上には、北半部は暗灰黄色砂質土、灰色粘質土が順に堆積し、灰色粘質土上面が第1遺構面のベースとなる。南半部では暗灰色粘土、灰色粘土が順に堆積し、その上面が第1遺構面のベースとなる。里道の両側はほぼフラットで、標高はT.P.3m付近にある。里道は同位置にあり、幅13m、最大高0.8mを測った。出土遺物から、第1面は15世紀に比定される。

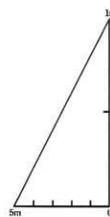
### 3. C調査区（第9・10図）

C調査区では、古墳時代中・後期の遺構面までを全面調査の対象深度とし、結果的にT.P.0.8m～1.5m付近まで掘削した。また、それ以下の層序と遺構の有無を把握するため、トレチを設定してT.P.-1.0mの深度まで調査した。

まず、T.P.-1mで検出した黒褐色粘土上面の縄文時代対応面から、T.P.-0.5m付近で検出



- 1 固着灰化土
- 2 青灰化粘土(部分分離層が薄い)
- 3 青灰化粘土(黄色砂が混じる)
- 4 緑灰色土・灰白色砂
- 5 緑灰色土+粘土
- 6 緑灰色土+淤泥粘土
- 7 緑灰色粘土
- 8 緑灰灰化土+灰化粘土
- 9 灰化粘土
- 10 青灰化粘土
- 11 青灰化粘土
- 12 青灰化粘土
- 13 青灰化粘土質土
- 14 緑青灰化シルトに青灰化砂がブロックで混じる
- 15 緑青灰化シルトに青灰化砂が混入
- 16 緑青灰化シルトに灰化粘土が混入
- 17 緑青灰化粘土
- 18 黄褐色砂
- 19 砂質土
- 20 黄褐色砂・暗青灰化砂質土
- 21 青灰化粘土土
- 22 青灰化粘土土に砂がブロック状に多く混じる
- 23 灰化粘土土に灰化砂が混入
- 24 灰白化粘土質土
- 25 灰化灰化砂質土・青色砂
- 26 灰化灰化砂質土・青色砂
- 27 上述の灰化粘土土が少く混じる
- 28 砂質土
- 29 黑褐色粘土
- 30 黑褐色粘土
- 31 黑褐色粘土に綠灰化粘土シルトがブロック状に混じる



第10図 C調査区土層断面図

した暗灰黄色粘土状面の弥生時代中期対応面までは、ほぼフラットな自然堆積層が続く。

その上には、C調査区の西半部からB調査区の北西半部にかけて、河川の氾濫で堆積したと思われる砂層によって自然堤防が形成されている。

その上には、青灰色シルトないしは青灰色粘土が堆積し、その上面が第11遺構面となっている。検出レベルT.P.1.5m前後で、古墳時代中期～後期の集落を構成する遺構を多数検出した。

その上には、古墳時代中期の遺物包含層である黒灰色粘土が堆積し、その上面が第10遺構面となっている。T.P.1.8m前後で、古墳時代後期の集落を構成する遺構を検出した。

その上には、古墳時代後期の遺物包含層である灰色～暗灰色粘土が堆積する。この層は調査区南東部に所在する谷状地形の上を覆う層である。

その上には、特に南東部谷状地形の上に、平安時代前期の包含層である砂層と鈍い灰色粘土が堆積し、その上面が第8遺構面となっている。T.P.1.4m前後で、谷状地形に沿うように走る畦畔が検出されている。

その上には、平安時代中期の包含層である灰白色砂礫層と暗灰色砂質土（灰色砂が混入）が堆積し、その上面が第7遺構面となっている。条里制地割による畦畔で区画された水田が検出された。

その上には、黄褐色砂と暗青灰色砂質土、砂礫層などが堆積し、その上面が第5b遺構面となっている。南北方向の段で区画された耕作面が検出された。

その上には、平安時代後期の包含層である黄褐色砂、暗褐灰色粘質土、暗褐色砂、黒灰色シルト（黄灰色砂が混入）、暗灰色シルト（黄灰色砂ブロックが混じる）などが堆積し、その上面が第5a遺構面となっている。調査区の一部で畦畔が検出された。

その上には、平安時代後期の包含層である暗青灰色粘土、青灰色粘土などが堆積し、その上面が第4遺構面となっている。T.P.2.5m～2.8m前後で、調査区北半部で平安時代後期の集落遺構が検出された。

その上には、第3遺構面（室町時代）、第2遺構面（近世）、第1遺構面（近世）が、T.P.3.25mまでの間に認められ、いずれも耕作地跡が検出された。

## 第2項 D調査区（第11図）

D調査区はポンプ棟・沈砂池棟建設部分である。西半部のポンプ棟部分をD-1地区、東半部の沈砂池棟部分をD-2地区と呼称した。

D調査区では、古墳時代中～後期の遺構面までを全面調査の対象深度とし、T.P.1.0m付近まで掘削した。また、それ以下の層序と遺構の有無を把握するため、トレーナーを設定してT.P.0mの深度まで調査した。その結果、調査区の東半部にあたるD-2地区の、T.P.0.3m付近で弥生時代中期の遺構面を確認した。そのため、D-2地区的全域を対象として、T.P.0mの深度ま

で調査した。

D - 2 地区の東半部の、T.P.0.3m 付近で灰白色シルト～砂層の堆積が認められ、その上面が第 15 遺構面で、弥生時代中期前葉の遺構が検出された。西に向かって緩やかに低くなっている、西半部では T.P. ± 0m 付近にあり、遺構はまったく認められない。

その上には、弥生時代中期の包含層である黒褐色砂混じり粘土が堆積する。検出レベル T.P. 0.5m 前後で、直下層と同様に、西に向かって低くなるとともに集落の西端部付近で消滅する。

その上には、間層を挟んで第 14 層の青灰色シルトないしは粘土が堆積し、その上面が第 14 遺構面となっており、古墳時代中・後期の遺構が検出された。標高は D - 2 地区中央部で T.P. + 0.5m 付近、D - 2 地区西半から D - 1 地区全域と、D - 2 地区東端部では T.P.1.3m 付近にある。

第 14 層の上には、6 世紀の遺物包含層である第 13 層オリーブ灰色粘土（緑灰色粘土や灰色粘土のブロック混じり）が堆積する。その上面が第 13 遺構面となっており、古墳時代後期の遺構が検出された。

その上には、粗粒砂を挟んで第 12 層オリーブ灰色粘質土が堆積する。その上面が第 12 遺構面で、畦畔を検出した。

その上には、第 11 層灰白色～淡黄色粗粒砂を含む灰色粘土が堆積する。その上面が第 11 遺構面で、畦畔が検出された。

その上には、第 10 層暗灰色粘質砂混じりシルトが堆積する。その上面が第 10 遺構面で、畦畔が検出された。

その上には、第 9 層が堆積するが、第 9 層は 9a ～ 9c 層に細分できる。第 9a 層は灰色砂混じりシルト、第 9b 層は灰オリーブ色～灰白色粗粒砂、第 9c 層は灰白色粗粒砂～灰色シルトである。第 9c 層上面が第 9 c 遺構面となっており、畦畔が検出された。

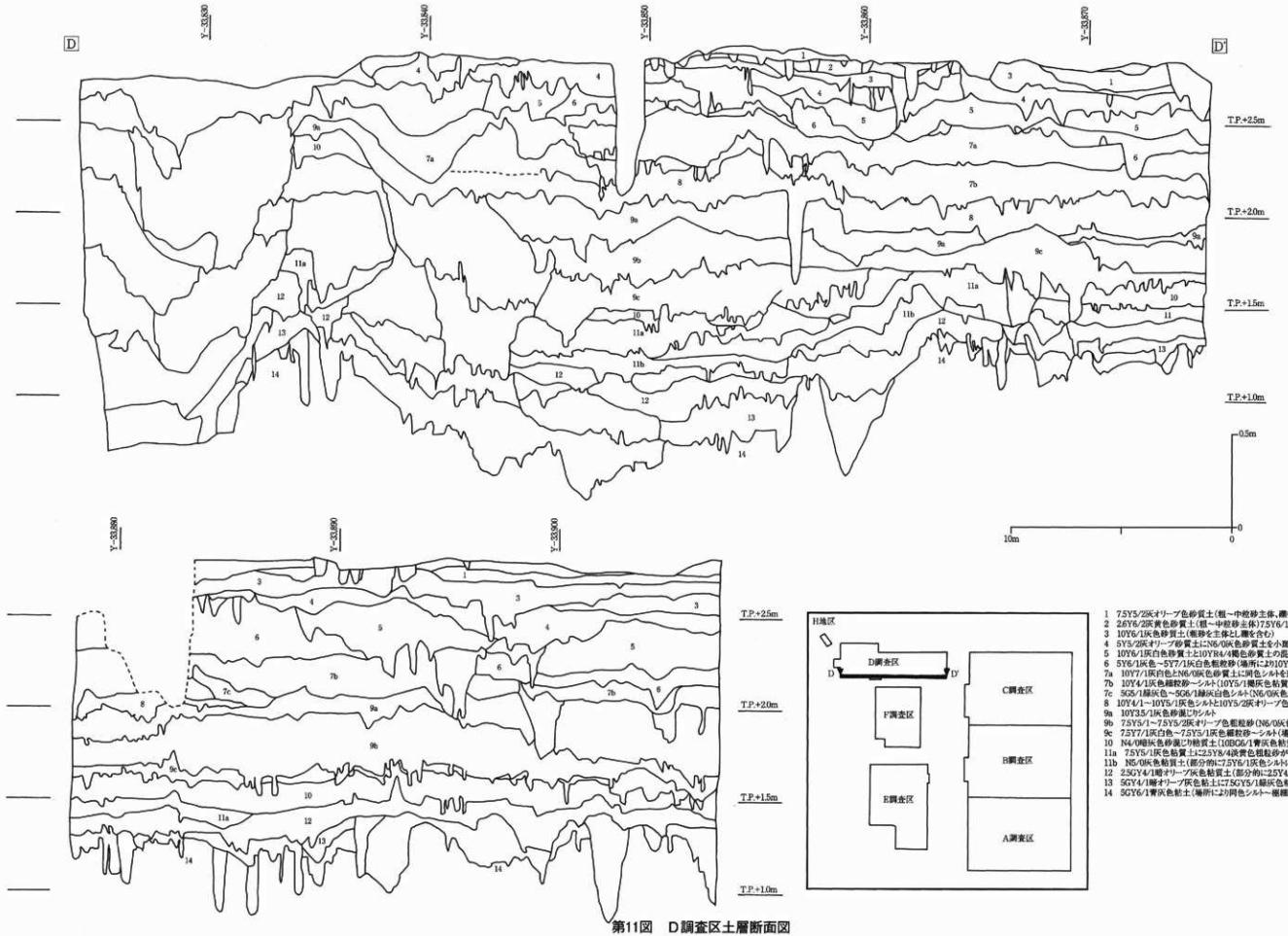
その上には、第 8 層灰色シルトとオリーブ灰色粗～中粒砂の混合層が堆積する。その上面が第 8 遺構面となっており、平安時代の遺構が検出された。。

その上には、第 7 層が堆積するが、第 7 層は 7a ～ 7c 層に細分できる。第 7a 層は灰～灰白色の粗～中粒砂で、その上面が第 7 a 遺構面となっており、中世のピット、畝溝などが検出された。第 7b 層は灰～灰オリーブ色の粗～中粒砂で、その上面が第 7 b 遺構面となっており、畦畔や溝が検出された。第 7c 層は灰色粘質シルトを含む緑灰白色～緑灰色シルトである。その上面が第 7 c 遺構面となっており、畦畔が検出された。

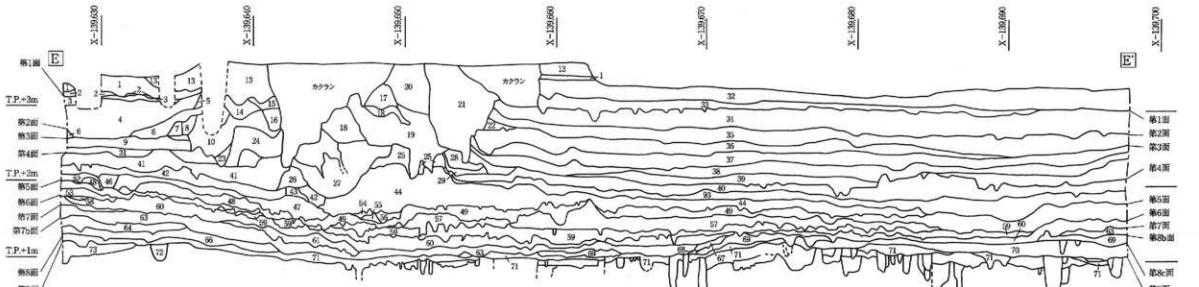
その上には、第 6 層灰～灰白色の粗～細粒砂が堆積する。その上面が第 6 遺構面で、中世（12 世紀末～13 世紀）のピット、井戸、畝溝などが検出された。

その上には、第 5 層灰白色粗～中粒砂および灰黄褐色粘質土が堆積する。その上面が第 5 遺構面で、中世（12 世紀末～13 世紀）の溝、土坑、井戸、ピット、畝溝などが検出された。

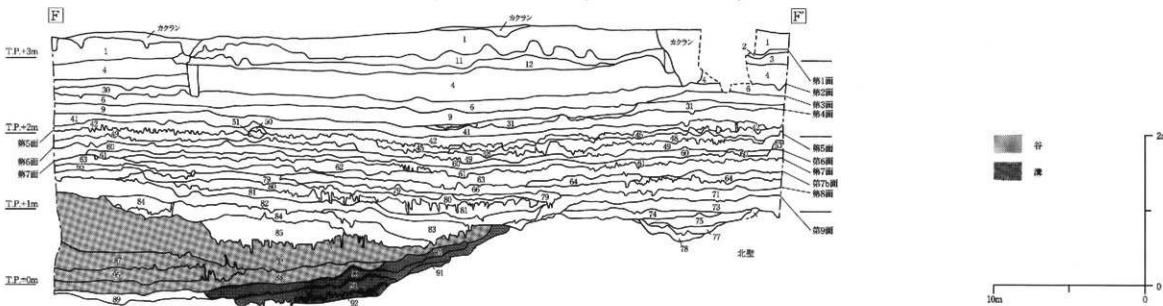
その上には、第 4 層灰～灰オリーブ色の粗～中粒砂が堆積する。その上面が第 4 遺構面で、畝溝が検出された。



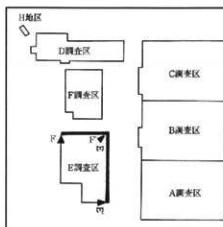
第11図 D調査区土層断面図



東側



2m  
0  
30m



- 1 黄色泥じの青灰粘質土上  
2 淡灰色砂砾  
3 黄灰色砂砾  
4 黑灰粘质土  
5 黄灰色粗砂  
6 黄灰色粗砂  
7 黄灰色粗砂  
8 黄灰色粗砂  
9 黄灰色粗砂  
10 黄灰色粗砂  
11 黄灰色粗砂  
12 青灰粘质土  
13 陶质土  
14 黄灰色粗砂  
15 黑灰粘质土  
16 灰质土  
17 黄灰粘质土  
18 黄灰粘质土  
19 淡灰色砂砾  
20 黄灰粘质土  
21 明黄色粘土  
22 黄灰粘质土  
23 黑灰粘质土  
24 黄灰粘质土  
25 黄灰粘质土  
26 绿灰色砂砾  
27 绿灰色砂砾  
28 黄灰色砂砾  
29 黄灰色砂砾  
30 黄灰色砂砾  
31 黄灰色砂砾  
32 黄灰色砂砾  
33 黄灰色砂砾  
34 黄灰色砂砾  
35 明黄色粘土  
36 黄灰粘质土  
37 黄灰色砂砾  
38 黄灰色砂砾  
39 黄灰色砂砾  
40 黄灰色砂砾  
41 黄灰色砂砾  
42 黄灰色砂砾  
43 黄灰色砂砾  
44 黄灰色砂砾  
45 黄灰色砂砾  
46 黄灰色砂砾  
47 黄灰色砂砾  
48 黄灰色砂砾  
49 绿灰色砂砾  
50 黄灰色砂砾  
51 黄灰粘质土  
52 黄灰砂砾  
53 黄灰砂砾  
54 黄灰砂砾  
55 黄灰砂砾  
56 黄灰砂砾  
57 黄灰砂砾  
58 黄灰砂砾  
59 黄灰砂砾  
60 黄灰砂砾  
61 黄灰砂砾  
62 黄灰砂砾  
63 黄灰砂砾  
64 黄灰砂砾  
65 黄灰砂砾  
66 黄灰砂砾  
67 黄灰砂砾  
68 黄灰砂砾  
69 黄灰砂砾  
70 黄灰砂砾  
71 黑灰粘质土  
72 黄灰砂砾  
73 黄灰砂砾  
74 黄灰砂砾  
75 黄灰砂砾  
76 黑灰粘质土  
77 黑灰粘质土  
78 黑灰粘质土  
79 黑灰粘质土  
80 黑灰粘质土  
81 黑灰粘质土  
82 黑灰粘质土  
83 黑灰粘质土  
84 黑灰粘质土  
85 黑灰粘质土  
86 黑灰粘质土  
87 黑灰粘质土  
88 黑灰粘质土  
89 黑灰粘质土  
90 黑灰粘质土  
91 黑灰粘质土  
92 黑灰粘质土  
93 黑灰粘质土  
94 黑灰粘质土  
95 黑灰粘质土

第12図 E調査区土層断面図

その上には、第3層砂礫を含む灰色粗～中粒砂が堆積する。

その上には、第2層灰黄色粗～中粒砂が堆積する。その上面が第2遺構面で、凹溝が検出された。

その上には、第1層灰オリーブ色粗～中粒砂が堆積する。上面がT.P.2.8m付近にある。

### 第3項 E調査区（第12図）

E調査区は砂ろ過施設部分である。

E調査区では、古墳時代中・後期の遺構面までを全面調査の対象深度とした。

当地区は集落の西端部付近にあたると想定されていた地域であったが、調査の結果、調査区の中央部で古墳時代中・後期の集落の西端を限定する、南北に縱断する大溝が検出された。集落内にあたる大溝の東側はT.P.0.9m～1.2mで、南北両端部付近がT.P.1.2mと高く、中央部がT.P.0.9mと低くなっている。集落外にあたる大溝の西側はT.P.±0m付近で古墳時代中・後期の遺構面が検出され、集落内外の比高差が最大で1.2mみられた。この面が第9遺構面で、集落内は青灰色ないしは緑灰色のシルトが基本的にベースとなる。集落外の大溝の肩部付近は灰黄色微砂で、その西側は弥生時代後期から古墳時代前期の流路の覆土である黄灰色の砂層上面がベースとなっていた。

その上には、集落内には5世紀の遺物包含層である灰青色のブロックが混入した黒褐色粘質シルトが堆積する。その上面が第8遺構面で、古墳時代後期の遺構が検出された。ただし、この層は最大でも0.1m強と薄く、南北両端部付近の高位地では、堆積がみられない部分も認められた。

6世紀後半には大溝が埋没しており、溝内の上層（谷E1に相当）から黒褐色粘質シルト内と同時期の須恵器が出土している。集落外では、大溝埋没後に比較的短期間に炭酸ノジュールを含んだオリーブ茶色の砂質土が0.2m程堆積する。この上面が第8遺構面となっている。集落内である東半部の標高はT.P.1.0m～1.3m付近にあり、地形は第9遺構面と同様に南北両端部付近が高く中央部が低い。集落の西端部は約1.3mの段差がみられる斜面で限定されている。

その後は集落外の低位地部分が集落内とほぼフラットになるまで埋積していくが、この間の埋土は概ね9層に分層でき、各層から6世紀前半～後半の遺物が出土している。

その上には、南北両端部付近の高位地に限り、南端部には0.1m～0.2m程黒褐色粘質シルトが、北端部には0.1m程暗灰青色粘土が堆積する。この上面が第8c遺構面で、南端部では飛鳥時代～奈良時代の集落遺構が、北端部では小区画水田が検出された。

その上も南北両端部付近の高位地に限り、南端部には暗灰色粘質シルトが、北端部には暗灰青色粘質土が0.1m程堆積する。その上面が第8b遺構面で、南端部で平安時代前期の遺構が検出された。

その上には、北端部付近の高位地にのみ、暗灰青色の強粘性と砂混じりの粘土が0.1m～0.2m堆積する。その上面が第7b遺構面で、平安時代の小区画水田が検出された。

その上には、南端部のごく一部を除くほぼ全域に灰青色粘土が0.1m～0.2m程堆積する。その上面が第7遺構面で、平安時代中頃の面と考えられ、南北両端部付近の高位地に水田が認められた。

その上には、ほぼ全域で黄褐色砂混じりの灰青色粘質土が0.1m～0.2m程堆積する。その上面が第6遺構面で、平安時代後期の面となる。この頃には当該地の所在する讃良郡でも条里制が施行されており、これより上層で検出された水田は、条里制に規制された方形区割りを呈していた。また、中央部の低位地は耕作地となり得なかったようで、畦畔などは南北両端部付近の高位地にのみ認められた。

その上には、ほぼ全域で黄灰色や灰青色の砂あるいは砂質土が南北両端部付近で0.1m～0.2m、中央で0.4m～0.5m程堆積し、さらにその上に、緑灰色の粘土が0.1m～0.2m程薄く堆積する。その上面が第5遺構面で、やはり平安時代後期の面となる。調査区の東半部の低位地で、北東から南西方向に延びる幅6m～7m、高さ0.6m程の堤状遺構が認められた。これは東方のB調査区でも認められた里道の八丁堤道と考えられる。

その上には、緑灰色や褐黄色の砂質土あるいは微砂、暗茶褐色の粘土などが0.2m～0.4m程堆積する。その上面が第4遺構面で、13世紀頃の瓦器碗の破片が出土している。第4面は中世に比定できる。里道はほぼ同位置にあり、幅10m程に拡大する。

その上には、暗青灰色、暗灰色、暗灰茶色の粘土が0.4m～0.5m程堆積し、その上面が第3遺構面となる。里道はほぼ同位置にあり、幅も10m程とあまり変化がない。

その上には、明青灰色の粘質土が0.2m程堆積し、その上面が第2遺構面となる。出土遺物から15世紀に比定できる。里道はほぼ同位置にあるが、堤幅が約13m、堤高1mと拡大する。

その上には、暗緑灰色の粘土が0.3m程堆積し、その上面が第1遺構面となる。里道はほぼ同位置にあり、あまり変化がみられない。第1面より上は現代の擾乱を受けているため、部分的に残存するのみであったが、この傾向はとくに里道より北西側で強くみられた。

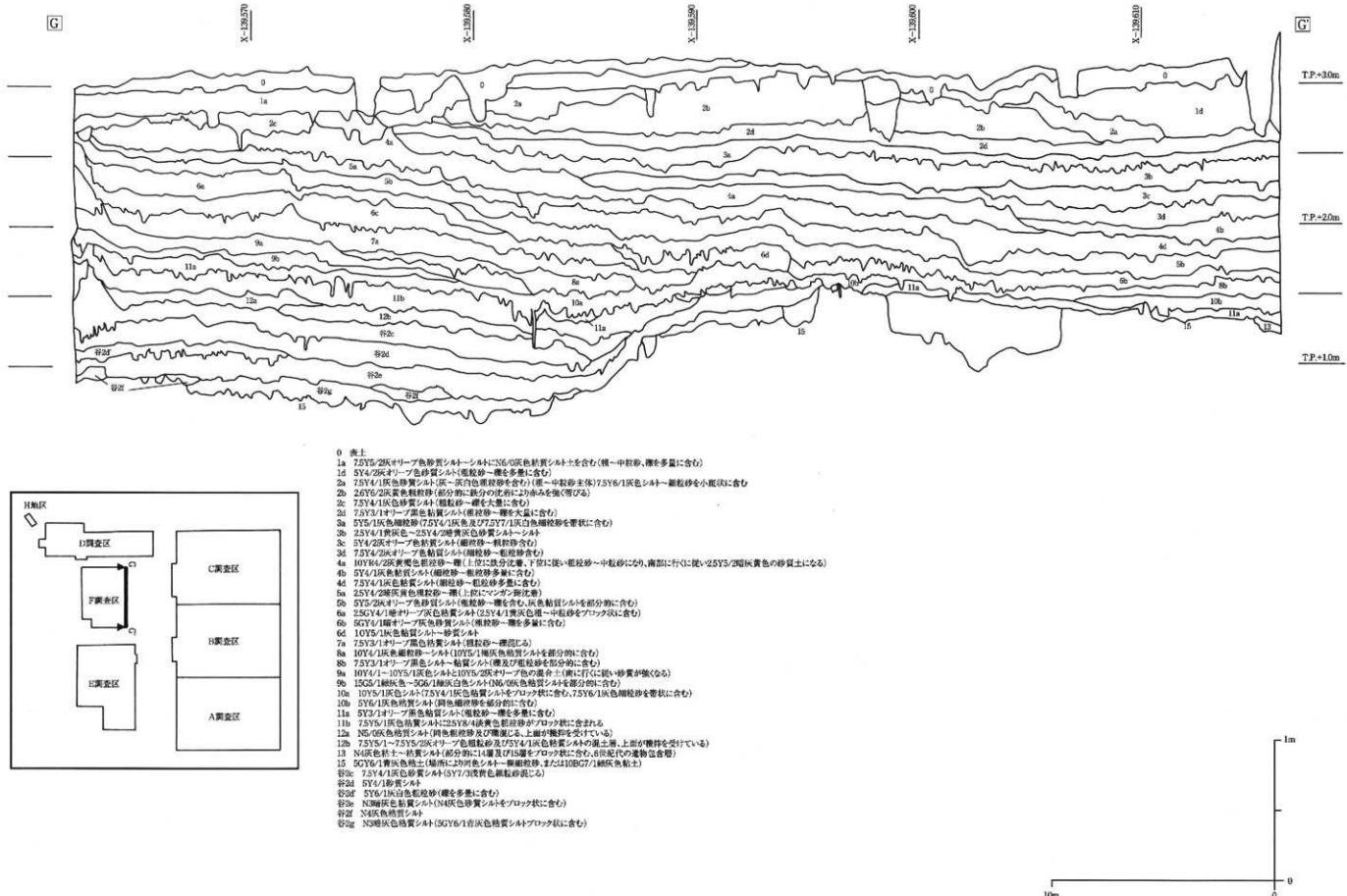
#### 第4項 F調査区（第13図）

F調査区は管理棟・送風機棟部分である。

F調査区では、古墳時代中・後期の遺構面までを全面調査の対象深度とした。

当地区は、E調査区と同様に集落の西端部付近にあたると想定されていた地域であったが、調査の結果、調査区の西端部で南北に縦断する大溝の東側肩部が検出された。また、北東端部付近で北へ向かって下がる浅い谷状地形が認められ、調査区の南東半部に古墳時代中・後期の集落遺構があり、さらに調査区東壁外へ広がる状況を呈する。大溝の東肩部付近がT.P.1.0m、調査区東壁中央付近が南北両端部付近が最も高くT.P.1.4mを測った。この面が第13遺構面で、集落内は青灰色の粘土ないしはシルトが基本的にベースとなる。

その上には、第14層の青灰色のブロックが混入した暗灰色粘土が部分的に堆積し、この層は



第13図 F調査区土層断面図

5世紀の遺物包含層である。

その上には、第13層の灰色粘質シルトが堆積し、この層は6世紀の遺物包含層である。

北端部で認められた谷状地形には灰色ないしは灰白色の粘質と砂質のシルトが堆積し、その上層に第12層のオリーブ灰色系の粘質シルトが堆積する。その上面が第12遺構面で、水田が検出された。

その上には、第11層オリーブ黒色粘質シルトが堆積し、その上面が第11遺構面で、奈良時代の水田を検出した。

その上には、調査区北東半部にのみ第10層灰色粘質シルト、第9層灰色～緑灰色シルトが堆積し、それぞれの上面が第10遺構面、第9遺構面となっている。いずれも水田面である。

その上には、第8層オリーブ黒色粘質シルトが調査区全域で堆積し、その上面が第8遺構面となっている。平安時代後期の水田面で、讀良郡条里の施行時期と合致するものである。

その上層には、調査区北半に第7層黒色粘質シルトが堆積し、その上面が第7遺構面で、水田が検出された。

その上には、第6層オリーブ灰色砂質シルトが調査区全域に堆積し、その上面が第6遺構面で、水田が検出された。

その上には、北半部には灰黄色砂礫層が、南半部にはオリーブ黒色粘質シルトが堆積し、その上面が第5遺構面で、北半部では中世の集落域が、南半部では水田が検出された。

その上には、第4層灰白色粗～中粒砂と灰黄褐色粘質土が堆積し、その上面が第4遺構面で、北半部では中世（12世紀末～13世紀）の集落域が、南半部では水田が検出された。

その上には、第3層灰白色砂質シルトが堆積し、その上面が第3遺構面で、中世の水田が検出された。

その上には、第2層灰黄色粗～中粒砂からなる洪水砂が堆積し、その上面が第2遺構面で、近世の島畠が検出された。

その上には、第1層灰色～灰オリーブ色砂質シルトが堆積し、その上面が第1遺構面で、近世の耕作地が検出された。

## 第5項 H地区（第14図）

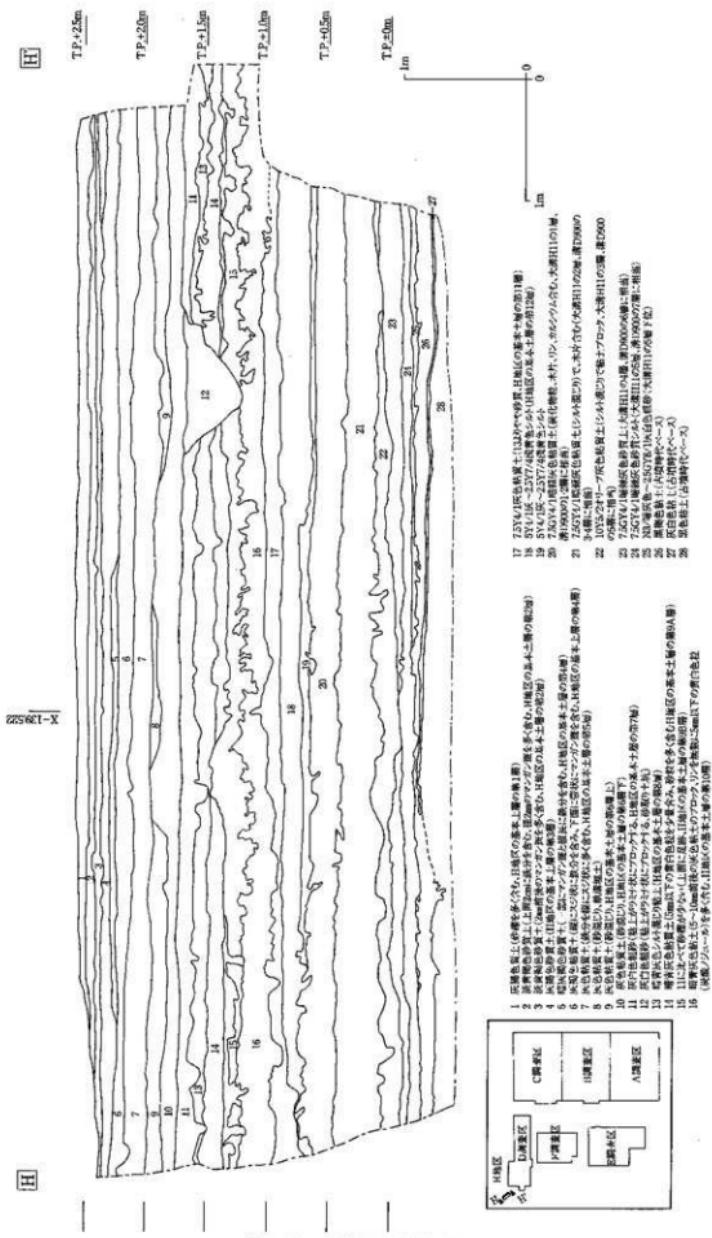
H地区は門真寝屋川直送幹線下水管渠の発進立坑部分である。

H地区では、T.P. - 1.0m付近まで調査した。

第13層上面が第11遺構面で、古墳時代中期～後期の遺構面となっている。大溝が検出された。

その上には、第12層の砂層が堆積し、その上面が第10遺構面で、古墳時代後期の遺構面となる。足跡が検出された。

その上には、第10層暗青灰色粘土が堆積し、その上面が第9遺構面で、古墳時代後期の遺構



第14図 H地区土層断面図

面となる。足跡が検出された。

その上には、第9C層と第9B層が堆積し、第9B層上面が第8遺構面で、古墳時代後期の遺構面となる。足跡が検出された。

その上には、第9A層暗青灰色粘質土が堆積し、その上面が第7遺構面で、古墳時代後期の遺構面となる。足跡が検出された。

その上には、第8層暗青灰色シルト混じり粘土が堆積し、その上面が第6遺構面で、平安時代～鎌倉時代の遺構面となる。畦畔、足跡などが検出された。畦畔は条里の地割りと方位が異なるものである。

その上には、第7層灰白色粗砂が堆積し、その上面が第5遺構面で、平安時代～鎌倉時代の遺構面となる。砂取り穴が検出された。

その上には、第6層灰色砂混じり粘質土が堆積し、その上面が第4遺構面で、平安時代～鎌倉時代の遺構面となる。砂取り戸溝が検出された。

その上には、第5層灰色粘質土、第4層灰褐色粘質土が堆積し、その上面が第3遺構面で、鎌倉時代の遺構面となる。条里の地割りと方位が一致する溝が検出された。

その上には、第3層灰褐色砂質土が堆積し、その上面が第2遺構面で、中世後期の遺構面となる。溝が検出された。

その上には、第2層淡黄褐色砂質土が堆積し、その上面が第1遺構面で、近世の遺構面となる。溝が検出された。

## 第6項 まとめ

萬屋北遺跡に関わる一連の調査で検出されたなかで、最も前出と考えられる遺構面はD調査区の第15遺構面である。東端部のT.P.0.3m付近で、弥生時代中期前葉の集落を形成する遺構が検出された。周辺のC調査区やF調査区では同時期の遺構が検出されていないことから、D調査区の東端部からC調査区西端部までの範囲内で北から南へ舌状に広がる高位地が存在し、その先端部付近に集落が形成されていたものと考えられる。弥生時代前期以前については、A調査区で縄文時代後期の包含層と弥生時代前期の包含層、B調査区で弥生時代前期の包含層、E調査区で弥生時代前期の包含層、F調査区で弥生時代前期の包含層など、ほぼ全域で包含層が確認されているが、遺構面は認められていない。

古墳時代中期～後期の遺構面は、調査区のほぼ全域で認められた。同時期の遺構面は、北方の河川の氾濫によって流入した砂層が堆積した自然堤防上に形成されており、そのため調査区によって、検出された遺構面のレベルにかなりの差異が認められた。最も高位置で検出されたのは北東居住域にあたるC調査区で、T.P.1.8m～1.5m付近で認められ、北東居住域の南端部にあたるB調査区北半部ではT.P.1.4m付近、西端部にあたるD調査区東端部ではT.P.1.3m付近で認め

られた。

B調査区の中央付近には、比高差0.8mを測る北東から南西方向と北西から南東方向の傾斜面が存在し、区画溝を隔てたその南西側には南西居住域、区画溝と浅い谷状地形を隔てた南東側には南東居住域が認められ、南東居住域にあたるA調査区の東端部ではT.P.1.0m付近で、南西居住域の東端部にあたるB調査区の南西端部からA調査区の北西端部では、T.P.0.6m付近で古墳時代中・後期の遺構が検出された。また、南西居住域の西端部にあたるE調査区東半部では、T.P.0.9m～1.2m付近で同時期の遺構が検出されている。

北東居住域とは区画溝と浅い谷状地形を隔てた西側の、D調査区中央部から西半部に認められた北西居住域では、T.P.1.3m付近で古墳時代中・後期の遺構が検出された。

北西居住域とは浅い谷状地形を隔てた南側で、南西居住域の北西端部のE調査区北端部と区画溝を隔てた北側の、西居住域にあたるF調査区の中央部から南半部では、T.P.1.0m～1.4m付近で同時期の遺構が検出されている。

飛鳥時代より上層では、E調査区の南端部にのみ認められた第8c遺構面で飛鳥時代から奈良時代、同じく第8b遺構面で平安時代前期、C調査区の第4遺構面で平安時代後期、D調査区の第6遺構面で平安時代後期から鎌倉時代初頭というように、小規模な集落遺構が時期ごとに所在地を移動しつつ存在していたと考えられる。

B調査区とその東西両側に隣接するAB-E調査区およびAB-W調査区の第4遺構面、そしてさらにその西側に近接するE調査区の第5遺構面で、AB-E調査区の北端部からB調査区の中央部を経てAB-W調査区の北端部に東西方向に、そしてE調査区の東半部を北東から南西方向に延びる八丁堤道が認められた。八丁堤道は平安時代後期から現代に至るまで、ほぼ同じ位置に存在しており、その周辺は概ね水田あるいは島畠などの耕作地として利用されていた。

飛鳥時代以降はすべての調査区で多くの遺構面から畦畔等の水田遺構が検出されており、当該地付近は概ね耕作地となっていたといえる。

A調査区の第9遺構面および第8遺構面、B調査区の第11遺構面および第10遺構面、C調査区の第8遺構面、D調査区の第12遺構面、第11遺構面および第10遺構面、E調査区の第8c遺構面、第7b遺構面および第7遺構面、F調査区の第10遺構面、第9遺構面および第8遺構面、H地区の第6遺構面などで小区画水田等の、条里の地割と方位が異なる水田遺構が認められている。

A調査区の第4遺構面、B調査区の第5遺構面、C調査区の第7遺構面、D調査区の第8遺構面、E調査区の第7遺構面、F調査区の第8遺構面などで平安時代の水田遺構が認められているが、これらの遺構はいずれも方位が讃良郡条里の地割りと一致し、さらに讃良郡で条里制が施行されたとされる年代とほぼ合致するものである。

## 第2節 繩文時代～古墳時代前期の遺構と遺物

## 第1項 繩文時代の遺物

藤屋北遺跡にかかる一連の調査では、繩文時代から弥生時代前期の遺構は認められていないが、いくつかの調査区では、少量の遺物が包含層から出土している。

### A・F調査区包含層出土の繩文土器（第32図1～3）

第32図1は磨消繩文の波状口縁深鉢である。口辺部に繩文帯を有し、繩文はLRである。胎土には2mm以下の長石、角閃石を含み、暗褐色を呈する河内産の土器と思われる。A調査区北東側B18g2区、T.P.-1.0mから下層に堆積する第19面ベース層の暗黄灰色シルト質粘土(2.5Y4/2)中から出土した。

2・3はいわゆる突帯文土器である。そのうち2は体部のみの小片で、低い突帯文が1条巡らされる。3は深鉢の口縁部の破片で、口縁部外面の上端付近に1条の突帯文が巡らされている。ともにF調査区で出土した。断ち割りトレチ掘削の際に見つかった自然流路内からの出土である。

## 第2項 弥生時代前期の遺物

藤屋北遺跡の周辺では、これまでに実施された第二京阪国道建設にともなう事前発掘調査などから弥生時代前期やさらに遡る繩文時代に比定される遺構や遺物が検出されているが、なわて水みらいセンター建設に伴う一連の発掘調査においては、これまで弥生時代前期の遺構は検出されていない。しかしながら、複数の調査区で黒灰色粘土層から弥生時代前期に比定される土器が検出されており、近隣に同時期の遺構が存在する可能性は認められるものと考える。

### E調査区出土の弥生時代前期土器（第32図4～21、図版151）

E調査区では、黒灰色粘土層から比較的まとまった量の弥生式土器が出土した。ここではそのうちの18点を図示した。

4～11・13・14は壺の破片で、完形に復元可能なものはなかった。そのうち4・5は頸部に段を有するもので、いずれも下側を削ることで段を形成している。口縁はごく短く外反して終わる。内外面ともに密なヘラミガキを施している。6は段の有無以外は4・5とほぼ同じ形状であるが、調整は外面のみ粗いヘラミガキで、内面はヘラ削りによる。7・8は大きく外反する口縁部で、8には蓋を固定するための円孔がみられる。9の頸部外面には、上下に沈線を巡らすことで表現された突帯がみとめられる。内外面ともに密なヘラミガキを施す。10は体部中位および下半の破片で、中位に2条単位の沈線文を2段巡らし、沈線間に無軸木葉文を巡らしている。調整は外面が密なヘラミガキで、内面はナデによる。11は口縁部を欠損しているが、頸部以下

は完全に図上復元できた。平らな底部から体部下半が外上方に立ち上がり、中位で大きく内弯して体部上半は内上方に内傾しつつ立ち上がる、いわゆる胸の張った形状を呈する。外面には、頸部に1条、体部上半に4条、そして体部下端から底部にかけて2条単位で2段と、それぞれ沈線文を巡らし、体部下端から底部にかけての2段の沈線間に、2条単位で縦方向に沈線文を施す。そして縦方向の沈線間の下側には2条単位の弧文が認められる。調整は外面がヘラミガキで、内面は表面が摩滅しており不明であるが、上半には指ナデ痕が残る。13・14は底部および体部下半のみの破片で、14は無文、13には体部外面下端に沈線文が2条巡らされる。

12・15～19は壺の破片である。体部外面上端付近に沈線文を巡らすもの（12・15・16）、体部外面に文様が認められないもの（17・19）がある。12は外面の中央に凹みを持たせた底部で、体部は内弯しつつ外上方へ立ち上がる。最大径が上半にあり、上半は内弯しつつ短く内傾し頸部に至る。口縁の立ち上がりは短く外反して終わる。沈線文は4条みられ、口縁端部下端に幅狭の刻目文がみられる。調整は器壁全体がヘラミガキによる。15は口縁部および体部上半のみの破片で、沈線文は2条みられる。16も口縁部および体部上半のみの破片で、沈線文は3条みられる。口縁端部に幅広の刻目文がみられる。19は口縁部および体部上半のみの破片で、口縁部が短く水平に屈曲するので、口縁端部に幅広の刻目文がみられる。体部の最大径は上端付近にあるが、ごくわずかに膨らみを持つ程度である。17は体部下半以上の破片で、下半が内弯しつつ外上方へ立ち上がり、中位から上半にかけて直立して終わる。口縁部は短く外反し、口縁端部に幅広の刻目文がみられる。18は底部および体部下半の破片で、外面の中央に凹みを持たせた底部から、体部がわずかに内弯しつつ外上方へ立ち上がる。体部外面をヘラミガキ調整するが、内面は表面が摩滅しており不明である。

20・21は蓋で、壺蓋（20）、甕蓋（21）がある。

### 第3項 弥生時代中期の遺構と遺物

調査区の北西端部にあたるD調査区の東半部で、北から南へ舌状にのびる台地状の高まり（T.P.0.4mからT.P.±0mの地点）が確認され、台地上で竪穴住居、方形周溝墓などからなる弥生時代中期の遺構面が検出された。各遺構内や直上に堆積する包含層からは弥生式土器、木製品などの遺物が出土した。台地状の高まりは南へ広がる様相を呈していたが、D調査区の南方に位置するF調査区では対応する面に遺構は存在せず、土器や木製品（第37図3・4、第38図1）が僅かに出土したのみであった。したがってD調査区は北から南へのびる舌状の台地の先端部付近にあたり、同時期の遺構は北方へ広がっているものと考えられる。

#### 竪穴住居（弥生）100（第16図、図版4b）

調査区の南東半部のA19f4区で検出した。楕円形状の平面プランを呈する竪穴住居である。

長径 2.40m、短径 2.20m で、検出面から床面までの深度は 8cm と浅い。周縁に幅 0.11m 内外、深度 6cm 内外の壁溝が認められた。主柱穴は 4 箇所で、中央部に炉と考えられる炭を大量に含んだ土坑がみられた。内部から弥生式土器の破片が少量出土したが、時期を特定できるものはみられなかった。

#### 掘立柱建物（弥生）1（第 17 図、図版 4a）

調査区の東半部の A19d4、A19e4 区で検出した。2 間 × 5 間の独立棟持柱を有する掘立柱建物で、梁間 1.75m、桁行間 2.6m を測った。北側梁部の中央部やや外側に 1 箇所、棟持柱のものと思われる柱穴が認められた。南側梁部については、棟持柱が存在すると考えられる位置が他の遺構によって削平されていたため検出されなかった。柱穴は径 0.2m ~ 0.3m の円形状を呈し、深度は 0.17m ~ 0.32m を測った。柱穴内部から弥生式土器の破片が少量出土したが、時期を特定できるものはみられなかった。土器以外には木製品がビット 113 から 2 点検出された。檼の一部と思われる。

#### 掘立柱建物（弥生）1 出土遺物（第 37 図 1・2、図版 308）

1 は木製檼である。滑板と隆起を一木から作り出したもので、右滑走台と思われる。隆起上面が連続する山形をなし、山の高まりに対応して左右に貫通する枘孔を穿っている。枘孔は 3 箇所存在したと考えられるが、最後尾の後半部以降と滑板の隆起部より内側部分を欠損している。樹種はクスノキである。

2 は横桟と思われる。梢円形状の断面を呈する棒状具で、残存する端部は方形状に変形しており、枘孔に差し込まれていた状態が把握できた。樹種はコナラ属アカガシ亜属である。

#### 方形周溝墓（弥生）1 7（第 18 図、図版 5a）

調査区の北東端部の A19d3、A19e3 区で検出した。調査区内で検出したのは西側端部付近のみで、プランの大部分が調査区外にあるためと、西周溝および埴丘裾部の中央部を、前回の調査の際に設定し、今回の調査を実施するきっかけとなった幅 2.5m の東西断ち割りトレチ掘削によって、結果的に削平してしまっているため、今回は北西、南西のコーナーと西周溝の一部を確認したにすぎなかった。検出範囲では、南北全長 4.33m、周溝幅 0.65m ~ 2.39m、深度 0.3m 内外を測った。周溝内南西コーナー付近から弥生時代中期に比定される土器が出土した（第 19 図）。

#### 方形周溝墓（弥生）1 7 出土遺物（第 33 図 1~3、第 34 図 1・2、図版 152）

比較的まとまった量の遺物が出土したが、図示し得たのは 5 点であった。第 33 図 1~3 は甕で、比較的小型のもの（1・2）と、大型のもの（3）がある。1・3 は口縁端部内面上端付近を丁寧にヘラミガキしており、3 の端部外面には、上・下端に刻目文が施されている。

第 34 図 1 は鉢の破片で、底部を欠損している。体部から口縁部にかけて内湾しつつ外上方へ立ち上がり、口縁端部は上端に面を持ち、外面に浅い沈線を 1 条巡らす。

第 34 図 2 は高壺の壊部ないしは浅い鉢の破片と思われる。体部は外上方に低く直線的に立ち

上がり、口縁部は短く直立する。口縁端部は上端に面を持つ。口縁部外面に簾状文が施されている。  
以上の弥生式土器は、概ね畿内第II様式から第III様式古段階に属するものと考える。

#### 土坑（弥生）28（第20図、図版6d）

調査区の北東端部のA19d3区で検出した。方形周溝墓17の北西に隣接する位置にある。南北に長軸を持つ楕円形状を呈する土坑である。長軸2.7m、短軸1.4m、深度0.26mを測った。内部から弥生時代中期に比定される土器が出土した（第21図）。

#### 土坑（弥生）28出土遺物（第34図3～6、図版152）

図示し得たのは4点であった。3～5は甌で、いずれも口径が体部最大径を上回る。口縁の立ち上がりが短く外反し、外面全体と口縁部内面に密なヘラミガキを施す。大型の5は口縁端部に刻目文を施している。6は脚付の鉢で、坏部上半を欠損する。

以上の弥生式土器は、概ね畿内第II様式から第III様式古段階に属するものと考える。

#### 土坑（弥生）34（第22図、図版6e）

調査区の北東端部のA19d3、A19e3区で検出した。方形周溝墓D17の西に隣接する位置にある。北西～南東に長軸を持つ不整楕円形状を呈する土坑である。断ち割りトレーナによって南半部を削平されており、残存長で長軸1.3m、短軸0.7m、深度0.47mを測った。埋土は5層に分層され、主に中層から弥生時代中期に比定される土器が出土した。

#### 土坑（弥生）34出土遺物（第34図7、図版152）

図示し得たのは1点であった。

7は甌で、平らな底部から体部下半が高く外上方に立ち上がり、体部上半は直立する。口縁部は短く外上方に開いて終わる。いわゆる逆台形状を呈する。体部外面上半と内面の上端には比較的密なヘラミガキ調整を施すが、外面下半と内面の大部分はヘラ削りによる。口縁端部の下端に刻目文がみられる。

以上の弥生式土器は、畿内第II様式に属するものと考える。

#### 土坑（弥生）36（第23図、図版7a・b）

調査区の南東端部付近のA19e4、A19f4区で検出した。北西～南東に長軸を持つ不整楕円形状を呈する土坑である。南東側の一部を北東から南西方向に走る溝によって切られているため全貌は不明であるが、残存長で長軸2.1m、短軸1.5m、深度0.29mを測った。埋土は3層に分層され、主に下層から弥生時代中期に比定される土器が出土した（第24図）。

#### 土坑（弥生）36出土遺物（第34図8、図版152）

図示し得たのは1点であった。

8は高坏で、ほぼ完形に復元できた。鉢形の坏部に中実の脚部を付したものである。坏部は底

部から体部にかけて外上方に内湾しつつ立ち上がり、口縁部はごく短く外反して終わる。端部が下方に肥厚する。脚部は筒状に近い胴部と短く外反する底部からなり、底部の端部は上方に肥厚する。調整は外面は坏部、脚部ともに密なヘラミガキで、内面はとともに一部をヘラミガキする。口縁端部下端に刻目文がみられる。

以上の弥生式土器は、畿内第II様式に属するものと考える。

#### 土坑（弥生）9（第25図）

調査区の南東端部付近のA19e3区で検出した。東西方向に長軸を持つ不整椭円形状を呈する土坑である。長軸1.4m、短軸0.65m、深度0.25mを測った。埋土は3層に分層され、主に下層から弥生時代中期に比定される土器が出土した（第26図）が、図示し得るものはなかった。

#### 土坑（弥生）5（第15図）

調査区の東壁中央付近のA19e3区で検出した。後述する溝D6の北に隣接する位置にある。東西方向に長軸を持つ不整椭円形状を呈する土坑である。長軸0.8m、短軸0.7m、深度7cmを測った。弥生時代中期に比定される土器が出土した。

#### 土坑（弥生）5出土遺物（第34図9～11、図版152）

図示し得たのは3点であった。

9～11はいずれも壺である。そのうち9は無頸壺で、体部上半以上の破片である。体部は僅かに内湾気味に内上方へ立ち上がり、口縁部に至る。口縁部は端部をわずかに上方に摘み出して終わる。体部外面には6段の直線文とその下に簾状文を巡らす。各文様帶の間にヘラ描沈線を1条、づつ、施文後に巡らしている。内面の調整はハケ目による。10は広口の長頸壺で、頸部以上上の破片である。頸部の最小径が下端にあり、緩く外反しつつ高く立ち上がり、口縁部は屈曲して外上方に低く開いて終わる。端部は外方に面を持つ。頸部外面に5段の直線文を、口縁端部外面の平坦面に波状文を巡らす。11は広口壺で、体部上半以上の破片である。体部上半の立ち上がりが直線的に内傾し、頸部はくの字状に屈曲して短く外上方に立ち上がり、口縁部はごく短く外方に開いて終わるもので、端部下端をわずかに摘み出す。調整は外面をヘラミガキ、内面はヘラ削りによる。以上の弥生式土器は、概ね畿内第II様式から第III様式古段階に属するものと考える。

#### 溝（弥生）37（第27図）

調査区の南東端部付近のA19e4、A19f4区で検出した。竪穴住居（弥生）100の西に隣接した位置にあり、住居の西半部に沿って巡らされた状態を呈する。幅0.5m～2.5m、深度は0.44mを測った。弥生時代中期に比定される土器が出土した。

#### 溝（弥生）37出土遺物（第34図12・13）

図示し得たのは2点であった。

12・13は壺である。そのうち12は口縁部のみの破片で、内面に波状文、端部外面には刻目文を巡らす。13は底部および体部下半の破片で、径の小さな底部から体部が内弯しつつ外方に高く立ち上がる。調整は外面の体部下端付近をヘラミガキし、その他はハケ目による。

以上の弥生式土器は、畿内第II様式に属するものと考える。

#### 溝（弥生）6（第28図）

調査区の東壁中央付近のA19e3、A19f3区で検出した。東壁中央付近から南西方へ走り、その後南方に延びて調査区南東端部付近で南壁外へ出る、弧状を呈する溝である。幅0.25m～1.2m、深度は0.18mを測った。

#### 溝（弥生）6出土遺物（第35図1）

図示し得たのは1点であった。

1は壺で、頸部および口縁部の破片である。頸部は直立し、口縁部は低く短く外反する。端部が下方に肥厚し、外端に面を持つ。

#### 包含層（D調査区）出土遺物（第35図2～18）

D調査区では、包含層掘削の際に比較的まとまった量の遺物が出土した。ここでは特徴的な17点を掲載する。

2～6・13・16は壺の破片である。広口長頸壺（2）、無頸壺（3）、広口壺（4・5・13・16）などがある。7～12・14・17は壺で、肩の張らない逆台形状を呈するもの（7・8）、倒鐘形状を呈するもの（9～12）などがある。14・17は底部のみの破片で、14は、底部外面に木の葉の葉脈の圧痕がみられる、いわゆる木の葉底を呈する。17は底部下端付近に1箇所、焼成後の穿孔が認められる、いわゆる底部穿孔土器である。15は鉢、18は高环の脚部と考えられる。

#### 自然流路（A調査区）、包含層（F調査区）出土遺物（第36図1～13）

第36図1は弥生土器甕である。体部最上位にはヘラガキ沈線を4条施す。口径9.8cm、残存高16.85cmを測る。弥生時代前期相当面である第18面直上を覆う黒色粘土（5Y2/1）に包含され、第18面で検出した自然流路の埋土でもある。出土位置は、A調査区南西端C18b9区、自然流路内の西岸側、T.P. - 1.5mから出土した。

2・3は壺の口縁部で、そのうち2は頸部から口縁部にかけての外面に多条沈線文が2段施される。3は大型の長頸壺で、頸部外面に多条沈線文が、口縁端部外面と内面上端に刻目文を施す。

4～6・11は高環である。環部の破片5と脚部の破片6は同一固体と思われる。鉢状の環部に短い脚部が付くもので、環部の形状が端部外面を外側につまみ出して終わるもの（4）と、口縁部が外半するもの（5・11）などがある。4と5・6は比較的小型で深い環部、11は大型で浅い環部である。

7～10、12・13は甕で、体部の最大径が口縁部径をうわまわるもの(7)以外は、如意形を呈するものである。口縁端部外面下半に刻目文を施すもの(8)、頸部外面に1条沈線文を巡らすもの(12)があるが、それ以外は無紋である。

2～13はF調査区の包含層から出土したものである。

#### 第4項 弥生時代後期～古墳時代前期の遺物

一連の調査において検出された遺物のうち、弥生時代後期～古墳時代前期に属するものはH地区およびE調査区で検出された流路の埋土内から検出された土器で、それ以外にはB調査区の断ち割り調査の際に、古墳時代中・後期遺構面の直下で認められた砂層内から出土した木製品(田舟)が1点みられるのみであった。

##### 1. E調査区流路出土遺物(第546図1～35・第547図1～25・第548図1～9・第549図1～9、図版231～233)

E調査区で検出された古墳時代中・後期の大溝の西肩部は、弥生時代後期～古墳時代前期の流路の埋土である砂層をベースとしているが、砂層の上端部および直上から古式土師器がほぼ原型を留めた状態で検出された。検出状況から見て、これらの土器には大溝の開削時期より先行するものと大溝の埋没時期を示すものが混在するものと考えられる。ここでは78点を図示した。

第546図1～15は古式土師器の高坏である。坏体部から口縁部にかけて外反するもの(1～3・5・13～15)と、直線的ないしは内弯気味に立ち上がるもの(4・6～8・11・12)に大別できる。

第546図16は古式土師器の丸底鉢で、体部最大径が上端部付近にある浅い体部に、ごく短く外反する口縁部からなる小型のものである。

第546図17～35・第547図1～16・19は古式土師器の壺で、小さな扁球形の体部と大きく外上方に開く口縁部からなる小型のもの(546-17)、扁球形の体部と外上方に開く口縁部からなる小型のもの(546-18～28・546-30～35・547-1～6)、体部上半が直立気味で、口縁の立ち上がりも直立気味にわずかに開く小型のもの(546-29)、扁球形に近い体部と上方につまみ出す程度の口縁部からなる小型の無頸壺(547-9)、平底の小型壺(547-10)、扁球形の体部と外上方に開く口縁部からなる中型のもの(547-11～16)、一度短く外上方へ立ち上がった後ごく短く直立し、その後再び外上方へ立ち上がる、いわゆる二重口縁を呈するもの(547-19)等がある。

第547図17～25・第548図1～9、第549図6・8は古式土師器の甕である。低く立ち上がり短い口縁部で、口縁端部に面をなすもの(547-17・18・20)、口縁端部を内側につまみ出すことにより、肥厚させるもの(547-21・25)、口縁端部を外側につまみ出したもの(547-22・24)、口縁部が外反しつつ立ち上がるもの(547-23・548-1～7)、口縁の立ち上がりが、一度短く外上方へ立ち上がった後ごく短く直立し、端部の上端に面をなすもの(548-8)、口縁の立ち上

りが短く直立するもの（548-9）、口縁部がわずかに内湾しつつ外上方に立ち上がり、端部を軽く外側に摘み出すもの（549-6・8）などがある。体部は球形をなすものが大半を占めるが、549-6・8はやや胴長の体部である。

第549図3・4は土師器で、甕である。いずれも須恵器の同器種を模倣したものと考えられる。

第549図1・2・5は韓式系土器で、黒色研磨土器の高壺（549-1・2）、平底鉢の底部（549-5）などがある。

第549図7は須恵器で甕の口縁部および体部上半の破片である。

第549図9は土師器の甕であるが、韓式系土器の特徴を示す調整を施している。

### 第3節 古墳時代中期～後期の遺構と遺物

#### 第1項 北東居住域の遺構と遺物

北東居住域はB調査区の北半部からC調査区の全域、D調査区の東端部にまたがる居住域である（第39図）。他の居住域より一段高い場所に方形に区画された状態で形成されており、5箇所認められた居住域のなかで、最も遺構密度が濃い状況を呈していた。竪穴住居12棟、掘立柱建物43棟、井戸5基、周溝墓2基を始めとする膨大な数の遺構が検出されており、集落の中心を成す居住域と言える。

居住域全体の平面図は第40図～44図に分割して図示している。竪穴住居、掘立柱建物、井戸、その他主要な土坑、溝等は個別に遺構平面図・断面図を作成した。遺構の記述は作成した遺構図面の挿図No順に掲載している。その他遺物が出土した遺構もできる限り、記述をおこなった。個別に遺構図面を作成していない遺構は、B・C調査区のそれぞれの調査区で北東の遺構から順に掲載した。この掲載順は、出土土器実測図面の挿図番号順に対応している。特にC調査区は大量の遺物が出土しており、包含層出土の遺物も10mメッシュの区割に合わせて記述している。D調査区の遺構は土坑、溝、ピット、包含層の出土遺物、流路の順に記述している。

#### 竪穴住居C1693（第45図、図版10）

北東居住域の北半中央部A18d6、A18e6区で検出した。5.2m×5.2mの隅丸方形の平面形を呈し、建物の主軸はN-6°-Wを指す。住居内に主柱穴と思われるピットを4箇所検出した。掘方はいずれも直径0.6m前後、検出深さは0.5m前後を測る。柱痕は検出できなかった。床面の検出レベルはT.P.1.6mである。カマドは東辺中央に作られており、わずかに側壁の高まりを検出したのみにすぎないが、側壁には直径2cmほどの細い杭が約0.3mの間隔に打ち込まれているのが認められた（第46図、図版10c）。住居床面からは鍋の体部片などが出土しているが、年代決定の決め手になる遺物は出土していない。しかし竪穴住居C1693は、I型式3段階の須恵

器が出土した竪穴住居C 2 4 8 4、土坑C 2 4 0 5（第47図）を切って掘り込まれていることから、それ以後の時期の構築と考えられる。また隣接の掘立柱建物C 1とは建物間の距離が近いことから同時期ではないと考えられるので、竪穴住居C 1 6 9 3の時期は、須恵器編年II型式1段階に相当すると推定される。

#### 竪穴住居C 1 6 9 3出土遺物（第172図34～38、第173図1～4・7～11）

第172図34～38は覆土からの出土で、須恵器壺蓋（34）、須恵器高壺（35）、須恵器壺身（36・37）（38）は瓶口縁部である。他にガラス玉（分析編第3章図版1-C16）が出土している。第173図1・4は住居内カマド横からの出土で、（4）は土師器鍋の体部片である。円筒形土製品（2・3）、須恵器壺蓋（7）、須恵器壺身（8）土師器高壺（9）、韓式系土器甕（10）、土師器鉢（11）は住居より下層の遺物包含層からの出土であり、竪穴住居C 1 6 9 3の下限を示す遺物となる。土坑C 2 4 0 5は竪穴住居C 1 6 9 3の住居に切られている（第47図）。検出長3m、検出最大幅2m、深さ0.3mを測る。須恵器、土師器が出土した。

#### 土坑C 2 4 0 5出土遺物（第173図12・13、図版157）

図化したのは2点で、須恵器高壺（12）、韓式系土器（13）がある。

#### 竪穴住居C 2 4 8 4（第48図、図版10）

北東居住域の北半中央部A18d6、A18d5区で検出した。北辺は調査区外になり、調査地内で、6.6m×6.7m以上の長方形の平面形を呈す。主軸方位はN-10°-Wを指す。住居内にピットは多数検出したが、主柱穴は確定できなかった。床面の検出レベルはT.P.1.4mである。住居内北側中央付近に灰が集中している箇所があり、カマドの一部と思われる（第49図）。カマドの大半は調査区外になる。灰の中から支脚に使用されたと思われる須恵器壺身が伏せた状態で出土しており、この須恵器壺身の年代から竪穴住居C 2 4 8 4はI型式3段階に比定できる。

#### 竪穴住居C 2 4 8 4出土遺物（第173図5・6・14～28、第626図9、図版156）

15は支脚に転用されていた須恵器壺身である。土師器壺（5）、土師器高壺（6）、須恵器壺蓋（14）、高壺（16）、須恵器高壺脚部（17）、韓式系土器（18・19）、土師器甕（20）、製塙土器（23・24）は覆土からの出土である。21は住居内で検出したピットC 2 5 2 3から出土した須恵器壺蓋、22は同じく住居内で検出したピットC 2 5 3 6から出土した須恵器高壺、25、26は同じくピットC 2 4 8 0から出土した須恵器壺身、27はピットC 2 4 9 2から出土した須恵器壺蓋、28はピットC 2 5 3 4から出土した須恵器壺身である。第626図9は土製紡錘車である。

#### 竪穴住居C 3 3 3 3（第50図、図版11b）

北東居住域の西半部A18h9、A18h8区で検出した。6.8m×6.7mの方形の平面形を呈し、主軸方位はN-Sを指す。検出レベルはT.P.1.5mで床面の検出レベルはT.P.1.4mである。住居内北辺、西辺、東辺北半分に住居検出面からの深さ約0.2mの壁溝を検出した。住居内にピットを

多数検出したが、主柱穴は確定できなかった。カマドも検出していない。住居の年代決定の決め手になる遺物は出土していない。

#### 豊穴住居C 3 2 1 7（第51図、図版11c）

北東居住域の南半中央部 A18h7、A18h6区で検出した。5.2m × 5.2m の隅丸方形の平面形を呈す。主軸方位はN -25° - Wを指す。住居内北辺西半分に壁溝、主柱穴と思われるピットを4箇所検出した。カマドは検出していない。床面の検出レベルはT.P.1.3m ~ 1.4mで南側に緩やかに傾斜している。覆土内と住居内のピットから遺物が出土した。出土した須恵器はI型式3段階に相当するものである。

#### 豊穴住居C 3 2 1 7出土遺物（第172図14~16）

14は覆土から出土した須恵器壺身、15は覆土から出土した製塙土器である。16は主柱穴C 3 2 5 5から出土した土師器鉢である。

#### 豊穴住居C 3 7 6 7（第52図、図版11a）

北東居住域の西半部 A18g10、A18h10区で検出した。建物南西部を掘立柱建物C 8と豊穴住居C 3 7 7 0に切られている。8.5m × 6.7m の長方形の平面形を呈し、主軸方位は座標北を指す。長辺×短辺は57.8m<sup>2</sup>あり、調査地内で最も規模の大きい豊穴住居である。検出レベルはT.P.1.6m、床面の検出レベルはT.P.1.3mである。住居内の北辺、南東隅に壁溝、主柱穴と思われるピットを5箇所検出した。主柱穴の掘方はいずれも直径0.7m前後、検出深さ0.6m前後を測る。カマドは検出していないが、東辺中央に住居外まで伸びる溝状の土坑C 3 9 7 3を検出しており、検出場所、平面形をみると、豊穴住居廃絶後、崩壊したカマドの痕跡とも推定できる。

覆土、住居内の土坑、柱穴から遺物が出土した。出土した須恵器の年代から豊穴住居の時期はI型式3段階に相当する。

#### 豊穴住居C 3 7 6 7出土遺物（第172図1~9）

覆土から出土したのは1~5で、1・2は須恵器壺蓋、3・4は須恵器壺身、5は土師器鉢である。6は主柱穴3 9 4 6から出土した土師器鉢、7も同じく主柱穴3 9 6 2から出土した須恵器壺蓋、8は住居内土坑C 3 9 7 3から出土した須恵器壺蓋である。いずれもI型式3段階に比定される。その他にU字形板状土製品の破片（第606図1、図版241・242）が出土している。

#### 豊穴住居C 3 8 8 8（第53図、図版11a）

北東居住域の西端、A18f10、A19f1区で検出した。6.2m × 6.2m の方形の平面形を呈し、主軸方位はN -41° - Wを指す。北西の隅が一部調査区外になる。検出レベルはT.P.1.5m、床面検出レベルはT.P.1.4mである。住居内にピットを多数検出したが、主柱穴は確定できなかった。カマドは検出していない。

住居内の遺構や覆土から遺物が出土した。年代の決め手になる遺物は出土していないが、建物間の距離や主軸方位からみて竪穴住居C 3818とほぼ同時期と思われる。

#### 竪穴住居C 3888出土遺物（第170図31、図版157）

31は覆土からの出土で、土師質の円筒形土製品である。

#### 竪穴住居C 4040（第53図、図版11a）

北東居住域の西端、A18f10、A19f1区で検出した。平面形の大部分が竪穴住居C 3888に切られている。検出した長辺は3.7m、短辺は2.0mを測る。検出レベルはT.P.1.5m、床面の検出レベルはT.P.1.4mを測る。カマドは検出していない。住居の年代を決定する決め手になる遺物は出土していない。

#### 竪穴住居C 3770（第54図、図版11a）

北東居住域の西半部 A19h1、A18h10、A19g1、A18g10区で検出した。5.2m × 5mの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方位はN -40° - Wを指す。検出レベルはT.P.1.6m、床面の検出レベルはT.P.1.3mである。南部は掘立柱建物C 8の柱穴に切られている。住居内の北西隅、南東隅に壁溝、主柱穴と思われるピット4箇所を検出した。主柱穴は直径0.4m ~ 0.6m、検出深さは0.2m ~ 0.4mを測る。カマドは検出していない。

覆土から遺物が出土した。年代決定の決め手になる遺物は出土していないが、竪穴住居C 3217を切っていることなどから、竪穴住居C 3217より後出、須恵器編年I型式4段階に構築されたと推定できる。

#### 竪穴住居C 3770出土遺物（第172図10～13）

すべて覆土からの出土で、10は土師器高环脚部、11・12は韓式系土器平底鉢、13は須恵器器台である。

#### 竪穴住居C 3840（第55図、図版11a）

北東居住域の西半部 A18f10、A18f9、A18g10、A18g9区で検出した。5.8m × 5.7mの方形の平面形を呈し、主軸方位はN -5° - Wを指す。検出レベルはT.P.1.6m、床面の検出レベルはT.P.1.4mである。南東部は竪穴住居C 3818に切られている。住居内に主柱穴と思われるピットを4箇所検出した。直径0.5m ~ 0.7m、検出深さは0.6m ~ 0.7mを測る。カマドは検出していないが、東辺中央に住居外まで伸びる溝状の土坑C 3998とC 3837を検出しており、検出場所、平面形をみると、竪穴住居廃絶後、崩壊したカマドの痕跡とも推定できる。

覆土、住居内のピット、主柱穴、土坑から遺物が出土した。出土した須恵器はI型式3段階に相当する。

#### 竪穴住居C 3840出土遺物（第170図1～6・8・9・13・17・18・19・21）

1～3・6・8・9・19は覆土からの出土遺物で、須恵器壺蓋（1～3）、須恵器鉢（6）、土師器鉢（8）、土師器円筒形土製品（9）、須恵器壺口縁部（19）がある。4は主柱穴C 3 9 6 8から出土した須恵器壺蓋、21は同じく主柱穴C 3 9 9 2から出土した須恵器壺である。13は住居内ピットC 3 9 7 0から出土した土師器高环、18は土坑C 3 9 9 8内ピットC 4 7 8 0から出土した土師器甕である。5と17は土坑C 3 8 3 7からの出土遺物である。5は百済系の陶質土器蓋、17は土師器高环である。土坑C 3 8 3 7のその他の出土遺物は、第171図1～25に掲載した。土坑C 3 8 3 7出土遺物（第171図1～24）

1は須恵器壺蓋、I型式3段階に相当する。2は須恵器高环、6、7は須恵器甕口縁部、13（図版168）は須恵質の円筒形土製品である。3～5は土師器高环、8は布留系の大型甕の口頭部、9は土師器壺、10は土師器小型丸底甕、11・12は土師器鉢である。22～24は小型製塙土器、3点とも外面にタタキ痕はない。14～21は土坑内のピットからの出土遺物である。14・15はピットC 4 6 8 2から出土した須恵器壺、16は土師器高环、18は同じくピットC 4 6 8 2から出土した土師器甕である。19・21はピットC 4 6 8 1、17・20はピットC 4 6 8 3から出土した土師器甕口縁部である。

#### 豎穴住居C 3 8 1 8（第56図、図版11a）

北東居住域の西半部A18f10、A18f9、A18g10、A18g9区で検出した。6.2m×5.7mの隅丸方形の平面形を呈し、主軸方位はN -22° - Wを指す。検出レベルはT.P.1.6m、床面の検出レベルは約T.P.1.45mである。住居内からは検出深さ0.1m前後の壁溝、主柱穴と思われるピットを4箇所検出した。主柱穴の掘り方は直径0.3m～0.8m、検出深さは0.4m前後である。カマドは検出していない。覆土、住居内のピット、主柱穴、住居下土坑から遺物が出土した。年代の決め手になる遺物は出土していないが、豎穴住居C 3 8 4 0を切っていることなどから、豎穴住居C 3 8 4 0より後出、須恵器編年I型式4段階前後に構築されたと推定できる。

#### 豎穴住居C 3 8 1 8出土遺物（第170図7・12・15・16・20・22・24、図版156）

7・15・16・20は覆土からの出土遺物で、須恵器高环（7・16）、須恵器壺身（15）、須恵器壺口縁部（20）がある。12は住居内ピットC 3 9 3 6から出土した土師器口縁部、22は主柱穴C 3 9 9 3から出土した布留系の土師器甕口縁部、24は住居下土坑C 3 9 8 8から出土した韓式系土器口縁部である。

豎穴住居C 3 8 1 8と豎穴住居C 3 8 4 0は平面的に重複しており、前後関係を確認するため切り合い部分の精査を重ねた。その段階で出土した遺物が、第170図10・11・14・23・25～30である。切り合い部分から出土した遺物は、一括して紹介する。

#### 豎穴住居C 3 8 1 8と豎穴住居C 3 8 4 0の切り合い部分出土遺物（第170図10・11・14・23・25～30、図版157）

14は須恵器壺蓋、I型式4段階に相当する。10は土師器高环、11は須恵器系土器高环、23は

布留系の土師器甕口縁部、26～30は土師質の円筒形土製品である。土坑C 3 9 9 8から出土した須恵質の円筒形土製品を合わせると6点の円筒形土製品を確認しており、竪穴住居C 3 8 1 8と竪穴住居C 3 8 4 0の周辺では特に多く出土しているといえる。

#### 竪穴住居C 2 4 4 0（第57図、図版11d）

北東居住域の中央部分、A18g6、A18g5区で検出した。6.3m×5.7mの方形の平面形を呈し、主軸方位はN-20°-Wを指す。掘立柱建物C 2 3と掘立柱建物C 3 5が廃絶したあと構築され、南東隅は掘立柱建物C 7の周囲溝C 2 4 8 7に、北半部は掘立柱建物C 6の柱穴列に、南半部は掘立柱建物C 7の柱穴列に切られている。すなわち竪穴住居C 2 4 4 0周辺の建物の構築の順番は、掘立柱建物C 2 3→掘立柱建物C 3 5→竪穴住居C 2 4 4 0→掘立柱建物C 7→掘立柱建物C 6になり、竪穴住居C 2 4 4 0内は重なり合う建物の柱穴は多数検出されたが、竪穴住居の主柱穴は確定できなかった。検出レベルはT.P.1.6m、床面の検出レベルはT.P.1.5mである。カマドは検出していない。

住居内の遺構や覆土から遺物が出土した。第58図は住居内のピットC 2 5 7 3の遺物出土状況図、土層断面図である。出土した須恵器の年代から竪穴住居C 2 4 4 0の時期は須恵器編年I型式5段階に比定できる。

#### 竪穴住居C 2 4 4 0出土遺物（第172図17～33、図版156・157）

17～23は覆土からの出土で、須恵器坏身（17・18）、須恵器高环（19）、土師器口縁部（20）、土師器甕（21～23）がある。24は住居内のピットC 2 7 3 4から出土した土師器甕口縁部である。25～28は住居内のピットC 2 5 6 0からの出土で、須恵器坏蓋（25）、須恵器坏身（26・28）、製塙土器（27）がある。29～33は住居内のピットC 2 5 7 3からの出土で、須恵器高环蓋（29）、須恵器坏蓋（30・31）、須恵器坏身（32）、土師器甕（33）がある。

#### 竪穴住居B 2（第59図、図版37）

北東居住域に属するB調査区の北西半部の、A18j7、A18j8、B18a7、B18a8の4区で検出した。4.6m×4.4mの隅丸方形の平面形を呈し、建物の主軸はN-25°-Wを指す。住居内に主柱穴と考えられるピットを4箇所検出した。住居内の北壁西端部付近に造り付けカマドを持つ。カマドは後世の遺構により攪乱をうけており、床面がごく一部残存するのみで、その全容は不明である。

覆土内から、須恵器・土師器・製塙土器などが出土した。出土した須恵器はI型式5段階に相当するものである。

#### 竪穴住居B 2出土遺物（第173図29～33、図版156）

覆土内から須恵器・土師器・製塙土器などが出土した。図示し得たのは5点で、須恵器坏蓋（31・32）、須恵器坏身（33）、須恵器甕（29）、土師器甕（30）などがある。

**カマドB131300（第60図）**

北東居住域に属するB調査区の北西半部のA18j8区で、掘立柱建物B8の南西に隣接する位置で検出した。遺存状況が悪く、床面と奥壁の基底部の一部を除いて削平されており、全体の形状は把握できなかったが、ほぼ中央部には支脚の抜き取り痕と思われる小穴が認められた。規模は0.8m×0.8mを測った。

炭層の上面に堆積した土層から、須恵器、土師器などが出土した。出土した須恵器はII型式4段階に相当するものである。また、動物遺存体も出土している。

**カマドB131300出土遺物（第177図12～16）**

炭層の上面に堆積した土層から、須恵器、土師器などが出土した。図示し得たのは5点で、須恵器壺蓋（12・13）、須恵器壺身（14）、土師器甕（15）、土師器壺（16）などがある。動物遺存体には哺乳類の骨片がある。

**カマドB131301（第61図）**

北東居住域に属するB調査区の北西半部のA18j8区の、カマドB131300の北東に隣接する位置で検出した。カマドB131300と同様に遺存状況はよくないが、基底部は概ね残存していた。0.8m×1.2mの規模を測った。

炭層の上面に堆積した土層から、須恵器、土師器などが出土した。出土した須恵器はII型式2段階に相当するものである。

**カマドC1559、C1560、C1557（第62図、図版25）**

掘立柱建物1と2の間に北から南にC1559、C1560、C1557とならんで3基検出した。第10面で検出しておらず、検出レベルはT.P.1.8m前後である。掘立柱建物C1、C2を含む古墳時代後期の集落の共同炊事場であったと思われる。覆屋の存在は不明である。3基とも煙出しを北、南側に炊き口、灰をかき出した跡が残っており、土師器高壺を支脚に転用している。

カマドC1560（図版25a）は最大幅80cm、長さは1.5mを測る。わずかに高さ8cmほどの窯体が残存している。カマド内部には土師器鉢（第177図18）と甕（第177図17）を二重に重ねたものと、倒置した土師器大型高壺（第177図20、図版157）が並んで出土している。支脚として用いられたものと思われる。カマド内からキジの焼骨、滑石製白玉2点が出土している。

カマドC1559（図版25c）は最大幅0.45m、長さ0.9mを測る。倒置した土師器高壺（第177図21、図版157）が出土している。支脚として用いられたものと思われる。

カマドC1557（図版25e）は最大幅0.6m、長さ0.9mを測る。倒置した土師器高壺（第177図19）が出土している。支脚として用いられたものと思われる。

**掘立柱建物C1（第63図、図版12）**

掘立柱建物C 1はA18e6、A18e7区、第10面で検出した梁間3間×桁行4間の平面プランを有する建物である（以下は建物C 1と呼称する）。主柱穴の掘方検出レベルはT.P.1.8m前後である。梁間は4.99m、桁行は6.97mで床面積は34.72m<sup>2</sup>を測る。建物C 1は南面に庇列も検出した。主柱穴の掘方は平面形が円形、直径は約70cm前後、埋土はおおむね暗灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入している。庇列の柱穴は平面形が円形、直径が0.6m前後、埋土は主柱穴と同じである。

建物C 1では主柱穴14箇所の内13箇所から柱材を検出した。これらの柱の中には遺構面から0.3mほど上部に、柱穴内では地中0.7m深く残存していたものもあり、取り上げてみると残存長が1mを超えるものがほとんどである。これらの柱は建物が廃絶した後も抜き取られることも無く放置されていた。柱材の樹種は全てヒノキである。庇列の柱穴からも4本の柱がみつかっている。また北側には建物に沿うように浅い土器溜まりを検出しており、ここからは多量の土器が出土した。出土した須恵器はII型式3～4段階に相当し、建物C 1が廃絶したのはII型式4段階前後と思われる。

建物C 1の柱の上部は第10面上部を覆っている灰色粘土（砂混じり）層上面から発見していくため、第10面まで掘り下げる早い段階で、掘立柱建物の平面プランが判明していたが、掘方を検出するまで掘り下げる段階で内部構造や上部構造を復原できるような遺構、遺物は検出していない。土層断面を観察すると、建物内部の土層は柱穴の掘方検出面より上部0.1mほどは水平に堆積しており、建物内部床面を平らに整地した痕跡の可能性もある。建物内外の埋土を洗浄したところ、土中から多量の滑石製白玉を発見した。出土数は474点で、その他ガラス小玉18点（分析編第3章 図版1～3）も発見している。

#### 掘立柱建物C 1 北側土器溜まり（第66図、図版25d）

掘立柱建物C 1の北側、A18e6区で検出した。検出レベルはT.P.1.9m前後で、掘立柱建物C 1と同じく第10面で検出した。掘立柱建物C 1の主柱穴の掘方のほうが、検出レベルが低いのは、掘方の平面形の輪郭がはっきりする深さまで掘り下げたためである。掘立柱建物C 1の本来の床面は土器溜まりとほぼ同じレベルであったと思われる。

土器溜まりの平面形は不整形な溝状遺構で、検出長さ4m、最大巾2m、深さ0.3mを測る。断面はU字形で、埋土は断面では3層に分かれたが、遺物の取り上げは1層を上層、2・4層を下層として取り上げ、多量の須恵器、土師器、石製品、鉱滓が出土した。

掘立柱建物C 1出土遺物（第174図1～23、第175図1～7、第623図7、第625図6、第628図11、第630図1・2、第637図4、第638図8、第649図5、図版166、図版243、図版244、図版246a、図版250、図版261a）

出土遺物実測図の一部が第174図1～23、第175図1～7、第637図4、第638図8である。第174図1・2・4は庇列の柱穴からの出土遺物で須恵器壺蓋（1）、製塙土器（2）、土師器壺（4）がある。3・5～22は建物掘り下げ時出土遺物である。掘立柱建物C 1は柱が上部層にとび出しがある。

ていたため、掘削の早い段階で平面プランが判明した。そのため建物内部、外回り 2m 程を区割りして掘り下げたが、ほとんどの遺物が建物北側土器溜まり上層からの出土である。5～8 は須恵器坏蓋、9～14 は須恵器坏身、15 は須恵器壺、16 は土師器長胴甕、17・18・19 は土師器中型甕、20 は韓式系土器、還元炎焼成で斜格子タタキが施されている。21～23 は土師器瓶口縁部である。

石製品は第 623 図 7 の勾玉未製品、第 625 図 6 の石製紡錘車、第 628 図 11 の管玉、第 630 図 1・2 の双孔円板、有孔円板 6 点、白玉が出土した。石製紡錘車は側縁、裏面に鋸歯文が刻まれている。管玉は緑色片岩製である。第 637 図 4 は砂岩、第 638 図 8 は流紋岩製の砥石である。第 638 図 8 は不整形の八角形で、上下、側面すべての面に使用痕がある。他にガラス玉（分析編第 3 章図版 1・2-C1・4～9・13・17～19・21～27）が出土している。

第 175 図 1～7、第 649 図 5 は土器溜まり下層からの出土で、第 175 図 1 は土師器瓶、2 は土師器長胴甕か鍋の口縁部、3～5 は土師器中小甕、6 は須恵器坏身、7 は土師器鉢である。第 649 図 5 は鹿角製品の木製品である。

#### 掘立柱建物 C 1 柱材（第 64・第 65 図、図版 170）

掘立柱建物 C 1 は主柱穴から 13 本、庇列から 4 本柱材を検出した。柱材の樹種はいずれもヒノキである。主柱穴から出土した柱の直径は最も細いもので 12.5cm、最も太いもので 18.9cm で、残存長は 1m 前後である。庇列の柱材直径は 1cm 前後である。いずれも芯持ち、丸太材のまま柱として使用されており、加工痕は底部のみで、手斧により周囲から細かく施された段差が残る状態で使用されている。

#### 掘立柱建物 C 2（第 67 図、図版 13）

掘立柱建物 C 2 は A18f9、A18f8、A18g9、A18g8 区、第 10 面で検出した梁間 3 間×桁行 4 間の平面プランを有する建物である（以下は建物 C 2 と呼称する）。主柱穴の掘方検出レベルは T.P.1.8m から 2m 前後である。梁間は 4.6m、桁行は 6.69m で床面積は 30.75 m<sup>2</sup> を測る。主柱穴の掘方は平面形が円形、直径は 0.5m～0.8m 前後で、埋土はおおむね暗灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入している。

建物 C 2 では主柱穴 14箇所の内 9 箇所から柱材を検出した。これらの柱の中には遺構面から 30cm ほど上部に、柱穴内では地中 70cm 深く残存していたものもあり、取り上げてみると残存長が 1m を超えるものもあった。柱材の直径は 15～19cm で、芯持ち、丸太材のまま使用されている。これらの柱は建物が廃絶した後も抜き取られることも無く放置されていた。樹種は全てヒノキである。

建物 2 の柱の上部は第 10 面上部を覆っている灰色粘土（砂混じり）層上面から発見していたため、第 10 面まで掘下げの早い段階で、梁間 3 間×桁行 4 間の平面プランが判明していた。そのため建物内部、外回り 2m 程を区割りして掘り下げたが、建物床面まで掘り下げる段階で内部構造や上部構造を復原できるような遺構、遺物は検出していない。しかし土層断面を観察すると

掘立柱建物C1と同様、建物内部の土層は柱穴の掘方検出面より上部0.1mほどは水平に堆積しており、建物内部床面を平らに整地した痕跡の可能性もある。建物内外の埋土を洗浄したところ、土中から多量の滑石製の白玉を発見した。出土数は359点で、その他紡錘車、双孔円板、砥石、台石や鉛滓を発見している。出土遺物や掘立柱建物C1と同様、柱材が抜き取られること無く残存している状況から、建物が廃絶したのは掘立柱建物C1同様II型式4段階に相当すると思われる。

**掘立柱建物C2出土遺物（第175図8～13、第625図11、第628図11、第630図3～6・8～10、図版243a、図版244、図版246a、図版248b）**

出土土器実測図の一部が第175図8～13で、8・9・12・13は柱穴掘方検出面までに出土した遺物である。8・9は土師器鉢、12・13は土師器甌である。10・11はピットC1636からの出土であるが、建物下層の遺構からの混入品と思われる。

石製品は第625図11が紡錘車、第628図11は管玉、第630図3～6・8は双孔円板、第630図9・10は有孔円板である。紡錘車は裏面に鋸齒文が刻まれている。図版248bは滑石製白玉の一部である。他にガラス玉（分析編第3章図版1・2-C2・3～12・15・20）が出土している。

### 掘立柱建物C3（第68図、図版13）

掘立柱建物C3はA18g7、A18h7区で検出した梁間3間×桁行4間の平面プランを有する建物である。第10面で柱の上部を発見したが、柱穴は第11面で検出した（以下は建物C3と呼称する）。主柱穴の掘方検出レベルはT.P.1.7m～1.8m前後である。梁間は4.65m、桁行は7.08mで床面積は32.92m<sup>2</sup>を測る。柱穴掘方は平面形が円形、直径は0.5m～0.7m前後で、埋土はおおむね暗灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入している。

建物南西のコーナー部は第1次試掘調査のトレント内にかかり、このとき発見された柱根とあわせて9本の柱が残存することになる。今回の調査で出土した6本の柱の樹種鑑定結果によると、柱材の樹種は柱穴C3480から出土した柱のみコウヤマキで、他はすべてヒノキの丸太材である。第105図はC3480出土の柱材の実測図である。厚みが約8cm、残存長63.2cmの板状の芯去材で根元にくびれの加工があり、転用材と思われる。

建物3の柱の上部は第10面で発見していたため、第11面まで掘り下げの早い段階で、梁間3間×桁行4間の平面プランが判明していた。そのため建物内外を区割りして掘り下げ、須恵器、土師器が出土した。出土遺物や、柱材が抜き取られること無く残存している状況から、建物が廃絶したのは掘立柱建物C1同様II型式4段階に相当すると思われる。

### 掘立柱建物C3出土遺物（第175図14～18）

出土土器実測図の一部が第175図14～17である。すべて柱穴掘方検出面までに出土した遺物である。14～16は須恵器坏身、17は土師器鉢、18は須恵器甌である。

### 掘立柱建物C4南・C4北（第69図・第70図、第73図、図版14、図版171）

掘立柱建物C 4は第A18e5、A18f5区で検出した3間×3間の平面プランを有する建物である。第10面で建物の大部分の柱穴を検出していたが、第11面で検出した柱穴とあわせてはじめて3間×3間の総柱建物が南から北に建替えられたことが判明した。第69図・第70図は建物4南、4北の平面図、断面図である。2棟合わせた平面プランをみると3間×6間になるが、柱穴C 1570-C 1572-C 1573-C 1777ラインを境にして北側の柱穴は底にワラ材をむしろ状に敷きこんでいる例がみられるのに対し、南側柱穴は礎板を敷きこんだ柱穴を2か所検出し、ワラ材は検出していないこと、また建物柱穴C 1570-C 1572-C 1573-C 1777ラインを境にして、北側の建物のほうが桁行柱間の平均寸法が若干広くなっていることから、平面プランは同じ建物が、南から北に建て替えが行われたと判断した。柱穴C 1570-C 1572-C 1573-C 1777ラインのそれぞれの柱穴の平面形は南北に長い平面楕円形であったが、これは建て替えに際し柱が抜き取られ、少し位置をずらして同じ柱穴を再度利用したためと考えている。

掘立柱建物C 4南の柱穴掘方検出レベルはT.P.1.6m～1.75m前後である。梁間は4.14m、桁行は4.39mで床面積は18.15m<sup>2</sup>を測る。柱穴掘方は平面形が円形、直径は0.6m～0.8m前後で、埋土はおおむね暗灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入している。建物南西の柱穴C 2224、C 2068、C 2226、C 2067は第11面で検出した。柱穴C 1588とC 1573からは礎板が出土した。柱穴C 1588の礎板は板状で、検出深さ0.7mの柱穴底部に東寄りに据えてあった。樹種はスギである。

柱穴C 1573は検出面の平面形は1m×0.78mの楕円形であるが、底部は直径0.4m前後の円形で、底から4枚の礎板が重なって出土した。第73図は柱穴C 1573礎板出土状況平面図である。出土した礎板は整理作業の後、把手付き盤の一部（約半分と思われる）を4分割して礎板として利用していたことが判明した（図版171）。第74図は把手付き盤の形に復元して実測したものである。

この盤は底部と側面中央は非常に薄く作られており、一対の把手が残存している。

柱穴から出土した須恵器、近接する掘立柱建物C 6との距離などから考えて、掘立柱建物C 4南の時期はII型式1段階に相当すると思われる。

掘立柱建物C 4北の柱穴掘方検出レベルは、建て替えで再利用された柱穴C 1570-C 1572-C 1573-C 1777ラインを除きT.P.1.8m前後である。梁間は4.18m、桁行は5.17mで床面積は21.56m<sup>2</sup>を測る。桁行寸法は南側建物のC 4南より広くなっている。柱穴掘方は平面形が円形、直径は0.7m～0.9m前後で、埋土はおおむね暗灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入している。

柱穴C 1594、C 1563、C 1564、C 1567、C 1569、C 1570、C 1572では底部、もしくは埋土中にワラ材を敷き込んでいるのが確認された。柱の沈下を防ぐとともに、滑り止めのような役割もあったと思われる。

柱穴から出土した須恵器、近接する竪穴住居C 1 6 9 3との距離などから考えて、掘立柱建物C 4 北の時期はII型式2段階以降と思われる。

#### 掘立柱建物C 4 北・南出土遺物（第175図19～24）

19・20・24は掘立柱建物C 4 南の柱穴からの出土遺物である。19は柱穴C 1 5 7 3、24は柱穴C 1 5 7 2から出土した須恵器坏身、II型式1段階に相当する。20は須恵器系土器高环脚部で、形状は須恵器風であるが、酸化炎焼成である。須恵器のような透かし孔がうがたれており、縁部回転の甘い波状文が施されている。

21～23は掘立柱建物C 4 北の柱穴からの出土遺物である。21は柱穴C 1 5 9 4、22は柱穴C 1 5 6 3、23は柱穴C 1 5 6 7からの出土遺物である。21、22は土師器壺、23は須恵器蓋である。なお柱穴C 1 5 6 3から滑石製白玉1点が出土している。

#### 掘立柱建物C 5 東・C 5 西（第71図・第72図、図版14）

掘立柱建物C 5はA18f3、A18f4、A18g3、A18g4区で検出した。建物C 5も建物C 4と同様第10面でほとんどの柱穴を検出していたが、第11面で検出した柱穴と合わせて初めて2間×4間の建物（建物C 5 東）が3間×5間（建物C 5 西）の建物に建替えられたことが判明した。第71図は建物C 5 東、第72図は建物C 5 西の平面図、断面図である。

建て替えの順番は南東コーナー部の柱穴C 2 1 8 2がC 2 1 8 3を切っていることから、ほぼ同じ面積ながら柱数を増やして2間×4間の建物が3間×5間に建て替わったことが判る。この時柱穴C 1 6 4 9、C 1 6 5 5は再び利用されている。建物C 5は東・西2棟ともに柱穴底にワラ材を敷きこんでいる例がみられた。

掘立柱建物C 5 東の柱穴掘方検出レベルはT.P.1.5m～1.8m前後である。梁間は4.13m、桁行は8.18mで床面積は33.74m<sup>2</sup>を測る。柱穴掘方は平面形が円形、直径は0.5m～0.8m前後で、埋土はおおむね暗灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入している。柱穴C 1 6 5 8、C 1 6 5 5の2箇所からワラ材を検出した。

掘立柱建物C 5 西の柱穴掘方検出レベルはT.P.1.6m～1.8m前後である。梁間は4.07m、桁行は8.15mで床面積は33.13m<sup>2</sup>を測る。柱穴掘方は平面形が円形、直径は0.45m～0.75m前後で、埋土はおおむね暗灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入している。柱穴C 1 6 5 4からワラ材、柱穴C 2 1 7 8から樹種がヒノキの柱材を検出した。

建物南側に沿って検出した溝C 2 2 7 6からは、II型式2段階に相当する須恵器坏蓋と共に木製の下駄が出土している。建物C 5 西の柱穴C 1 6 4 9、C 1 6 5 4から出土した須恵器は小片で図化したのは2点のみである（第176図1・2）。これらの遺物から建物C 5 東・西の時期はII型式2段階前後、6世紀前半から中頃に相当する。

#### 掘立柱建物C 5 南縁溝2 2 7 6出土木製品（第76図）・出土土器（第201図20～22）

溝C 2 2 7 6は幅0.6m、長さ8m、検出深さ0.2m前後を測り、須恵器、土師器と共に、木製

の下駄が出土した。第75図は下駄の出土状況平面図である。溝底で裏返った状態で出土した。第76図は下駄の実測図である。下駄は歯が一本残存しており、孔の位置から推定して左足用、長さ0.247m、幅0.1m、高さ4.7cmを測る。

第201図20・21は須恵器蓋、22は土師器鉢である。21の須恵器坏蓋はII型式2段階に相当する。

#### 掘立柱建物C6（第77図、図版14）

掘立柱建物C6はA18f5、A18f6、A18g5、A18g6区で検出した平面プランが3間×4間の建物である。建物南面の柱穴ラインが豎穴住居C2440を切っている。梁間4.57m、桁行6.82mで床面積は31.14m<sup>2</sup>を測る。全ての柱穴を第11面で検出しており、柱穴の検出レベルはT.P.1.5m～1.6mである。主柱穴の掘方は平面形が円形、直径は約0.4m～0.8m前後、埋土はおおむね暗灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入している。柱材、ワラ材は出土していない。図上復元で主柱穴の外回りに平面形の直径が0.3m前後のやや規模の小さい柱穴が並んでいることがわかり、検出深さも主柱穴より浅いことから、庇の柱列と思われる。建物の桁行のみならず梁間にも庇列があるとすれば、屋根の構造は寄棟の可能性もある。庇ピットC1836から鉱滓が出土している。

柱穴から出土した須恵器は小片で、図化したのは1点（第176図3）のみである。出土した遺物や建物の切り合い関係から、掘立柱建物C6の時期はII型式3段階に相当すると思われる。

#### 掘立柱建物C8（第78図、図版15）

掘立柱建物C8はA18g10、A19g1、A18h10、A19h1区で検出した平面プランが3間×4間の建物である。建物南西の柱穴ラインは豎穴住居C3770を、東辺の柱穴ラインは豎穴住居C3767を切っている。梁間4.86m、桁行6.95mで床面積は33.72m<sup>2</sup>を測る。柱穴C1549とC3774は第10面から、その他の柱穴は第11面で検出した。柱穴の検出レベルはT.P.1.4m～1.6m前後である。主柱穴の掘方は平面形が円形、直径は約0.5m～0.8m前後、埋土はおおむね暗灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入している。

第10面から検出した柱穴C1549、C3774は柱材が残存していた。第106図は出土した柱材の実測図である。2本の柱はどちらも断面が多角形になるように加工が施された芯去材で、転用された部材と考えられる。残存長は2本とも約0.7mである。樹種は他の建物の柱がほとんどヒノキであるのに対し、コウヤマキが用いられている。柱穴C1549から鉱滓が出土している。

柱穴C3797からは遺物が出土した（第176図8・9）。出土した須恵器と建物の切り合い関係から、掘立柱建物C8の時期はII型式4段階前後、6世紀後半と思われる。

#### 掘立柱建物C7（第79図、図版14）

掘立柱建物C7はA18h6、A18g5、A18g6区で検出した平面プランが3間×5間大型の掘立

柱建物である。建物北東の柱穴列が豎穴住居C 2440を切っている。梁間4.92m、桁行8.52mで床面積は41.88m<sup>2</sup>を測る。全ての柱穴を第11面で検出しており、柱穴の検出レベルはT.P.1.5m前後である。柱穴の掘方は平面形が円形、直径は約0.7m～0.8m前後、検出深さ0.6m前後を測り、埋土はおおむね暗灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入している。柱穴C 2367、C 2463、C 2364、C 2363、C 2359、C 2358、C 2357は底にワラ材が敷きこまれていた。

柱穴からの出土遺物実測図の一部が第176図4～7で、柱穴C 2398、C 2356からは須恵器坏蓋(4・5)、柱穴C 2358、C 2357からは須恵器坏身(6・7)、柱穴C 2359から双孔円板(第630図14)が出土した。出土遺物と建物の切りあい関係から掘立柱建物C 7の時期はII型式2段階前後に相当する。

#### 掘立柱建物C 7周囲溝C 2422(第80図・第81図、図版30)

掘立柱建物C 7南半部を取りまくように位置する溝C 2422を検出した。建物南辺に沿った部分で幅1.4m、検出最大深さ0.17mを測る。建物東辺に沿う部分はやや幅広くなつており溝C 2487として検出したが溝C 2422と一連のものである。この部分は幅2.3m、検出最大深さ0.15mを測る。須恵器、土師器、滑石製臼玉1点、敲石等多量の遺物が出土した。建物東辺に沿ったところでは壘状のものが広がっているのが認められた。建物の壁や屋根に使用した植物繊維状の草壁、藁葺屋根の一部の可能性もある。

#### 掘立柱建物C 7周囲溝C 2422出土遺物(第193～195図、第630・637図、図版166、図版251)

第193～195図は掘立柱建物C 7周囲溝C 2422出土遺物実測図の一部である。第193図1～8・14は須恵器坏身、14の坏身内面は漆状のものが付着している。9～13は須恵器坏蓋、15は須恵器高坏蓋、16は須恵器坏蓋、17は須恵器高坏脚部、20は須恵器壺、21・22・24～26、第194図6は須恵器壺である。出土した須恵器は須恵器編年II型式2段階前後に相当する。第193図18・19・23は須恵器系土器で、18・19は壺、23は高坏である。壺は回転の甘い波状文が施されている。

第194図3・4は土師器瓶、2は土師器壺、1、5、7は土師器長胴甌である。第195図1～4は口径が8cm前後の土師器鉢、5・6・8は器高が5cm前後の浅形の鉢、11・19・20は器壁が厚く、甌の体部下半をそのまま利用したような形状の鉢、23は把手つき鉢と多様な鉢が出土している。13～17・21・22は土師器壺、24・25は土師器鍋である。10は土師器の蓋で、天井部に円筒状の孔が貫通している。なお、第193図6・11・14、第195図12・21・22・25は溝C 2487、第193図3・13・26、第195図2・19・20は溝C 3509から出土したものである。

第630図11は石製品で双孔円板、第637図1は砂質頁岩製の砥石である。長さ15.25cmを測る。

#### 掘立柱建物C 10(第82図、図版22)

掘立柱建物C 10はA18d9、A18d10、A18e9、A18e10区で検出した平面プランが3間×4間

の建物である。梁間 4.61m、桁行 6.74m で床面積は 31.05 m<sup>2</sup> を測る。すべての柱穴を第 11 面で検出した。柱穴の検出レベルは T.P.1.5m 前後、柱穴の平面形は円形で直径が 0.85m ~ 0.4m、埋土は暗灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入している。

柱穴 C 4 3 4 9 からは柱の樹皮のみ検出した。柱穴 C 4 3 4 3 からは礎板を検出したが、この礎板は丸太材を半裁して平らな面を伏せて使用しており、柱の下に敷き込んだのではなく柱の根固めのために用いられたものと思われる。

建物 C 1 0 の柱穴からの出土遺物は小片で図化できたものはなかったが、建物北面に沿って検出した溝 C 4 3 5 4 からは II 型式 2 段階に相当する須恵器が出土している。これらの遺物から建物 C 1 0 の時期は II 型式 2 段階前後、6 世紀前半から中頃に相当する。

#### 掘立柱建物 C 1 0 北縁溝 C 4 3 5 4 出土遺物（第 196 図 1 ~ 21）

溝 C 4 3 5 4 は幅 0.8m ~ 1.5m、長さ 9.5m、検出深さ 0.2m 前後を測り、須恵器、土師器、製塙土器が出上した。第 196 図 1 ~ 21 は掘立柱建物 C 1 0 北縁溝 C 4 3 5 4 出土遺物実測図の一部である。1 は土師器長胴甕、12 は土師器甕、13・14・16 は土師器中小甕、4 は土師器台付小型鉢、17 は土師器鉢で、口縁部が外方に屈曲している。18 ~ 20 は製塙土器で、椀形である。2 は須恵器壺の蓋、5 ~ 7 は須恵器壺蓋、3・8・9 は須恵器壺身、3 は口径が 6cm 未満のミニチュア品である。10 は須恵器壺、11 は須恵器高壺である。須恵器蓋壺は II 型式 2 段階に相当する。15・21 は製塙土器で、21（図版 172）は口縁部外面にタタキ痕が残る大型ボウルタイプである。

#### 掘立柱建物 C 1 1 （第 83 図、図版 15）

掘立柱建物 C 1 1 は A18h9、A18h10 区で検出した平面プラン 3 間 × 5 間の建物である。梁間 4.73m、桁行 8.46m で、床面積 40.02 m<sup>2</sup> を測る。すべての柱穴を第 11 面で検出した。柱穴の検出面は T.P.1.4m ~ T.P.1.65m で、柱穴の平面形は円形で直径が 0.8m ~ 0.5m、埋土は暗灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入している。

柱穴 C 3 6 7 4 からは柱材（樹種はヒノキ）、柱穴 C 3 6 8 3、C 4 0 0 2、C 4 0 0 1 からは礎板を検出した。柱穴 C 4 0 0 1 の礎板は 2 枚が上下に交差した状態（第 88 図）で出土したが、下に敷きこまれていた板材は柄を欠損した様である。

柱穴からは図化できるような遺物は出土していないが、周辺の建物の距離等から掘立柱建物 C 1 1 の時期は II 型式 2 段階前後、6 世紀中葉と思われる。

#### 掘立柱建物 C 1 1 柱穴 C 4 0 0 1 出土礎板（第 89 図）

第 88 図は柱穴 C 4 0 0 1 の礎板出土状況平面図である。下の礎板が柄を欠損した様である。第 89 図は出土した礎板の実測図で、幅 13cm、厚み 3cm、残存全長 46cm、柄は 3cm 四方の棒状で本体先端から一体で削り出して作られている。柄の先端は欠損している。

#### 掘立柱建物 C 1 3 （第 84 図、図版 22）

掘立柱建物C 13はA18e9、e10区で検出した平面プラン3間×4間の建物である。梁間5.03m、桁行7.40mで床面積は37.20m<sup>2</sup>を測る。一部の柱穴を第10面で検出していたがすべての柱穴を検出し、平面プランが確定したのは第11面である。建物C 13は建物C 17と主軸を違えて重複している。柱穴の検出レベルはT.P.1.7～1.5m、平面形は円形で、直径は1m～0.5m前後、埋土は暗灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入している。北東隅から須恵器(第176図10)が出土した。

第10面で検出した柱穴C 1677、C 1672からは遺構面より上部に残存する柱材を検出している。柱材の樹種はヒノキである。柱穴C 4309から須恵器壊蓋(第176図11)、柱穴C 4295から須恵器壊身(第176図12)が出土した。建物の切り合い関係、周辺の建物の距離等から掘立柱建物C 13の時期はII型式3段階、4段階前後、6世紀後半と思われる。

#### 掘立柱建物C 20(第85図、図版22、図版171)

掘立柱建物C 20はA19e1、A18e10区で検出した平面プランが3間×5間の建物である。西側の一部柱穴が未検出であるものの図上の復原により3間×5間の建物になることが判明した。梁間5.38m、桁行9.25m、復元した床面積49.77m<sup>2</sup>を測り、検出した建物の中で最も広い。すべての柱穴は第11面で検出した。柱穴の検出レベルはT.P.1.45m前後、柱穴の平面形は円形で、直径は0.9m～0.6mである。埋土はおむね暗灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入している。柱穴C 4384からは弥生式土器(第176図16)が出土したが、ベース土の混入品と思われる。他に建物の時期の決め手になる遺物は出土していないが、建物のプラン、周辺の建物との距離等から掘立柱建物C 20の時期はII型式2段階前後、6世紀前半と思われる。

柱穴C 4392、C 4384、C 4403、C 4372から礎板が出土した。これら建物C 20の柱穴と建物外のピットC 4517の5箇所から出土した礎板は、一つの加工痕のある板材を分割して礎板に転用したものである。

第92～96図は上記の5箇所の柱穴の礎板出土状況図である。出土した礎板を合体して実測したものが第97図である。合体復元された板材は幅44cm、長さ88cm、厚み4cmを測り、片面は未調整、片面は手斧痕が鮮明に残る。断面の形状から、盤のような容器に加工中であったと思われるが、途中で放棄され、乱雑に6枚の板に分割され、礎板に転用されている。

#### 掘立柱建物C 17(第86図、図版22)

掘立柱建物C 17はA18e9、A19f9区で検出した平面プランが調査区唯一の4間×5間の建物である。平面図を検討した結果屋内に2箇所棟持柱があったと思われる。梁間5.64m、桁行7.70m、床面積43.43m<sup>2</sup>を測る。一部の柱穴を第10面で検出していたがすべての柱穴を検出し、平面プランが確定したのは第11面である。建物C 17は建物C 13と主軸を違えて重複している。柱穴の検出レベルはT.P.1.6m前後、平面形は円形で、直径は1m～0.5m前後、埋土は暗灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入している。

柱穴C 3 8 5 8 から柱が、また柱穴C 3 8 4 8、C 1 6 7 3、C 4 3 0 7 から礎板が出土したが、そのうち柱穴C 3 8 4 8 の礎板は田下駄を転用したものである。

柱穴からは図化できるような遺物は出土していないが、建物の切り合い関係、周辺の建物との距離等から掘立柱建物C 1 7 の時期はII型式1段階前後、6世紀初頭と思われる。

第90図は柱穴C 3 8 4 8 の礎板出土状況平面図である。第91図は田下駄を転用した礎板実測図である。幅10cm、長さ27cm、厚み2cmで孔の位置から右足用と推定できる。なお第638図2は泥岩製の砥石で柱穴C 1 6 7 4 から出土した。

#### 掘立柱建物C 1 8（第87図、図版15）

掘立柱建物C 1 8 はA18g8、A18g9、A18h8、A18h9区で検出した平面プラン3間×4間の建物である。梁間5.17m、桁行6.76m、床面積34.95m<sup>2</sup>を測る。すべての柱穴を第11面で検出した。柱穴の検出レベルはT.P.1.6m前後、柱穴の平面形は円形と方形があり、埋土はおおむね暗灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入している。柱穴C 4 4 0 6 から柱材が出土した。樹種はムクノキである。

柱穴C 3 6 0 6 から須恵器环身（第176図15）、柱穴C 3 4 7 7 から須恵器高坏（第176図14）が出土しているが、他に建物の時期の決め手になる遺物は出土していない。周辺の建物の距離等から掘立柱建物C 1 8 の時期はII型式3段階前後、6世紀中頃と思われる。

#### 掘立柱建物C 9（第98図、図版16）

掘立柱建物C 9 はA18h9、A18i9、A18i10区で検出した平面プランが3間×3間の総柱建物である。梁間4.58m、桁行5.41mで床面積は24.78m<sup>2</sup>を測る。すべての柱穴を第11面で検出した。柱穴の検出レベルはT.P.1.25m～1.5mである。柱穴の掘方は平面形が円形、直径が0.7m～0.5mで、埋土はおおむね灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入している。

全ての柱穴から礎板が出土し、柱穴C 4 1 1 8 からは礎板と柱がセットで出土した。礎板は長方形の板材を使用し、礎板の長辺をおおむね東西方向にそろえて整然と据えられている。柱材の樹種はヒノキである。

柱穴からは図化できるような遺物は出土していないが、周辺の建物の距離等から掘立柱建物C 9 の時期はII型式2段階前後、6世紀中葉と思われる。

#### 掘立柱建物C 1 4（第99図、図版18）

掘立柱建物C 1 4 はA18i7、A18i8、A18j7、A18j8区で検出した平面プラン3間×3間の総柱建物である。梁間4.61m、桁行5.41m、床面積は24.89m<sup>2</sup>を測る。南西隅の3箇所の柱穴はC調査区とB調査区の境上に位置しており、B調査区で検出した。その他の柱穴はC調査区第11面で検出した。柱穴の検出レベルはT.P.1.2～1.35m、平面形は円形で、直径は0.7m～0.4m、

埋土は暗灰色～黒灰色粘土に緑灰色粘質シルトがブロックで混入する。検出した柱穴はいずれも断面がバケツ型、検出深さが0.8m前後を測り、全ての柱穴に非常に厚みのある礎板が敷き込まれていた。これらの礎板は船材を截断して転用したと思われ、樹種はスギ材である。

柱穴C 2 9 0 6からは須恵器壺蓋（第176図13）が出土しているが、他に建物の時期の決め手になる遺物は出土していない。建物の規模、周辺の建物の距離等から掘立柱建物C 1 4の時期はII型式2段階前後、6世紀前半と思われる。

#### 掘立柱建物C 1 2と掘立柱建物C 1 9（第100図・第101図、図版17・20）

掘立柱建物C 1 2と掘立柱建物C 1 9はA18i10、A19i1区から重複して検出した、共に平面プランが2間×4間の総柱建物である。掘立柱建物C 1 2は梁間4.41m、桁行5.06mで床面積22.29m<sup>2</sup>を測る。掘立柱建物C 1 9は梁間3.37m、桁行4.81mで床面積16.19m<sup>2</sup>を測る。すべての柱穴を第11面で検出しており、柱穴の切り合い関係からみて建物C 1 2から建物C 1 9に東に位置をずらして建替えられたと考えられる。建物C 1 2の柱穴の検出レベルはT.P.1.35m～1.5m、柱穴の平面形は円形で、直径は0.85m～0.4m、埋土は暗灰色粘土に緑灰色シルトがブロックで混入する。建物C 1 9の柱穴の検出レベルはT.P.1.35m～1.5m、柱穴の平面形は円形で、直径は0.6m～0.4m、埋土は暗灰色粘土に緑灰色シルトがブロックで混入する。

建物C 1 2は10箇所、建物C 1 9も10箇所の柱穴から礎板を検出したが、これらの礎板は分厚く柱穴の底一面に敷き込まれているものがほとんどである。建物C 1 9では小さい板材を積み重ねて複数枚の礎板を使用している例もあり、これは柱の高さを調節、もしくは柱の根固めをおこなったと考えられる。

柱穴からは図化できるような遺物は出土していないが、周辺の建物の距離等から掘立柱建物C 1 2、C 1 9の時期はI型式4段階前後、5世紀後半と思われる。

#### 掘立柱建物C 2 1（第102図、図版21）

掘立柱建物C 2 1はA18h4、A18h5、A18i4、A18i5区で検出した平面プラン2間×3間の総柱建物である。梁間3.51m、桁行4.12m、床面積14.44m<sup>2</sup>を測る。すべての柱穴を第11面で検出した。柱穴の検出レベルはT.P.1.1m～1.4mで、柱穴の埋土は灰色粘土～暗黒色粘土である。柱材が残存していた柱穴の平面形は長方形で、それに対しても柱が抜き取られている柱穴の平面形は不整形である。すなわち本来の柱穴の平面形は長方形であったと推定できる。

柱穴C 2 5 0 2、C 2 4 8 6は土坑C 2 4 1 5を切り込んでおり、この2箇所の柱穴からの出土遺物（第176図17～22）は土坑C 2 4 1 5からの混入品である可能性が高い。建物のプラン、建物間の距離、切り合い関係から掘立柱建物C 2 1の時期はI型式4段階前後、5世紀後半に相当すると思われる。

柱穴C 2 4 8 6、C 2 5 1 3、C 2 5 1 6、C 2 5 1 7の4ヶ所の柱穴から柱材が出土したが

その全ての柱はヒノキの芯去材が用いられていた。第107図は柱材が出土した柱穴の平面図、断面図である。平面図をみると柱は柱穴内の中央に立てるのではなく、側面に寄せて立てているのがわかる。また他の建物と比べると建物の面積に対して用いられている柱材直径が大きい建物である。なお柱穴C 2 5 0 2 から砥石1点が出土している。

第108図は出土した柱材の実測図である。いずれも腐食が激しいが、ヒノキの芯去材で、底部は平らに加工されている。

#### 掘立柱建物C 2 5 (第103図、図版24)

掘立柱建物C 2 5 は A18e4、A18e5、A18f4、A18f5 区で検出した平面プラン 3間×4間の総柱建物である。梁間 5.51m、桁行 7.00m、床面積 38.54 m<sup>2</sup>を測る大型建物である。大半の柱穴は第11面で検出したが、建物東辺ラインは溝状土坑C 1 9 2 2 に1箇所(第104図)、同じく溝状土坑C 1 7 5 5 の中に2箇所の礎板を検出し、礎板の間隔から建物C 2 5 の平面プランが復元できた。柱穴の検出レベルは T.P.1.5 ~ 1.7m、柱穴の平面形はおおむね円形、直径は 0.8m ~ 0.5m、埋土は灰色~暗灰色粘土に緑灰色シルトがブロックで混入する。

建物の外回りの柱穴のみ厚みのある板材が敷き込まれており、東柱には礎板は設置されていない。総柱建物であるが、倉庫ではなく住居建物の可能性がある。溝状土坑C 1 9 2 2 内で検出した建物C 2 5 の礎板直上からの須恵器坏身(第176図33)が出土していること、近接する建物との距離等から掘立柱建物C 2 5 の時期はI型式4段階、5世紀後半に相当すると思われる。

#### 掘立柱建物C 1 5 (第109図、図版19)

掘立柱建物C 1 5 は A18h7、A18h8、A18i7、A19i8 区で検出した平面プラン 2間×3間の総柱建物である。梁間 4m、桁行 6.28m、床面積 25.10 m<sup>2</sup>を測る。すべての柱穴を第11面で検出した。柱穴の検出レベルは T.P.1.2m ~ 1.4m で、平面形は円形と隅丸方形がある。建物C 1 5 の柱穴埋土はほとんど遺物もブロック土も混じらない灰色粘土であり、ベース土との区別が非常に困難であった。すべての柱穴から礎板が出土しているが、幅や厚みが不ぞろいの板材で向きを揃えずに設置されている。

柱穴からは陶化できるような遺物は出土していないが、周辺の建物の距離等から掘立柱建物C 1 5 の時期はI型式4段階前後、5世紀後半と思われる。

#### 掘立柱建物C 3 0 (第110図、図版15)

掘立柱建物C 3 0 は A18h8、A18g8 区で検出した平面プランが 2間×4間の総柱建物である。西半分は竪穴住居C 3 3 3 3 を切っている。梁間 4.60m、桁行 6.46m、床面積 29.69 m<sup>2</sup>を測る。すべての柱穴を第11面で検出した。柱穴の検出レベルは T.P.1.4m ~ 1.6m、平面形はおおむね円形で、直径は 0.35m ~ 0.65m である。

3か所の柱穴から礎板を、1箇所から柱材を検出しているが、東柱にあたるC3312、C3452では礎板が検出され、建物外回りの柱穴C2996は礎板を用いず直接柱を立てていることなど検出した他の縦柱建物とは様相が異なる。柱材の樹種はヒノキである。柱穴からは炭化できるような遺物は出土していないが、建物の切り合い関係、周辺の建物の距離等から掘立柱建物C30の時期はI型式5段階前後、6世紀初頭と思われる。

#### 掘立柱建物C22北（第111図、図版21）

掘立柱建物C22北はA18h4、A18g4区で検出した平面プラン3間×3間の建物である。梁間4.20m、桁行4.55m、床面積19.09m<sup>2</sup>を測る。11面を覆っている包含層掘り下げる早い段階から、大半の柱穴の輪郭は見え始めていたが、すべての柱穴が検出され平面プランが確定したのは第11面である。柱穴の検出レベルはT.P.1.05～1.4m、平面形は円形、直径は0.8m～0.4m、埋土は褐灰色～暗灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入する。第11面まで掘り下げると、h4区・g4区の遺構面はすぐ東側の谷状の窪地に向かってなだらかに下がっていき、周辺の包含層は非常に多くの遺物を含んでいた。建物C22の柱穴からも多数の遺物が出土した。遺物の出土状況は、建物C22が前代の遺構を整地して構築された状況をしめしている。

第176図23～30は柱穴からの出土遺物の一部である。23は柱穴C2238から出土した須恵器壺蓋、24は柱穴C2239から出土した須恵器壺身、25～27は柱穴C2240から出土した須恵器高壺、28は同じく柱穴C2240から出土した須恵器壺口縁部、29は柱穴C2247から出土した須恵器系土器壺身、30は同じく柱穴C2247から出土した須恵器甕である。また柱穴C2660からは製塙土器が出土した（第203図8）。出土遺物、周辺の建物との距離から掘立柱建物C22北の時期はII型式2段階前後、6世紀中頃と思われる。

#### 掘立柱建物C22南（第112図、図版21）

掘立柱建物C22南はA18h4区で検出した平面プラン2間×3間の建物である。図上で検討した結果、建物C22南は屋外棟持柱がつくことが判明した。梁間3.35m、桁行4.73m、床面積15.82m<sup>2</sup>を測る。すべての柱穴を第11面で検出した。柱穴の検出レベルはT.P.0.95～1.38m、平面形は円形で、直径は0.8～0.4m、埋土は暗灰色～褐灰色粘土である。

柱穴C2260、C2266、C2580、C2552の4箇所の柱穴から礎板が出土したが、そのうち柱穴C2260、C2266には焼けた角材が用いられていた。柱穴C2580からは須恵器壺蓋（第176図31）、移動式カマドが出土した。出土遺物、周辺の建物との距離から掘立柱建物C22の時期はI型式5段階前後、6世紀初頭と思われる。

#### 掘立柱建物C28（第113図）

掘立柱建物C28はA18e7、A18e8、A18f7区で検出した平面プラン3間×5間の建物である。

梁間 5.58m、桁行 8.12m、床面積 45.28m<sup>2</sup>を測る。すべての柱穴を第 11 面で検出した。柱穴の検出レベルは T.P.1.4 ~ 1.6m、平面形は不整形なものが多く、規模もばらつきがある。柱穴の形状をみると上面から攪乱された状況を示している。

柱穴からは図化できるような遺物は出土していないが、周辺の建物との距離から掘立柱建物 C 28 の時期は II 型式 1 段階前後、6 世紀前葉と思われる。

#### 掘立柱建物 C 23、C 35（第 115 図・第 116 図、図版 23）

掘立柱建物 C 23 と掘立柱建物 C 35 は g 6 区で重複して検出した、ともに平面プラン 2 間 × 4 間の総柱建物である。掘立柱建物 C 23 は梁間 4.00m、桁行 6.28m、床面積 25.10m<sup>2</sup>を測る。掘立柱建物 C 35 は梁間 4.09m、桁行 6.23m、床面積 25.48m<sup>2</sup>を測る。すべての柱穴を第 11 面で検出した。建物全体が豎穴住居 C 2440 に、北側は掘立柱建物 C 6 の柱穴列に、南半分は掘立柱建物 C 7 の柱穴列と合計 4 棟の建物に切られている。建物 C 23 と C 35 は平面プランが同じで、面積もほとんど変わらないので、位置をずらして建て替えられたと思われるが、2 棟の建物の柱穴間の切り合い関係がないので、新旧関係はわからない。

建物 C 23 の柱穴の検出レベルは T.P.1.3 ~ 1.5m、柱穴の平面形は不整形、埋土は暗灰色～灰色粘土に緑灰色土がブロックで混入する。建物 C 35 の柱穴の検出レベルは T.P.1.4m 前後、柱穴の平面形は不整形、埋土は暗灰色～灰色粘土に緑灰色土がブロックで混入する。

建物 C 23 は 9 箇所、建物 C 35 は 7 箇所の柱穴から礎板を検出したが、形や大きさがさまざまな板材を 1 ヶ所に数枚積み重ねたり、向きを揃えずばらばらに敷き込んだり、礎板の使用に規則性がない。建物 C 35 の柱穴 C 2564 からは須恵器高坏、台石が出土している（第 176 図 36）。建物 C 23 の柱穴 C 2758 から土師器甕（第 176 図 32）が出土している。出土遺物と建物の切り合い関係から、掘立柱建物 C 23、C 35 の時期は I 型式 3 段階前後に相当すると思われる。

#### 掘立柱建物 C 31・C 32（第 117 図・第 118 図）

掘立柱建物 C 31・C 32 はともに平面プラン 2 間 × 2 間の総柱建物で、建物 C 31 は A18f4、A18f5 区、建物 C 32 は A18f4 区で検出した。

建物 C 31 は梁間 2.51m、桁行 3.26m、床面積は 8.17m<sup>2</sup>を測る。建物 C 32 は梁間 3.01m、桁行 3.47m、床面積は 10.43m<sup>2</sup>を測る。すべての柱穴を第 11 面で検出した。柱穴の検出レベルは T.P.1.5 ~ 1.55m、平面形はおむね円形で、直径は 0.3m ~ 0.6m、埋土は暗灰色～灰色粘土に緑灰色粘土をブロックで混入する。

建物 C 31 の 5 箇所の柱穴から礎板が、建物 C 32 の 4 箇所の柱穴で礎板、1 箇所で柱材を検出した。柱材の樹種はヒノキで直径は 0.155m、建物の規模に比して柱の直径が小さいことはない。礎板は大きさや形が不揃いの板材を用い、方向をそろえることも無く置かれ、積み重ねて使用されている柱穴もあり、使用状況に規則性がない。近接する建物間の距離等から考えて掘立柱建物

C 3 1、C 3 2は5世紀代の建物と思われる。

#### 掘立柱建物 C 1 6 (第119図、図版21)

掘立柱建物 C 1 6 は A19h1、A19h1 区で検出した大型の掘立柱建物である。建物の大半は調査区外になるが、長辺は6間以上になる可能性がある。すべての柱穴を第11面で検出した。柱穴の検出レベルは T.P.1.4 ~ 1.55m、柱穴の平面形は円形で、直径は 0.9m ~ 0.5m、埋土は灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入する。

建物 C 1 6 では柱穴 C 4 7 3 6 を除く全ての柱穴から礎板が出土した。また柱穴 C 4 7 0 5、C 3 7 5 1、C 4 6 4 3、C 4 7 1 5 からは礎板の上に柱材が残存していた。用いられていた礎板はいずれも厚さが 8cm 前後を測り、柱材の直径は平均 20cm を超え、これは検出した建物の中で最も規模が大きいものである。柱は礎板の中心に据えられており、柱材の樹種は C 4 7 1 5 がコウヤマキで他はすべてヒノキである。第120図1は柱穴 C 4 6 4 3 出土の柱材である。直径 22 cm、残存長 52cm、底部は水平に加工されており、手斧痕は残っていない。第120図2は柱穴 C 3 7 5 1 出土の礎板である。幅 35cm、長さ 46cm、厚み 10cm を測り、上面中央に柱痕跡が残っている。

柱穴からは図化できるような遺物は出土していないが、周辺の建物の距離等から掘立柱建物 C 1 6 の時期は I 型式 4段階前後、5世紀後半と思われる。

#### 掘立柱建物 C 3 4 (第121図)

掘立柱建物 C 3 4 は平面プラン 2間×3間の建物で A18h8、A18h9、A18i8、A18i9 区で検出した。建物北東隅の柱穴は竪穴住居 C 3 3 3 3 を切っている。梁間 4.07m、桁行 4.82m、床面積 19.59 m<sup>2</sup> を測る。すべての柱穴を第11面で検出した。柱穴の検出レベルは T.P.1.4m 前後、平面形は円形、直径は 0.6m 前後、埋土は暗灰色～灰色粘土に緑灰色シルトがブロックで混入する。礎板、柱は出土していない。建物の切り合い関係、近接する建物の距離から考えて掘立柱建物 C 3 4 は 6 世紀代の建物と思われる。柱穴 C 2 9 6 1 から J 字形板状土製品 (第606図4) が出土している。

#### 掘立柱建物 C 2 9 (第114図)

掘立柱建物 C 2 9 は A18d6 区で検出した平面プラン 3間×2間以上の総柱建物である。東側半分は竪穴住居 C 2 4 8 4 を、西半分は d 6 区製塙土器集中部分を切って建てられている。すべての柱穴を第11面で検出した。柱穴の検出レベルは T.P.1.5m 前後、柱穴の平面形は円形で、埋土は暗灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入する。礎板や柱は検出していない。柱穴からは須恵器、土師器等が出土した。第176図34・35・37～43 はその一部である。37 は柱穴 C 1 7 0 1 から出土した須恵器壺蓋、38 は C 1 7 0 5 から出土した須恵器壺蓋、34・35・39～42 は柱穴 C 1 7 0 3 からの出土で、韓式系土器 (34)、土師器鉢 (35)、土師器甕 (42)、須恵器壺蓋 (39・40)、須恵器壺身 (41) がある。43 は C 1 7 0 4 から出土した須恵器壺身である。出土遺物は下層遺構からの混入が多いが、43 須恵器壺身を上限の遺物とし、近接する建物との距離を考える

と掘立柱建物C 2 9の時期はII型式3段階以降、6世紀後半に相当すると思われる。

柱穴C 1 6 9 5からはウマの臼歯片、柱穴1 7 0 3からは大型哺乳類の長骨片が出土している。

#### 掘立柱建物B 2（第122図、図版37）

北東居住域に属するB調査区の北西半部の、B18b9、B18b10の2区で検出した。梁間2間×桁行間3間の東西に長い掘立総柱建物である。北東コーナー部分の柱穴は、井戸1 3 1 0 0 0に切られて欠損していた。梁間4.0m、桁行4.75mで、柱間は梁間が1.70m～2.12m、桁行間が1.51m～1.81mと異なる。

柱穴は9箇所の棟持柱と2箇所の東柱の計11箇所認められ、掘方の平面形は径0.5m～0.7mの不整円形ないしは不整橢円形で、深度は0.3m～0.5mを測った。柱およびその痕跡、礎板などは認められなかった。

建物B 2を構成する各柱穴の掘方内から、須恵器、土師器などが出土した。図化できるものはなかったが、出土須恵器はI型式4段階に相当するものである。

#### 掘立柱建物B 3（第123図、図版38）

北東居住域に属するB調査区の北西端部の、A18j9、A18j10、B18a9、B18a10の4区で検出した。梁間2間×桁行間3間の南東・北西に長い掘立総柱建物である。梁間3.6m、桁行4.4mで、柱間は梁間が1.81m～2.12m、桁行が1.21m～1.81mと異なる。

柱穴は10箇所の棟持柱と2箇所の東柱の計12箇所認められ、掘方の平面形は径0.5m～0.7mの不整円形ないしは不整橢円形で、深度は0.5m～0.7mを測った。柱根やその痕跡は認められなかったが、南東側の両コーナーにあたる2箇所の柱穴から礎板が検出された。

建物B 3を構成する柱穴の埋土から、須恵器、土師器、製塙土器（第177図1～3）、砥石などが出土した。出土した須恵器はII型式4段階に相当するものである。

#### 掘立柱建物B 4（第124図、図版38）

北東居住域に属するB調査区の北西端部のB18a10区で、掘立柱建物跡B 3の南西側に隣接する位置で検出した。梁間2間×桁行3間の北東・南西に長い掘立総柱建物である。梁間3.7m、桁行4.1mで、柱間は梁間が1.63m～1.81m、桁行が1.21m～1.70mと異なる。

柱穴は10箇所の棟持柱と2箇所の東柱の計12箇所認められ、掘方の平面形は径0.5m～1.0mの不整円形ないしは不整橢円形で、深度は0.4m～0.6mを測った。柱根やその痕跡、礎板などは認められなかった。

建物B 4を構成する柱穴の埋土から、須恵器、土師器、製塙土器（第177図4・6）などが出土した。出土した須恵器はI型式5段階に相当するものである。

### 掘立柱建物 B 5 (第 125 図、図版 39)

北東居住域に属する B 調査区の北西半部の、B18a9、B18a10 の 2 区で検出した。梁間 2 間 × 桁行間 2 間の東西に長い掘立柱建物である。建物の主軸は E-W を指す。梁間 4.0m、桁行 4.7m で、柱間は梁間が 1.81m ~ 2.12m、桁行が 2.24m ~ 2.42m と異なる。柱穴は 8 箇所の棟持柱が認められ、掘方の平面形は径 0.5m ~ 0.9m の不整円形ないしは不整椭円形で、深度はいずれも約 0.5m を測った。全 8 箇所中の 6 箇所の柱穴に礎板および柱材が、1 箇所に礎板が残存していた。柱材の樹種はいずれもヒノキで、礎板の樹種はモミ、スギ、ヒノキ、スタジイなどである。

建物 B 5 を構成する柱穴の埋土から、須恵器・土師器などが出土した。出土した須恵器は II 型 4 段階に相当するものである。

### 掘立柱建物 B 7 (第 126 図)

北東居住域に属する B 調査区の北西端部の、A18j10、A19j1 の 2 区に跨る地点で検出した。梁間 3 間 × 桁行 4 間の南東・北西に長い掘立柱建物である。梁間 3.7m、桁行 5.5m で、柱間は梁間が 0.79m ~ 2.00m、桁行が 1.21m ~ 1.51m と異なる。

柱穴は 14 箇所認められ、掘方の平面形は 0.2m ~ 0.6m の不整円形で、深度は 0.2m ~ 0.6m を測った。柱根やその痕跡は認められなかった。

建物 B 7 を構成する柱穴の埋土から、須恵器、土師器（第 177 図 5）などが出土した。出土した須恵器は II 型式 1 段階に相当するものである。

### 掘立柱建物 B 8 (第 127 図、図版 40)

北東居住域に属する B 調査区の北西半部の、A18j7、A18j8 の 2 区で検出した。梁間 2 間 × 桁行 3 間の南東・北西に長い掘立柱建物である。梁間 3.9m、桁行 6.2m で、柱間は梁間が 1.81m ~ 2.12m、桁行が 2.12m ~ 2.30m と異なる。

柱穴は 10 箇所認められ、掘方の平面形は 0.5m ~ 0.9m の不整円形ないしは不整椭円形で、深さは 0.4m ~ 0.7m を測った。10 箇所の柱穴のうち 7 箇所に柱材が残存していた。柱材の樹種はシャンボ、ネジキ、リョウブなどである。

建物 B 8 を構成する柱穴の埋土から、須恵器、土師器、製塙土器（第 177 図 7 ~ 11）などが出土した。出土した須恵器は II 型式 4 段階に相当するものである。

### 掘立柱建物 D 1 2 (第 129 図、図版 46b・47b)

D - 2 調査区の東端、A19d ~ e3 区で検出した。梁間 3 間 (6.0m) × 桁行 3 間以上 (5.3m 以上) で、東側は調査区外に伸びる。平均柱間は梁間が 2.01m、桁行が 1.74m。柱穴 D 5 0 4・5 1 0・5 1 2・5 1 9・8 0 2・8 4 6・8 5 6・8 6 9 で構成される。主軸は N -57.5° - W で、検出面の標高は T.P.1.46m。溝 D 5 1 8、ピット D 7 8 9 に切られる。

柱掘方径は平均 0.41m。柱穴 D 504・510・512・519・856 に柱材が残存していた。柱穴 D 504 の柱材（ヒノキで、辺材、削出丸木）は径 11.5cm、残存長 43.9cm。柱穴 D 510 の柱材（シャシャンボ、芯持丸木）は径 12.4cm、残存長 39.7cm。柱穴 D 512 の柱材（ヒノキ、削出丸木）は径 12.3cm、残存長 24.2cm。柱穴 D 519 の柱材（ヒノキ、削出丸木）は径 6cm、残存長 17.5cm。柱穴 D 856 の柱材（ヒノキ、削出丸木）は径 14cm、残存長 20.1cm を測る。

各柱穴から出土した土器は、いずれも細片で図化することができない。このため所属時期については明確に判定できないが、5～6世紀と考えられる。

#### 掘立柱建物 D 13 (第 128 図、図版 46b・47b)

D - 2 調査区の東端、井戸 D 474 のすぐ北東、A19d～e3 区で検出した。梁間 2 間 (3.71m) × 柱行 3 間 (4.74m) の総柱建物で、主軸は N -56.5° - W 。検出面の標高は T.P.1.45m を測る。床面積は 17.54 m<sup>2</sup>。平均柱間は梁間が 1.85m、柱行が 1.58m。柱穴 D 502・507・508・509・514・761・764・790・817・828・831・837 で構成される。

柱掘方径は平均 0.55m。柱穴 D 507・508 に柱材が残存していた。柱穴 D 761 では底に柱材の沈下を防ぐための蓆（長さ 42cm、幅 27cm）が敷かれていた。柱痕跡は柱穴 D 509・514・828・831 で確認され、それぞれの径は 13cm・20cm・13cm・13cm を測る。なお、柱穴 D 508・831 では柱痕跡が柱穴底面に沈み込む様子が観察された。

柱穴 D 507 の柱材（アカガシ亜属、芯持丸木）は径 16.5cm、残存長 15.3cm。柱穴 D 508 の柱材（ネジキ、残存不良）は径 5.3cm 以上で、残存長 12.8cm を測る。

#### 掘立柱建物 D 13 出土遺物 (第 230 図 1～3・5)

柱穴 D 509 から土師器甌（1）、移動式カマド（5）、柱穴 D 828 から土師器甌の口縁部片（2）、柱穴 D 502 から須恵器高环脚部片（3）が出土している。所属時期は須恵器高环脚部片（3）から 5 世紀後半の範疇で考えることができるが、移動式カマド（5）は 6 世紀に下る資料であるため、建物の廃絶時期は 6 世紀頃と推定される。

#### 掘立柱建物 D 14 (第 130 図、図版 46b・47b)

D - 2 調査区の北東隅、A19d3 区で検出した。梁間 2 間以上 (3.7m 以上) × 柱行 2 間以上 (3.5m 以上) で、西・北側は調査区外に伸びる。主軸は N -37.5° - E で、検出面の標高は T.P.1.6m。平均柱間は梁間が 1.71m、柱行が 2.25m。柱穴 D 760 (778)・813・820・825・845 で構成される。柱穴 D 825 は上坑 D 826 を切る。

柱掘方径は平均 0.6m 程度の円形もしくは不整円形を呈している。柱痕跡は柱穴 D 760・820・825 で確認され、その径は平均 13cm を測る。

柱穴 D 760・825 では柱痕跡が柱穴底面に沈み込む様子が観察された。柱穴 D 845 からは礎板が検出され、4 個の部材 (30 × 11.1 × 4.8cm, 31.4 × 10.9 × 3.8cm, 20.4 × 8 × 3.5cm,

31.7 × 11.9 × 5.5cm) で構成されていた。

#### 掘立柱建物D 1 4 出土遺物 (第230図4)

柱穴D 8 4 5 から土師器甕口縁部片(4)が出土しているが、所属時期については5～6世紀と幅をもたせて考えている。

#### 井戸C 2 5 4 9 (第131図、図版28・29)

井戸枠を設置した井戸で、A18i5区の南東谷の縁辺で検出した。井戸枠上部の検出レベルはT.P.0.9m前後で、井戸枠底部のレベルはT.P.-0.5mである。掘方の平面形はややいびつな楕円形で、長径が1.6m、短径が1.4mである。井戸枠(第132図)は船材を転用して使用しており、2枚の舷側版と3枚の船底材を平面扇形に組み合わせて作られている。部材2は舷側板で、船底部と結合させる為の穴が4ヶ所残存している。

第131図3は井戸C 2 5 4 9の立面図、南側の部材1と3をはずした状態の立面図である。内部には部材1と部材4の間に先端を尖らした角材でつっぱりがしてあり、つっぱりの先端が部材4の外部に飛び出していた。井戸枠内の埋土はおむね2層に分かれ、上層は暗灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入する、下層は暗灰色粘土に緑灰色粘土、木質を多く含む層である。

簡状に組み合わされた井戸枠は、0.7m四方の正方形土坑に「井」の字の形に板材を並べ敷きこんだ上に載せられた状態で、北側は井戸枠を安定させるために板材がもう一枚敷き込まれている。敷き込まれていた板材は、長さ0.68m前後、幅0.15m～0.2m前後、厚みは5cm～8cm前後を測る。この板材の下層に直径0.5m程度のいびつな穴があり、土師器甕を中心とする多量の遺物がほぼ完形のまま埋置された状態で出土した。埋土は暗灰色粘土に緑灰色粘土がブロックで混入する。

第131図4は板材を取り上げた後の遺物出土状況平面図である。遺物は板材に覆われるように出土していることから、井戸掘削時、底板がおかれる前に儀礼的に埋め込まれたと考えられる。出土遺物から井戸C 2 5 4 9は5世紀後半に廃絶したと推定される。

#### 井戸C 2 5 4 9出土遺物 (第179図1～20、第180図1～6、第618図、第646図2、第686図2、図版154・155・240・258・307)

井戸C 2 5 4 9からは須恵器、土師器、移動式カマド、U字形板状土製品、滑石製白玉5点、鉛滓(第646図2、図版258)、哺乳類、魚類の骨が出土した。第179図1～20、第180図1～6は井戸C 2 5 4 9の出土遺物実測図で、第179図1・6・7は掘方からの出土、第179図2・3・9は井戸枠内、他は井戸底部から出土している。井戸枠内からヒョウタン(図版262b)、木錘(第686図2、図版307)、U字形板状土製品(第618図、図版240)も出土している。

掘方から出土した須恵器環身(1)は瓦質焼成、I型式3段階に相当する。6、7は移動式かまどの把手、庇である。井戸枠内から出土した2は須恵器環身、3は土師器高壺、9は須恵器甕である。

井戸底の穴から出土した須恵器甕(4)、壺(5)で、2点とも口縁部は打ち欠かれているように欠けていた。残りの上記2点以外の遺物はすべて土師器の中小型の丸底甕で、図化できたのは第

179図10～20、第180図1～6の14個体である。中小丸底甕は特に目立った打ち欠きはなかった。井戸底から出土した骨はマダイ、イノシシ、キジ科、イタチ科等の骨である。

#### 井戸C 2 4 7 6（第133図、図版26・27）

井戸枠を設置した井戸でA18g4、A18g5区で検出した。南東の谷が入り江状に入り込んだ奥に位置する。検出レベルはT.P.1.4mである。掘方の平面形は径約3.3mの円形、断面は逆台形、井戸枠の先端から井戸底までの深さは約3mである。掘方内の埋土はおおむね暗灰色粘土で、井戸底からは現在も湧水があった。

井戸枠は上下に分かれる。上部の井戸枠は断面弧形の部材を2つ抱き合わせていたが、北側の部材の幅がやや小さくそれを補うように別の板材（第135図1）を東側に足して合わせていた。上部井戸枠の平面形は長径1m、短径0.55mの楕円形である。井戸枠内は棒状の角材でつっぱりがしてあった。

井戸枠部材1（南側）（第135図3）は復元径0.75mの木材を円筒状に割り抜いたもので、残存厚0.1m、残存高1.5m、残存幅1.1mである。部材2（北側）（第135図2）は復元径0.7mの木材を円筒状に割り抜いたもので、残存厚0.1m、残存高1.45m、残存幅0.96mである。部材3は厚さ0.1m前後の板材で、幅0.3m、残存高1.3mで、上部に0.15m四方の方形の穴があけられている。部材1、部材2とともに、片側の側縁に段が残存し、もう片側の側縁は井戸転用時に切断された際の手斧痕が鮮明に残っていた。

下部の井戸枠は板材の両端から約0.1mの部分を上下に欠いて、それを井桁状に組み積み上げたもので、T.P.-0.25m～-1.25mのあいだで検出した。南北の一一番底辺の部材は板材の上部のみを切り欠いている。検出したのは5段であるが、残存する最上段の部材も両端を上下に欠いていることから、さらに上部に積み上げられていた可能性がある。上部の井筒状の井戸枠と下部の井桁の間に井桁の部材が押しつぶしたように倒れてはさまっていることなどから、本来は井桁のみで上部まで構成された井戸だったが、上部が崩れたため掘方をひろげて掘りなおし、井筒状の枠を載せて作りなおしたと思われる。下部の井桁組井戸枠の内法は長辺0.8m×短辺0.7mの方形で、井戸枠内には暗灰色粘土が堆積していた。井桁の部材（第134図）は、ほとんどが板目の板材で、短辺に使用された板材は長さ0.85m前後、幅0.15m～0.2m、厚みが3.5cm前後、長辺に使用された板材は長さ1.05m前後、幅0.15m～0.2m、厚みが3.5cm前後を測る。板材はいずれも片面を手斧で成形した痕跡が鮮明に残っている。

#### 井戸C 2 4 7 6出土遺物（第178図1～19、第630図12、図版153）

井戸C 2 4 7 6からは須恵器、土師器、石製品、敲石等が出土した。第178図1～19は井戸C 2 4 7 6からの出土遺物実測図である。5・6は井桁枠内埋土出土で井戸枠最下段の層位近くから出土した土師器甕である。1～4・7は井桁枠内埋土からの出土で井戸枠最下段よりさらに下層からの出土で1は須恵器壺蓋、2は土師器直口壺、3・4・7は土師器壺である。8～10・20

は上部井戸枠内埋土、11～19は堀方埋土からの出土である。8は須恵器环身、9は須恵器鉢、10は土師器鉢である。1の須恵器环蓋はII型式2段階、8の須恵器环身はII型式3段階前後に位置づけられる。第630図12は双孔円板（図版246a）である。出土遺物から井戸の使用された時期は6世紀中頃で、6世紀後半に廃絶したと推定される。

#### 井戸B131000（第136図、図版41）

北東居住域に属するB調査区の北西半部の、B18a9、B18b9の2区で検出した。木枠を持つ井戸で、掘立柱建物跡B2の北東コーナーの柱穴を切った状態で掘方が検出された。掘方は上端が長軸1.95m、短軸1.7mの楕円形状を呈し、そこから0.9mの深度で径1mの円形にすばり、その後は垂直に近い形で1.7m掘り込まれた、いわゆるラッパ状の断面形を呈する。井戸底までの深度2.6mを測った。掘方内には、刳り船を切断して転用した井戸枠が据えられていた。井戸枠の平面形は長軸0.8m、短軸0.5mの楕円形状を呈し、長軸を東西方向にして、掘方中段の北壁側に寄せて据え付けたうえで、掘方を埋め戻している。

井戸枠として使用されたのは刳り船を転用したもので、スギの巨木を刳り抜いて作られている。南側の井戸枠に使用された部材（第137図1）は現存長2.635mで、上端部幅0.9m、下端部幅0.55m、厚みは上端部が最小で3cm、最大値は下端部付近にあり6.5cmを測った。上端から下端にかけて、左右対称に緩やかに内湾する形状と、下端部には内側の刳り抜きがみられないことなどからみて、刳り船の舳部分の部材と考えられ、さらに井戸枠として転用された際に、下端付近の内側の上面が削られていたため明確ではないが、左舷側に4箇所、右舷側に3箇所舷側板を設置するための枘孔が穿たれており、準構造船の刳り船部分の、舳付近の部材と考えられる。また、船底にも左右2個一対の枘孔がみられるが、この位置に枘孔を穿つとは考えられず、これらは井戸枠に転用した際に穿たれたものといえる。

北側の井戸枠に使用された部材（第137図2）は現存長2.495mで、上端部幅0.8m、下端部幅0.55m（復元）、厚みは上端部が最小で2cm、最大値は下端部付近にあり7.5cmを測った。上端から下端にかけて、ほぼ同幅でのび、下端部でいったんすぼまつたあと再び平行に伸び終わる形状と、下端部には内側の刳り抜きがみられないことなどからみて、刳り船の艤部分の部材と考えられ、さらに井戸枠として転用された際に、下端付近の内側の上面が削られていたため明確ではないが、わずかにほぞ穴の痕跡がみられるため、こちらは準構造船の刳り船部分の艤付近の部材と考えられる。また、船底には左右2個一対のほぞ穴が2箇所みられるが、1と同様にこれらも井戸枠に転用した際に穿たれたものといえる。

井戸B131000の井戸枠内および掘方内から、須恵器、土師器、滑石製白玉19点、砥石、敲石、動物遺存体、ヒョウタン、桃などの種子が出土した。出土した須恵器はI型式5段階に相当するものである。

#### 井戸B131000出土遺物（第180図7～15、図版156）

井戸枠内および掘方内から、須恵器、土師器などが出土した。図示し得たのは9点で、須恵器  
壺蓋(7)、須恵器壺身(8)、須恵器高壺(9)、須恵器壺(10)、土師器甕(11~15)などがある。  
動物遺存体はトリ、哺乳類などがある。

#### 井戸C 2756 (第138図)

調査区東半部 A18h5区で検出した、素掘りの井戸である。平面形は1.35m×1.6mのいびつな  
円形で、検出レベルはT.P.1.5m、検出深さは1.4mを測る。断面漏斗形で底部は狭くなっている。

埋土は5層に分かれ、1、2層から須恵器が出土した。底部から遺物は出土していない。出土  
した須恵器の年代から井戸C 2756は5世紀後半に廃絶したと思われる。

#### 井戸C 2756出土遺物 (第180図 16~20)

C 2756からは須恵器が出土したが、すべて1、2層からの出土である。第180図16~20  
が出上:遺物実測図である。16は須恵器壺身、I型式3段階に相当する。17は須恵器高壺、18は  
韓式系土器甕か壺の口縁部、19・20は須恵器甕口頭部である。

#### 井戸D 474 (第139図~第143図、図版48・49・50a)

D-2調査区の東端やや南寄り、A19e3区で検出した。径4.60m×5.80mを測る大型の井戸で、  
深さ1.8mを測る。井戸底の標高はT.P.-0.3mで、湧水点となる砂層まで掘削されている。断面  
形態は鉢形を呈し、2段に掘り込まれていた。

埋土は大きく上層(1~3層)、下層(4~6層)、最下層(7~12層)に分かれる(第139図)。  
各層から遺物が出土しているが、遺物の大半は下層で、土師器、須恵器、土製品、ガラス玉、貝、  
桃核、ヒョウタンなどとともに大量の木製品が出土している(第140~143図、図版48・49)。  
4層及び5層の調査については部分的に上位・下位に分けて遺物の取り上げを行っている。

#### 井戸D 474出土遺物 (第231図~第233図、第679図~第684図、図版166・301~306)

下層の4~6層を中心に須恵器、土師器、土製品、ガラス玉、貝、桃核、ヒョウタンなどと  
ともに大量の木製品が出土している。

#### 須恵器 (第231図1~28)

4層(上)から(11・13)、4層(下)から(22)、5層から(2・6・16・17・23・27・28)、  
5層(下)から(1・20・26)、6層から(3・4・7~9・14・24)、下層から(15・18・16・25)  
が出土した。なお、(12)は4層と5層のものが、(5)は5層と6層のものが接合した資料である。  
(10・19・21)については層位不明のものである。

(1~10)は壺蓋で、(5)の口縁部の立ち上がりは低い。(3~6・8・9)は内面に一定方向の  
ナデ調整。(4)は体部と口縁部の間の稜線がわずかに認められ、II型式2段階から3段階への  
過渡期の特徴。(2)は壺身(20)とセットの可能性。(11~22)は壺身で、(11・12・14)は口  
縁部の立ち上がりがやや低いタイプ。(10)は口縁部に刻み目を施している。(21)は口縁端部

内側に沈線がめぐり、器壁が薄い。(13)は内面に一定方向のナデ調整。(23)は口縁部のみの遺存で、横瓶の可能性。(24)は壊で、無蓋高壊の壊部に近似し、底部外面の調整は手持ちヘラケズリ。(25)は高壊脚部片で、三方に円形の透かし孔をあけている。(26～28)は壊で、(28)は頸部と同様に口縁部の外面にも櫛描波状文を巡らしている。なお、(2・12・14・21)は内面に同心円文の當て具痕が残る。

以上、(22)はI型式5段階、(3・5～9)はII型式2段階、(1・2・4・11・13～20)はII型式3段階、(12)はII型式4段階に比定される。なお、壊身(11・13・14)はII型式3段階の中でもやや新しいタイプと思われる。(22)は混入品であろう。

#### 土師器（第232図1～20、第233図1～3）

4層（上）から(232-1・9)、5層から(232-10・11、232-3)、5層（下）から(232-13・14)、6層から(232-2・4・6・7・15・17、233-1・3)、上層から(232-19)が出土した。なお、(232-18・20、233-2)については5層と6層ものが接合した資料である。(232-8)については層位不明のものである。

(232-1)はミニチュア鉢。(232-2～4、15)は鉢。(232-6～12)は小型壺で、(6・8～10)の下半部のハケは粗い。(232-13)は小型長頸壺で、表面と口頸部内面に赤色の化粧土を塗布している。器壁は厚く、成形時の指おさえによる凹凸が明瞭に残る一方で、胎土は精良である。北西居住域の土坑D679からも同タイプのもの（第422図14・15）が出土している。(232-14・16・19)は壺。(232-17・18)は壺で、(18)の下半部は粗いハケ。(232-20、233-1)は鍋。(233-2)は把手付き鉢。(233-2)は移動式カマドで、蔀屋北遺跡では5世紀後半に通有に見られるタイプで、口縁部上面、外面上縁にヘラケズリ、外面下半に平行タタキメ調整を施している。須恵器壊身(22)と同様に混入したものと思われる。

#### 韓式系土器・須恵器系土器（第231図29～32）

上層（1～3層）から韓式系土器（軟質）斜格子タタキメ（29・30）、5層（下）から須恵器系土器高壊（31）、6層から韓式系土器（軟質）壺の把手（32）が出土している。(31)は脚柱部片で、内外面回転ナデ調整。

その他に、上層（1～3層）から碗形の製塙土器（第232図5）が出土している。

#### 木製品（第679図～第684図、図版301～306）

木製品では農具、容器、下駄、建築部材、祭祀具などの豊富な資料が出土している。

1層から曲物底板（682-1）。4層から曲物側板（682-3・5）、斎串（683-1・2・13・19・21）、加工材。4層（上）から大足（680-1・3～9）、下駄（680-10）、木錘（681-2・3）、斎串（683-9・14・23・24・26）、不明木製品（684-7）、板材（684-9）、加工木、小枝、用途不明木製品、自然木。4層（下）から大足（680-2）、木錘未成品（681-7）、斎串（683-11・12）、曲物側板、加工材、用途不明木製品、薄板材、木片。5層から目盛板（681-8）、曲物側板（682-4）、槽（682-7）、斎串（683-3・4・7・10・15・16・22・28）、杭（684-3）、一木鋤（684-4）、ヒヨウ

タン、棒状木製品、杭状木製品、木片、用途不明木製品、加工材、薄い板、木皮、樹皮、自然木。5層（下）から木錘（681-1・4・5）、曲物側板（682-6）、斎串（683-5・8・17・18・20・25）、梯子（684-1）、建築部材（684-2）、板材（684-5）、木片、小枝、自然木。6層から曲物側板（682-2）、斎串（683-27）、板材（684-6）、曲物側板（684-8）、木錘（681-6）、用途不明木製品、ヒヨウタン、木。

以上、多くの木製品が出土しているが、中でも「斎串」は30点以上出土している。6世紀中頃～後半の遺構から斎串がこれだけまとまって出土する例は珍しく、いっしょに見つかった他の木製品との関わりをも含めて今後、遺構の性格を考慮していく上でも、重要な資料といえる。

その他の遺物として、桃核。また、5層からガラス玉（分析編第3章図版1-D4）が出土した。

#### 周溝墓B131250（第146図、図版43e）

北東居住域に属するB調査区の北西半部の、A18j8、A8j9、B18a8、B18a9区で検出した。長軸7.7m、短軸5.8mの長方形状の区画の周囲を幅0.5m～1m、深さ0.4m内外の溝で区画した遺構である。主軸方位はN-67°-Eを示す。西側コーナー付近の一角は複数の遺構に切られている状況を呈しており、溝の存在は確認できなかった。区画の内部も他の遺構による削平を受けており、墓壙などが認められなかった。

周溝内から須恵器、土師器、韓式系上器、砥石、動物遺存体などが出土した。出土した須恵器はI型式2段階に相当するものである。

#### 周溝墓B131250出土遺物（第181図14～17、第182図1～10、図版159）

周溝内から須恵器、土師器、韓式系土器、砥石などが出土した。図示し得たのは15点で、須恵器环身（182-1）、須恵器高环（182-2）、土師器甕（181-17、182-8・9）、土師器高环（182-3～7）、韓式系土器甕（181-14）、韓式系土器甕（181-15・16）、製塙土器（182-10）などがある。動物遺存体には貝がある。

#### 周溝墓B131101（第144図、図版42a）

北東居住域に属するB調査区の北西端部の、A18i10、A18j10、A19j1、B18a10、B19a1区で検出した。一辺約7.5mの正方形状の区画の周囲に幅1.2m～2m、深さ0.5m内外の周溝を巡らせた遺構である。主軸方位はN-65°-Eを示し、区画内の中央南西寄りに埋葬主体部と考えられる土壙が認められており、B131101は周溝墓と思われる。しかし、墳丘は後世に削平を受けて基底部の一部が確認できるのみであった。

主体部は木棺直葬で、墓壙は隅丸の台形状を呈し、長軸3m、短軸1.7mを測る。後世の削平を受けているため残存深度は0.3mにすぎない。主軸方位はN-65°-Eを示す。墓壙内には木棺の痕跡が2.2m×1mの範囲に長方形状に残存していた（第47図、図版42b）。主体部と周溝の位置関係から見て、複数埋葬（2体）の可能性がある。

周溝墓B 1 3 1 1 0 1 からは韓式土器、須恵器、土師器などが出土した。出土した須恵器はI型式1段階～2段階に相当するものである。

周溝墓B 1 3 1 1 0 1 出土遺物（第182図11～16・18～23・25・26・28～30、第183図1～5、図版158）

周溝内から須恵器、土師器、韓式系土器、土製品などが出土した。図示し得たのは21点で、須恵器蓋（182-13）、須恵器把手付鉢（182-14）、土師器高坏（182-11・12、18・19）、製塙土器（182-15・16）、土師器甕（182-20・21）、土師器壺（182-22・29）、韓式系土器平底鉢（182-23・26・28、183-1）、韓式系土器甕（183-2・4・5）、土師質土錐（182-25）などがある。

#### 溝C 2 3 3 1（第147図、図版31a）

A18e3、A18e2、A18f2、A18f3区で検出した。南西部は掘立柱建物C 5東、C 5西の柱穴に、中央部は土坑C 2 2 0 5に上部から切り込まれている。平面形は円弧状を呈し、検出幅1.5m、長さ約13m、検出最大深さ0.2mを測る。検出レベルはT.P.1.7m、埋土はおおむね2層に分かれ、上層の暗灰色粘質シルトから土師器、韓式系土器、滑石製白玉が出土した。

#### 溝C 2 3 3 1出土遺物（第181図1～13、図版163）

出土土器実測図の一部が第181図1～13である。1は土師器高坏、2は黒色研磨土器高坏、3は土師器甕、4は韓式系土器平底鉢、6・7・10は土師器甕、9は土師器直口壺である。5は弥生土器甕で、実測図を掲載していないが、他にも弥生土器甕が出土している。11は外面斜格子タタキで仕上げられた把手付き壺、12・13は外面斜格子タタキで仕上げられた甕、12は口縁部が外方に屈曲、13は直口する。須恵器は出土しなかったが、韓式系土器、特に外面に斜格子タタキを残す土器が集中して出土し、C調査区の中で最も古い様相を示す土器群である。

#### 土坑C 4 0 8 3（第148図、図版33a）

A18i9、A18i10、A18j9、A18j10区で検出した。平面形は方形で西端は周溝墓B 1 3 1 1 0 1（C 4 0 8 7）につながる。長辺7.7m、短辺3.8m、断面の形状は2段掘りで、検出最大深さは0.6mである。埋土は2層に分かれ、須恵器、土師器等が出土した。

#### 土坑C 4 0 8 3出土遺物（第183図8～19、図版163・164）

出土土器実測図の一部が第183図8～19である。8・9は須恵器壺身、10は須恵器甕、15は須恵器甕、16は須恵器甕、17は須恵器器台である。11はコップ形製塙土器、12・13は土師器高坏、14は須恵器系高坏である。18は緻密な胎土を持ち、外面ヘラ磨きで丁寧に仕上げられている直口壺、19は内面削りで成形された土師器甕である。出土須恵器は須恵器編年I型式2段階に相当する。なお、C 4 0 8 7から韓式系土器甕（第182図27、183図6・7、図版158）、土師器高坏（第182図17）が出土している。

## 土坑C 3 4 8 5・C 3 4 8 6（第150図、図版32b）

A18e6、A18e7、A18f6、A18f7区で検出した。掘立柱建物1の庇列のピットに上部から切り込まれている。平面形は共にややいびつな隅丸長方形で南北に近接して検出した。共に長辺約3.7m、短辺約2m、検出最大深さは0.1mである。埋土はおおむね2層に分けられ、特に上層にススや灰を大量に含んでいる部分があった。須恵器、須恵器系土器、土師器、移動式カマド（資料No.16）、U字形板状土製品（資料No.36・44）の他、特にC 3 4 8 5から多量の炭化物と共に製塙土器が出土した。大量の灰・ススと小型製塙土器の破片が出土したことから、土坑C 3 4 8 5・C 3 4 8 6は製塙の最終工程である焼き塙をおこなったとの廃棄土坑と推定できる。

## 土坑C 3 4 8 5・C 3 4 8 6出土遺物（第184図1～38、第185図1～13、図版160・172）

出土土器実測図の一部が第184図1～38、第185図1～13である。1～3は須恵器坏蓋、4・5は須恵器坏身、6・7は須恵器高坏、13～15は須恵器甕である。8～12は須恵器の製作技法を取り入れた須恵器系土器高坏で、回転ナデや、回転ヘラケズリが施されている。

17・18は小型製塙土器で、小型バケツ型を呈する。外面はナデ調整である。19～38はコップ型の製塙土器で、19～23・29・30は外面タタキがあり、他はナデ調整である。

第185図1～4は土師器中小の甕、5～10・13は土師器長胴甕である。11は韓式系土器羽釜、12は韓式系土器瓶で、瓶外面はタタキの上からナデを施している。出土した須恵器は須恵器編年I型式4段階に相当する。

## 土坑C 2 4 1 5（第149図、図版32c）

A18h5、A18h4区で検出した。北から南にゆるやかに下がっていく斜面上に長さ6m、最大幅4mの落ち込み上の窪みがあり、その南東部で検出した。上部から掘立柱建物C 2 1の柱列に切り込まれている。2m×2m、検出深さ0.2mの隅丸方形の平面形を呈し、上部の落ち込みの埋土は暗灰色粘土、土坑C 2 4 1 5は黒灰色粘土に大量のススや、灰を含んでおり、須恵器、土師器、移動式カマド、U字形板状土製品（資料No.23・31）、繩の羽口の小片の他、特に製塙土器が多量に出土した。大量の灰・ススと小型製塙土器の破片が出土したことから、土坑C 2 4 1 5は製塙の最終工程である焼き塙をおこなったとの廃棄土坑と推定できる。

## 土坑C 2 4 1 5出土遺物（第189図1～20、図版172）

1は須恵器坏蓋、2・7は須恵器高坏、3は須恵器坏身、19は須恵器甕口縁、6は須恵器系土器高坏である。4・5は土師器甕、17は土師器長胴甕、18は韓式系土器口縁部である。8～11は小型製塙土器、鉢形で非常に器壁が薄い、内外面ナデ調整で精巧な作りである。12～16はコップ型製塙土器、12～14は外面タタキなし、15・16は外面タタキがある。20は移動式カマドの底体部である。出土須恵器は須恵器編年I型式4段階前後に相当する。

## 土坑C 2 1 9 8（第151図、図版31c）

A18e2 区で検出した。東端は調査区外になる。平面形はほぼ円形で、検出直径は約 2.7m で、検出最大深さ 0.1m を測る。埋土は暗灰色粘土に緑灰色粘土が少々混入している。須恵器、土師器、製塙土器、U字形板状土製品（資料 No.25・117）等の遺物が出土した。

#### 土坑 C 2 1 9 8 出土遺物（第 190 図 1～9、図版 172）

出土遺物実測図の一部が第 190 図 1～9 である。1・2・10 は須恵器環蓋、5・6 は須恵器高环脚部、3（図版 172）は製塙土器、外面は粘土の接合痕が残り、未調整に近い、内面は丁寧にナデである。7～9 は土師器長胴甕である。出土須恵器は須恵器編年 I 型式 5 段階に相当する。

#### 土坑 C 2 2 0 5（第 152 図、図版 31d）

A18e3、A18 f 3 区で検出した。溝 C 2 3 3 1 を上面から切り込んでいる。平面形は直径約 2.5m の円形を呈し、検出最大深さは 0.15m である。埋土は暗灰色粘土で須恵器、土師器、U字形板状土製品（資料 No.37・138）、滑石製白玉 1 点、鉛滓等が出土した。

#### 土坑 C 2 2 0 5 出土遺物（第 190 図 10～14、図版 164）

出土土器実測図の一部が第 190 図 10～14 である。10 は須恵器環蓋、11 は須恵器口縁部、12 は須恵器高环、13・14 は土師器甕である。出土須恵器は須恵器編年 I 型式 4 段階に相当する。

#### 土坑 C 4 1 5 9（第 153 図、図版 32a）

A18e8 区で検出した。A18e9、A18e8、A18 f 9、A18f8 には東西 6m、南北 8m 四方の落ち込みがあり、5 世紀中ごろ～6 世紀までの遺物が出土した。土坑 C 4 1 5 9 はこの落ち込みの北東部分にあり、5 世紀後半から末のまとまった遺物が出土した。平面形はいびつな台形を呈し、長辺約 4m、短辺約 3.8m、検出最大深さは 0.25m、検出レベルは T.P.1.5m である。埋土は緑灰色シルトがブロック状に混じる暗灰色粘土で、須恵器、土師器、製塙土器、瓦質土器・U字形板状土製品（資料 No.35）等大量の遺物が出土した。

#### 土坑 C 4 1 5 9 出土遺物（第 186 図 1～26、第 187 図 1～6、第 188 図 1～34、図版 161・162）

出土土器実測図の一部が第 186 図 1～26、第 187 図 1～6、第 188 図 1～34 である。第 186 図 1～5 は須恵器環蓋、6～10 は須恵器環身、11・12 は須恵器高环蓋、13～17 は須恵器高环、22 は須恵器甕である。18・19 は須恵器の技法を取り入れ製作された須恵器系土器高环である。18 は脚部との接合箇所に刻み目を入れている。25 は須恵器壺、26 は須恵器甕で底部外面に焼成時に付着したと思われる窯体底の敷き砂が付いている。出土した須恵器は須恵器編年 I 型式 5 段階に相当する。21 は瓦質土器の短頸壺、23 は韓式系土器口縁部、24 の韓式系土器甕は落ち込み下層遺物の混入品である可能性が高い。

第 187 図 1・2 は土師器甕、2 は落ち込み上層からの混入品である。3 は韓式系土器長胴甕、体部外面は平行タタキをすり消している。4 は布留系の口縁部を持つ土師器甕、6 は土師器鍋、把手は付いていない。5 は土師器長胴甕である。

第188図1・2は土師器鉢、6は土師器高环、3～5・7～10は土師器蓋である。11～34は製塙土器で、外面は粘土の接合痕が残り、未調整に近いが内面は丁寧にナデが施されている浅い碗形のもの（11～16）、小型のバケツ型で外面タタキが無いもの（17・18）、小型のバケツ型で外面タタキ痕が残るもの（19）、やや厚手の鉢形で口縁部が外方に屈曲するもの（20～23）、コップ型で外面タタキが無いもの（24・25）、コップ型で外面タタキがあるもの（26～34）と多種多様な種類が出土した。

#### 土坑C 3 3 4 2（第154図、図版33c）

A18i8、A18j8区で検出した。南西隅は調査区外になる。検出レベルはT.P.1.15m前後で、平面形は方形で長辺約3m、短辺約2.6m、検出最大深さは0.3mである。埋土は3層で、上層の緑灰色シルトがブロック状に混じる暗灰色粘土で、須恵器、土師器、U字形板状土製品の破片（第606図1、図版241・242、資料No.51）、移動式カマド等が出土した。

#### 土坑C 3 3 4 2 出土遺物（第191図3～16、図版164）

出土土器実測図の一部が第191図3～16である。第191図7・8は須恵器環蓋、9・10は須恵器環身、11は壺の蓋、12は壺口縁部、13は須恵器系土器高环、14は須恵器高环、15・16は須恵器蓋口縁部である。出土須恵器は須恵器編年I型式5段階に相当する。3は土師器鉢、4は土師器小型手づくねの壺、5は土師器壺、6は移動式カマドである。

#### 溝状土坑C 2 9 2 7（第155図、図版33b）

A18i8区で検出した。検出レベルはT.P.1.35m、長さ3.5m、幅1.3m前後、検出深さ約0.1mを測る。土坑埋土は暗灰色粘土で須恵器、土師器、移動式カマド、製塙土器が出土した。

#### 溝状土坑C 2 9 2 7 出土遺物（第191図17～26、第595図1）

出土土器実測図の一部が第191図17～26である。20は須恵器環蓋、21・22は須恵器環身、18は須恵器高环、23は須恵器蓋口縁部である。17は製塙土器、器壁が薄く、内面は丁寧になんである。19は土師器大型高环、25は土師器鉢、26の移動式カマドは掛け口上部に平坦面があり、付け底である（595-1）。出土須恵器は須恵器編年I型式4・5段階に相当する。

#### 土坑C 4 7 7 3（落ち込みC 2 9 1 4内）（第156図、図版34b）

A18h7区で検出した。A18h7区～A18i7区にかけて広がる不整形の落ち込みC 2 9 1 4の中央部に位置する。長さ1m×幅0.5m～0.6mで、平面形はいびつな楕円形を呈す。検出レベルは1.3m、検出深さは約7cmである。

落ち込みC 2 9 1 4と共に、須恵器、土師器、韓式系土器、移動式カマド等が出土した。

#### 落ち込みC 2 9 1 4 出土遺物（第192図1～9）

出土土器実測図の一部が第192図1～9である。1（図版167）は須恵器、平底把手付の鉢で

ある。外面体部中央にやや乱れた波状文が4条施されており、体部下半はヘラケズリ調整である。2は須恵器坏身、3は須恵器小型短頸甕、4は須恵器高坏、8は須恵器器台である。出土須恵器は須恵器編年I型式3・4段階に相当する。5・9は上師器甕、6・7は土師器鉢である。

#### 土坑C 4 7 7 3 出土遺物（第192図10～13・15）

出土土器実測図の一部が第192図10～15である。10は土師器鉢、13は上師器高坏、15は土師器長胴甕である。11は須恵器坏身、須恵器編年I型式4段階に相当する。12は韓式系土器鉢、外面平行タタキ痕をナデやオサエで消している。ほかに滑石製白玉1点が出土している。

#### 土坑C 3 0 1 6（第158図、図版34a）

A18h7区で検出した。居住域内を北西から南東方向に区画する小溝3017を切り込んでいる。1.6m×1.2mの平面形は不整形な台形を呈し、検出レベルはT.P.1.35m～1.4mで土坑一面が須恵器大甕の破片で埋め尽くされていた。破片を接合してみるとほぼ1個体に復元できることから、この大甕はほぼこの位置に設置されていたと推定される。

#### 土坑C 3 0 1 6 出土遺物（第212図2）

土坑C 3 0 1 6から出土したのは第212図2の須恵器大甕で口径0.434m、器高推定0.9mを測る。口縁部外面は櫛描文が施されており、6世紀の須恵器大甕では最大級の規模のものである。居住域の水甕として使用されていた可能性が高い。

#### 土坑C 2 0 6 3（第157図）

A18e5区で検出した。直径0.45mの平面形が円形を呈し、検出レベルはT.P.1.65m、検出深さは約5cmである。埋土は暗灰色粘土に青灰色粘土、炭化物を多く含んでおり、須恵器、土師器が出土した。

#### 土坑C 2 0 6 3 出土遺物（第203図4～6）

4は土師器高坏、内外面ハケ調整が施されている。中実の脚頂部が坏部に接合されている。5は須恵器坏蓋、6は須恵器坏身で共に須恵器編年II型式3段階に相当する。

#### 溝C 2 4 0 1 上部土器群（第159図、図版35d）

A18h2、A18h3区で検出した。溝C 2 4 0 1はC調査区の東端で南東谷部の輪郭に沿って検出されたが、溝上部の土器群はそれより先に、土器が盛り上がり、散乱した状態で検出している。土器を取り上げ、精査した後、溝C 2 4 0 1の平面上の輪郭がはっきりした。

#### 溝C 2 4 0 1 上部土器群出土遺物（第197図1～13、第198図1～5、第199図1・2、図版165）

溝C 2 4 0 1上部土器群は取り上げた状態では非常に細かい破片に分散していたが、接合作業の結果、長胴甕が6個体（第197図11～13、第198図1・2・5）、瓶が2個体（第199図1・2）、大小の鉢あわせて4個体（第197図5～7、第198図3）、中小甕3個体（第197図8～10）以

上に復元することができた。ほかに滑石製臼玉2点が出土している。第197図2~4は須恵器坏身、坏蓋で須恵器編年II型式3・4段階に相当し、溝C2401は集落が廃絶する直前の土器群となる。

#### 土坑C2203（第40図、図版31b）

A18e2、A18f2区で検出した。東端は調査区外になる。平面形が隅丸長方形を呈し、検出幅約3m、長さ3.5m、検出最大深さ0.2mを測る。埋土はおおむね2層に分けられ、下層の黒灰色粘質シルトから須恵器、土師器、製塙土器、U字形板状土製品（資料No.45・52）等の遺物が出土した。

#### 土坑C2203出土遺物（第190図15~30、第191図1・2、第630図、図版164）

出土土器実測図の一部が第190図15~30である。15は須恵器高坏蓋、16は須恵器坏蓋、17は須恵器鉢、18は須恵器坏身、21~24は須恵器坏蓋、25~27は須恵器高坏、19・20は製塙土器、外面は粘土の接合痕が残り、未調整に近い、内面は丁寧にナデである。28は土師器甌、29・30は土師器長胴甌である。出土須恵器は須恵器編年I型式4・5段階に相当する。ほかに滑石製双孔円板（第630図16）、滑石製臼玉2点が出土している。

#### A18d6区製塙土器溜まり（第41図）

A18d6区西半部、竪穴住居C2484検出箇所より西側はコップ形製塙土器の破片が地面を埋め尽くし盛り上がっている箇所があった。出土した遺物は大半がコップ形製塙土器の破片であるが、須恵器、土師器、韓式系土器も出土した。第189図21~23は出土した須恵器高坏蓋、坏身である。I型式3段階に相当する。24・25は出土したコップ形製塙土器の一部である。外面タタキが残る。26・27は土師器甌である。28は韓式系土器甌、外面タテハケで底部との境に横方向ヘラケズリが施されている。

#### 土坑C3873（第41図）

A18f10区で検出した長径1.5m、短径0.9m、検出深さ0.2mの平面形が楕円形の土坑である。すぐ南に竪穴住居C3840が検出されたが、遺物の年代からみると土坑C3873が後出の遺構である。土坑内には須恵器とともに小楕円形の製塙土器、コップ形製塙土器がぎっしり詰まっていた。第171図25は土師器甌、26・27は須恵器坏蓋、28は須恵器鉢である。I型式5段階前後に相当する。29~31は小楕円形製塙土器、32は甌形製塙土器、22~24・33~37はコップ形製塙土器、35・36は外面タタキ痕が残る。

#### 土坑C3471（第41図）

A18g8区で検出した幅3.5m、長さ7m、検出深さ0.1m~0.15mの不整形な長方形を呈する土坑である。掘立柱建物C18の柱穴列に中央を切られ、東端は土坑C3472に切られている。検出レベルはT.P.1.6m前後である。

## 土坑C 3 4 7 1 出土遺物（第192図14・16～20）

第192図14は土師質筒状土製品である。16は須恵器坏蓋、17は須恵器坏身、18は土師器高坏、20は土師器甕である。坏蓋はI型式5段階、坏身はI型式3段階に相当する。19は韓式系土器（硬質）で焼成は還元炎焼成であるが、色調は赤灰色を呈する甕である。

## 土坑C 3 2 9 4（第42図）

A18h8、A18h9、A18i8、A18i9区で検出した3.5m×4.5mの平面形は方形の土坑である。検出レベルはT.P.1.35m前後、検出深さは0.2mである。掘立柱建物C 3 4の柱穴に切られている。土坑C 3 2 9 4 出土遺物（第192図21～23、第638図6、図版159）

第192図21・22は須恵器坏蓋、23は須恵器高坏である。23の高坏脚部はヘラ先で4箇所小さい穿孔が施されている。21・23はI型式2段階に相当する。第638図6は流紋岩製の砥石である。

## 居住域内区画溝 C 4 2 6 3 - C 4 2 6 4 - C 4 2 4 3 - C 4 2 4 7 - C 4 2 4 8 - C 3 5 4 0 - C 3 5 4 1 - C 3 4 7 3 - C 2 8 7 9 - C 2 6 2 6（第41・42図）

A18d8区からA18j6区まで検出した北西から南東方向の溝群で、北東居住域内を東西に区画している。検出面は第11面で、最大幅1.7m、おむね0.7m前後、検出深さ0.2m～0.3mを測る。溝群は2列から多いところでは4列ほど平行、もしくは切り合い関係をもっている。上記に記した遺構Naは遺物が出土した溝である。溝群北西端の様相は調査区外により不明であるが、溝群南東端が居住域の外周に到達する箇所では外周の区画溝が途切れおり、この箇所が居住域の南東の出入り口となっていたと思われる。調査区中央部に溝群をきって6世紀代の遺構掘立柱建物C 3を検出していること、また出土遺物からこれらの溝群は6世紀にはほとんど埋没していたと思われる。

## 居住域内区画溝出土遺物（第222図1～23、第223図1～11、第630図19）

北側の溝から順に、溝群から出土した遺物を記述する。第222図1～15は溝C 4 2 6 3、溝C 4 2 6 4から出土した遺物である。1・2は小楕円形製塙土器、5は土師器鉢、4は土師器長胴甕、6は土師器小型の甕である。15は韓式系土器甕で外面平行タタキの上からナデが施されている。須恵器はI型式4段階に相当するものを含む。溝C 4 2 4 3、4 2 6 4からは掛け口が2つの移動式カマド（第584図、図版169）も出土している。

第222図16は溝C 4 2 6 4の溝肩から出土した土師器甕である。体部下半は欠損しているが、残存している甕の中にコップ形の製塙土器が詰まった状態で出土した。甕内部から出土したコップ形製塙土器は外面にタタキがあるもの、ナデで仕上げられているものの両方があり、少なくとも7個体以上は存在する。

第222図17・18は溝C 4 2 4 3から出土した。17の坏蓋はII型式2段階に相当する。第222図19・21～23、第223図1～3は溝C 4 2 4 7、第222図20は溝C 4 2 4 8から出土した。

19・20は土師器鉢、23は土師器長胴甕である。21は須恵器高坏、脚部のスカシ孔は円形。22は韓式系土器鍋、外面平行タタキの上からナデ、オサエが施されている。第223図1は韓式系土器の鉢、外面部分的に平行タタキが残る。2は韓式系土器平底鉢、3は須恵器大型甕の口縁部である。

第223図4は溝C 3 5 4 1から出土した須恵器坏蓋、第223図5・6は溝C 3 5 4 0から出土した須恵器坏蓋、須恵器甕である。4はII型式3段階、5はII型式2段階に相当する。第223図7は溝C 3 4 7 3から出土した須恵器系土器高坏脚部である。

第223図8は溝C 2 6 2 6から出土した須恵器坏蓋、第223図10は溝C 2 8 7 9から出土した韓式系土器で、焼成は硬質、色調は紫灰色である。第223図9・11は溝南東端の落ち込み(C 2 4 2 6)から出土した須恵器甕である。C 2 4 2 6から滑石製双孔円板(第630図19)、滑石製白玉も出土している。

#### 溝C 2 5 5 0 (第42図)

A18h4、A18i5、A18i4区で検出した南東谷と居住域の境に位置する溝である。幅1.2m、検出長さ22m、検出深さ0.2m前後を測る。溝中央部溝底に直径0.5mのビットを9箇所検出している。これらのビットのうちビットC 2 5 9 5、C 2 5 9 8からは直径0.1mほどの杭が出土しており、溝内に杭を打ち柵を構築していたと推定できる。

第223図12～17は溝C 2 5 5 0からの出土遺物である。13は韓式系土器平底鉢、他はすべて須恵器である。蓋坏はI型式5段階に相当する。溝C 2 5 5 0からはこの他移動式カマド(資料No.6)、U字形板状土製品(資料No.31)、滑石製白玉5点も出土している。

#### 柵C 1、C 2 (第42図)

A18i7、A18i8、A18i9区で北東から南東方向に並ぶビット列を検出した。北東端は居住区内画溝に達しており、全長26mを測る。ビットの直径は0.3m～0.8m、間隔はほとんどない部分や2mほど空いている個所もある。i9区では土坑C 2 9 2 7の長辺と平行している。部分的に2列検出している箇所もあり、柵列であったと考えられる。土坑C 2 9 2 7の長辺がこのビット列の方向に沿っていることから、ビット列の時期は土坑C 2 9 2 7とほぼ同時期、I型式4段階以降と考えられるであろう。

#### 北東谷 (第40図、図版35)

調査区北東隅、A18d2、A18d3、A18d4区で幅4m、長さ20m、平面形は弧状の谷を検出した。検出レベルはT.P.1.6mで、最も深いところでT.P.0.7mを測る。検出面は第11面で古墳時代後期は埋没していた。埋土は暗灰色粘質シルト～暗褐色粘土である。谷の北側に一辺が約3mの落ち込みがあり、そこから舟形木製品が出土した(第686図1、図版307)。

北東谷部出土遺物(第200図1～40、第201図1～6、第686図1、図版172・307)

北東谷部からは須恵器、土師器、韓式系土器、製塙土器、U字形板状土製品（資料No.25・47・95～97）、木製品（第686図1、図版307）、有孔円盤、砥石、敲石、台石、鉱滓等大量の遺物が出土した。第200図1～40、第201図1～6はその一部である。第200図1～20は須恵器、I型式2段階からII型式3段階に相当する。21～24は須恵器系土器で、器種は高環（21・23・24）壺（22）がある。25～28は韓式系土器で、平底鉢（25・26）甕の口縁（27・28）がある。29～34は製塙土器、29・31（図版172）・32は小楕円形、33のコップ形は須恵質焼成である。35～39、第201図1～6は土師器である。

#### 土坑C 2 0 00（第40図、図版31）

A18e2区で検出した平面形が直径0.8mの円形の土坑である。内部は固く締った炭化物で覆われていた。炭化物の厚みは中心部分で5cmを測る。遺物は出土しなかった。

#### ピットC 2 1 3 1（第40図）

A18e3、A18e4区で検出した円形のピットである。長径0.8m、短径0.6m、検出深さ0.4mである。第201図8の韓式系土器平底鉢が出土した。

#### 土坑C 2 1 5 1（第40図）

A18e3、A18e4区で検出した小土坑である。幅0.9m、長さ2m、検出深さ5cmである。北西端をピットC 2 1 5 0に切られている。第201図7の須恵器鉢が出土した。

#### 土坑C 2 1 5 5（第40図）

A18e3区で検出した小土坑である。幅1.1m、長さ2.2m、検出深さ8cm前後である。溝状遺構C 2 3 3 1の北端を切っている。土坑内は纖維状の木質が堆積していた。第201図14の土師器脚部が出土した。

#### 土坑C 2 4 7 5（第40図）

A18f3、A18g3、A18f4、A18g4区で検出した土坑である。掘立柱建物C 5のピット列に切られている。幅2.2m、長さ3.2m、検出深さ0.1mの平面形は梢円で、北東端は溝状に伸びる。第201図12・13の土師器高環が出土した。

#### 土坑C 2 6 4 6（第40図）

A18g2区で検出した土坑である。東部は調査区外で、幅2.3m、検出長さ1.7m、検出深さ0.1mである。第201図17の韓式系土器平底鉢、18の土師器甕、19の土師器高環が出土した。

## 溝C 2 4 0 1（第40図）

A18h2、A18h3区で検出した。C調査区の東端で南東谷部の輪郭に沿って位置している。幅1.3～1.8m、検出長さ13m、検出深さ0.3mである。第201図23の土師器鉢、24の須恵器口縁部が出土した。

## 南東谷（第40図、図版35）

C調査区南東部、A18h2、A18h3、A18i2、A18i3、A18i4区で検出した。A18g4、A18g3、A18h3区に入り江状に入り込み、南東すみに向かいながら下っていく。入り江状になった部分は幅7～5m、長さ14mである。埋土は暗灰色粘土、下層は粗砂を含む。谷の検出面は第11面で、検出レベルはT.P.1.4m、C調査区内での最深レベルはT.P.0.45mで、古墳時代後期には大半が埋没していた。しかし古墳時代以降調査地一帯が耕作地になった後どの時期においても南東隅はC調査区で最もレベルが低くなる。

## 南東谷出土遺物（第201図25～33、第202図1～20、第604図1、第630図33）

南東谷部からは須恵器、土師器、韓式系土器、製塙土器、U字形板状土製品（資料No.23・29・31・33・48・62～65・67・118）、移動式カマド（604-1）、滑石製双孔円盤（第630図33）、臼玉2点、台石等大量の遺物が出土した。第201図25～33、第202図1～20はその一部である。第201図25～27は土師器高壺、28～30・32～33は土師器鉢である。土師器鉢は底部が丸底で口縁部が内湾するもの、底部が平底で口縁部が内湾しつつ上方方に伸びるものがある。31は楕円形の製塙土器である。第202図1～14は須恵器、蓋壺はI型式2～5段階に比定されるものを含む。18・19は土師器甕、15～17・20は韓式系土器である。15は色調が灰白色、還元炎焼成硬質の繩文タタキの甕、16・17・20は酸化炎焼成軟質である。16は外面平行タタキの甕、17（図版168）は外面平行タタキの羽釜である。20は外面平行タタキ、内面同心円當て具痕が残る甕である。第615・616図（資料No.23）、第613・614図（資料No.31）はU字形板状土製品。

## 土坑C 2 5 9 1（第40図）

A18h4区で検出した小土坑である。幅0.6m、検出長1.3m、検出深さ0.15mを測る。掘立柱建物C 2 2北のピット列に東西端を切られている。第203図1の韓式系土器平底鉢が出土した。平底鉢の外面はヘラケズリで仕上げられている。

## ピットC 2 5 0 3（第40図）

A18h4区で検出したピットである。長径1.0m、短径0.5m、検出深さ0.15mの楕円形のピットで、掘立柱建物C 2 1のピットC 2 5 4 3を切っている。第203図2の須恵器壊身が出土した。

## 土坑C 2 2 1 0（第40図、図版30）

A18e4 区で検出した、幅 2.5m ~ 4.5m、長さ 5.4m、検出深さ 0.15m の平面形が台形の大型土坑である。埋土は暗灰色粘土で土坑のほぼ一面に繊維状の木質が堆積していた。第 203 図 21・22 の須恵器坏身、23 の土師器甕が出土した。須恵器の年代は II 型式 3 段階に比定できる。

#### 土坑 C 2 2 1 3 (第 40 図)

A18e4 区で検出した。土坑 C 2 2 1 0 の南側に位置する。幅 1.5m、長さ 2.2m、検出深さ 0.15m を測る。第 203 図 24 の須恵器坏蓋、25 の土師器大型の蓋が出土した。須恵器の年代は II 型式 3 段階に比定できる。

#### ピット C 2 3 2 5 (第 40 図)

A18e4 区で検出した長径 1.1m、短径 0.8m、検出深さ 0.3m の椭円形のピットである。第 203 図 26・27 の土師器甕が出土した。

#### 土坑 C 1 7 2 3 (第 40 図)

A18e5、A18d5 区で検出した。幅 4.5m、最大長さ 8m、検出深さ 0.1m 前後の不整形の土坑である。北東に向かって緩やかに傾斜している。第 204 図 4 の韓式系土器平底鉢、5 の土師器高环、6 の須恵器坏身が出土した。7 ~ 9 は土坑内のピットからの出土で、7・8 は須恵器高环の脚部、9 は小椀形の製塙土器である。8・9 はピット C 1 8 2 2、7 はピット C 1 8 1 7 より出土した。

#### ピット C 1 7 8 8 (第 40 図)

A18e5 区で検出した直径 0.5m、検出深さ 0.3m の円形のピットである。第 204 図 13 の小椀形の製塙土器が出土した。

#### 土坑 C 1 7 9 2 (第 40 図)

A18e5、A18e4 区で検出した幅 1.5m、検出長さ 3m、検出深さ 0.1m の不整形の土坑である。第 204 図 18 の須恵器坏蓋が出土した。

#### ピット C 1 7 6 1 (第 40 図)

A18e5 区で検出した直径 0.8m、検出深さ 0.5m のピットである。第 204 図 19・20 の須恵器坏身を検出した。2 点とも II 型式 3 段階に相当する。

#### ピット C 2 7 8 2 (第 40 図)

A18e5 区で検出した長径 0.8m、短径 0.6m、検出深さ 0.5m の椭円形のピットである。第 204 図 14 の須恵器坏蓋が出土した。II 型式 4 段階に相当する。

#### 土坑C 1 6 9 4 (第40図)

A18e5区で検出した長辺3.8m、短辺3.5m、検出深さ0.15mの方形の土坑である。第204図11の須恵器高壺蓋、第204図12の韓式系土器平底鉢が出土した。土坑内南東隅のピットC 1 7 3・4から第204図15の須恵器壺蓋、16の土師器壺、ピットC 1 8 0 1から17の須恵器高壺、ピットC 1 8 1 1から第204図21の土師器壺口縁部が出土した。

#### 溝状土坑C 1 9 2 2 (第104図)

A18e5、A18f5区で検出した。掘立柱建物C 2 5の南辺の柱列を切り込んでいる。最深部では掘立柱建物C 2 5の西辺の柱穴が2箇所認められ、そのうちの1箇所からは礎板を検出した。南側上層は長さ2m、幅1m、検出深さ0.5mの楕円形の土坑が掘り込まれており、掘立柱建物C 2 5のピットC 2 7 7 9を切っている。ここから第205図5~12の遺物が出土した。5~7は須恵器壺蓋、8・9は須恵器壺身でII型式2・3段階に相当するものである。11は土師器壺、10・12は土師器長胴壺である。他に砥石1点が出土している。

#### 土坑C 2 0 7 0 (第40図)

A18f4、A18f5区で検出した幅1m、長さ2m、深さ5cmの不整形の土坑である。第205図1の須恵器壺蓋が出土した。II型式3段階に相当する。

#### 落ち込みC 2 6 8 1 (第40図)

A18e5、A18f5区で検出した深さ5cm前後の浅い落ち込みである。掘立柱建物C 4に切られている。第205図2の須恵器壺身が出土した。II型式3段階に相当する。

#### ピットC 2 2 2 7 (第40図)

A18e5区で検出した直径0.9m前後、検出深さ0.4mのピットである。第205図4の須恵器高壺脚部が出土した。

#### ピットC 2 0 7 2 (第40図)

A18e5区で検出した直径0.5m前後、検出深さ0.3mのピットである。第205図3の須恵器壺身が出土した。

#### ピットC 2 7 2 0 (第40図)

A18g5区で検出した長辺が0.9mの隅丸方形のピットである。第205図20の須恵器壺身、21の須恵器壺が出土した。I型式5段階に相当する。

**ピットC 2691（第40図）**

A18g5区で検出した長辺が0.7m、短辺が0.5m、深さ0.3mの楕円形のピットである。第205図18の須恵器坏身が出土した。

**ピットC 2771（第40図）**

A18g5区で検出した長辺が0.9m、短辺が0.6mの楕円形のピットである。第205図15の須恵器坏蓋が出土した。II型式4段階に相当する。

**溝C 2490（第40図）**

A18g5区で検出した幅0.6m、検出長さ6m、検出深さ0.1mの平面形が弧状の溝である。第205図16の須恵器坏身が出土した。II型式3段階に相当する。

**小溝C 2775、C 2764（第40図）**

A18g5区で検出した幅0.2m～0.3m、深さ8cm前後の小溝である。第205図19のI型式4段階に相当する須恵器坏身、17の須恵器鉢が出土した。

**落ち込みC 2701（第40図）**

A18g5、A18h5区で検出した幅2.3m、長さ5m、深さ5cm前後の浅い落ち込みである。須恵器、土師器、移動式カマド（資料No.8・20）、韓式系土器、U字形板状土製品（資料No.29・49）、台石等大量の遺物が出土した。第205図25～28、第206図12・17はその一部である。第205図25は須恵器坏蓋でI型式4段階に相当する。26は土師器高环、27は土師器鉢、28は韓式系土器羽釜である。第206図12は須恵器系土器壺、17は土師器把手付鍋である。第593図2は移動式カマドである。

**落ち込みC 2279（第40図）**

A18g5区で検出した幅1m、長さ5m、深さ5cm前後の浅い落ち込みである。西端は掘立柱建物C7周囲溝C 2422に切られている。須恵器、土師器、滑石製白玉1点出土した。

第206図1～10の須恵器、13～16の土師器はその一部である。1～5の須恵器蓋坏はI型式3段階に相当する。

**落ち込みC 2702（第40図）**

A18g5、A18h5区で検出した幅1m、長さ4m、検出深さ5cm前後の浅い落ち込みである。須恵器、土師器、U字形板状土製品（資料No.29・31・39）が出土した。第206図11の須恵器甌は内部

に外面から穿孔した時の粘土が落ち込んで張り付いている。

#### 落ち込み C 2740 (第40図)

A18g5 区で検出した幅 1 ~ 2m、検出長さ 5m、深さ 5cm 前後の浅い落ち込みである。第 206 図 18 の須恵器環蓋、19・20 の須恵器高环、21 の土師器甕が出土した。

#### ピット C 2353 (第40図)

A18h5 区で検出した 0.5m 四方の方形のピットである。第 206 図 22 ~ 24 の須恵器が出土した。

#### 溝 C 2729 (第41図)

A18h5、A18h6 区で検出した幅 0.6m、検出長 3.7m、深さ 0.1m の溝である。東端は井戸 C 2756 に切られている。溝中央部でピット C 2753 に切られている。第 206 図 25 ~ 30 の遺物が出土した。25 ~ 27 は須恵器蓋環で I 型式 3 段階に相当する。

#### ピット C 2753 (第41図)

A18h5、A18h6 区で検出した長辺 0.8m、短辺 0.5m、検出深さ 0.45m の梢円形のピットである。溝 C 2729 を切っている。第 206 図 31 の須恵器系土器高环が出土した。

#### ピット C 2546 (第42図)

A18i5 区で検出した直径 0.7m、検出深さ 0.2m のピットである。礎板が出土している。第 207 図 1・2 の須恵器蓋環、3 の土師器甕が出土した。須恵器は I 型式 3・4 段階に相当する。

#### 土坑 C 2423 (第42図)

A18i ~ h6 区で検出した幅 4.3m、長さ 7m、検出深さ 0.1m ~ 0.3m のほぼ方形の大型土坑である。第 207 図 4・6 の土師器、5 のコップ形の製塙土器の他に U 字形板状土製品（資料 No.23）が出土している。

#### 土坑 C 2412 (第42図)

A18h6 区で検出した幅 2m、長さ 2.5m、検出深さ 0.2m の平面形が菱形の土坑である。埋土は炭化物や焼土を含んでいた。第 207 図 12 の須恵器甕、13 の甕形の製塙土器が出土した。

#### 土坑 C 2700 (第41図)

A18f6 区で検出した長径 1.4m、短径 0.6m、検出深さ 0.3m のピットである。第 208 図 3 ~ 5 の土師器が出土した。3 は口径と器高がほぼ等しい鍋で、把手はつかない。4 と 5 は口径が器高を凌

驚する瓶である。2点とも外面はハケ調整、舌状の把手をもち、蒸気孔は4が4孔、5は3孔である。

#### 土坑C 3 1 9 2 (第41図)

A18f7区で検出した長径1.5m、短径0.5cm、検出深さ0.2m前後の小土坑である。第208図6の口径が35cmを超える土師器大型の鉢が出土した。この鉢は外面ハケで仕上げられ、一对の舌状の把手と体部3／4位に注口をもつ(図版167)。

#### 溝C 1 7 0 6 (第41図)

A18d6区で検出した幅0.5m、長さ6.5m、検出深さ0.1m～0.15mを測る溝である。総柱建物C 2 9の柱列の間に位置する。第209図1～3の須恵器が出土した。II型式3段階以降の須恵器を含み、掘立柱建物C 2 9とほぼ同時期の遺構と考えられる。

#### A18d6区ピット出土遺物(第209図4～8・11～15)

d6区は製塙土器の破片が集中して出土した区である。盛り上がった破片を取り除いた後に、小ピットを多数検出した。第209図4・5はコップ形製塙土器でピットC 2 7 9 7出土である。6・7は土師器鉢、8は土師器壺でピットC 2 8 2 3からの出土である。11は須恵器壺の口縁部、12は須恵器环身、13は土師器鉢でピットC 2 8 1 5からの出土である。14・15は須恵器壺でピットC 2 8 4 6からの出土である。

#### 溝C 3 5 4 7 (第41図)

A18d7、A18e7区で検出した幅3m、検出深さ0.1m～0.2m、平面形は直角に曲がる溝である。第209図20の須恵器壺、22～24の須恵器环蓋、21の土師器瓶が出土している。須恵器はII型式2段階に相当する。

#### 溝C 3 5 8 2 (第41図)

A18d8、A18d7区で検出した幅2m前後、検出長さ8m、検出深さ0.1m～0.2mの溝である。第209図26～35、第210図1～4の遺物が出土した。

29・30はコップ形製塙土器、37は韓式系土器甕か壺の口縁部、26～28・31～36はすべて須恵器である。須恵器环蓋はI型式4段階～II型式2段階に相当するものを含んでいる。第210図1は土師器鉢、2は土師器深鉢、3・4は土師器甕である。

#### ピットC 4 2 6 0 (第41図)

A18d7区で検出した直径0.8m、検出深さ0.35mのピットである。第209図16・17の須恵器环蓋が出土した。II型式3段階に相当する。

#### ピットC 4 2 5 3 (第41図)

A18d7区で検出した直径0.6m、検出深さ0.35mのピットである。第209図18・19の須恵器蓋坏が出土した。I型式5段階に相当する。

#### ピットC 3 5 7 7 (第41図)

A18d7区で検出した直径0.8m、検出深さ0.5mのピットである。第209図25の須恵器坏身が出土した。I型式5段階に相当する。

#### 土坑C 3 5 8 3 (第41図)

A18d7、A18d8、A18e7、A18e8区で検出した幅2.5m、検出長さ4.5m、深さ0.1m前後の落ち込み状の土坑である。第210図5～15の遺物が出土した。6は製塩土器、7は土師器鉢、12・13は土師器甕、9・14は韓式系土器壺か甕の口縁部、15は土師質円筒形土製品、他は須恵器である。須恵器蓋坏はI型式4段階に相当するものとII型式4段階に相当するものを含む。

#### 土坑C 4 2 1 8 (第41図)

A18e7区で検出した長径1.8m、短径1.5m、検出深さ6cm前後の楕円形の土坑である。北西部は土坑C 3 5 8 3に切られている。第210図22の土師器甕が出土した。

#### 土坑C 4 1 9 5 (第41図)

A18e7、A18e8区で検出した直径1.8m、検出深さ0.2mの円形の土坑である。掘立柱建物C 2 8の下層遺構である。土坑内にピットC 4 5 7 3があり、礎板を検出している。東側は土坑C 4 1 9 6につながる。第210図25の須恵器高坏、26の須恵器坏身が出土した。

#### 土坑C 4 1 9 3 (第41図)

A18e7区で検出した長径2.2m、短径1.8m、検出深さ0.1mの楕円形の土坑である。掘立柱建物C 2 8の下層遺構である。第210図18の須恵器器台、19・20の須恵器坏蓋、21の高坏脚部が出土した。蓋坏はI型式2段階に比定できる。また土坑内ピットC 4 4 8 0からも同時期の高坏脚部(第210図23)が出土している。

#### 土坑C 3 1 0 7 (第41図)

A18e7区で検出した長径1.5m、短径0.9m、検出深さ0.15mの楕円形の土坑である。第210図27の土師器甕、28の土師器高坏が出土した。

**ピットC 3 1 1 6 (第41図)**

A18e7区で検出した直径 0.6m、検出深さ 0.3m のピットである。第 210 図 29 の小楕円形製塙土器が出土した。

**ピットC 3 1 8 2 (第41図)**

A18f7区で検出した直径 0.3m 前後、検出深さ 0.1m のピットである。第 210 図 36 の須恵器坏身が出土した。

**ピットC 4 6 1 3 (第41図)**

A18f7区で検出した直径 0.5m 前後、検出深さ 0.45m のピットである。第 211 図 1 の須恵器坏蓋が出土した。II型式 3段階に相当する。

**ピットC 4 5 8 7 (第41図)**

A18f7区で検出した長径 0.7m、短径 0.5m、検出深さ 0.45m の楕円形のピットである。第 211 図 3 の須恵器すり鉢、6の縦体部が出土した。

**ピットC 2 8 8 7 (第41図)**

A18h7区で検出した直径 0.3m、検出深さ 0.14m のピットである。第 211 図 18 の須恵器高坏蓋が出土した。

**土坑C 3 0 2 4 (第41図)**

A18h7区で検出した上坑 C 4 7 2 0、C 4 7 2 1 等に切られており、本来の形状は不明である。第 211 図 19 ~ 29、砥石が出土した。須恵器蓋坏は II型式 3段階前後に相当する時期のものを含んでいる。

**落ち込みC 2 8 9 5 (第42図)**

A18i7区南半部は全体に浅い窪地状になっており、須恵器、土師器、U字形板状土製品（資料 No.35・40・41・54~56）等遺物が出土した。検出深さは 0.05m ~ 0.1m である。第 213 図 1 ~ 6 はその一部である。須恵器蓋坏は I型式 3段階前後と II型式 3段階に相当するものを含む。4 は韓式系土器瓶、外面平行タタキが残る。

**落ち込みC 2 8 6 0 (第42図)**

A18j7区で検出した長径 1.7m、短径 1.2m、検出深さ 0.15m の楕円形の浅い落ち込みである。第 213 図 7 の須恵器坏身が出土した。

**ピットC 3 2 8 9 (第42図)**

A18i8 区で検出した直径 0.4m、検出深さ 0.35m の円形のピットである。第 213 図 14 の土師器ミニチュア鉢が出土した。

**ピットC 3 3 4 8 (第42図)**

A18i8 区で検出した直径 0.5m、検出深さ 0.12m の円形のピットである。第 213 図 15 の土師器中型甕が出土した。

**ピットC 3 3 5 1 (第42図)**

A18i8、A18j8 区で検出した直径 0.6m 前後、検出深さ 0.35m の円形のピットである。第 213 図 17 の土師器鉢、16 の須恵器坏蓋が出土した。I 型式 5 段階に相当する。

**ピットC 2 9 8 8 (第41図)**

A18h8 区で検出した直径 0.7m、検出深さ 0.4m の円形のピットである。第 214 図 1 の須恵器坏蓋が出土した。I 型式 3 段階に相当する。

**土坑C 3 4 7 2、ピットC 4 4 8 5 (第41図)**

A18g8 区で検出した幅 3m、長さ 5.5m、検出深さ 0.1m 前後の方形の土坑である。第 214 図 23 の土師器鉢、24 の須恵器高坏蓋が出土した。土坑内ピット C 4 4 8 5 からは第 214 図 15 の須恵器系土器高坏脚部が出土している。

**土坑C 3 8 2 8 (第41図)**

A18f8、A18g8 区で検出した幅 2m、検出長さ 7m、深さ 0.15m 前後の溝状土坑である。東端は溝 C 3 9 2 3 に切られている。中央部分は掘立柱建物 C 2 の柱穴に切られている。第 214 図 16 ~ 22 の遺物が出土した。16 ~ 19 は須恵器で I 型式 4 段階に相当する。19 の高坏脚部は円形の透かしが穿たれている。20 は土師器鉢、21 ~ 22 は土師器甕である。

**ピットC 3 9 2 5 (第41図)**

A18g8 区で検出した直径 0.6m 前後、深さ 0.3m の円形のピットである。第 214 図 14 の須恵器坏身が出土した。

**土坑C 4 2 2 3 (第41図)**

A18e8、A18e7 区で検出した長径 1.5m、短径 1m、検出深さ 0.2m の椭円形の土坑である。第

215図23の須恵器坏蓋が出土した。I型式4段階に相当する。

#### ピットC4233（第41図）

A18e8区で検出した直径0.4m、深さ0.25mの円形のピットである。第215図24の須恵器坏蓋が出土した。

#### ピットC4234（第41図）

A18e8区で検出した直径0.3m、深さ12cmの円形のピットである。第215図22の須恵器高坏脚部が出土した。

#### ピットC3899（第41図）

A18f8区で検出した直径0.5m、深さ0.4mの円形のピットである。第215図5の土師器壺口頸部が出土した。

#### ピットC4271（第41図）

A18f8区で検出した直径0.6m、深さ0.3mの円形のピットである。第215図6の土師器鉢が出土した。

#### ピットC4680（第41図）

A18f9区土坑C3837内で検出した直径0.8m、深さ0.5mの円形のピットである。第217図9のコップ形製塙土器、10の土師器坏、13・20の須恵器坏蓋が出土した。須恵器はI型式3段階に相当する。

#### ピットC3842（第41図）

A18f9区で検出した直径0.4m、深さ0.3mの円形のピットである。第217図11の須恵器坏蓋が出土した。

#### 土坑C3870（第41図）

A18f9区で検出した1.5m四方、検出深さ0.1m前後の方形の土坑である。第217図17の須恵器坏身が出土した。

#### ピットC4650（第41図）

A18f9区で検出した直径1m、検出深さ0.8mの円形のピットである。掘立柱建物C2の柱穴C1636に切られている。第217図12の須恵器坏蓋が出土した。

## 溝C 3 8 2 1・3 8 2 9（第41図）

A18g9区で検出した幅0.6m～1.2m、長さ6.3m、検出深さ0.3m～0.4mの溝である。北半部をC 3 8 2 9、南半部をC 3 8 2 1として遺物を取り上げた。掘立柱建物C 2の西辺に並行している。第177図22・25～28はC 3 8 2 9からの出土遺物である。22は土師器中型の甕、28は土師器鉢、25は須恵器提瓶の口縁部である。第218図1～8はC 3 8 2 1から出土遺物である。1・2は土師器甕、6・7は須恵器系土器高坏、8は土師器高坏脚部、3～5は須恵器である。出土した須恵器はII型式3段階以降である。

## 溝C 3 9 2 3（第41図）

A18f8、A18g8区で検出した幅1.2m、検出長さ7m、検出深さ0.1m～0.2mの溝である。北半は土坑C 3 8 2 8を切っている。第177図23・24の須恵器が出土した。23の須恵器坏身はII型式3段階に相当する。

## 溝状土坑C 3 8 2 7（第41図）

A18g8区で検出した幅0.7m、長さ4.8m、検出深さ0.15m～0.2mの溝状遺構で、掘立柱建物C 2内に位置する。第177図29（図版172）の製塙土器、30の須恵器坏身が出土した。

## 溝状土坑C 3 4 1 6（第41図）

A18h9、A18g9区で検出した幅0.9m、長さ3.5m、検出深さ0.2mの溝状土坑である。第218図22～25、第219図1～3の遺物が出土した。22は須恵質円筒形土製品で外面に平行タタキが残る。同様の個体がg9区包含層からも出土している（第218図21、図版168）。23は土師器甕、24は轆の羽口（第646図1、図版258a）、25は須恵器坏身、II型式3段階に相当する。第219図1は土師器長胴甕、2は土師器甕、3は把手付鉢である。

## 土坑C 3 3 9 3（第42図）

A18h9区で検出した幅70cm、平面形は直角に曲がる全長3.5m、検出深さ5cm前後の溝状土坑である。第218図26の須恵器坏身が出土した。II型式2段階に相当する。

## 溝状土坑C 3 4 0 8（第41図）

A18h9、A18g9区で検出した幅1m、長さ5.5m、検出深さ0.2m～0.3mの溝状土坑である。第219図6の土師器甕、第219図7の土師器高坏、第219図9の韓式系土器平底鉢が出土した。9の平底鉢は外面に格子タタキが残る。

**ピットC 3 3 2 5（第42図）**

A18h9区で検出した直径30cm、深さ0.25mのピットである。第219図4の土師器壺が出土した。

**溝状土坑C 3 3 9 8（第42図）**

A18h9、A18h10、A18i9、A18i10区で検出した幅1.2m、検出長4.3m、深さ0.15m前後の溝状土坑である。東はしは土坑C 3 3 9 2に切られている。第219図5の韓式系土器平底鉢が出土した。5は外面に格子タタキが残る平底鉢である。

**土坑C 3 3 9 2（第42図）**

A18h9区で検出した長径1.3m、短径1.1m、検出深さ0.1mの楕円形の土坑である。第219図8の土師器高壺が出土した。

**落ち込みC 3 2 8 1（第42図）**

A18j9、A18j8、A18i9、A18i8区で検出した幅2.6m、検出長5.5m、検出深さ0.1m前後の不整形の落ち込みである。第219図10の土師器鉢、13の土師器壺、11・12須恵器蓋壺が出土した。

**土坑C 3 2 8 3（第42図）**

A18i9、A18i8区で検出した直径80cm、検出深さ0.4mの円形の土坑である。第219図18（図版168）の韓式系土器羽釜が出土した。

**溝状土坑C 3 3 7 2（第42図）**

A18i9区で検出した幅0.8m、検出長5m、検出深さ0.1mの溝状土坑である。第219図17の須恵器壺口縁部が出土した。

**落ち込みC 3 8 3 3（第42図）**

A18i9区で検出した幅2.2m、長さ2.5m、検出深さ0.2m前後の浅い落ち込みである。第219図19の韓式系土器壺、20～22の須恵器蓋壺、23の須恵器鉢、24の土師器壺が出土した。19は外面平行タタキが残り、24の壺は外面に施された格子タタキを上からナデやオサエで消している。

**土坑C 3 6 9 2（第42図）**

A19i1区で検出した長径0.9m、短径0.5m、検出深さ0.6m前後の楕円形の土坑である。第220図18の韓式系土器口縁部、19の土師器壺、20の土師器高壺、21（図版172）の變形製塙土器が出土した。

ピットC 4 5 5 1 (第42図)

A18h10区で検出した直径 0.5m、検出深さ 0.65m の円形のピットである。第220図 26・27 の土師器高壺が出土した。2点は器形、調整ともに同一である。

ピットC 3 7 8 2 (第41図)

A19g1区で検出した直径 0.3m、検出深さ 0.15m の円形のピットである。第221図 16 の須恵器坏身が出土した。

落ち込みC 4 5 5 5 (第42図)

A18h10区で検出した幅 2m、検出長さ 5m、深さ 0.15m ~ 0.2m の落ち込みである。第221図 5・6 の土師器が出土した。

A18e2、A18e3、A18f3 区包含層出土遺物 (第201図 9 ~ 11・15・16)

第201図 9 は韓式系土器甕口縁部、10 は土師器鉢、11 は須恵器高壺、I型式 4段階に相当する。15 は製塙土器、16 (図版 167) は須恵器系土器高壺で土師器高壺を模したような形状を呈し、脚部には凹孔すかしが穿たれている。

A18g4、A18f4、A18e4 区包含層出土遺物 (第203図 9 ~ 20・28 ~ 30)

第203図 9 ~ 11 は小楕円形の製塙土器、13 は須恵器高壺、14 は須恵器系土器高壺、15・16 は土師器甕、18 は土師器口縁部、口縁部は外方にほぼ水平に屈曲する、体部は比較的器壁は厚い。19、20 は土師器鉢である。12 は須恵器坏身、17 は須恵器甕で共に I型式 2段階以前のものである。28 は須恵器台、29 は須恵器坏身、30 は須恵器高壺で、I型式 4段階前後に相当する。

A18d4、A18d5、A18e5 区包含層出土遺物 (第204図 1 ~ 3・22 ~ 27)

第204図 1 は須恵器甕、2 は土師器高壺、3 は台付鉢である。22・25・27 は韓式系土器、22 は外面平行タタキのあとヨコナデ、27 は外面斜格子タタキの甕である。25 は外面繩縞文タタキの平底鉢である。23・24 は小楕円形製塙土器、26 は土師器小型甕である。

A18f5、A18g5 区包含層出土遺物 (第205図 13・14・22 ~ 24・29)

13 は須恵器高壺、14 は須恵器短頸甕、22 は II型式 2段階に相当する須恵器坏蓋、23 は須恵器坏身が出土した。II型式 3段階に相当する。

g5 区からはウマの基節骨が出土している。

A18i6、A18h6、A18g6、A18d6、A18e6、A18f6 区包含層出土遺物 (第207図 7 ~ 11、14 ~

## 27、第 637 図 5)

i6 区から出土した須恵器は 8 ~ 12 で、I 型式 4・5 段階に相当する。h6 区から出土した須恵器壺蓋 (15)、d ~ e6 区から出土した須恵器壺身 (25) のように I 型式 2 段階以前までさかのぼるものも出土している。14・19 は土師器鉢、特に 19 は口径 20cm を測る丸底の大型の鉢である。i6、e6 区からは韓式系土器羽釜も出土している。e6 区から出土した 27 の羽釜は鉢から下はタタキをナデ消している。g6・de6 区からは小椀形製塩土器 (22・24)、h6 区からは壺形の製塩土器 (18) が出土している。f6 区からは第 637 図 5 (図版 250) の流紋岩製の大型砥石が出土した。全長 21.75cm を測る。

d 6 区からはウマの右中足骨 (図版 268b-1) が出土している。

## A18f6 区包含層出土遺物 (第 208 図 1・2)

1 は土坑 C 3 4 8 6 上部から出土した土師器長胴甌である。2 は韓式系土器甌で外面平行タタキをナデ消している。

## A18d7、A18e7 区包含層出土遺物 (第 210 図 16・17・24・30 ~ 35)

第 210 図 17 (図版 167) は d7 区から出土した土師器つまみ付き蓋である。外面ハケ調整で仕上げられている。24 は e7 区から出土した須恵器系土器高壺である。16・30 ~ 34 は e7 区から出土した遺物である。16 は須恵器把手付鉢、30・35 は須恵器高壺、30 は脚部に円形透かしが穿たれている、31 は土師甌、32 は韓式系土器甌か壺の口縁部、外面は平行タタキが残る。33・34 は土師質の円筒形土製品である。

d7 区からは表面を研磨した鹿角が出土している。

## A18f7、A18g7 区包含層、落ち込み C 4 1 6 7 出土遺物 (第 211 図 2・4・5・7 ~ 17、第 607 図)

7 は土師器鉢、10 は土師器高壺、15 は土師器移動式カマド、16 は土師器深鉢、14 は製塩土器、17 は須恵器系土器高壺である。須恵器蓋壺は II 型式 3 段階に比定できる。2・4・5・8、第 607 図 3 は落ち込み C 4 1 6 7 から出土した。2・5 は須恵器壺蓋、4 は須恵器甌、8 は土師器甌、第 607 図 3 は U 字形板状土製品 (図版 241・242) である。

## A18i7、A18i8 区包含層出土遺物 (第 212 図 1、第 213 図 8 ~ 13・18 ~ 30、第 638 図 9)

第 212 図 1 は i7 区で出土した破片を中心に、溝 C 2 5 5 0、C 2 4 2 2 等の遺構から出土した破片を合わせて復元した土師器複合口縁壺である。接合した破片はおよそ 40m 四方から集めている。口径 19cm、器高 40cm を測り、外面全体が粗いハケ調整で仕上げられている。肩部にヘラにより線刻が刻まれている。

第 213 図 8・9 は韓式系土器平底鉢、27 は韓式系土器の口縁部である。13 は i7・i8 区で出土

した破片を中心に土坑C 3 8 3 7や掘立柱建物C 2等から出土した破片も合わせて復元した韓式系土器（硬質）である。接合した破片はおよそ40m四方から集めている。外面は肩部まで繩縄文タタキがのこり、そのうえに間隔の粗い沈線が巡る。焼成は還元炎焼成であるが、色調は紫灰色である。10～12・18～30は須恵器で、蓋坏はI型式2段階～II型式3段階に相当するものまで含んでいる。21は樽型甕、30は横瓶の口縁部である。

i7区からは第638図9の砂岩製の砥石も出土している。またi7区からはウマの左距骨が出土している。

#### A18h8、A18g8区包含層出土遺物（第214図2～13・25～29）

h8区からはII型式2段階前後の須恵器が出土している。第214図9は須恵器器台、10は須恵器高環脚部である。5・6は須恵器系土器高環脚部、8は土師器甕、7は土師器高環脚部である。

g8区でもII型式2段階前後の須恵器が出土している。25は須恵器器台、27は須恵器短脚高環脚部、28は須恵器甕口縁部である。26は須恵器系土器高環脚部である。

#### A18g8、A18f8区包含層出土遺物（第215図1～4・8～18）

g8区からは1・2・4の土師器甕、3の大型高環が出土した。f8区周辺から出土の須恵器坏身はII型式3段階を中心とする。8は須恵器器台脚部、11は高環である。12・13（図版167）は須恵器系土器壺でともに外面底部は手持ちヘラケズリ、体部中央に回転の甘い波状文を施す。9は土師器壺、10は須恵器の円筒形土製品で外面平行タタキが施されている。14は韓式系土器平底鉢で外面平行タタキが残る。16～18は須恵器坏身、15は坏蓋で、7は土坑C 1 5 5 8から出土した。

#### A18e8区包含層出土遺物（第215図19～21・25～28、第216図1～18）

第215図19～21は須恵器系土器高環である。26・27は韓式系土器平底鉢、28は韓式系土器甕、外面格子タタキが残る。25は韓式系土器（硬質）甕で外面斜格子タタキが残る。第216図1は韓式系土器鍋で外面平行タタキがナデ消されている。2は土師器鉢、13は土師器高環脚部、14は土師器楕形の鉢、15は土師器壺、16はミニチュアの鉢、17・18は土師器甕である。e8区の須恵器はI型式4段階～II型式3段階に相当するものを含む。

#### A18d7、A18d8、A18d9区包含層出土遺物（第216図19～25、第217図2～4・6）

d8、d9区出土の須恵器はII型式に属するものが多く、19の短脚高環、20の提瓶、22～24の甕がある。25（図版167）は陶質土器で、平底で胴が張り、頸部がすぼまる。体部外面はカキ目調整が施されている。朝鮮半島栄山江流域に系譜をたどれるものである。第217図2～4・6は須恵器系土器で、2～4（図版167）は高環、6は壺である。

## A18e9、A18f9 区包含層出土遺物（第 217 図 1・5・7・15・16・18・19・21～29、第 637 図 3）

e9 区からは II 型式 3・4 段階の須恵器坏身が出土している。土師器は 5 の瓶、7 の鉢があり、1 の須恵器系土器高坏がある。

f9 区からは I 型式 3 段階の須恵器坏身、坏蓋が出土している。その他 22 の壺、28 の器台脚部、29 壺口縁部がある。土師器は 25～27 が高坏、23・24 は円筒形土製品である。f9 区からは第 637 図 3 の泥質砂岩製の砥石が出土している。

## A18g9 区包含層出土遺物（第 218 図 9～21）

g9 区から出土した須恵器は I 型式 3 段階～II 型式 3 段階までを含む。蓋坏の他に 17・18 の壺の蓋、19 の器台、12 の鉢などがある。13 は韓式系上器平底鉢、14 は土師器高坏、15 は土師器甕である。

## A18h9 区包含層出土遺物（第 219 図 14～16）

14、16 は須恵器系土器高坏である。15 は須恵器系土器坏蓋、I 型式 2 段階以前に相当する。

## A18i9、A18i10、A19i1、A18j10、A19h1 区包含層出土遺物（第 220 図 1～13・17・22～24、第 221 図 1～4、第 637 図 2）

C 調査区の南西隅にあたるこれらの区周辺では、II 型式の須恵器蓋坏と I 型式 2 段階以前の須恵器蓋（10）、樽型甕（12）が出土している。第 220 図 1・2・13 は土師器高坏、4・9 は土師器鉢、14 は上師器直口壺、15 は土師器複合口縁壺、16 は黒色研磨土器の体部片、22、23 は韓式系土器平底鉢、24 は韓式系土器甕、25（図版 172）は變形の製塙土器である。第 221 図 1 は土師器大型高坏、2・4 は土師器甕である。3 は須恵器鉢である。第 637 図 2 は砂岩製の砥石である。

## A18h10、A18g10、A19g1、A18f10、A19f1、A18d10 区包含層出土遺物（第 221 図 7～15、17～25、第 638 図 1）

C 調査区南東にあたるこれらの区では、I 型式 4 段階～II 型式 2 段階までの須恵器が出土した。7・8 は韓式系土器平底鉢、12 は韓式系土器口縁部、20 は韓式系土器甕である。20 の甕は外面平行タタキをナデ消している。15 は土師器椀形の鉢、19 は台付の小型壺である。17・18 は須恵器系土器、24・25（図版 168）は土師質円筒形土製品である。外面細かいタテハケ、内面は粘土の繊ぎ目が残る。A19g1 区では第 638 図 1（図版 249）の流紋岩製の砥石が出土している。なお第 221 図 7～11 は落ち込み C 3 7 7 2 から出土した。

## 土坑 B 1 3 0 3 5 7（第 160 図）

北東居住域に属する B 調査区の北西半部の、B18a7、B18b 7 の 2 区で検出した。平面形は不

整橢円形で、長軸 4.25m、短軸 3.2m、深さ 0.1m を測った。埋土は青灰色のブロックが混じる黒灰色シルトで、部分的に炭や焼土を含む。埋土内から須恵器、土師器、製塙土器などが出土した。出土した須恵器は II 型式 2 段階に相当するものである。

#### 土坑 B 1 3 1 0 9 7 (第 161 図)

北東居住域に属する B 調査区の北西半部の、B18a9 区で検出した。平面形は不整橢円形で、長軸 2.8m、短軸 1.2m、深さ 0.2m を測った。埋土に焼土、炭などが多く含まれ、これらを除去すると焼壁らしき痕跡が確認された。したがって土坑 B 1 3 1 0 9 7 はカマド状の遺構と思われる。埋土内から韓式系土器、土師器、砥石などが出土した。

#### カマド B 1 3 1 0 9 7 出土遺物 (第 225 図 30 ~ 34)

埋土内から韓式系土器、土師器、砥石、台石などが出土した。図示し得たのは 5 点で、韓式系土器蓋 (31)、土師器高环 (30・33)、土師器甕 (32)、土師器瓶 (34) などがある。

#### 土坑 B 1 3 1 0 0 1 (第 162 図)

北東居住域に属する B 調査区の北西半部の、B18a9 区で検出した。平面形はやや歪な隅丸方形で、長軸 2.51m、短軸 2.41m、深さ 0.25m を測った。掘立柱建物 B 5 の柱穴のひとつや、土坑 B 1 3 1 0 0 2 を切って掘られており、三者の内で最も後出の遺構といえる。埋土内から須恵器、土師器、製塙土器が出土した。出土した須恵器は I 型式 5 段階に相当するものである。

#### 土坑 B 1 3 1 0 0 1 出土遺物 (第 224 図 1 ~ 30、第 225 図 1 ~ 8)

埋土内から須恵器、土師器、韓式系土器、製塙土器などが出土した。図示し得たのは 38 点で、須恵器环蓋 (224-1 ~ 4)、須恵器环身 (224-5 ~ 9)、須恵器有蓋高环 (224-10・11)、須恵器無蓋高环 (224-13・14)、須恵器高环 (224-12・15 ~ 18)、須恵器甕 (224-19)、韓式系土器鍋 (224-22)、土師器甕 (224-20・23 ~ 26・28・30)、土師器瓶 (225-1)、製塙土器 (225-2 ~ 8) などがある。

#### 土坑 B 1 3 1 0 0 2 (第 163 図)

北東居住域に属する B 調査区の北西半部の、B18a9、B18a10 の 2 区に跨る地点の、土坑 B 1 3 1 0 0 1 の西側に接する位置で検出した。平面形は不整橢円形で、長軸の復元長 2.25m、短軸 2.05m、深さ 0.1m を測った。B 1 3 1 0 0 1 に切られており、それより前出である。また、掘立柱建物 B 5 の柱穴のひとつを切って掘られており、それより後出といえる。埋土内から須恵器、土師器が出土した。出土した須恵器は I 型式 5 段階に相当するものである。

#### 土坑 B 1 3 1 0 0 2 出土遺物 (第 225 図 9 ~ 11)

埋土内から須恵器、土師器が出土した。図示し得たのは 3 点で、須恵器环身 (9)、須恵器有蓋高环 (10)、須恵器無蓋高环 (11) などがある。

**土坑B130764（第164図）**

北東居住域に属するB調査区の中央部の、B18a7区で検出した。土坑B130417掘削後にその床面で確認された。平面形は歪な楕円形で、長軸1.5m、短軸0.9m、残存部分の深さ0.6mを測った。埋土内から須恵器、土師器、製塙土器、移動式カマド、曲柄又鋸、船材と思われる木製品などが出土した。出土した須恵器はI型式4段階に相当するものである。

**土坑B130764出土遺物（第226図1～3、5・6、9、第595図2、第685図4、図版307）**

埋土内から須恵器、土師器、製塙土器、移動式カマド（595-2）、木製品などが出土した。図示し得たのは8点で、須恵器环身（1・2）、須恵器有蓋高坏（3）、須恵器高坏（5）、土師器甕（6・9）、曲柄又鋸（685-4、図版307）などがある。

**土坑B131103（第165図）**

調査区の北西端部の、A18j9、A18j10の2区に跨る地点の、墳墓B131101の東側に隣接する位置で検出した。平面形は不整長方形で、長軸現存長2.75m、短軸1.52m、深さ0.53mを測った。墳墓B131101を切って掘られている。埋土内から須恵器、土師器が出土した。出土した須恵器はI型式4段階～5段階に相当するものである。また、動物遺存体も出土した。

**土坑B131103出土遺物（第225図12～29）**

埋土内から須恵器、土師器などが出土した。須恵器环蓋（12）、須恵器环身（17）、須恵器甕（23・25）などがある。13・15・18は周溝墓B131101、29はピットB131080、14・16・19・22・24・27は包含層のものと接合。動物遺存体はウマかウシと思われるものが出土している。

**土坑B130965（第166図）**

北東居住域に属するB調査区の北西半部の、B18a7区で、上半部をII型式3段階の土坑B130357に切られた状態で検出した。平面形は不整楕円形で、残存部で長軸1.9m、短軸0.85m、深さ0.2mを測った。埋土に焼土や炭が多く混じっており、壁土と思われる硬く焼け締った土もみられること、甕の破片が出土していることなどから、カマドと思われる。埋土内から須恵器、土師器、製塙土器などが出土した。出土した須恵器はI型式5段階に相当するものである。

**土坑B130965出土遺物（第227図1～10）**

埋土内から須恵器、土師器、製塙土器などが出土した。図示し得たのは10点で、須恵器环蓋（1）、須恵器环身（2）、須恵器高坏（3）、土師器甕（4～6）、土師器瓶（7～10）などがある。

**土坑B130765（第167図）**

北東居住域に属するB調査区の中央部のB18b8区で、土坑B130764の南西側に隣接する位置で検出した。土坑B130417掘削後にその床面で確認された。平面形は不整円形で、

長軸 0.8m、短軸 0.7m、残存部分の深さ 0.3m を測った。埋土内から須恵器、土師器、製塙土器、用途不明の木製品などが出土した。出土した須恵器は I 型式 4 段階に相当するものである。

#### 土坑 B 1 3 0 7 6 5 出土遺物（第 226 図 4・7・8）

埋土内から須恵器、土師器、製塙土器、木製品などが出土した。図示し得たのは 3 点で、須恵器有蓋高坏（4）、土師器甌（7）、製塙土器（8）などがある。

#### 土坑 B 1 3 0 0 2 5（第 42 図）

北東居住域に属する B 調査区の北端部の、A18j5、A18j6、B18a5 の 3 区で検出した。平面形は不定形で、北半部は C 調査区にある。長軸 5.7m、短軸 0.39m、深さ 0.39m を測った。出土した須恵器は I 型式 5 段階～II 型式 1 段階に相当するものである。

#### 土坑 B 1 3 0 0 2 5 出土遺物（第 228 図 1～14、第 615・616 図、第 630 図 18、第 638 図 7、図版 238a・239a）

埋土内から須恵器、土師器、U 字形板状土製品、石製品、鉱滓、磁石 3 点、蔽石などが出土した。図示したのは須恵器坏蓋（1・2）、坏身（3～5）、無蓋高坏（6）、高坏（7～9）、甌（10）、壺（11）、甌（12・13）、器台（14）、U 字形板状土製品（第 615・616 図）、滑石製有孔円板（630-18）、滑石製白玉 1 点、磁石 3 点（638-7）、蔽石である。動物遺存体はウマが出土している。

#### 土坑 B 1 3 0 9 6 1（第 42 図）

北東居住域に属する B 調査区の中央部の、B18a7 区で検出した。平面形は不整橢円形で、長軸 1.3m、短軸 0.8m、残存部分の深さ 0.16m を測った。埋土内から須恵器、土師器などが出土した。出土した須恵器は I 型式 5 段階に相当するものである。

#### 土坑 B 1 3 0 9 6 1 出土遺物（第 228 図 22・23）

埋土内から須恵器、土師器などが出土した。図示し得たのは 2 点で、須恵器高坏蓋（22）、土師器甌（23）などがある。

#### 溝 B 1 3 1 3 2 0（第 42 図）

北東居住域に属する B 調査区の北西部の、A18j8 区で検出した。幅 0.9m、深さ 0.1m 内外を測った。埋土内から須恵器、土師器などが出土した。出土した須恵器は I 型式 5 段階に相当するものである。

#### 溝 B 1 3 1 3 2 0 出土遺物（第 228 図 24）

埋土内から須恵器、土師器などが出土した。図示し得たのは 1 点で、須恵器坏身（24）である。出土した須恵器は II 型式 2 段階に相当するものである。

**土坑B131200（第42図）**

北東居住域に属するB調査区の北西半部の、A18j8区で検出した。平面形は不整橢円形で、古墳時代中期の遺構を切った状態で検出された。長軸3.8m、短軸1.2m、深さ0.1mを測った。埋土内から須恵器、土師器、斧状石製品などが出土した。出土した須恵器はII型式2段階に相当するものである。

**土坑B131200出土遺物（第228図25～33）**

埋土内から須恵器、韓式系土器、土師器、斧状石製品などが出土した。図示し得たのは9点で、須恵器坏身（25）、韓式系土器甕（26・27・30）、土師器鉢（28）、土師器甕（29・32・33）、土師器甌（31）などがある。

**土坑B131310（第42図）**

北東居住域に属するB調査区の中央部の、A18j7区で検出した。平面形は不整橢円形で、長軸1.7m、短軸1.0m、深さ0.44mを測った。埋土内から須恵器、土師器などが出土した。出土した須恵器はI型式5段階に相当するものである。

**土坑B131310出土遺物（第228図15～21）**

埋土内から須恵器、土師器などが出土した。図示し得たのは7点で、須恵器坏蓋（15・16）、須恵器坏身（18）、須恵器高坏（17）、土師器製塙土器（19・20）、土師器甕（21）などがある。

**土坑B131238（第42図）**

北東居住域に属するB調査区の北西部の、B18j8、B18j9、B18a8、B18a9の4区で検出した。平面形は不整円形で、長軸3.1m、短軸2.7m、深さ0.15mを測った。

**土坑B131238出土遺物（第228図34・35）**

埋土内から韓式系土器が出土した。図示可能は2点で、韓式系土器平底鉢（34・35）である。

**土坑B131082（第42図）**

北東居住域に属するB調査区の北西部の、A18j9区で検出した。平面形は不整橢円形で、長軸2.7m、短軸0.9m、残存部分の深さ0.2mを測った。埋土内から須恵器、土師器、U字形板状土製品などが出土した。出土した須恵器はI型式5段階に相当するものである。

**土坑B131082出土遺物（第229図1～3）**

埋土内から須恵器、土師器、U字形板状土製品などが出土した。図示し得たのは4点で、須恵器坏蓋（1）、須恵器坏身（2）、土師器製塙土器（3）、U字形板状土製品などがある。U字形板状土製品はB130193、B130200、C調査区の複数の遺構および包含層などから出土した破片と接合された。

#### 土坑B 1 3 1 0 8 3（第42図）

北東居住域に属するB調査区の北西半部の、A18j9区で検出した。平面形は不整橢円形で、長軸1.5m、短軸1.3m、深さ0.1mを測った。埋土は青灰色のブロックが混じる黒灰色シルトで、炭や焼土を含む。埋土内から須恵器、土師器、韓式系土器、滑石製有孔円板などが出土した。出土した須恵器はII型式2段階に相当するものである。

#### 土坑B 1 3 1 0 8 3出土遺物（第229図4～6、第630図17）

埋土内から須恵器、土師器、韓式系土器、石製品などが出土した。図示し得たのは3点で、土師器甕（4）、須恵器环蓋（5）、須恵器环身（6）、滑石製有孔円板（第630図17）などがある。

#### 土坑B 1 3 1 2 3 1（第42図）

北東居住域に属するB調査区の北西部の、A18j9、B18b7の2区に跨る地点で検出した。平面形は不整円形で、長軸3.0m、短軸2.6m、残存部分の深さ0.1mを測った。

#### 土坑B 1 3 1 2 3 1出土遺物（第229図7～9）

埋土内から土師器、韓式系土器などが出土した。図示し得たのは3点で、土師器甕（7）、土師器高环（8）、韓式系土器平底鉢（9）などがある。

#### 土坑B 1 3 1 2 6 8（第42図）

北東居住域に属するB調査区の北西部の、B18a9区で検出した。平面形は不整橢円形で、溝B 1 3 1 0 8 4に一部を切られている。長軸1.6m、短軸1.0m、残存部分の深さ0.1mを測った。埋土内から土師器が出土した。

#### 土坑B 1 3 1 2 6 8出土遺物（第229図10～13）

埋土内から土師器が出土した。図示し得たのは4点で、土師器甕（10・12・13）、土師器高环（11）、などがある。

#### 土坑B 1 3 1 0 9 3（第42図）

北東居住域に属するB調査区の北西部の、B18a9区で検出した。平面形は不定形で、長軸3.8m、短軸2.4m、残存部分の深さ0.2mを測った。

#### 土坑B 1 3 1 0 9 3出土遺物（第229図14～18）

埋土内から土師器、韓式系土器、須恵器などが出土した。図示し得たのは5点で、土師器製塙土器（14・15）、土師器环（16）、韓式系土器甕（17）、須恵器高环（18）などがある。出土した須恵器はI型式5段階に相当するものである。

#### 土坑B 1 3 1 1 0 6（第42図）

北東居住域に属するB調査区の北西部の、A18j9、A18j10の2区に跨る地点で検出した。平

面形は不整円形で、径 3.0m、深さ 0.2m を測った。出土した須恵器は I 型式 4 段階に相当するものである。

#### 土坑 B 131106 出土遺物（第 229 図 24～26）

埋土内から須恵器が出土した。図示し得たのは 3 点で、須恵器高環蓋（24）、須恵器有蓋高环（25）、須恵器环身（26）などがある。

#### 土坑 B 131180（第 42 図）

北東居住域に属する B 調査区の北西部の、A18j9、A18j10 の 2 区に跨る地点で検出した。平面形は不整橢円形で、長軸 1.4m、短軸 1.0m、残存部分の深さ 0.3m を測った。

#### 土坑 B 131180 出土遺物（第 229 図 28）

埋土内から土師器が出土した。図示し得たのは 1 点で、土師器甌（28）である。

#### ピット B 131072（第 42 図）

北東居住域に属する B 調査区の北西部の、B18a9 区で検出した。平面形は不整円形で、ピット B 131073 に一部を切られている。径 2.0m、深さ 0.55m を測った。出土した須恵器は II 型式 1 段階に相当するものである。

#### ピット B 131072 出土遺物（第 229 図 19）

埋土内から須恵器が出土した。図示し得たのは 1 点で、須恵器高环（19）である。

#### 溝 B 130288（第 42 図）

北東居住域に属する B 調査区の北西半部の、A18j7、B18a7、B18a8、B18b8、B18b9 の 5 区で検出した。B 調査区の北端部中央から南西方に走る溝で、幅 0.16m から 0.9m、深さ 0.1m 内外を測った。埋土内から須恵器が少量出土した。出土した須恵器は II 型式 4 段階に相当するものである。

#### 溝 B 130107（第 42 図）

北東居住域に属する B 調査区の中央部の、B18a6、B18b6、B18b7、B18c8、B18c9 の 5 区で検出した。幅 1.0m～1.5m、深さ 0.2m 内外を測った。埋土内から U 字形板状土製品の破片が出土した。

#### ピット B 130992（第 42 図）

北東居住域に属する B 調査区の北西部の、B18a8 区で検出した。平面形は不整円形で、径 0.2m、深さ 0.6m を測った。出土した須恵器は I 型式 2 段階に相当するものである。

#### ピット B 130992 出土遺物（第 229 図 20・21）

埋土内から須恵器が出土した。図示し得たのは 2 点で、須恵器环身（20・21）である。

**ピットB131155（第42図）**

北東居住域に属するB調査区の北西端部の、B18a8区で検出した。平面形は不整円形で、径0.5m、深さ0.5mを測った。

**ピットB131155出土遺物（第229図22）**

埋土内から土師器が出土した。図示し得たのは1点で、土師器鉢（22）である。

**ピットB130847（第42図）**

北東居住域に属するB調査区の北西部の、B18b9区で検出した。平面形は不整円形で、径0.4m、深さ0.5mを測った。出土した須恵器はI型式5段階に相当するものである。

**ピットB130847出土遺物（第229図23・27）**

埋土内から須恵器、土師器などが出土した。図示し得たのは2点で、須恵器坏蓋（23）、土師器瓶（27）などがある。

**ピットB131272（第42図）**

北東居住域に属するB調査区の北西端部の、A18j10区で検出した。平面形は不整橢円形で、長軸0.5m、短軸0.45m、残存部分の深さ0.6mを測った。

**ピットB131272出土遺物（第229図29・30）**

埋土内から須恵器、土師器などが出土した。図示し得たのは2点で、須恵器坏蓋（29）、土師器瓶（30）などがある。出土した須恵器はII型式1段階に相当するものである。

**土坑B130417（第42図）**

B調査区の中央部の、B18b8、B18c8の2区で検出した。幅0.3m～1.0m、深さ0.15m～0.16mを測った。B130417掘削後の床面で、土坑B130764、土坑B130765などが検出された。出土した須恵器はI型式4段階に相当するものである。

**土坑B130417出土遺物（第496図6～21、第606図3、図版241・242）**

埋土内から須恵器、土師器、U字形板状土製品などが出土した。図示し得たのは17点で、須恵器甕（6・12）、須恵器坏蓋（7～9）、須恵器坏身（10・11）、須恵器高环（14・15）、須恵器瓶（17・18）、土師器坏（16）、土師器高环（21）、U字形板状土製品（606-3、図版241・242）などがある。

**ピットB130762（第42図）**

B調査区の中央部の、B18b7区で検出した。平面形は不整円形で、長径0.5m、深さ0.78mを測った。

**ピットB130762出土遺物（第496図29）**

埋土内から須恵器が出土した。図示し得たのは1点で、須恵器坏蓋（29）である。

## 土坑D 5 2 0 (第44図、図版46a・47a)

D-2調査区の東端、A19d～e3・4区で検出した。長軸約7m、短軸約2mで、深さ約0.15mを測る。掘立柱建物D13のピットD509、溝D493・494、ピットD497に切られる。埋土はN4/灰色シルト層に10BG6.5/1明青灰色シルトが径2～3cmの斑状に混入する。

## 土坑D 5 2 0 出土遺物 (第233図4～19、第629図4、図版194、248e)

I型式5段階の須恵器高環の蓋(4～7)・坏蓋(8)、I型式4段階以前の甕(9)、土師器小型甕(14・15)・長胴甕(16～18)・瓶(19)、製塙土器(10～13)が出土している。須恵器高環蓋(4)の天井部の外面下位には一帯の櫛描波状文を巡らしている。坏蓋(8)の内面には同心円文の当て具痕が残る。その他に土玉(第629図4、図版248e)が一点出土している。

## 土坑D 5 2 9 (第44図、図版46a・47a)

D-2調査区の東端、A19e3区で検出した。長軸約6m、短軸約1mで、深さは約0.2mを測る。西側は調査区外に伸びる。埋土はN5/灰色シルト層で、基本土層の第13b層と同じ。

## 土坑D 5 2 9 出土遺物 (第230図6～8)

II型式3段階の須恵器高环蓋(6)・坏身(7)・甕(8)、U字形板状土製品の突帯部分の破片、鉱滓が出土している。遺構の時期は出土土器から6世紀後半と考えられる。

## 土坑D 5 3 7 (第44図、第44図、図版46a・47a)

D-2調査区東側の南端、A19f4区で検出した不定形土坑である。南側部分は調査範囲外に広がる。規模は長軸4.7m、短軸約1.5mで、深さは削平を受けたためか6cmと浅い。埋土はN4/灰色シルト層である。

## 土坑D 5 3 7 出土遺物 (第230図11)

層中より土師器、須恵器の小片が出土しているが、土師器甕(11)以外は細片のため図化できない。

## 土坑D 8 1 9 (第43図、図版46b・47b)

D-2調査区の北東隅、A19d3区で検出した。平面プランは椭円形を呈し、径1.35m×1.00m、深さ0.15mを測る。埋土はN3/0暗灰色シルト層である。

## 土坑D 8 1 9 出土遺物 (第230図)

埋土より5世紀後半に比定される須恵器甕(12)・高环脚部(13)、土師器瓶(14)などが出土している。

## 土坑D 8 3 8 (第44図、図版46b・47b)

D - 2 調査区の東端、A19d ~ e3 ~ 4 区で検出した。平面プランは椭円形を呈し、径 7m × 5.8m、深さ 0.2m を測る。

#### 土坑D 8 3 8 出土遺物（第 230 図 9・10）

須恵器坏身（9）、土師器甕（10）が出土している。（9）は I 型式 5 段階に相当することから、遺構の時期は 5 世紀後半頃と考えられる。

#### 溝D 4 9 3（第 44 図、図版 46a・47a）

D - 2 調査区の北東隅、A19d3 区で検出した。幅 0.57m、深さ約 6cm を測る。土坑 D520 を切っている。なお、西側で溝 D 4 9 4 と重複するが、前後関係は明らかにすることが出来なかった。埋土は 10BG6/1 青灰色シルト（焼土・炭化物混じり）である。

#### 溝D 4 9 3 出土遺物（第 234 図 1～4）

埋土中より II 型式 2 段階の須恵器坏蓋（1）、土師器甕（2）・瓶（3・4）などが出土している。

#### 溝D 4 9 4（第 44 図、図版 46a・47a）

D - 2 調査区の北東隅、A19d3 区で検出した。幅 0.55m、深さ約 6cm を測る。土坑 D520 を切っている。なお、北側で溝 D 4 9 3 と重複するが前後関係は明らかにすることが出来なかった。

#### 溝D 4 9 4 出土遺物（第 234 図 5・6）

II 型式 4 段階の須恵器坏蓋（6）、II 型式 3 段階の須恵器坏蓋（5）が出土している。（5）は内面に一定方向のナデ調整が施している。

#### 溝D 4 9 5（第 43 図、第 44 図、第 169 図、図版 46b・47b・50c）

D - 2 調査区の北東隅、A19d3 区で検出した。北東 - 南西走する幅約 0.6m、深さ約 0.3m の溝である。溝 D 4 9 3・4 9 4、ピット D 7 4 9 に切られる。埋土は大きく 2 つに分けられ、上層は 6 世紀、下層は 5 世紀と考えられる。

#### 溝D 4 9 5 出土遺物（第 234 図 7～18）

上層から II 型式 1 段階の須恵器高坏の蓋（12）、II 型式 2 段階の須恵器坏蓋（7・8）・坏身（9～11）・提瓶（16）・脚台付き壺（14）などが出土している。（7・8）の天井部外面には赤色顔料付着している。

下層から I 型式 5 段階の須恵器高坏の坏部（13）、土師器甕（18）、U 字形板状土製品が出土している。なお、須恵器甕（15）、製塩土器（17）の出土層位は不明である。

#### 溝D 7 5 2（第 43 図、図版 46b・47b）

D - 2 調査区の南東隅、A19f4 区で検出した。幅 2.08m、深さ 0.36m を測る。西側は F 調査区の谷 F 2 と同一の遺構である「谷状遺構」と重複し、東側は自然流路 D 4 7 0 に切られる。

### 溝D 752出土遺物（第234図19～22）

II型式1段階の須恵器坏身（19）、II型式2段階の須恵器坏身（20）、I型式4段階の須恵器坏身（21）・器台（22）が出土している。坏身（20）は内面中央に同心円文の当て具痕が残る。（20・21）の外面に「-」のヘラ記号を刻む。

### ピットD 501（第44図、第168図、図版46a）

D-2調査区の東端、A19d～e3区で検出した。径 $1.05 \times 0.95$ m、深さ0.34mで、掘立柱建物D 13のピットD 817を切る。柱材の径は $44 \times 51$ cmで、残存長は41cmを測る。柱材の樹種はニヨウマツ類（芯持丸木）である。

### ピットD 501出土遺物（第230図15）

埋土中よりII型式3段階の須恵器坏蓋（15）が出土している。

### ピットD 511（第43図、第44図、第168図、図版47a）

D-2調査区の東端、A19e3区で検出した。径0.35m、深さ0.24mを測る。掘立柱建物D 12のピットD 512に切られる。柱材の径は10cm、残存長21cm。埋土中より古墳時代後期の須恵器、土師器片が出土しているが、いずれも細片のため図化することができない。

### ピットD 749（第43図、第44図、第168図、図版50b）

D-2調査区の北東隅、A19d3区で検出した。径 $0.55 \times 0.40$ cm、深さ0.5mを測る。溝D 495を切っている。柱材（コウヤマキ、芯持丸木）はピットの中心からややすれているが、良好に遺存していた。柱材の径は13.8cm、残存長65cmで、底部は削り込んで細くして、径 $9.5 \times 11$ cmとなっていた。埋土中より土器片が出土しているが、いずれも細片のため図化することができない。ピットの所属時期は、遺構の重複関係から6世紀前半以降である。

### ピットD 753（第43図、第168図、図版46b）

D-2調査区の東端やや南寄り、A19f4区で検出した。溝D 752を切っている。径0.65m、深さ0.28mを測る。底に葉状の纖維（炭化物）を敷いていた。

### ピットD 753出土遺物（第230図16）

埋土中よりI型式5段階の須恵器坏身（16）が出土している。

### ピットD 758（第44図、図版46b・47b）

D-2調査区の北東隅、A19d3区で検出した。径 $0.95 \times 0.85$ m、深さ0.3m以上を測る。埋土はN3/0灰色シルト～粘土に10BG7/1明青灰色シルトブロック若干混入する。

### ピットD 758出土遺物（第230図17・18）

埋土中よりII型式2段階の須恵器坏蓋(17)・坏身(18)が出土している。坏蓋(17)の内面には、広い範囲に同心円文の当て具痕が残る。

#### ピットD 8 4 2 (第43図、図版46b・47b)

D-2調査区の東端、A19e3区で検出した。径0.15m、深さ8cmを測る。柱材は径7.1cm以上、残存長14cmで、樹種はシャシャンボ(削出丸木?)。埋土はN3/0暗灰色シルト層である。埋土中より土器片が出土しているが、いずれも細片のため図化することができない。このため時期等については、明らかにできない。

#### ピットD 8 4 7 (第43図、第168図、図版46b・47b)

D-2調査区の北東隅、A19d3区で検出した。掘立柱建物C14のピットD825を切る。径0.7m×0.45m、深さ0.25m、柱痕跡は径0.13mを測る。土器片はいずれも細片で、時期等については、明らかにできない。

#### ピットD 8 5 1 (第43図、図版46b・47b)

D-2調査区の北東隅、A19d3区で検出した。径0.4m×0.3m、深さ0.28mを測る。柱材は径8.9cm、残存長0.237mで、樹種はネジキ(芯持丸木)。埋土は10Y3.5/1オリーブ黒色シルトに10BG6.5/1明青灰色シルトが径10mm以下の小斑状に7~10%混入する。出土土器はいずれも細片である。

#### 流路C 4 3 5 3 (第41図)

C調査区A18d9、A18d10、A19d1区で検出自然流路である。C調査区では東北東から南南西に走行し、D調査区の流路D470、F調査区の流路F529へと続く。幅3m、深さ0.8mを測る。

左右の肩部に沿って直径30cm前後のピット列を検出しており、柵のような護岸施設が設置されていた可能性がある。

#### 流路C 4 3 5 3 出土遺物 (第235図9~22)

弥生式土器壺(9・10)、II型式4段階の須恵器坏身(12)などの他に、U字形板状土製品、円筒形土製品(17~22)が出土している。17~21は土師質で外面細かい縦ハケが施されている。22は瓦質、内外面ナデ調整で仕上げられている。

#### 流路D 4 7 0 (第43図、図版46a)

D-2調査区の南東隅、A19e・f3区で検出した。幅5.0m以上、深さ約0.64m。C調査区の流路C4353と同一の遺構である。北東から南西方向に走行する自然流路で、F調査区の流路F529へと続く。最下層の粗砂層から出土した須恵器坏蓋・身から、6世紀後半には形成され、その後、数度の氾濫を繰替ながら古代には埋没していく。なお、北西の肩部から子持ち勾玉

(第 624 図 1、図版 243c) が出土した。

#### 流路 D 470 出土遺物 (第 235 図)

最下層から弥生土器壺 (1)、II 型式 4 段階の須恵器壺蓋 (2)・壺身 (3~6)、短頸壺 (7)、堤瓶 (8)、鉢津などが出土している。

#### 包含層出土遺物 (第 234 図 23・24)

須恵器壺 (24)、土師器鉢 (23) は第 13 層から出土した。

#### 包含層出土石製品 (観察表編 表 5、表 6)

砥石は 1 点で、D - 2 調査区第 8 層上面から微閃綠岩製の砥石（個体番号 D13、以下個体番号省略）が出土している。敲石は 1 点で、D - 2 調査区第 13a 層上面から砂岩製の敲石 (D5) が出土している。いずれも掲載図化していない。

#### 包含層出土玉類 (観察表編 表 4)

滑石製臼玉は D - 2 調査区青灰色シルト層から 6 点、第 12 層から 4 点、第 13 層から 4 点、第 13a 層から 2 点、第 13b 層から 1 点、第 13c 層から 2 点出土している。

### 第 2 項 南東居住域の遺構と遺物

南東居住域は、各調査区の南東側、水処理施設の南側に位置する A 調査区の東側で検出した（第 39 図）。北を東西方向の区画溝 A 429、西を北西から南東方向に走る区画溝 A 428 で画された居住域である。このため、調査区で検出した居住域は頂点を下にした三角形を呈し、東側の調査区外に遺構集中区域を広げる。居住域全体の平面図は第 236 図に示している。竪穴住居、掘立柱建物、井戸その他主要な土坑などは個別に遺構平面図・断面図を作成した。遺構の記述は作成した遺構図面の挿図番号順に掲載している。その他遺物が出土した遺構もできる限り記述をおこなった。個別に遺構図面を作成していない遺構は、居住域の北側から順に掲載した。

#### 竪穴住居 A 1 (第 237 図、図版 53)

南東居住域に属する A 調査区東端の B18g2、B18g3、B18h2、B18h3 区で検出した。7.2m × 5.7m の隅丸長方形の平面形を呈し、建物の主軸は N -40° - W を指す。住居内から多数のピット等を検出したが主柱穴は特定できなかった。検出面から床面までの深さ 0.15m を測る。

覆土内から須恵器、土師器 (第 249 図 1~3)、砥石 (第 640 図 1、図版 250a) が出土した。また住居内土坑 A 731 から土師器壺 2 点 (第 249 図 5・6)、柱穴 A 719 から土師器壺? (第 249 図 4) が出土した。

#### 竪穴住居 A 2 (第 238 図、図版 54a)

南東居住域に属するA調査区東側のB18g3、B18g4、B18h3、B18h4区の、竪穴住居A1の西側で隣接して検出した。竪穴住居A4及び竪穴住居A3と重複関係にあり、3基の遺構の中で最も新しい。6.7×5.4mの隅丸長方形の平面形を呈し、建物の主軸はN-44°-Eを指す。住居内から多数のピットを検出したが主柱穴は特定できなかった。検出面から床面までの深さ0.1mを測る。覆土内から土師器甕（第249図7）の他、土師器、須恵器の小片が出土したが図化できなかった。また、住居内壁溝A869から土師器甕（第249図8）が出土した。

#### 竪穴住居A3（第238図、図版54a）

南東居住域に属するA調査区東側のB18h3区で検出した。竪穴住居A1、竪穴住居A2、竪穴住居A4と重複関係にあり、竪穴住居A4より新しく、竪穴住居A1と竪穴住居A2によって破壊されていた。検出時で床面まで削平を受けており、壁溝の一部が残存していた。南東側壁溝4.8m以上、南西側壁溝3.2m以上を測る隅丸方形の平面形を呈し、建物の主軸はN-27°-Eを指す。壁溝の幅0.2m、深さ0.05mを測る。主柱穴は特定できなかった。

南西側壁溝に接する土坑A525から須恵器高环の脚部が出土した（第249図10）。

#### 竪穴住居A4（第238図、図版54）

南東居住域に属するA調査区東側のB18h3区で検出した。竪穴住居A2、竪穴住居A3と重複関係にあり、両竪穴住居によって破壊されていた。検出時で床面まで削平を受けており、壁溝の一部が残存していた。南東側壁溝6.0m以上、南西側壁溝2.2m以上を測る隅丸方形の平面形を呈し、建物の主軸はN-25°-Eを指す。

壁溝内から土師器の小片が出土したが、図化できなかった。

南東居住域での竪穴住居の築造順は、古い方からA4→A3→A2・A1と考えられる。

#### 掘立柱建物A1（第239図、図版55a）

南東居住域に属するA調査区北東側のB18f3、B18g2、B18g3区で検出した。梁間3間、桁行3間の建物である。建物の主軸はN-51°-Wを指す。梁間3.87m、桁行4.33mで、柱間は梁間が1.29m、桁行が1.44mと異なる。柱穴は12箇所認められ、掘方の平面形は一辺0.4m～0.6mの長方形・略方形で、全12箇所中の2箇所の柱穴に礎板が残存していた。

掘立柱建物A1を構成する柱穴の埋土から須恵器、土師器が出土した（第249図11、図版174）。ピットA443出土土師器（11）は、丹塗り研磨の直口壺である。ピットA1667出土礎板は円形に、ピットA1675出土礎板は方形に加工されていた。

#### 掘立柱建物A2（第240図）

南東居住域に属するA調査区東側のB18h3、B18i3区で検出した。梁間3間、桁行3間の総柱建物である。建物の主軸はN-55°-Wを指す。梁間3.60m、桁行3.69mで、柱間は梁間、桁

行ともに1.2m前後を測る。柱穴は16箇所認められ、掘方の平面形は径或いは一辺0.4m～0.7mの不整円形・略方形を呈し、柱材、礎板は出土しなかった。2箇所の掘方から径0.25mの柱痕を検出した。柱穴A 6 9 4から須恵器壺蓋（第249図9）が出土している。

#### 井戸A 4 9 4（第241図、図版55b～f、56a～d）

南東居住域に属するA調査区東側のB18g4、B18h4区で検出した。区画溝A 4 2 8の東側に隣接し、南東居住域の西辺部に位置する。刎船の転用材を用いた木製の井戸枠を持つ井戸で、掘方は長軸1.6m、短軸1.4mの楕円形の平面形を呈し、検出面から2.0mをほぼ垂直に掘り込み、断面の形状は長方形を呈する。

掘方内に刎船を切断したものを2枚、内面を合わせて立て井戸枠としている。井戸枠の平面形は、長軸1.0m、短軸0.55mの扁平な楕円形を呈する。井戸枠は掘方の北側に寄せて据え立て、掘方を埋め戻す。

井戸枠設置後、さらに井戸枠内を一回り小さくした形状で楕円形に深さ0.7mを垂直に掘り込む。検出面から井戸底まで2.7mを測る。

井戸枠に転用された刎船は、杉の巨木を割り抜いたものである。第242図1は西側に使用された井戸枠は、最大残存長2.1m、最大幅1.25m、厚さ6cm～9cmを測る。浅いU字状の断面形を呈し、船底部は平坦で、内側の船底幅0.5mを測る。舷側への立ち上がりは外側で高さ0.4mを測るが、舷側上部は、井戸枠への転用時に上端面が削られていた。しかし、部分的にL字状に割り込まれた仕口加工が残存しており、ほど穴も2箇所認められた。

第242図2は東側に使用された井戸枠は、最大残存長2.14m、最大幅1.20m、厚さ7cm～10cmを測る。浅いU字状の断面形を呈し、船底部は平坦で、内側の船底幅0.6mを測る。舷側への立ち上がりは外側で高さ0.4mを測るが、舷側は、井戸枠への転用時に左側舷側の立ち上がりが船底近くから削られ欠損していたが、右側舷側の上端部は残存状況が良好で、舷側板を載せるための仕口がL字状に割り込まれている。仕口の水平部5cm、立ち上がり5cmを測る。

井戸枠として使用された上部側は、腐食により切断時の原形を留めないが、底部側に使用された端面には、両船材とともに鉄製工具により切断された痕跡が明瞭に観察できる。

両船材は、残存する切断面では接合しない。また船底部の幅、復元した舷側部の幅も一致しないが、各々の差異は中央部と舳あるいは艦に寄った部位との計測値であり、本来同一船体だと考えられる。舷側上部に残された井戸枠転用前の加工痕は、この上部にさらに舷側板を載せるための機能を果たすと考えられ、転用前は丸木船ではなく準構造船であったと考えられる。

井戸枠内の埋土からは少量の遺物が出土しただけで、図化できるものは無かった。井戸枠を据えた底からさらに掘り込まれた土坑状の部分から30数点を数える土師器、須恵器が埋納された状態で出土した（第241図）。最下部から、土師器壺の口縁部と体部上半部を打ち欠き、椀状に加工した土器が12点検出され、その上位に土師器小型丸底壺・中型・大型の壺、須恵器の直口壺・

甕等が多数出土し、最上部から大型甕（第251図6）が出土した。合わせて37点以上の土器が埋納されていた。第251図3の甕の注口部には木栓が外側から詰められていた。出土した須恵器はI型式4段階に相当するものである。第251図3の甕と同層中から滑石製白玉56点（図版248c）が出土している。

また井戸の埋土から多数の骨片が出土した。井戸枠内からカエル・ネズミ・イノシシの他、鋭利な刃物による切断痕のあるイヌの頸椎、ウマの頭骨の一部が出土した。また最下層の土器群から切痕のあるイヌの腰椎、ウマの中節骨が出土した（図版267-2、272e、273e）。

#### 井戸A 5 4 2（第243図、図版56）

南東居住域に属するA調査区東側のB18h2区で検出した。長辺1.5m、短辺1.3mの略方形の平面形を呈する素掘り井戸である。断面の形状は深い逆台形で、検出面から井戸底まで2.5mを測る。

井戸最深部から土師器甕（第250図1～5、図版175）、滑石製勾玉（第623図12、図版243b）、滑石製白玉54点（図版248d）が出土した。また、井戸を埋め戻す際の埋土から多量の焼け焦げた部材が投棄された状態で出土し、これに混入して槽（第686図3、図版308）が出土した。南東居住域検出の遺構から火災に遭った建物等は検出しておらず、調査区外の東側に廃棄する原因となった遺構が存在すると考えられる。

#### 井戸A 7 6 7（第244図）

南東居住域に属するA調査区南東側のB18j3区で検出した。径0.85m～1.1mの椭円形の平面形を呈する素掘り井戸である。断面の形状は逆台形で、検出面から井戸底まで0.45mを測る。

井戸底付近から土師器等が出土した（第250図6・7）。また埋土から大型哺乳類の骨片が10片出土した。

井戸A 7 6 7は、区画溝A 4 2 8の中央最深部で、南東居住域から離れた位置で検出した。溝底に掘られた土坑の可能性もあるが、形状、深さ等から本来南東集落域の中にあった井戸と考えれば、区画溝A 4 2 8が南東集落域を破壊して掘削された可能性を指摘できる遺構である。

#### 井戸A 6 7 6（第245図、図版57c・d）

南東居住域に属するA調査区東側のB18f3区で検出した。南東居住域の北辺に位置し、井戸A 6 9 5の北西に隣接する。径1.3mの円形の平面形を呈する素掘り井戸で2段に掘り込む。断面の形状は深い逆台形で、検出面から井戸底まで1.25mを測る。

埋土から土師器甕、須恵器坏等が出土した（第250図19～21、図版175）。出土した須恵器はI型式3段階に相当するものである。

井戸A 6 7 6は、井戸A 6 9 5と重複して検出され、井戸A 6 9 5の据方北西部を破壊して新たに井戸A 6 7 6を掘削している。

**井戸A 590（第246図、図版57a・b）**

南東居住域に属するA調査区東側のB18f3区で検出した。長軸1.4m、短軸1.1mの橢円形状の平面形を呈する素掘り井戸である。断面の形状は逆台形で、深さ1.0mを測る。井戸底の南西に寄せてさらに径0.35m、深さ0.35mを土坑状に深く掘り込む。検出面から井戸底まで1.35mを測る。

井戸最深部から単独で須恵器甕が1点出土した（第249図14、図版175）。甕体部の穴には中空の竹製注ぎ口が挿入された状態で残存していた。また、井戸を埋め戻す際の埋土から土師器、須恵器、陶質土器が出土した（第249図12・13・15～17、図版175）。出土した須恵器はI型式3段階に相当するものである。

**井戸A 695（第247図、図版57e・f、58）**

南東居住域に属するA調査区北東側のB18f3区で検出した。区画溝A 429の東側に位置し、南東居住域北辺部の遺構が希薄になる部分に当たる。木製の井戸枠を持つ井戸で、掘方は径1.9m～2.2mの円形の平面形を呈し、2段に掘り込み、断面の形状は深い逆台形を呈する。検出面から井戸底まで1.4mを測る。

井戸枠は、掘方中央部からやや北側に寄せ、幅0.3m～0.35m、長さ1.36m～1.4m、厚さ2cmの長方形の板材を4枚組み合わせて立て、周りを埋め戻す。組み合わせた板材の内法は0.24m～0.28mの方形で、井戸枠としてはかなり小規模である。

井戸枠内最深部から、大小2つのヒョウタン（図版262b）が入れ子になった状態で出土し、ヒョウタンの下側から丹塗り磨研土器の土師器ミニチュア壺が出土した（第250図15、図版175）。また中層以下から土師器甕、須恵器甕・壺等（第250図8～18、図版174・175）が出土した。出土した須恵器はI型式2段階に相当するものである。

**土坑A 675（第236図）**

南東居住域に属するA調査区北東側のB18f3区の、井戸A 676の西側で検出した。長辺1.9m、短辺1.4mの隅丸長方形の平面形を呈する土坑で、深さ0.2mを測る。

土坑埋土内から須恵器壺、甕、壺蓋、高环脚部、土師器甕等が出土した（第249図18～22）。出土した須恵器はI型式4～5段階に相当するものである。

**土坑A 1540（第236図）**

南東居住域に属するA調査区北東側のB18f3区の、井戸A 695の東側で検出した。長軸1.8m、短軸1.0mの不整形の平面形を呈する。深さ0.1mを測る。

土坑埋土から、土師器甕とともに製塙土器が多数出土した（第253図1～14）。

#### 土坑A 4 3 5（第248図、図版58）

南東居住域に属するA調査区東側のB18g3区で検出した。竪穴住居A 1及び他の造構と重複して検出され、いずれの造構よりも新しい。長辺3.7m、短辺3.0mの南北方向に長い長方形の平面形を呈し、深さ0.2mを測る。

土坑埋土から須恵器、土師器、滑石製臼玉等多数の遺物が出土し（第253図15～29）、最上層から鉄製曲刃鎌が出土した（第641図3、図版252）。土坑埋土には炭が混入する。出土した須恵器はI型式4～5段階に相当するものである。

#### 土坑A 5 3 6（第236図）

南東居住域に属するA調査区東側のB18h3区、竪穴住居A 1の南側で検出した、長辺4.7m、短辺2.5mの東西方向に長い略長方形の平面形を呈する。深さ0.3mを測る。

土坑埋土から土師器甕と椀形の製塙土器が出土した（第254図1・2）。

#### 土坑A 5 9 4（第236図）

南東居住域に属するA調査区東端のB18i2区で検出した。長辺0.5m、短辺0.35mの長方形の平面形を呈し、深さ0.2mを測る。

土坑埋土から土師器甕、高坏が出土した（第254図3・4）。

#### 土坑A 5 6 1（第236図）

南東居住域に属するA調査区東側のB18i3、B18i4区で検出した。区画溝A 4 2 8の東側肩部に並ぶ土坑群の1基である。長軸5.0m、短軸3.6mの不整方形の平面形を呈し、深さ0.4mを測る。

土坑埋土から、土師器甕が出土した（第254図7）。

#### 土坑A 1 5 5 2（第236図）

南東居住域に属するA調査区東側のB18i3区で検出した。土坑A 5 6 1と同様、区画溝A 4 2 8の東側肩部に並ぶ土坑群の1基である。長軸4.4m、短軸2.0mの不整楕円形の平面形を呈し、深さ0.4mを測る。

土坑埋土から須恵器高坏、土師器甕、高坏が出土した（第254図9～12）。

#### 土坑A 1 5 5 6（第236図）

南東居住域に属するA調査区東端のB18j2、B18j3区で検出した。土坑A 5 6 1と同様、区画溝A 4 2 8の東側肩部に並ぶ土坑群の1基である。長軸3.5m、短軸2.9mの略方形の平面形を呈し、深さ0.3mを測る。

土坑埋土から須恵器坏蓋、土師器甕、高坏が出土した（第254図13～18）。出土した須恵器

はI型式3段階に相当するものである。

#### 土坑A 1567（第236図）

南東居住域に属するA調査区東端のB18j2区で検出した。土坑A 561と同様、区画溝A 428の東側肩部に並ぶ土坑群の1基である。長軸2.5m、短軸1.7mの長方形の平面形を呈し、深さ0.3mを測る。

土坑埋土から土師器甕、韓式系土器平底鉢が出土した（第254図20・21）。

#### 溝A 535（第236図）

南東居住域に属するA調査区東側のB18h3、B18i3区で検出した。竪穴住居A 1から南側へ南北方向に検出され、区画溝A 428に当たって方向を東へ変え、井戸A 590に至る。幅0.7m～2.3m、深さ0.1m～0.45mを測る。

溝埋土から土師器高环、甕、台石が出土した（第254図5・6）。

#### 溝A 877（第236図）

南東居住域に属するA調査区東側B18i4、C18a2区で検出した。区画溝A 428の最深部で並行して検出した。幅1.0m～1.4m、深さ0.1m～0.2mを測る。

溝埋土から韓式系土器把手付鉢、土師器甕等が出土した（第254図19・22）。

#### ピットA 1575（第236図）

南東居住域に属するA調査区東側のB18i3区で、土坑A 1552と重複して検出した。径0.4mの円形の平面形を呈し、深さ0.2mを測る。

土坑埋土から土師器甕が出土した（第254図8）。

### 第3項 南西居住域の遺構と遺物

南西居住域はE調査区の東半部からB調査区の南西端部、A調査区の西端部にまたがる居住域である（第39図）。北西居住域、西居住域と同様に集落の西を限定する大溝の東側に形成された居住域で、竪穴住居13棟、掘立柱建物13棟、井戸6基、馬埋葬土壙2基を始めとする膨大な数の遺構が検出されている。

居住域全体の平面図は第255～257図に分割して図示している。竪穴住居、掘立柱建物、井戸、その他主要な土坑、溝等は個別に遺構平面図・断面図等を作成した。遺構の記述は作成した遺構図面の挿図番号順に掲載している。その他遺物が出土した遺構もできる限り、記述をおこなった。個別に遺構図面を作成していない遺構は、A調査区では東側の遺構から順に、E調査区では北側の

遺構から順に掲載した。この掲載順は、出土土器実測図面の挿図番号順に対応している。

#### 豊穴住居B1（第259図、図版62a）

南西居住域に属するB調査区の南西端部のB18e10、B19e1区で検出した。カマドを持つ豊穴住居である。5.7m×5.4mの隅丸方形の平面形で、建物の主軸はN-8°-Wを指す。四壁の内側に沿うように、幅0.2m、深さ0.1mの壁溝を巡らす。床面検出の際に、柱穴と考えられるピットが複数検出され、そのなかで住居の主柱穴4箇所を特定することができた。

住居内の北壁中央部付近に造り付けのカマドを持つ（第260図、図版62b）。遺存状態が悪く、支脚付近の床面が残存するのみであった。支脚は土師器壺の口縁部が転用されており、端部を下に立てた状態で検出された。

覆土内から須恵器、土師器などが出土した。出土した須恵器はI型式4段階に相当するものである。

#### 豊穴住居B1出土遺物（第323図1～3）

覆土内から須恵器、土師器などが出土した。図示し得たのは3点で、土師器壺（1・2）、土師器移動式カマド（3）などがある。

#### 豊穴住居A5（第261図、図版63a・63b）

南西居住域に属するA調査区の北東端部のB18f10、B18g10、B19f1、B19g1区で検出した。6.1m×5.8mの隅丸方形の平面形を呈し、建物の主軸はN-31°-Wを指す。豊穴住居A6と重複関係にあり、南東壁の大部分を破壊されている。住居内からピット、土坑、カマドを検出したが主柱穴を特定できなかった。検出面から床面までの深さ0.2mを測る。北西壁中央部に造り付けのカマドを持つ。豊穴を掘る際に北西壁に接して0.9m×1.3mの基底部を掘り残す。壁体はU字状を呈するが、削平が著しく奥壁部分が残存するのみであった。奥壁から0.4mの位置で土師器壺を転用し、口縁部を下に伏せた状態で支脚を検出した（第262図）。

覆土内から須恵器壺蓋、壺、カマドから土師器壺が出土した（第323図4～6）。出土した須恵器はII型式3段階に相当するものである。

#### 豊穴住居A6（第261図、図版63c）

南西居住域に属するA調査区B18g10、B19g1区で検出した。5.5m×4.0mの東西方向に長い隅丸長方形の平面形を呈し、建物の主軸はN-30°-Wを指す。豊穴住居A5と重複関係にあり、新しい。住居内から多数のピットを検出したが主柱穴を特定できなかった。検出面から床面までの深さ0.1mを測る。

覆土内から須恵器壺身、須恵器系土器高壺、台石が出土した（第323図7・8）。出土した須恵器はII型式3段階に相当するものである。

### 豊穴住居 E 0 8 0 1 2 0 (第 263 図)

南西居住域に属するE調査区の南東半部東端部付近のB19i4、B19i5区で検出した。検出面は第8遺構面である。平面形は4.3m×4.3mの隅丸方形で、建物の主軸はW-3°-Sを指す。四壁の内側に沿うように、幅0.2m深さ0.24mの壁溝を巡らせている。主柱穴と考えられるピットが4箇所検出された。住居の西端部の中央やや南寄りに造り付けのカマドを持つ(第264図・第265図)。覆土内から須恵器、土師器などが出土した。

### 豊穴住居 E 0 8 0 1 2 0 出土遺物 (第 323 図 16)

覆土内から須恵器、土師器が出土した。図示し得たのは1点で、土師器長胴甕(16)である。

### 豊穴住居 E 1 (第 266 図)

南西居住域に属するE調査区の北東端部付近のB19d5区で検出した。平面プランの南西端部付近を、掘立柱建物E1を構成するピットに切られている。平面形は4.4m×3.8mの隅丸方形で、建物の主軸はE-7.5°-Nを指す。壁溝は認められなかった。プラン内で主柱穴と考えられるもの3箇所を含む11箇所のピットが検出された。住居の南西端部付近に造り付けのカマドを持つ。カマド(第267図・第268図)は器壁のごく一部の痕跡がかろうじて判別できる程度にまで削平され、床面で支脚の設置痕と火床付近が確認できるのみであった。

覆土内から須恵器、土師器、製塙土器などが出土した。出土した須恵器はI型式3段階に相当するものである。

### 豊穴住居 E 1 出土遺物 (第 323 図 9 ~ 11)

覆土内から須恵器、土師器、製塙土器などが出土した。図示し得たのは3点で、須恵器坏身(9)、土師器鉢(10)、土師器甕(11)などがある。

### 豊穴住居 E 2 (第 269 図)

南西居住域に属するE調査区の北東半部のB19e5、B19f5区で検出した。著しく削平を受けていたため床面が残存するのみで、壁溝の検出によってその存在が判明した。壁溝から推測した平面形は一辺6.5mの方形で、西側端部付近は南北方向に延びる溝に切られ欠損している。建物の主軸はN-5°-Wを指す。壁溝は幅0.2m、床面からの深度0.1mを測った。主柱穴と考えられるピットが4箇所検出された。カマドは検出されなかった。ピットや壁溝内から須恵器、土師器などが少量出土したが、図示し得るものは認められなかった。出土した須恵器はII型式2段階に相当するものである。

### 豊穴住居 E 3 (第 270 図、図版 70b)

南西居住域に属するE調査区北東半部のB19e4区の、豊穴住居E2の東側に隣接する位置で

検出した。平面形は  $3.7m \times 3.6m$  の方形で、建物の主軸は N -3° - E を指す。四壁の内側に沿うように、幅 0.24m 深さ 0.2m の壁溝を巡らす。主柱穴と考えられるピットが 3箇所検出された。検出できなかった北東側の 1箇所は、後出しのピットが掘削された際に欠損したものと考えられる。カマドは検出されなかった。

覆土内から須恵器、土師器、製塙土器などがごく少量出土したが、時期決定の判断材料となり得るものはなかった。

#### 竪穴住居 E 3 出土遺物（第 323 図 12 ~ 14）

覆土内から須恵器、土師器、製塙土器などがごく少量出土した。図示し得たのは 2 点で、土師器高环（13）、土師器甕（12・14）などがある。

#### 竪穴住居 E 4（第 271 図、図版 71a）

南西居住域に属する E 調査区の中央部東端の B19f4、B19f5 区の、竪穴住居 E 5、E 6、E 7 の 3 棟と重複した位置で検出した。E 5・E 6 の 2 棟の上側にほぼ完全に重なる状況で、E 7 には南側の一部を切られていた。平面形は  $6.94m \times 4.3m$  の隅丸長方形で、建物の主軸は E -2° - N を指す。壁溝は認められなかった。主柱穴と考えられるピットが北半部で 2箇所認められたが、中央より南側では検出できなかった。住居の東端部の中央やや北寄りに造り付けのカマド（第 272 図・第 273 図）を持つ。器壁は遺存しておらず、床面で支脚の設置痕が検出され、その周辺に炭、焼土塊が認められた。煙道にあたる部分は排水溝掘削によって欠損した。

覆土内から須恵器、瓦質系土器、土師器、滑石製有孔円板などが出土した。出土した須恵器は II 型式 2段階に相当するものである。

#### 竪穴住居 E 4 出土遺物（第 323 図 18・19・21 ~ 24）

覆土内から須恵器、瓦質系土器、土師器などが出土した。図示し得たのは 6 点で、須恵器坏蓋（18）、須恵器坏身（19）、須恵器高环（22）、土師器高环（21）、土師器甕（23・24）、滑石製有孔円板（第 631 図 8）などがある。

#### 竪穴住居 E 5（第 274 図、図版 71b）

南西居住域に属する E 調査区の中央部東端の B19f4、B19f5 区の、竪穴住居 E 4・E 6・E 7 の 3 棟と重複した位置で検出した。E 4 の下、E 6 の上にほぼ完全に重なる状況で、E 7 には南側の一部を切られていた。平面形は  $6.0m \times 4.82m$  の隅丸長方形で、建物の主軸は E -6° - N を指す。四壁の内側に沿うように、幅 0.25m 深さ 0.24m の壁溝を巡らせている。主柱穴と考えられるピットは検出できなかった。住居の東端部の中央やや北寄りに造り付けのカマド（第 275 図、図版 71c）を持つ。E 4 掘削の際に破壊を受けたため器壁は遺存しておらず、床面にその痕跡と支脚の設置痕がわずかに残存していたのみであった。

覆土内から須恵器、土師器、製塙土器、韓式系土器が出土した。出土した須恵器は I 型式 5 段

階に相当するものである。

#### 竪穴住居E 5 出土遺物（第324図1～5）

覆土内から須恵器、土師器、製塙土器、韓式系土器などが出土した。図示し得たのは5点で、須恵器坏蓋（1）、須恵器坏身（2）、須恵器腹（3）、製塙土器（4）、土師器壺（5）などがある。

#### 竪穴住居E 6（第276図、図版72a）

南西居住域に属するE調査区中央部東端のB19f4、B19f5区の、竪穴住居E 4・E 5・E 7の3棟と重複した位置で検出した。E 4・E 5の下にはほぼ完全に重なっており、E 7には南側の一部を切られていた。平面形は4.3m×4.18mの隅丸方形で、建物の主軸はN-2°-Eを指す。四壁の内側に沿うように、幅0.18m深さ0.2mの壁溝を巡らせている。主柱穴と考えられるピットは検出できなかった。住居の北端部の中央に造り付けのカマド（第277図・第278図）を持つ。E 5掘削の際に破壊を受けていたため器壁は遺存しておらず、床面にその痕跡と支脚の設置痕がわずかに残存しているのみであった。

覆土内から須恵器、土師器、製塙土器などが出土した。出土した須恵器はI型式4段階に相当するものである。

#### 竪穴住居E 6 出土遺物（第323図25～28）

覆土内から須恵器、土師器、製塙土器などが出土した。図示し得たのは4点で、須恵器坏蓋（25～27）、製塙土器（28）などがある。

#### 竪穴住居E 7（第279図、図版72b）

南西居住域に属するE調査区の中央部東端のB19f4、B19g4区の、竪穴住居E 4・E 5・E 6の3棟、掘立柱建物E 7と重複しており、3棟の南側で南端部を切り、掘立柱建物E 7の東側で柱穴の一部を切っている。平面形は4.78m×4.3mの隅丸方形で、建物の主軸はN-60°-Wを指す。四壁の内側に沿うように、幅0.1m、深さ0.09mの壁溝を巡らせている。住居内に複数のピットが存在したが、主柱穴と考えられるものはなかった。住居の北西端部の東寄りに造り付けのカマド（第280図・281図）を持つ。袖の器壁の基底部がわずかに残存しており、床面には焼土塊と炭がみられた。覆土内から須恵器、土師器が出土した（第323図17・20）。図示したのは2点で、須恵器坏蓋（17）、土師器移動式カマド（20）である。竪穴住居E 4との切り合い関係からE 7はII型式2段階以降と考えられる。

#### 竪穴住居E 8（第282図、図版73a）

南西居住域に属するE調査区の南東半部東端部付近のB19h4区で検出した。平面形は5.5m×5.4mの隅丸方形で、建物の主軸はN-15°-Wを指す。四壁の内側に沿うように、幅0.12m深さ0.13mの壁溝を巡らせている。主柱穴と考えられるピットは検出できなかった。住居の北端部の

中央に造り付けのカマド（第284図・285図）を持つ。カマドは比較的遺存状態が良好で、袖の器壁は基底部を検出できた。床面に土師器壺の上半部を倒立した支脚が残存しており、火床も認められた。

覆土内から須恵器、土師器、製塙土器などが出土した。出土した須恵器はI型式4段階に相当するものである。

#### 竪穴住居E 8 出土遺物（第324図6～20）

覆土内から須恵器、土師器、製塙土器などが出土した。図示し得たのは15点で、須恵器壺蓋（11・14・15）、須恵器壺身（12・13・16・19）、須恵器高杯（17・18）、土師器壺（6・8）、土師器高杯（7）、土師器鉢（7・9）、韓式系土器櫃（20）、製塙土器（10）などがある。

#### 竪穴住居E 9（第283図）

南西居住域に属するE調査区の南東半部東端部付近のB19i4区の、竪穴住居E 8の南側に隣接する位置で検出した。平面形は6.58m×6.12mの隅丸方形で、建物の主軸はN-6°-Wを指す。四壁の内側に沿うように、幅0.22m深さ0.18mの壁溝を巡らせている。主柱穴と考えられるピットが3箇所検出されたが、南東側のピット1箇所は、後出のピットが掘削された際に欠損したものと思われる。カマドは認められなかった。

覆土内から須恵器、土師器、製塙土器、磁石などが出土した。出土した須恵器はI型式4段階に相当するものである。

#### 竪穴住居E 9 出土遺物（第324図21～24、第639図12、図版250a）

覆土内から須恵器、土師器、製塙土器などが出土した。図示し得たのは4点で、須恵器壺蓋（21・22）、須恵器壺（24）、土師器鉢（23）、磁石（第639図12）などがある。

#### 掘立柱建物B 1（第286図）

南西居住域に属するB調査区の南西半部のB18d10、B18e10区で検出した。梁間2間×桁行4間の南東・北西に長い掘立柱建物である。梁間3.5m、桁行4.6mで、柱間は梁間が1.16m～1.81m、桁行が1.03m～1.21mと異なる。

柱穴は12箇所認められ、掘方の平面形は0.3m～0.5mの不整円形ないしは不整橈円形で、深さは0.2m内外を測った。12箇所中4箇所の柱穴に柱材が残存していた。

掘立柱建物B 1を構成する柱穴の埋土から須恵器、土師器などが出土した。出土した須恵器はII型式4段階に相当するものである。

#### 掘立柱建物A 3（第287図）

南西居住域に属するA調査区西側のB18g9区で検出した。梁間2間、桁行3間の建物である。建物の主軸はN-30°-Wを指す。梁間3.76m、桁行4.96mで、柱間は梁間が1.88m、桁行が1.65m

と異なる。柱穴は12箇所認められ、掘方の平面形は一辺0.4m～0.7mの略方形・円形で、柱材、礎板は出土しなかった。柱穴の埋土から図化できる遺物は出土しなかった。

#### 掘立柱建物E1（第288図、図版73b）

南西居住域に属するE調査区の南西半部のB19d4、B19d5区で検出した。建物の主軸はほぼ東西方向を指す。梁間3間×桁行3間の掘立柱建物で、構成する柱穴の1箇所が豊穴住居E1の南西端部を切っている。梁間4.3m、桁行4.56mで、柱間は梁間が1.21m～1.51m、桁行が1.40m～1.64mと異なる。

柱穴は12箇所と4箇所の東柱を持つ総柱の掘立柱建物である。

柱穴の平面形は不整円形ないしは梢円形で、柱穴内に柱根や礎板は認められなかった。

掘立柱建物E1を構成する柱穴の埋土から須恵器、土師器などの破片が少量出土したが、時期比定の決め手になるものではなかった。しかし、柱穴の1箇所が豊穴住居E1を切っていることから、I型式3段階よりは後出のものと考えられる。

#### 掘立柱建物E1出土遺物（第324図25）

掘立柱建物B1を構成する柱穴の埋土から須恵器、土師器などが出土した。図示し得たのは1点で、須恵器高环（25）がある。

#### 掘立柱建物E2（第289図）

南西居住域に属するE調査区の北東端部付近のB19d4区の、掘立柱建物E1のすぐ東側に並列する位置で検出した。建物の主軸はほぼ東西方向を指す。1間以上×3間の掘立柱建物である。建物の東半部が調査区東壁外へ延びているため全体の形状は不明であるが、総柱の掘立柱建物になると思われる。東西延長1.9m以上、南北延長3.5mを測った。

柱穴の平面形は不整円形ないしは梢円形で、柱穴内に柱材が残存するものが2箇所認められた。掘立柱建物E2を構成する柱穴の埋土から土師器の破片、滑石製白玉1点（柱穴C090043）が出土したが、時期比定の決め手になるものや、図示し得たものはなかった。しかし、建物の方向や位置関係からみて、掘立柱建物E2は掘立柱建物E1と同時期に並存していた可能性がある。

#### 掘立柱建物E3（第290図）

南西居住域に属するE調査区北東端部付近のB19e4区の、掘立柱建物E1および掘立柱建物E2の南側で検出した。2間以上×3間の掘立柱建物で、建物の主軸は掘立柱建物1、掘立柱建物2とは異なり、N-5°-Wを指す。建物の東半部が調査区東壁外へ延びているため全体の形状は不明である。東西延長4.0m以上、南北延長5.3mを測った。

柱穴の平面形は不整円形ないしは梢円形で、柱穴内に柱材や礎板の類は認められなかった。掘立柱建物E3を構成する柱穴の埋土から須恵器、土師器、製塙土器などの破片が少量出土したが、

時期比定の決め手になるものや、図示し得るものはなかった。

#### 掘立柱建物 E 4 (第 291 図、図版 74a)

南西居住域に属する E 調査区の東半部中央付近の B19g5、B19h5 区で検出した。2 間 × 3 間の掘立柱建物で、建物の主軸はほぼ東西方向を指す。建物を構成する柱穴の 1 箇所が井戸 E 0 9 0 5 5 3 と重複する状態で検出された。梁間 4.12m、桁行 4.4m で、柱間は梁間が 2.00m ~ 2.30m、桁行が 1.33m ~ 1.51m と異なる。

10 箇所の柱穴と 2 箇所の束柱を持つ総柱の掘立柱建物である。

柱穴の平面形は不整円形ないしは楕円形で、柱穴内には礎板が認められた。

掘立柱建物 E 4 を構成する柱穴の埋土から土師器の破片が少量出土したが、時期比定の決め手になるものや、図示し得るものはなかった。しかし、建物の方向や位置関係から掘立柱建物 E 4 は、後述する掘立柱建物 E 5 および掘立柱建物 E 7 に先行して構築された可能性が高く、5 世紀代にさかのぼるものといえる。

#### 掘立柱建物 E 5 (第 292 図、図版 74b)

南西居住域に属する E 調査区の東半部中央付近の B19g4、B19h4 の 2 区に跨る地点の、掘立柱建物 E 4 のすぐ東側に並列する位置で検出した。1 間 × 3 間以上の掘立柱建物で、建物の主軸はほぼ東西方向を指す。東西延長 4.2m 以上、南北延長 3.9m を測った。

建物の東半部が調査区東壁外へ延びているため、全体の形状は不明であるが、検出範囲で 9 箇所の柱穴に加えて 2 箇所の束柱を持つ総柱の掘立柱建物である。

柱穴の平面形は不整円形ないしは楕円形で、柱穴内には礎板が認められた。

建物 E 5 を構成する柱穴の埋土から須恵器、土師器などの破片が少量出土したが、時期比定の決め手になるものや、図示し得るものはなかった。しかし、近接する掘立柱建物 E 4 および後述する掘立柱建物 E 7 と建物のプラン、方向、位置関係を比較検討した結果、掘立柱建物 E 5 は 6 世紀初頭に構築されたものと推定できる。

#### 掘立柱建物 E 6 (第 293 図)

南西居住域に属する E 調査区の北東半部の B19e6、B19f6 区の、竪穴住居 E 2 のすぐ西側の位置で検出した。1 間 × 1 間の掘立柱建物で、建物の主軸はほぼ南北方向を指す。東西 2.5m、南北 2.7m を測った。柱穴は 4 箇所認められ、柱穴の平面形は不整円形ないしは楕円形で、柱穴内には礎板が認められた。掘立柱建物 E 6 を構成する柱穴の埋土から土師器の破片が少量出土したが、時期比定の決め手になるものや、図示し得るものはなかった。

#### 掘立柱建物 E 7 (第 294 図、図版 75a)

南西居住域に属するE調査区の東半部中央付近のB19f5、B19g5区の、掘立柱建物跡E 4のすぐ北側に並列する位置で検出した。梁間3間×桁行4間の掘立柱建物で、建物の主軸はほぼ南北方向を指す。梁間5.3m、桁行6.8mで、柱間は梁間が1.51m～1.81m、桁行が1.51m～2.12mと異なる。柱穴は14箇所認められ、柱穴の平面形は不整円形ないしは梢円形状で、柱穴内には礎板が認められた。

掘立柱建物E 7を構成する柱穴の埋土から須恵器、土師器などが出土した。出土した須恵器はII型式2段階に相当するものである。

#### 掘立柱建物E 7出土遺物（第324図26～28）

掘立柱建物E 7を構成する柱穴の埋土から須恵器、土師器などが出土した。図示し得たのは3点で、須恵器环蓋（27）、須恵器环身（28）、土師器甕（26）などがある。

#### 掘立柱建物E 8（第295図、図版75b）

南西居住域に属するE調査区の南東半部東端付近のB19h4、B19h5区の、竪穴住居E 8と重複する位置で検出した。梁間2間×桁行3間の掘立柱建物で、建物の主軸はほぼ南北方向を指す。梁間4.7m、桁行5.7mで、柱間は梁間が2.12m～2.42m、桁行が1.81m～2.12mと異なる。

柱穴は10箇所認められ、柱穴の平面形は不整円形ないしは梢円形で、柱穴内に柱根や礎板は認められなかった。

建物E 8を構成する柱穴の埋土から須恵器、土師器、製塙土器などが出土した。出土した須恵器はI型式5段階に相当するものである。

#### 掘立柱建物E 8出土遺物（第324図29～31）

掘立柱建物E 8を構成する柱穴の埋土から須恵器、土師器、製塙土器などが出土した。図示し得たのは3点で、須恵器环蓋（30）、土師器甕（29）、製塙土器（31）などがある。

#### 掘立柱建物E 9（第296図）

南西居住域に属するE調査区の南東半部東端付近のB19i4、B19j4区の、竪穴住居E 9の南側に一部が重複する位置で検出した。

梁間1間×桁行3間の掘立柱建物で、建物の主軸はほぼ東西方向を指す。梁間2.9m、桁行4.1mで、柱間は梁間が1.19m～1.51m、桁行が1.21m～1.81mと異なる。

柱穴は10箇所の棟持柱が認められ、柱穴の平面形は不整円形ないしは梢円形状で、柱穴内に柱根や礎板は認められなかった。

掘立柱建物E 9を構成する柱穴の埋土から須恵器、土師器、製塙土器などが出土した。出土した須恵器はII型式1段階に相当するものである。

#### 掘立柱建物E 10（第297図）

南西居住域に属するE調査区の中央部東端付近のB19f4、B19f5区の、竪穴住居E 4・E 5・E 6の3棟と重複した位置で検出した。梁間2間×桁行2間の掘立柱建物で、建物の主軸は概ねN-45°-Wを指す。梁間3.45m、桁行3.6mで、柱間は梁間が1.51m～1.81m、桁行が1.51m～1.81mと異なる。

柱穴は8箇所と1箇所の東柱を持つ総柱の掘立柱建物である。柱穴の平面形は不整円形ないしは楕円形で、柱穴内に柱根や礎板は認められなかった。

掘立柱建物E 10を構成する柱穴の埋土から須恵器、土師器、製塙土器（第324図32）などが出土したが、時期比定の決め手になるものや、図示し得るものはなかった。しかし柱穴が竪穴住居E 4・E 5・E 6の3棟をいずれも切っていることから、掘立柱建物E 10はII型式2段階よりは後出のものと考えられる。

#### 掘立柱建物E 11（第298図）

南西居住域に属するE調査区の南東端部付近のB19f4区で検出した。2間×1間以上の掘立柱建物で、建物の主軸はほぼ東西方向を指す。プランのほとんどが調査区東壁外にあるため詳細は不明であるが、南北延長5m、東西延長2.1m以上を測った。

柱穴は5箇所認められ、柱穴の平面形は不整円形ないしは楕円形で、柱穴内に柱根や礎板は認められなかった。

掘立柱建物E 11を構成する柱穴の埋土から須恵器、土師器、製塙土器などが出土した。出土した須恵器はI型式5段階に相当するものである。

#### 井戸A 1501（第299図、図版64b）

南西居住域に属するA調査区西側のB18h8区で検出した。木製の井戸枠を持つ井戸で、掘方は径2.4m～2.7mの楕円形の平面形を呈し、2段に掘り込み、断面の形状は深い逆台形を呈する。検出面から井戸底まで2.2mを測る。

掘方1段目のテラス部を利用して多種類の板材を組み合わせて井戸枠を作る。井戸枠は、上段掘方テラス部に長さ1.0m、幅0.2m、厚さ0.07mの板材を0.8m離して平行に並べ、その上位に直交して長さ1.2m、幅0.2m、厚さ0.08mの板材を0.55m離して平行に並べて井桁式に組み合わせる。短辺側の上部に弯曲した高さ0.8m、幅0.6m、厚さ4cmの板材を立て、小口部とする。この小口を挟むように長さ0.9m、幅0.25m～0.35m、厚さ3cmの板材を3段に積み上げる。井戸機能時には、小判形の平面形を呈する木製井戸枠である。

井戸枠の板材は杉である。刳船を解体して転用したと考えられる厚さ、形状のものが数多く見られる。内1点は舳部に近い反りを有する部材である。

井戸内埋土から多数の土器片、U字形板状土製品（資料No.174・191）等が出土し、最深部付近から須恵器壊身、壺、土師器甕等が出土した（第325図13～21、図版178）。

**井戸A 1613（第300図、図版65a～65c）**

南西居住域に属するA調査区西側のB18h10で検出した。径2.3～2.6mの円形の平面形を呈する素掘り井戸で2段に掘り込む。断面の形状は深い逆台形で、検出面から井戸底まで1.8mを測る。埋土から須恵器高环、壺、土師器高环、壺、甕等（第325図1～12、図版178）、滑石製勾玉（第623図2、図版243b）、鉛津が出土した。出土した須恵器はI型式2段階に相当するものである。

**井戸E 090451（第301図、図版76）**

南西居住域に属するE調査区の南東半部中央付近のB19i6区で検出した。平面形は長軸1.55m、短軸1.16mの楕円形で、逆台形状の断面を呈する素掘り井戸である。検出面から井戸底までの深度1.5mを測った。

埋土は4層で、上から黄褐色微砂と灰青色シルトがブロック状に混じる暗灰青色粘質シルト、緑灰色シルトブロックと炭が混じる灰青色粘質シルト、灰黒色粘質シルトと緑灰色シルトの互層、黄褐色荒砂である。埋土の各層から須恵器、土師器などが出土した。出土した須恵器はI型式2段階に相当するものである。

**井戸E 090451出土遺物（第324図33～40、図版179）**

埋土内から須恵器、土師器などが出土した。図示し得たのは8点で、須恵器甕（33）、土師器高环（34・35）、土師器壺（36～38）、土師器甕（39・40）などがある。

**井戸E 090553（第302図）**

南西居住域に属するE調査区の東半部中央付近のB19g5、B19h5区で検出した。掘立柱建物E4を構成する柱穴のひとつと重複する位置で検出した。掘方の平面形は長軸1.75m、短軸1.6mの楕円形で、逆台形状の断面を呈する素掘り井戸である。検出面から井戸底までの深度1mを測った。

埋土は3層で、上から暗灰青色粘質シルト、緑灰色シルト混じりの灰黒色粘土、灰黒色粘土と緑灰色シルトの互層である。埋土から遺物は出土しなかったが、掘立柱建物E4との切り合い関係からII型式第2段階より前出のものと考えられる。

**井戸E 090805（第303図、図版77・78a・78b）**

南西居住域に属するE調査区の南東半部の中央付近や南西寄りのB19i6区で検出した。掘方の北西端部が井戸E 090806の掘方の南東端部と重複する状態で検出されている。井戸枠を持つ井戸で、掘方の平面形は上端が長軸1.88m、短軸1.75mの楕円形で、検出面から約1.15mの深度でほぼ垂直に掘り込んだ後、さらに東寄りに径1mの円形に1m程垂直に掘削している。したがって、掘方は中位の西側に平坦面を持つ2段掘りの形状を呈し、検出面から井戸底までの深度2.15mを測った。掘方内には割り船を切断して転用した井戸枠が、下段掘方の北側に沿わ

せて据えられていた。井戸枠は船材を2枚、内面通しを合わせた状態で立てかけて形成しており、井戸枠の平面形は、長軸1m、短軸0.35mの扁平な楕円形を呈する。

掘方の埋土は5層で、井戸枠下に暗茶褐色シルト（第303図d層）と茶褐色粘土と灰色微砂の互層（第303図e層）、井戸枠外に上から灰黒色粘土ブロックの混じる暗灰青色粘質シルトと緑灰色シルトの互層、灰黒色粘質シルトと緑灰色粘質シルトおよび茶褐色粘土の互層、黒灰色粘土ブロックの混じる茶褐色粘土となっている。

井戸枠内の埋土は3層で、緑灰色シルトのブロック混じりの暗灰青色粘質シルト（第303図a層）、緑灰色シルトと暗灰青色粘質シルトの互層（第303図b層）、暗緑灰色粘質シルトと灰黒色粘土の互層（第303図c層）であった。最上層は井戸枠部分を含む掘方全体を覆う状態で、灰黒色粘土と緑灰色シルトおよび黄褐色微砂のブロックの混じる暗灰青色粘質シルトが検出された。

井戸枠に転用された船材のうち、第305図1は最大残存長1.9m、最大幅0.94mで、弧状の断面形を呈するモミ属の板材である。船底側端部の厚み0.12m、側面側端部の厚み6cmを測った。側面端部付近に概ね0.4m間隔で貫通する長方形状のはぞ穴が認められ、はぞ穴内に樹皮や楔が残存するものも認められた。したがってこの船材は準構造船の船底材で、はぞ穴は船底部と舷側板を固定するために穿たれたものである。第305図2は最大残存長2m、最大幅0.96mで、弧状の断面形を呈するモミ属の板材である。船底側端部の厚み0.12m、側面側端部の厚み6cmを測った。2と同様に、側面端部付近に概ね0.4m間隔で貫通する長方形のはぞ穴が認められ、こちらもはぞ穴内に樹皮や楔が残存するものが認められた。したがってこの船材も準構造船の船底材である。

井戸枠内の井戸底付近から須恵器、土師器などが出土した。これらの出土遺物から井戸E090805が廃棄され埋没した時期をI型式3段階と考えることができる。

#### 井戸E090805出土遺物（第326図1～10、図版179・180）

井戸枠内の井戸底付近から須恵器、土師器、石製品、動物骨などが出土した。図示し得たのは10点で、須恵器壺（1～4）、土師器甕（5～10）、滑石製白玉4点などがある。

#### 井戸E090806（第304図、図版77a・78b・79）

南西居住域に属するE調査区の南東半部中央付近や南西寄りのB19i6区で検出した。掘方の南東端部が井戸E090805の掘方の北西端部と重複する状態で検出されており、井戸E090805を切っていることが判明した。井戸枠を持つ井戸で、掘方の平面形は上端が長軸1.98m、短軸1.68mの楕円形で、検出面から約0.4mの深度まで皿状に掘り込んだ後、中央西寄りを径1.6mの円形に1.8m程掘削している。そしてさらに西寄りに0.6m×0.8の楕円形に約0.6m掘り下げ、土器を埋納したうえで0.5m程埋め戻している。したがって、掘方は上位の東西と中位の東側に平坦面を持つ3段掘りの形状を呈し、検出面から井戸底までの深度2.4mを測った。掘方内には船材を切断して転用した井戸枠が、掘方の西側に沿うように据えられていた。井戸枠は船材を4枚組み合わせて立てかけて形成しており、井戸枠の平面形は長軸0.8m、短軸0.6mの楕円形を呈

する。井戸枠下の土坑の埋土は緑灰色シルトブロック混じりの灰黒色粘土（第304図f層）で、掘方の埋土は5層に分層でき、上から暗灰青色粘質シルトと黄灰色微砂および緑灰色シルトの互層、灰黒色粘土ブロック混じりの緑灰色シルトと暗灰青色粘土の互層、暗灰青色粘質シルトブロックの混じる緑灰色シルト、緑灰色シルトブロックの混じる暗灰青色粘質シルト、灰黒色粘質シルトと暗灰青色粘質シルトの互層となっている。井戸枠内の埋土は5層で、暗灰青色粘質シルト（第304図a層）、灰黒色粘土ブロック混じりの暗灰青色粘質シルト（第304図b層）、腐食土（第304図c層）、暗灰青色粘土（第304図d層）、暗灰青色粘質シルト（第304図e層）であった。

井戸枠に転用された船材のうち第306図1は最大残存長2.28m、最大幅0.74mで、弧状の断面形を呈するスギの板材である。船底側端部の厚み10cm、側面側端部の厚み6cmを測った。側面端部付近の内側に台形の貫通しないものと貫通する長方形の2種のほぞ穴が認められ、ほぞ穴内に樹皮や楔が残存するものも認められた。したがってこの船材は準構造船の船底材で、ほぞ穴は船底部と舷側板を固定するために穿ったものである。第306図2は最大残存長2.2m、最大幅0.3mで、スギの板材である。船底側端厚み7cmを測った。残存する範囲にはほぞ穴などは認められなかつたが、その形状からみて準構造船の舷側板と思われる。第307図3は最大残存長2.2m、最大幅0.38mで、スギの板材である。一方の面の片側に概ね0.8mから0.9m間隔で貫通しない台形のホゾ穴が認められる。準構造船の舷側板と思われ、船底材に穿った台形のホゾ穴と位置を合わせて楔で固定したものと考えられる。第307図4は最大残存長2.3m、最大幅0.76mで、弧状の断面形を呈するスギの板材である。船底側端部の厚み8cm、側面側端部の厚み6cmを測った。側面側端部付近の内側に台形の貫通しないホゾ穴と、貫通する長方形のホゾ穴が認められた。したがってこの船材は第306図1と同様に準構造船の船底材である。

井戸枠下の土坑および井戸枠内から須恵器、瓦質土器、土師器、韓式系土器、U字形板状土製品（資料No.202）などが出土した。井戸枠下の土坑から出土した遺物から、井戸E090806が掘削された時期をI型式第4段階と考へることができる。

#### 井戸E090806出土遺物（第327図1～18、図版180・181）

井戸枠下の土坑および井戸枠内から須恵器、瓦質土器、土師器、韓式系土器、U字形板状土製品、石製品などが出土した。

図示し得たのは18点で、須恵器壺（1～5）、須恵器（瓦質）甕（6）、土師器甕（7～15）、土師器ミニチュア鉢（16～18）、滑石製白玉6点などがある。

#### 馬埋葬土坑A940（第308図、図版66～67a）

A調査区の中央部、B18b7区で検出した。土坑の平面形は、隅丸長方形を呈し、長辺2.03m、短辺1.52m、深さ0.3mを測る。土坑内から馬の全身骨格が埋葬された当時の姿勢を良好に保った状態で出土した。

馬は頭部を北側に置き、右側位を上にした横臥姿勢で出土した。鼻先を東に、前肢は進展、後

肢は折り曲げていた。骨格は、右側位を上にして埋葬されていたため、より下位に位置する左側位は、骨膜、海面質ともに比較的の残存状況は良好で、なかでも肋骨は立体的な形状をよく保っていた。一方、土坑検出面に近い右側位は、全体的に腐蝕が進行し、脆弱な状態で、大半は薄い膜となり、かろうじて骨の形状が確認できる程度であった。

年齢は切歯の咬耗程度および臼歯高から5～6歳と推定される。大きさについては、前脚を進展した状態で検出できることから、体高（第2胸椎の棘突起先端から末節骨までの距離）は約127cmで、日本在来馬でいう御崎馬（体高124～130cm）程度の体格である。性別については頭部の先端（犬歯の有無不明）および骨盤の残りが悪いため不明である。

古墳時代中期の馬埋葬土坑はいくつか知られているが、骨格の一部分が残るのみで、土坑の大きさや骨の位置関係から馬そのものを埋葬したことがわかる例が大半である。また、古墳時代中期の馬の大きさは今まで一部分の骨の長さから推定されていたが、全身骨格が残っていたことで、当時の馬の大きさを知る上で貴重な資料といえる。さらに、従来、古墳時代の馬埋葬土坑は、古墳に伴うものがほとんどで、集落域から見つかった例は今回が初めてである。

土坑の埋土から須恵器、土師器（第336図4・5）の小片が出土したが、遺構の時期を特定できるものはなかったが、第12面（古墳時代中期の遺構面）で検出したことから、5世紀中～後半と考えられる。

#### 土坑A 6 5 5（第309図、図版65d～65e）

南西居住域に属するA調査区中央部南端のC18A6区で検出した。長辺0.8m、短辺0.6mの隅丸長方形の平面形を呈する土坑で、深さ0.15mを測る。土坑の主軸はN-38°-Wを指す。

土坑内から馬の頭蓋骨（図版265）が検出された。骨の検出位置が北側に偏在することから、頭部から首にかけての部分が埋納されていたと考えられる。

土坑埋土から図化できる遺物は出土しなかった。

#### 馬埋葬土坑A 1 3 4 5（第310図、図版67b～67c）

南西居住域に属するA調査区中央部南端のC18A7区で検出した。長辺1.7m、短辺1.0mの長方形の平面形を呈する土坑で、深さ0.25mを測る。土坑の主軸はN-22°-Eを指す。

土坑の北側壁で馬の頭蓋骨、下顎骨（図版264）が検出された。その他に馬骨等は認められなかったが、3層に分層された土坑埋土の上層と中層の全体からリン分が検出されていること、頭蓋骨を土坑北側壁に持たせ掛けている状況から、馬埋葬土坑A 9 4 0と同様に、本来は馬1頭が埋葬されていたと考えられる。

土坑の埋土から須恵器、土師器の小片が出土したが、遺構の時期を特定できるものや図化できるものはなかった。

### 土坑A1135（第311図～第312図、図版68）

第2次試掘調査（平成12年度）によって検出した土坑<sup>(註1)</sup>で、本調査（A調査区）によって全体像が明らかとなった。A調査区の西端南寄り、B19j1区に位置する。平面プランは長楕円形で長さ6.15m、幅2.55m、深さ0.6mを測る。埋土は大きく4つに分けられる。上層は機能消失後の凹に堆積した土層で、古墳時代後期の土器が出土している。中層および下層は出土遺物に時期差は認められなかった。最下層（第312図上の12層、第312図下の11・12層）は土坑開削時に、ベースである弥生時代自然河川の砂・シルトが崩れ再堆積したものである。

下層から多量の須恵器、土師器とともに鳥足文タキメの認められる陶質土器や滑石製の双孔円板2点・円玉88点（試掘時61点）、砥石そして移動式カマド、U字形板状土製品などが出土地している。さらに、焼土・炭層・灰層に混じって夥しい数の製塙土器約82kg（試掘時は76kg）、個体数にして推定1641個体にのぼる資料が同時に出土した。

製塙土器は加熱などの使用によって表面の摩耗が激しいもの、摩耗の程度が弱いものもある。また、破片となって出土しているが、完形に復元されるものも多い。このため割れて捨てられたというよりも、割って捨てたという状況も考えられた。

### 土坑A1135出土遺物（第329～335図、第631図、図版183～186、189、236・237、246b）

埋土中より須恵器、土師器、陶質土器、韓式系土器、須恵器系土器、製塙土器（第333図1・5、第334図～第335図、図版183～186）、滑石製双孔円板2点（第631図、図版246b）、砥石3点、鉄製品、馬具などが出土している。また、その他に土壤を洗浄した際に出土した細かい土塊、炭化種子、炭などがある。

#### 須恵器（第329図～第332図、図版183～185）

中層から（329-7・25）、下層から（329-2・3・5・6・8～10・14・15・18～24・27、330-1～5、331-1～3、332-1）が出土した。（329-1・4・11～13・17）は層位不明のものである。

（329-1・2）は高壺蓋、（329-3～5）は壺蓋、（329-6～12）は壺身、（329-13・14）は有蓋高壺、（329-15）は無蓋高壺、（329-23・24）は壺、（329-20～22）は甌で、下層下位から横並びした状態で出土した。（329-25、330-1～5、331-1～3、332-1）は甌で、（332-1）は口径51.4cm、高さ107.3cmを測る大型品である。

中層及び下層から出土した須恵器はI型式4・5段階に相当するものである。

#### 土師器（第333図2～4・6～24、図版186）

中層から（8・14）、下層から（7・9・10・13・15・16・17・19～24）が出土した。（6）は中層と下層のものが接合した資料。（2～4・11・12・18）は層位不明のものである。

（2～4・7・12）は鉢で、（12）はミニュチュア鉢。（6）は壺？。（8・9）は瓶。（10・11・13～21・22・23）は甌で、（23）は長胴甌。（24）は鍋。

#### 移動式カマド（第585図・586図、図版186）

下層より出土した。平底の甌を倒立させたような形態を呈し、水平な天井部をもつ。掛け口は

径  $21.9 \times 22\text{cm}$  の円形を呈する。天井部幅  $28.9 \times 29\text{cm}$ 、基部幅  $43.3\text{cm}$ 、高さ  $32\text{cm}$  を測る。体部上位に 1 対の角状の把手が下向きに取り付けられている。掛け口は天井部で屈曲して、幅約  $3.6\text{cm}$  の平坦面をつくり、端部はヘラケズリ調整を施し、シャープな面をつくる。焚き口の庇部分は、上部がやや上方に張り出す「付け庇」である。焚き口の上部からつづく庇は、基部に向かうほど張り出しの度合いが弱くなる。庇高は先端部を一部欠損するが、掛け口高（天井部）を上回らないタイプ。庇の上面・左右側面には、製作～乾燥時の支えとして使用した植物茎の痕跡と考えられる竹管文状のスタンプ痕が認められた。その平面および断面の形状が一定していないことから、先端がやわらかい（植物質？）棒状のものを使用したものと考えられる。焚き口は、幅  $36.4\text{cm}$ 、高さ  $25.2\text{cm}$  をはかり、立面形は肩のまるい台形をなす。焚き口の両側は端部を内外に肥厚させ、幅広の面をもつ。なお、このタイプは今のところ部屋北遺跡、寝屋川市域のみで確認されている。

焚き口の背面には径  $3.2 \times 3.4\text{cm}$  の円形の「煙り出し孔」を穿つ。焚き口の裾部両側には、支脚状の低い小突起を付し、わずかに裾あきになる。背面については欠損のため、小突起の有無は不明。体部外面には縦方向の平行タタキメ、内面はナデ調整を施している。胎土中には雲母・角閃石が多量に含まれ、暗灰褐色を呈する、いわゆる「生駒西麓産」と呼ばれるものである。

体部上位には端の収束しない水平方向の浅い沈線を巡らし、その位置に左右一対の牛角状把手を下向きに取り付けている。把手の下面側には、庇の上面・左右側面に観察されたような、竹管文状のスタンプ痕が各一ヶ所に認められた。煙り出し孔・内面の上部には、煤の付着が認められた。また、赤変した部分が天井部内面と体部内面下半、焚き口周辺に認められた。掛け口の外外面に施されたヘラケズリ調整は、倒立して成形した時に生じた、はみ出した粘土を整えるためであろう。おそらく、かまどの製作方法は、把手の付け方や庇部分の支え痕跡（竹管文状のスタンプ）から、平底の甌のような器を倒立させ、焚き口・掛け口を開けて製作されたと考えられる。今回の資料と同様なタイプは寝屋川市長保寺遺跡<sup>(42)</sup>でも見出されている。

#### U字形板状土製品（第 611・612 図、国版 236・237）

U字形板状土製品は造り付けの甌などの焚き口の前面に立て、それを保護・装飾するための土製品で、形状から「U字形土製品」、用途から「甌焚口枠」、「造付け甌の付属具」、「甌枠装飾」、「焚口縁飾」とも呼称されている<sup>(43)</sup>。U字形を呈する厚さ  $1 \sim 2\text{cm}$  の板状の土製品。その片面の両縁に沿って、幅  $1 \sim 2\text{cm}$ 、高さ  $1 \sim 2\text{cm}$  の断面台形の突帯を平行して貼り付けている。

今回の資料によって、全体の形がはじめて判明した。右側のコーナー部分が一部破損するが推定幅約  $85\text{cm}$ 、高さ  $40\text{cm}$  をはかり、左右の先端部は隅丸に仕上げられている。焚き口は、高さ  $27.2\text{cm}$ 。突帯のある面および側縁部は、丁寧なナデ調整で、平滑に仕上げられている。裏面には整形時に作業台に使用されていた板材の木目が压痕として残る。胎土はいわゆる「生駒西麓産」。成形・製作工程については、粘土塊を作業台の上で、平面U字形の板状に作り、内・外縁に突帯を貼り付け、焼成の前（生乾きの段階）に中央で「相欠き」状に切り離して、焼成したものである。これは焼成の際の便宜と使用時の際の移動等を考慮したことと考えられる。下層より出土

した。この種の土製品は後述する「鳥足文タタキメ」と同様に韓国内では西半部に分布していることが明らかにされている<sup>(註4)</sup>。

#### 陶質土器（第329図26、図版184）

26は肩部～体部にかけて一部破損しているが、口径15.6cm、器高27cm（推定）を測る菱形土器である。底部は平底で、体部外面に螺旋状沈線がめぐり、鳥足文タタキメで調整している。「鳥足文タタキメ」は通常の平行タタキメに、直行する形で「鳥の足」を形どった文様をタタキ板に彫りこんだもので、韓国では「鳥足垂直集線文」とも呼ばれている。この種のタタキメをもつ土器は、朝鮮半島の南西部、すなわち百濟中心地域や榮山江流域との係わりをもつ韓式系土器であることが明らかにされている。なお、内面は下から上に向けて丁寧な指ナデ調整を施している。下層より出土した。

#### 韓式系土器（第329図27、図版184）

（27）は口径29.8cm、高さ13.2cmを測る大型の蓋型土器（やや硬質の赤焼き系土器）で、摘みは一部破損している。外面の調整は平行タタキメ後に回転カキメ、内面はハケ状工具によるナデ調整を施した後に一部すり消している。下層より出土した。

#### 須恵器系土器（第329図16）

（16）は口径13.6cmを測る高杯坏部片である。上層と中層より出土した。内外面回転ナデ調整後に、坏部外面に軽いケズリ調整を施している。

#### 動物遺存体（分析編第5章表19）

馬の下顎第4小白歯？、下顎第1大臼歯？が出土している。同一個体のものと思われる。年齢は歯の咬耗度合いから3～4才と推定される。他に不明骨片が出土している。

#### 土坑A1654（第313図、図版69a・69b、図版257-1）

南西居住域に属するA調査区西端のB19h1、B19i1区で検出した。長辺2.8m以上、短辺2.7mの略方形の平面形を呈するが、西側は調査区外に伸びるため、全体の形状は不明である。深さ0.3mを測る。平行する2つの土坑が南北に並ぶように見えるが、埋土の堆積状況は同一で、最下層の薄い粘土層の上位に厚さ4cmに炭層が土坑全面に堆積する。

埋土中で検出された炭層の直上から多量の須恵器坏、高坏、壺、壺、甕（第337図1～21、図版187）、上師器甕、鍋、移動式カマド、製塙土器（第338図1～14、339図1～15、図版173・187）が出土した。また楕形滓（図版257-1）や滑石製白玉4点も出土している。出土した須恵器はI型式4～5段階に相当するものである。

#### 土坑B130567（第314図、図版62c・62d）

南西居住域に属するB調査区の南西半部のB18d10、B19d1区で検出した。平面形は長軸を東西に持つ不整形で、長軸3.8m、短軸1.2m、深さ0.2mを測った。検出時には確認できなかったが、

大小2基の不整円形状土坑が重複しているものと思われる。東側の土坑の埋土内から須恵器、土師器などとともに大量の製塙土器が出土した（第314図）。出土した須恵器はI型式3段階に相当するものである。

#### 土坑B130567出土遺物（第328図1～43、図版173）

埋土内から須恵器、土師器、製塙土器が出土した。図示し得たのは45点で、須恵器壺蓋（1～8）、須恵器高壺蓋（11・12）、須恵器高壺（9・10・13）、土師器高壺（14）、土師器甕（15～20）、移動式カマド（21）、製塙土器（22～43）などがある。

#### 土坑A1357（第315図、第639図10）

南西居住域に属するA調査区北西側のB18g10区で検出した。長辺2.8m、短辺1.7mの東西に長い長方形の平面形を呈する土坑で、深さ0.2mを測る。

埋土から須恵器壺、土師器甕、高壺、円筒形土器、楕円形の製塙土器（第341図1～18）、砥石（第639図10）が出土した。出土した須恵器はI型式5段階に相当するものである。

#### 土坑A1632（第316図、第639図8、図版67d）

南西居住域に属するA調査区西側のB18h10区で検出した。一辺0.9mの略方形の平面形を呈する土坑で、深さ0.4mを測る。

埋土は、人為的に埋め戻されたと考えられるブロック土が観察され、土坑底から0.1mの高さに揃って砥石（第639図8）と共に、製塙土器が破壊されない状態で出土した（第339図16～27、図版189）。また埋土から須恵器壺蓋、土師器甕（第339図28～30）、砥石（第639図8、図版249a）が出土した。出土した須恵器はI型式3段階に相当するものである。

#### 土坑A1639（第317図）

南西居住域に属するA調査区西側のB18h10、B18i10区で検出した。長軸1.2m、短軸0.8mの南北方向に長い楕円形の平面形を呈する土坑で、深さ0.3mを測る。

人為的に埋められたと考えられるブロック土を含む埋土の最上層から、須恵器高壺蓋、壺蓋、土師器甕が出土した（第339図31～34）。出土した須恵器はI型式3段階に相当するものである。

#### 土坑A1393（第318図）

南西居住域に属するA調査区南西端のC18b10区で検出した。径1.0mを測る略円形の平面形を呈する土坑で、深さ0.4mを測る。

埋土には炭が混入する。土師器甕、韓式系土器鉢が出土した（第341図24、25）。

#### 土坑A1165（第319図）

南西居住域に属するA調査区南西側のB18j10区で検出した。長辺0.8m、短辺0.4mの長方形の平面形を呈する土坑で、深さ0.15mを測る。

埋土から土師器把手鉢出土した（第341図23）。

#### 土坑E 0 9 0 4 4 7（第320図）

南西居住域に属するE調査区の南東半部のB19h4区で検出した。平面形は不整円形で、長軸3.5m、残存短軸2.9m、深さ0.28mを測った。埋土内から須恵器、土師器、韓式系土器、石製品などが出土した。出土した須恵器はI型式4段階に相当するものである。

#### 土坑E 0 9 0 4 4 7出土遺物（第348図1～6・第631図5、図版246b）

埋土内から須恵器、土師器、韓式系土器、石製品などが出土した。図示し得たのは7点で、須恵器壺蓋（1・2）、土師器鉢（3）、製塙土器（4）、土師器高壺（5）、韓式系土器鍋（6）、滑石製双孔円板（631-5、図版246b）などがある。

#### 溝E 0 9 0 4 4 6（第320図）

南西居住域に属するE調査区の南東半部のB19h4区で検出した。幅0.3m～0.68m、深さ0.37mを測った。埋土内から須恵器、土師器、製塙土器などが出土した。出土した須恵器はI型式5段階に相当するものである。

#### 溝E 0 9 0 4 4 6出土遺物（第348図7～21）

埋土内から須恵器、土師器、製塙土器などが出土した。図示し得たのは15点で、須恵器壺蓋（17）、須恵器無蓋高壺（18～20）、須恵器壺（21）、土師器瓶（13）、土師器鉢（14）、土師器甕（15・16）などがある。

#### 土坑A 1 3 9 4（第321図）

南西居住域に属するA調査区南西側のB18j9区で検出した。長軸1.5m、短軸1.0mの稍円形の平面形を呈する土坑で、深さ0.3mを測る。

埋土最上層から須恵器壺、土師器壺、韓式系土器等が出土した（第336図25～27、図版188）。

#### 溝A 1 2 3 1（第322図、図版69e）

南西居住域に属するA調査区中央部南側のC18b7からC18a8区で検出した。調査区中央部の南端から北西方向にやや弧を描き、溝A 1 1 9 2と並行する。幅1.5m～1.8m、深さ0.4mを測る。断面の形状はU字状を呈し、2段に掘削されている。

埋土は3層に分かれ、上層から須恵器壺、高壺、壺、甕（第342図）、土師器壺、甕（第343図1～13）が出土した。

出土した須恵器はI型式4段階に相当するものである。またウマ？の上下臼齒列が出土した。

ほかに滑石製白玉 8 点、台石が出土している。

#### 土坑A 8 1 8 (第255図)

南西居住域に属する A 調査区中央部南端の B18j6 区で検出した。長辺 0.7m、短辺 0.65m の略方形の平面形を呈する土坑で、深さ 0.25m を測る。

埋土から土師器甕、橢形の製塩土器が出土した (第336図1・2)。

#### 土坑A 6 3 0 (第255図)

南西居住域に属する A 調査区中央部の B18i6 区で検出した。長辺 3.2m、短辺 1.0m の長方形の平面形を呈する土坑で、深さ 0.25m を測る。

埋土から須恵器高壺蓋が出土した (第336図3)。出土した須恵器は I 型式 4 段階に相当するものである。

#### 土坑A 1 2 4 0 (第255図)

南西居住域に属する A 調査区中央部の B18j7 区で検出した。長軸 2.5m、短軸 1.5m の椭円形の平面形を呈する土坑で、深さ 0.25m を測る

埋土から須恵器壺、土師器甕の胴部が出土した (第336図6～9)。出土した須恵器は I 型式 5 段階に相当するものである。ほかに滑石製白玉が 2 点出土している。

#### 土坑A 9 5 8 (第255図)

南西居住域に属する A 調査区中央部北側の B18h7、B18h8、B18i8 区で検出した。長軸 5.6m、短軸 4.5m の不定形の平面形を呈する土坑で、深さ 0.15m を測る。

埋土から須恵器高壺、壺、土師器鉢、甕が出土した (第336図10～21)。出土した須恵器は I 型式 4 段階に相当するものである。ほかに滑石製白玉 1 点が出土している。

#### 土坑A 9 6 4 (第255図)

南西居住域に属する A 調査区中央部北側の B18h8 区で検出した。長辺 4.6m、短辺 2.0m の長方形の平面形を呈する土坑で、深さ 0.2m を測る。

埋土から土師器甕が出土した (第336図24)。

#### 土坑A 9 6 5 (第255図)

南西居住域に属する A 調査区中央部北側の B18h8、B18h9 区で検出した。長辺 5.6m、短辺 4.5m の略三角形の平面形を呈する土坑で、深さ 0.05m を測る。

埋土から須恵器壺蓋が出土した (第336図22)。出土した須恵器は I 型式 4～5 段階に相当す

るものである。

#### 土坑A 1367（第255図）

南西居住域に属するA調査区南西側のC18a9区で検出した。長軸0.55m、短軸0.4mの楕円形の平面形を呈する土坑で、深さ0.1mを測る。

埋土から須恵器坏身が出土した（第336図23）。出土した須恵器はI型式5段階に相当するものである。

#### 土坑A 1800（第255図、図版69c・69d）

南西居住域に属するA調査区西端のB19i1区で検出した。径4.0m以上の円形の平面形を呈するが、調査区壁際で検出され、西側は調査区外に伸びるため全体の形状は不明である。深さ0.7mを測る。

埋土は炭層を間層に挟み、上下2層に大別できる。埋土から須恵器坏、高坏、土師器壺、甕、坏、韓式系土器鍋、須恵器系土器高坏、製塩土器（第340図1～25）、滑石製臼玉4点が出土した。下層出土の土器は7～9、11～14、22である。出土した須恵器はI型式4～5段階に相当するものである。またウマの切歯、臼歯、哺乳類の骨片が出土した。

#### 土坑A 1771（第255図）

南西居住域に属するA調査区南西端のC19a1、C19b1区で検出した。径3.0m以上を測るが、調査区壁際で検出され、ほとんどの部分が調査区外に伸びるため、平面形は不明である。深さ0.2mを測る。

土坑底からやや浮いた状態で須恵器高坏、土師器壺、高坏が出土した（第340図26～32、図版188）。

#### 土坑A 1779（第255図）

南西居住域に属するA調査区北西端のB19g1区で検出した。長辺0.7m、短辺0.4mの長方形の平面形を呈する土坑で、深さ0.3mを測る。

埋土から土師器壺、甕（第341図19、20）、滑石製白玉5点が出土した。

#### 溝A 1359（第255図）

南西居住域に属するA調査区西側のB18g10区で検出した。長軸3.8m、短軸0.5mの楕円形の平面形を呈する土坑で、深さ0.3mを測る。豎穴住居A6、土坑A 1357と重複し、両遺構を破壊して構築されていた。

埋土から須恵器坏蓋が出土した（第341図22）。出土した須恵器はII型式4段階に相当するものである。

#### 土坑A 1 1 8 6 (第255図)

南西居住域に属するA調査区南西端のC18a10、C18b10、C19a1、C19b1区で検出した。長辺3.5m、短辺2.5mの方形の平面形を呈するが、南側は調査区外に伸びる。深さ0.1mを測る。

埋土から土師器鉢が出土した(第341図21)。

#### 土坑A 1 4 0 7 (第255図)

南西居住域に属するA調査区南西側のB18j10、C18a10区で検出した。長軸2.3m、短軸1.2mの略楕円形の平面形を呈する土坑で、深さ0.2mを測る。

埋土から須恵器壺、器台脚部(第341図26・28)、滑石製白玉7点が出土した。

#### 土坑A 1 1 8 7 (第255図)

南西居住域に属するA調査区南西端のC18a10、C18b10区で検出した。長軸8.0m、短軸2.0m以上の東西方向に長い楕円形の平面形を呈する土坑で、深さ0.25mを測る。

埋土から須恵器器台、土師器壺、高环、韓式系土器平底鉢が出土した(第341図27・29~32)。

#### 溝A 1 1 9 2 (第255図)

南西居住域に属するA調査区中央部南側のC18b6からB18j8区で検出した。調査区中央部の南端から北西方向に溝A 1 2 3 1と並行し、溝A 9 5 1に当たる。幅0.8m~2.5m、深さ0.3mを測る。断面の形状は浅いU字状を呈し、埋土は2層に分かれる。

埋土から土師器高环、甕、韓式系土器平底鉢が出土した(第343図14~18)。

#### 溝A 1 2 2 9 (第255図)

南西居住域に属するA調査区中央部南側のC18a7区で検出した。調査区中央部の南側で溝A 1 1 9 2と溝A 1 2 3 1の間で北西方向に並行する。幅1.0m、深さ0.2mを測る。断面の形状は浅いU字状を呈する。

埋土から土師器甕が出土した(第344図1)。

#### 溝A 1 1 9 4 (第255図)

南西居住域に属するA調査区南側のC18j7からC18i10区で検出した。東側では、溝A 1 2 1 6を挟んで溝A 1 2 3 1とつながり、北に一度折れた後、北西方向に再度方向を変える。溝A 1 1 9 2と並行し、溝A 9 5 1に流れ込む。幅0.7m~1.5m、深さ0.25mを測る。断面の形状はU字状を呈する。埋土から土師器高环、甕、韓式系土器鉢が出土した(第344図2~6)。

## 溝A 1 1 8 9（第255図）

南西居住域に属するA調査区B18j9からC18b9区で検出した。調査区西側の南端から南北方向に、溝A 1 2 1 5と並行するように検出され、南は調査区外へ、北は溝A 1 1 9 4に当たる。幅1.5m～2.5m、深さ0.2mを測る。断面の形状はU字状を呈し、埋土は2層に分かれれる。

埋土から須恵器壺、土師器高杯、甕が出土した（第344図15～18）。

## 溝A 1 2 4 4（第255図）

南西居住域に属するA調査区中央部のB18i8からB18h10区の、溝A 9 5 1の中央最深部で検出した。幅1.0m～2.4m、深さ0.2mを測る。断面の形状は浅いU字状を呈する。

埋土から須恵器环、壺、甕が出土した（第344図7～14）。出土した須恵器はI型式5段階に相当するものである。

## 溝A 9 5 1（第255図）

南西居住域に属するA調査区中央部から西側のB18h7、B18i7からB19g1、B19i1区で東西方向に検出した幅の広い溝である。幅9.0m～15.0m、深さ0.2mを測る。

埋土から須恵器高杯、环、甕、土師器鉢、韓式系土器平底鉢、瓶（第344図19～28・30）、滑石製勾玉（第623図1、図版243b）、有孔円板、滑石製白玉17点、敲石が出土した。出土した須恵器はI型式5段階に相当するものである。また、ウマの臼歯、哺乳類の骨片が出土した。

## 溝A 9 5 7（第255図）

南西居住域に属するA調査区中央部のB18h7からB18j7区で南北方向に検出した。幅0.8m、深さ0.4mを測る。断面の形状はU字状を呈し、埋土は3層に分かれれる。

埋土上層から土師器鉢、韓式系上器甕が出土した（第345図1・2、図版182）。

## 溝A 1 2 1 5（第255図）

南西居住域に属するA調査区南側のC18a8からC18b8区で検出した。調査区西側の南端から南北方向に溝A 1 1 8 9と並行するように検出され、南は調査区外へ、北は溝A 1 2 3 1に当たる。幅1.3m、深さ0.1mを測る。断面の形状は浅いU字状を呈し、埋土は2層に分かれれるが、下層は北から続く溝A 1 2 2 4の埋土である。溝A 1 2 2 4から須恵器高杯（第344図29）が出土。

埋土から須恵器台付壺、土師器甕・鉢が出土した（第345図3～7）。

## 溝A 1 2 2 2（第255図）

南西居住域に属するA調査区中央部のB18j8区で南北方向に検出した。幅0.9m、深さ0.15mを測る。断面の形状はU字状を呈する。

埋土から須恵器甕、土師器高坏が出土した（第345図8・10）。

#### 溝A1241（第255図）

南西居住域に属するA調査区中央部のB18h7からB18i8区で南北方向に検出した。幅1.0m～1.4m、深さ0.2mを測る。断面の形状はU字状を呈する。

埋土から須恵器甕が出土した（第345図9）。

#### 溝A1216（第255図）

南西居住域に属するA調査区南側のB18j8からC18a8区で南北方向に検出した。幅1.0m～1.5m、深さ0.35mを測る。断面の形状はU字状を呈する。

埋土から須恵器坏、土師器鉢、甕が出土した（第346図1～9）。

#### 溝A1399（第255図）

南西居住域に属するA調査区南側のB18j8区で東西方向に検出した。幅0.5m～2.5m、深さ0.1mを測る。断面の形状は浅いU字状を呈する。

埋土から須恵器甕が出土した（第346図10）。

#### 土坑E090153（第257図）

南西居住域に属するE調査区の北東半部のB19e4、B19e5区で検出した。平面形は不定形で、長軸4.9m、短軸1.8m、深さ0.2mを測った。埋土内から韓式系土器、土師器、石製品などが出土した。

#### 土坑E090153出土遺物（第347図3～5）

埋土内から韓式系土器、土師器、石製品などが出土した。図示し得たのは3点で、韓式系土器鉢（3・4）、土師器高坏（5）、滑石製臼玉1点などがある。

#### 土坑E090219（第257図）

南西居住域に属するE調査区の東半部中央のB19f5区で検出した。平面形は不整橢円形で、長軸2.2m、短軸1.6m、深さ0.28mを測った。埋土内から土師器等が出土した。

#### 土坑E090219出土遺物（第347図17）

埋土内から土師器が出土した。図示し得たのは1点で、韓式系土器平底鉢（17）である。

#### ビットE090501（第257図）

南西居住域に属するE調査区の北東半部の、B19e4区で検出した。平面形は円形で、径0.5m、深さ0.2mを測った。埋土内から土師器が出土した。

**ピットE 090501出土遺物（第347図1）**

埋土内から土師器が出土した。図示し得たのは1点で、土師器甕（1）である。

**ピットE 090517（第257図）**

南西居住域に属するE調査区の北東半部のB19e5区で検出した。平面形は楕円形で、長軸0.36m、短軸0.32m、深さ8cmを測った。埋土内から土師器が出土した。

**ピットE 090517出土遺物（第347図2）**

埋土内から土師器が出土した。図示し得たのは1点で、土師器甕（2）である。

**ピットE 090129（第257図）**

南西居住域に属するE調査区の東半部中央やや北寄りのB19f5区で検出した。平面形は不整円形で、長軸0.42m、短軸0.36m、深さ0.1mを測った。埋土内から土師器が出土した。

**ピットE 090129出土遺物（第347図6）**

埋土内から土師器が出土した。図示し得たのは1点で、土師器高坏（6）である。

**ピットE 090143（第257図）**

南西居住域に属するE調査区の北東半部の、B19e5区で検出した。平面形は楕円形で、長軸0.65m、短軸0.6m、深さ7cmを測った。埋土内から土師器が出土した。

**ピットE 090143出土遺物（第347図7）**

埋土内から土師器が出土した。図示し得たのは1点で、土師器甕（7）である。

**ピットE 091138（第257図）**

南西居住域に属するE調査区の北東半部東半中央やや北寄りのB19f5区で検出した。平面形は不整楕円形で、長軸0.56m、短軸0.35m、深さ8cmを測った。埋土内から土師器が出土した。

**ピットE 091138出土遺物（第347図8）**

埋土内から土師器が出土した。図示し得たのは1点で、土師器甕（8）である。

**溝E 090524（第257図）**

南西居住域に属するE調査区の東半部中央のB19e4区で検出した。平面形は楕円形で、長軸0.4m、短軸0.34m、深さ9cmを測った。埋土内から土師器、須恵器などが出土した。

**溝E 090524出土遺物（第347図9～12、第646図4、図版258）**

埋土内から韓式系上器、土師器、須恵器などが出土した。図示し得たのは5点で、韓式系土器甕（9）、土師器高坏（10・11）、須恵器鉢（12）、縁の羽口（646-4）が出土している。

**ピット E 0 9 0 5 2 5 (第 257 図)**

南西居住域に属するE調査区の東半部中央のB19e5区で検出した。平面形は円形で、径 0.65m、深さ 0.08m を測った。埋土内から須恵器が出土した。

**ピット E 0 9 0 5 2 5 出土遺物 (第 323 図 15)**

埋土内から須恵器が出土した。図示し得たのは 1 点で、須恵器壺 (15) である。

**ピット E 0 9 0 9 4 4 (第 258 図)**

南西居住域に属するE調査区の南東半部のB19i4区で検出した。平面形は楕円形で、長軸 0.5m、短軸 0.2m、深さ 0.2m を測った。埋土内から須恵器が出土した。出土した須恵器は I 型式 4段階に相当するものである。

**ピット E 0 9 0 9 4 4 出土遺物 (第 349 図 11)**

埋土内から須恵器が出土した。図示し得たのは 1 点で、須恵器壺 (11) である。

**土坑 E 0 9 0 2 5 8 (第 258 図)**

南西居住域に属するE調査区の東半部中央やや南寄りのB19g5区で検出した。平面形は不定形で、長軸 2.25m、短軸 1.0m、深さ 0.15m を測った。埋土内から須恵器が出土した。出土した須恵器は II 型式 2段階に相当するものである。

**土坑 E 0 9 0 2 5 8 出土遺物 (第 347 図 19)**

埋土内から須恵器が出土した。図示し得たのは 1 点で、須恵器壺蓋 (19) である。

**土坑 E 0 9 0 8 7 1 (第 258 図)**

南西居住域に属するE調査区の東半部中央やや南寄りのB19g5区で検出した。平面形は不整形で、長軸 0.56m、短軸 0.46m、深さ 0.3m を測った。埋土内から土師器が出土した。

**土坑 E 0 9 0 8 7 1 出土遺物 (第 347 図 21)**

埋土内から土師器が出土した。図示し得たのは 1 点で、土師器壺 (21) である。

**ピット E 0 9 0 8 7 8 (第 258 図)**

南西居住域に属するE調査区の東半部中央やや南寄りのB19g5区で検出した。平面形は不整形で、長軸 0.56m、短軸 0.44m、深さ 0.26m を測った。埋土内から須恵器が出土した。

**ピット E 0 9 0 8 7 8 出土遺物 (第 347 図 20)**

埋土内から須恵器が出土した。図示し得たのは 1 点で、須恵器壺 (20) である。

**ピット E 0 9 0 2 8 4 (第 258 図)**

南西居住域に属するE調査区の東半部中央やや南寄りのB19g4区で検出した。平面形は不整形

円形で、溝E 0 9 0 2 8 3に切られている。長軸0.5m、短軸0.15m、深さ0.05mを測った。埋土内から土師器が出土した。

#### ピットE 0 9 0 2 8 4 出土遺物（第347図22）

埋土内から土師器が出土した。図示し得たのは1点で、土師器甕（22）である。

#### ピットE 0 9 0 2 9 0（第258図）

南西居住域に属するE調査区の東半部中央やや南寄りのB19g4区で検出した。平面形は不規円形で、径0.6m、深さ0.1mを測った。埋土内から須恵器、土師器などが出土した。出土した須恵器はI型式5段階に相当するものである。

#### ピットE 0 9 0 2 9 0 出土遺物（第347図23～25）

埋土内から須恵器、土師器などが出土した。図示し得たのは3点で、須恵器坏蓋（23）、須恵器坏身（24）、土師器壺（25）などがある。

#### 土坑E 0 9 0 8 3 2（第258図）

南西居住域に属するE調査区の東半部中央やや南寄りのB19g4区で検出した。平面形は隅丸方形で、溝E 0 9 0 2 8 3に切られている。長軸0.475m、残存短軸0.22m、深さ0.04mを測った。埋土内から韓式系土器が出土した。

#### 土坑E 0 9 0 8 3 2 出土遺物（第347図26・27）

埋土内から韓式系土器が出土した。図示し得たのは2点で、韓式系土器平底鉢（26・27）である。

#### ピットE 0 9 1 1 2 0（第258図）

南西居住域に属するE調査区の南東半部のB19h4区で検出した。平面形は不整円形で、竪穴住居E 8に切られている。残存長軸4.38m、残存短軸0.7m、深さ0.1mを測った。埋土内から須恵器が出土した。出土した須恵器はI型式5段階に相当するものである。

#### ピットE 0 9 1 1 2 0 出土遺物（第347図28）

埋土内から須恵器が出土した。図示し得たのは1点で、須恵器高坏（28）である。

#### 溝E 0 9 0 7 4 6（第258図）

南西居住域に属するE調査区の南東半部のB19h4区で検出した。平面形は楕円形で、長軸6.0m、残存短軸2.7m、深さ0.15mを測った。埋土内から土師器が出土した。

#### 溝E 0 9 0 7 4 6 出土遺物（第347図29）

埋土内から土師器が出土した。図示し得たのは1点で、土師器甕（29）である。

ピットE 0 9 0 7 5 2 (第258図)

南西居住域に属するE調査区の南東半部のB19h4区で検出した。平面形は楕円形で、残存長軸0.5m、残存短軸0.4m、深さ0.26mを測った。埋土内から土師器が出土した。

ピットE 0 9 0 7 5 2 出土遺物 (第347図30・31)

埋土内から土師器が出土した。図示し得たのは2点で、土師器壺(30)、土師器高壺(31)である。

ピットE 0 9 0 8 7 5 (第258図)

南西居住域に属するE調査区の南東半部のB19h4区で検出した。平面のほとんどを南接する掘立柱建物E8に切られており、詳細は不明である。埋土内から須恵器が出土した。出土した須恵器はII型式1段階に相当するものである。

ピットE 0 9 0 8 7 5 出土遺物 (第347図32)

埋土内から須恵器が出土した。図示し得たのは1点で、須恵器壺蓋(32)である。

溝E 0 9 0 7 4 9 (第258図)

南西居住域に属するE調査区の南東半部のB19h4区で検出した。平面のほとんどを隣接する複数の造構に切られており、詳細は不明だが、わずかな残存部の幅0.35m、深さ0.1mを測った。埋土内から須恵器、土師器、韓式系土器などが出土した。出土した須恵器はI型式3段階に相当するものである。

溝E 0 9 0 7 4 9 出土遺物 (第348図22~29)

埋土内から須恵器、土師器、韓式系土器などが出土した。図示し得たのは8点で、須恵器壺蓋(23・24)、須恵器高壺(25)、韓式系上器壺(26)、土師器壺(27・28)、土師器移動式カマド(29)などがある。

土坑E 0 9 0 7 5 0 (第258図)

南西居住域に属するE調査区の南東半部のB19h4区で検出した。平面形は不整楕円形で、長軸1.4m、残存短軸0.9m、深さ0.25mを測った。埋土内から須恵器、土師器が出土した。出土した須恵器はI型式5段階に相当するものである。

土坑E 0 9 0 7 5 0 出土遺物 (第349図1~6)

埋土内から須恵器、土師器が出土した。図示し得たのは6点で、須恵器壺蓋(1)、須恵器壺身(2)、須恵器無蓋高壺(3・4)、韓式系土器壺(5)、土師器壺(6)などがある。

土坑E 0 9 0 4 3 9 (第258図)

南西居住域に属するE調査区の南東半部のB19i5区で検出した。平面形は不整楕円形で、長

軸 0.8m、残存短軸 0.7m、深さ 0.05m を測った。埋土内から須恵器が出土した。

#### 土坑 E 0 9 0 4 3 9 出土遺物（第 349 図 8）

埋土内から須恵器が出土した。図示し得たのは 1 点で、須恵器甕（8）である。

#### ピット E 0 9 0 3 3 2（第 258 図）

南西居住域に属する E 調査区の南東半部の B19h5 区で検出した。平面形は楕円形で、長軸 0.7m、残存短軸 0.58m、深さ 0.12m を測った。埋土内から土師器が出土した。

#### ピット E 0 9 0 3 3 2 出土遺物（第 349 図 9）

埋土内から土師器が出土した。図示し得たのは 1 点で、製塙土器（9）である。

#### 土坑 E 0 9 0 8 4 4（第 258 図）

南西居住域に属する E 調査区の南東半部の B19h5 区で検出した。平面形は不整楕円形で、長軸 1.5m、残存短軸 1.2m、深さ 0.4m を測った。埋土内から土師器が出土した。

#### 土坑 E 0 9 0 8 4 4 出土遺物（第 349 図 10）

埋土内から土師器が出土した。図示し得たのは 1 点で、土師器甕（10）である。

#### ピット E 0 9 0 9 4 7（第 258 図）

南西居住域に属する E 調査区の南東半部の B19i4 区で検出した。平面形は楕円形で、長軸 0.34m、残存短軸 0.3m、深さ 0.1m を測った。埋土内から須恵器が出土した。出土した須恵器は I 型式 5 段階に相当するものである。

#### ピット E 0 9 0 9 4 7 出土遺物（第 349 図 12）

埋土内から須恵器が出土した。図示し得たのは 1 点で、須恵器壺蓋（12）である。

#### ピット E 0 9 0 7 5 5（第 258 図）

南西居住域に属する E 調査区の南東半部の B19i4 区で検出した。平面形は楕円形で、長軸 0.7m、残存短軸 0.6m、深さ 0.08m を測った。埋土内から須恵器が出土した。出土した須恵器は I 型式 4 段階に相当するものである。

#### ピット E 0 9 0 7 5 5 出土遺物（第 349 図 13）

埋土内から須恵器が出土した。図示し得たのは 1 点で、須恵器無蓋高壺（13）である。

#### ピット E 0 9 0 9 4 1（第 258 図）

南西居住域に属する E 調査区の南東半部の B19h4 区で検出した。平面形は楕円形で、長軸 0.5m、短軸 0.45m、深さ 0.3m を測った。埋土内から土師器が出土した。

#### ピット E 0 9 0 9 4 1 出土遺物（第 349 図 14）

埋土内から土師器が出土した。図示し得たのは1点で、製塙土器（14）である。

#### 土坑E 0 9 0 9 3 3（第258図）

南西居住域に属するE調査区の南東半部のB19i4区で検出した。平面形は不整橢円形で、長軸1.0m、短軸0.7m、深さ0.14mを測った。埋土内から土師器が出土した。

#### 土坑E 0 9 0 9 3 3出土遺物（第349図15）

埋土内から土師器が出土した。図示し得たのは1点で、製塙土器（15）である。

#### 土坑E 0 9 0 9 3 6（第258図）

南西居住域に属するE調査区の南東半部のB19i4区で検出した。平面形は不定形で、長軸0.9m、短軸0.85m、深さ0.29mを測った。埋土内から須恵器、土師器が出土した。出土した須恵器はI型式4段階に相当するものである。

#### 土坑E 0 9 0 9 3 6出土遺物（第349図16・17）

埋土内から須恵器、土師器が出土した。図示し得たのは2点で、須恵器坏蓋（17）、土師器甕（16）などがある。

#### ピットE 0 9 0 9 2 5（第258図）

南西居住域に属するE調査区の南東半部のB19i5区で検出した。平面形は楕円形で、長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.07mを測った。埋土内から須恵器が出土した。出土した須恵器はII型式1段階に相当するものである。

#### ピットE 0 9 0 9 2 5出土遺物（第349図18）

埋土内から須恵器が出土した。図示し得たのは1点で、須恵器坏身（18）である。

#### 土坑E 0 9 0 9 0 0（第258図）

南西居住域に属するE調査区の南東半部のB19i4区で検出した。平面形は不定形で、長軸5.0m、残存短軸1.4m、深さ0.07mを測った。埋土内から土師器が出土した。

#### 土坑E 0 9 0 9 0 0出土遺物（第349図19）

埋土内から土師器が出土した。図示し得たのは1点で、土師器甕（19）である。

#### 土坑E 0 9 0 9 4 8（第258図）

南西居住域に属するE調査区の南東半部のB19i5、B19i5区で検出した。平面形は不整円形で、長軸2.35m、短軸2.25m、深さ0.2mを測った。埋土内から土師器が出土した。

#### 土坑E 0 9 0 9 4 8出土遺物（第349図20）

埋土内から土師器が出土した。図示し得たのは1点で、土師器高坏（20）である。

**ピットE 090950（第258図）**

南西居住域に属するE調査区の南東半部のB19j5区で検出した。平面形は不整梢円形で、長軸0.9m、短軸0.75m、深さ0.2mを測った。埋土内から須恵器が出土した。

**ピットE 090950出土遺物（第349図21・22）**

埋土内から須恵器が出土した。図示し得たのは2点で、須恵器坏蓋（21）、須恵器無蓋高坏（22）などがある。

**土坑E 091000（第258図）**

南西居住域に属するE調査区の南端部中央付近のB19j6区で検出した。平面形は不整梢円形で、長軸5.8m、短軸3.0m、深さ0.48mを測った。埋土内から須恵器、土師器、U字形板状土製品などが出土した。

**土坑E 091000出土遺物（第349図23）**

埋土内から須恵器、土師器、U字形板状土製品（資料No.205）などが出土した。図示し得たのは1点で、須恵器提瓶（23）である。

**ピットE 091048（第258図）**

南西居住域に属するE調査区の南東端部のB19j4区で検出した。平面形は梢円形で、長軸0.58m、短軸0.52m、深さ0.2mを測った。埋土内から土師器が出土した。

**ピットE 091048出土遺物（第349図24）**

埋土内から土師器が出土した。図示し得たのは1点で、土師器甕（24）である。

**ピットE 091007（第258図）**

南西居住域に属するE調査区の南東端部のB19j4区で検出した。平面形は不整梢円形で、長軸0.7m、短軸0.6m、深さ0.15mを測った。埋土内から土師器が出土した。

**ピットE 091007出土遺物（第349図25）**

埋土内から土師器が出土した。図示し得たのは1点で、土師器坏（25）である。

**ピットE 091032（第258図）**

南西居住域に属するE調査区の南端部中央やや東寄りのB19j6区で検出した。平面形は不整梢円形で、長軸0.56m、短軸0.5m、深さ0.09mを測った。埋土内から須恵器が出土した。出土した須恵器はI型式3段階に相当するものである。

**ピットE 091032出土遺物（第349図26）**

埋土内から須恵器が出土した。図示し得たのは1点で、須恵器坏身（26）である。

## 溝B130236（図版121a～121d）

南西居住域の北東部の居住域外にあたるB調査区の南西半部のB18d9、B18d8、B18e8、B18e7区で検出した。区画溝B130240の東側を北西から南東方向に直線的に走る溝で、北端部は上段と中段の境目あたりで終り、南端部はA調査区の北端部で終わる。幅0.5m～1m、深さ0.2m～0.3mを測った。

## 溝B130236出土遺物（第494図1～8、図版168）

埋立内から須恵器、土師器、韓式系上器、滑石製白玉1点などが出土した。図示し得たのは8点で、須恵器高壺蓋（1）、須恵器無蓋高壺（2）、土師器壺（3～7）、韓式系土器羽釜（8、図版168）などがある。出土した須恵器はI型式3段階に相当するものである。

## 第4項 北西居住域の遺構と遺物

北西居住域はD-1調査区の全域とD-2調査区の西半部が相当する（第39図）。豊穴住居25棟、掘立柱建物16棟、井戸3基などが検出されている。北西居住域の全体図は第350図に示す。豊穴住居、掘立柱建物、井戸、その他の主要な土坑、ピット等は個別に遺構平面図・断面図を作成した。遺構の記述は豊穴住居、掘立柱建物、井戸、土坑、ピットの順に掲載している。

## 豊穴住居

北西居住域で検出した豊穴住居は25棟で、5世紀のもの13棟、6世紀のもの11棟、時期不明1棟である。5世紀中頃以前のものは豊穴住居D5・8・21・22、最も新しいものは6世紀後半から末の豊穴住居D20である。

## 豊穴住居D1（第351図・第352図、図版80・84）

D-1調査区の南西、A20e1区で検出した。東側の大部分は、豊穴住居D2に切られている。検出面の標高はT.P.1.53m、床面の標高は1.43～1.45mで、床面までの最大深は10cmを測る。北辺の中央にカマドD1645を設けている。

平面形は隅丸正方形を呈し、規模は主軸方向4.1m、直交方向4.1mで、主軸方位はN-17.5°-Wである。床面で確認しているピットD1428・1429・1430・1431の内、ピットD1428・1430は主柱穴と考えられ、柱間寸法は2.16m。柱掘方の平面はほぼ円形を呈し、径は0.45m、深さは0.15～0.33mで、平均0.24m。

カマドD1645は、上部が削平され、焚口は豊穴住居D2によって削平されている。カマド部分の北壁は内側に幅0.7m、長さ0.5mほど入り込んでいる。土師器の高壺2点（第415図1・3）を倒立させて支脚としている。カマド床面（炭層下面）の標高はT.P.1.45m。

### 豎穴住居D 1 出土遺物（第415図1～3、図版190）

カマドD 1 6 4 5から高環部片2点(1・3)。いずれも支脚として転用されていた。(1)は口径13.4cmを測る楕円高環で、下位より出土した。(3)は口径22.8cmを測る大型の高環である。環部内面はヘラミガキ後に、上位にヨコハケ調整、外面はヨコナデで、下端には一部ハケメが認められる。(2)は床面で出土した土師器高環(環部のみ)である。時期は豎穴住居D 2に切られていることから、5世紀中頃以前と考えられる。

### 豎穴住居D 2（第353図・354図、図版80・84）

D-1調査区の南西、A20e1区～A19e10区に跨って検出した豎穴住居で、壁溝D 1 3 1 6をもつ。土坑D 9 9 0・1 3 1 7・1 3 2 1、ピットD 1 2 9 5・1 3 1 8に切られ、豎穴住居D 1を切っている。検出面の標高はT.P.1.56m、床面の標高は1.3～1.4mで、床面までの深さ20cmを測る。西北辺の中央にカマドD 1 4 3 5を設けている。

平面形は隅丸方形を呈し、規模は主軸方向5.75m、直交方向5.6mで、主軸方位はN-26°-Wである。ピットD 1 2 9 4・1 3 3 6・1 3 3 9・1 3 7 7は主柱穴で、平均柱間は主軸方向が2.75m、直交方向が2.62mで、主軸方向の柱間がやや長い。柱掘方の平面は円形、隅丸方形を呈し、径は0.45～0.89m、平均0.68m、深さは0.59～0.69mで、平均0.64m。

カマドD 1 4 3 5は長さ約1.2m、幅約0.75mを測る。土師器の變形土器（第415図18）を倒立させて支脚としている。カマド床面（炭層下面）の標高はT.P.1.35m。

### 豎穴住居D 2 出土遺物（第415図4～18、第626図、図版190）

豎穴住居覆土内から須恵器环身(5・6)、环蓋(4)、土師器小型鉢(13)、壁溝D 1 3 1 6の上面から須恵器壺(9)、壁溝内から須恵器环蓋・环身(7・8)、ピットD 1 3 7 7から土師器小型壺(14)、床面下からI型式3段階の須恵器环身(11)、土師器浅鉢(10)、土製紡錘車（第626図3）、床面直上から土師器直口壺(12)が出土している。カマドD 1 4 3 5からは土師器高環(15)・甕(16・18)・瓶(17)が出土している。甕(18)はカマドの支脚で、口径13cm、器高16.8cmを測る。土師器高環(15)は(18)の上に重なり、甕(16)・瓶(17)はカマド内部の西側から出土した。

須恵器环身(6)は底部・口縁部が破損しているため全体のプロボーションは明らかでないが、口縁部の立ち上がりが弱いことから当初、II型式3段階の須恵器环身と考え、豎穴住居の時期を6世紀後半としていた<sup>(註5)</sup>。しかし、これ以外に6世紀にくだる土器が出土していないこと、そして外面のヘラミガキ調整の範囲が広く、丁寧な点と胎土がやや甘い点などから、通有の須恵器でない可能性も考えられ、豎穴住居の時期を判断する材料から除外した。したがって、豎穴住居廃絶の時期は、覆土内より出土した(4～6)から5世紀後半頃と推定される。

### 豎穴住居D 3（第355図、第356図、図版83b・85）

D-1調査区の南半部、A19e10区で検出した竪穴住居で、壁溝D1406をもつ。竪穴住居D2の約1.5m東側に位置する。掘立柱建物D5のピットD1069・1068・1067・1411、竪穴住居D4に切られ、竪穴住居D5・21・22を切っている。検出面の標高はT.P.1.46m、床面の標高は1.2~1.28mで、床面までの深さ0.2~0.26mを測る。北西辺の中央にカマドD1646を設けているが、遺存状況は悪い。

平面形は隅丸方形を呈し、規模は主軸方向5.85m、直交方向5.8mで、主軸方位はE-28°-NであるD-1409・1612・1615・1658は主柱穴で、平均柱間は主軸方向が3.00m、直交方向が3.03m。柱痕跡は柱穴D1612・1658で確認され、径約20cm。柱掘方の平面はほぼ円形を呈し、径は0.5~0.93m、平均0.643m、深さは0.59~0.86mで、平均0.73m。

カマドD1646は長さ約1.0m、幅約0.7m測るもの、遺存状況は悪く、D-1調査区のほとんどのカマドで検出された支脚（甕形土器）は検出されなかった。カマド床面（炭層下面）の標高はT.P.1.15m。

#### 竪穴住居D3出土遺物（第415図19~23、第626図12、図版190）

埋土中から、須恵器壺蓋（21）・坏身（22）、縦方向の平行タタキメを施す韓式系土器瓶（23）、韓式系土器鍋（19）、土製紡錘車（第626図12）、砥石（第639図6）、壁溝D1406から須恵器無蓋高坏部片（20）が出土している。

なお、須恵器壺蓋（21）の一部はカマド内から出土したものと接合した。砥石（第639図6）の材質は流紋岩。遺構の時期は（22）がI型式5段階に相当することから、5世紀後半頃と推定される。

#### 竪穴住居D4（第357図、第358図、図版86）

D-1調査区の南半中央、A19e~f10区で検出した。掘立柱建物D17、ピットD1077・1078・1234・1602・1910、溝D902に切られ、竪穴住居D3・8を切っている。検出面の標高はT.P.1.38m、床面の標高は1.25~1.30mで、床面までの深さ8~13cmを測る。北西辺の中央より南東寄りにカマドD1469を設けている。

平面形は方形を呈し、規模は主軸方向5.05m、直交方向4.85mで、主軸方位はN-33.5°-Eである。主柱穴は検出できなかった。

カマドD1469は長さ約1.2m、幅約0.7m測る。土師器の甕形土器（第415図26）を倒立てて支脚としている。カマド床面（炭層下面）の標高はT.P.1.22m。

#### 竪穴住居D4出土遺物（第415図24~29、第416図1~4、第640図3・6、図版190・250a）

床面直下の整地層中から土師器移動式カマド（29）、須恵器甕（3）、土師器浅鉢（2）、砂岩製の砥石（第640図6）、カマドD1469から土師器移動式カマド（28）、土師器浅鉢（24）、タタキメのない製塙土器、カマド西側の床面から流紋岩製の砥石（第640図3、図版250）、カマド南東側の床面から土師器甕（25）、埋土中からは製塙土器（27）、土師器浅鉢（1・4）が出土して

いる。(1・4) は二次的に火を受ける。移動式カマド (28・29) はいずれも生駒西麓製の胎土で、外面は平行タタキメ、内面はナデで、(29) の天井部外面の上端はヘラケズリ調整を施している。

土師器甕 (第 415 図 26) はカマドの支脚で、口径 11.5cm、器高 12.9cm を測る。遺構の時期は出土遺物から、5 世紀後半と考えられる。

#### 竪穴住居 D 5 (第 359 図、第 360 図、図版 87b)

D - 1 調査区の南半部中央、A19e9 ~ 10 区で検出した。竪穴住居 D 3・8 に切られている。検出面の標高は T.P.1.38m、床面の標高は 1.2 ~ 1.26m で、床面までの深さ 12 ~ 18cm を測る。北西辺にカマド D 1 6 4 7 を設けているが、遺存状況は悪い。

平面形は隅丸方形？を呈し、規模は主軸方向 5.0m 以上、直交方向 3.0m 以上で、主軸方位は N -9° - E である。主柱穴は検出できなかった。

カマド D 1 6 4 7 は長さ約 1.0m、幅約 0.8m を測る。カマド内からは支脚等は検出できなかった。カマド床面（炭層下面）の標高は T.P.1.26m。

#### 竪穴住居 D 5 出土遺物 (第 416 図 5・6、図版 190)

埋土中から須恵器壺蓋 (5)、カマドの西側から土師器浅鉢 (6)、カマド周辺から須恵器器台、土師器甕形上器片が出土している。土師器甕形土器片は二次的に火を受け赤色化している。遺構の時期は切り合い関係から、5 世紀中頃以前と考えられる。

#### 竪穴住居 D 8 (第 360 図、第 361 図、図版 87)

D - 1 調査区、A19e ~ f9 区で検出した竪穴住居で、壁溝 D 1 3 6 9 をもつ。竪穴住居 D 4、掘立柱建物 D 6、溝 D 9 0 2 に切られ、竪穴住居 D 5 を切っている。検出面の標高は T.P.1.38m、床面の標高は 1.2 ~ 1.25m。床面までの深さ 0.14 ~ 0.2m。北東辺の中央南東寄りにカマド D 1 5 7 3 を設けている。

平面形は隅丸方形を呈し、規模は主軸方向 5.78m、直交方向 5.42m で、主軸方位は E -38° - N である。D 1 5 7 7 - 1 6 6 9 - 1 9 6 7 - 1 9 7 0 は主柱穴で、平均柱間は主軸方向が 3.10m、直交方向が 3.25m で、直交方向の柱間がやや長い。柱掘方の平面はほぼ円形を呈し、径は 0.54 ~ 0.86m、平均 0.668m、深さは 0.53 ~ 0.76m で、平均 0.618m。

カマド D 1 5 7 3 は長さ約 1.0m、幅約 0.9m を測る。土師器の甕形土器 (第 416 図 12) を倒立させて支脚としている。支脚周辺からカマドの南東床面にかけて韓式系土器甕 (第 416 図 13) が出土した。また、カマドのすぐ北西床面から I 型式 3 段階の須恵器壺蓋 (第 416 図 10)、カマドのすぐ南東床面から滑石製紡錘車 (第 625 図 5、図版 244) が出土している。なお、カマド床面（炭層下面）の標高は T.P.1.18m。

#### 竪穴住居 D 8 出土遺物 (第 416 図 7 ~ 13、第 625 図 5、図版 191)

埋土中から、土師器甕 (7)・複合口縁甕 (9)、床面から I 型式 3 段階の須恵器壺蓋 (10)、高

壺蓋（8）、土師器甕（11）、滑石製紡錘車（第625図5）、カマドD1573内部から床面にかけて韓式系土器甕（13）が出土している。（13）は底部の大半が破損しているが、口径26.6cm、器高31.3cm、底径13cmを測る軟質の赤焼き系土器。体部中位に水平方向の浅い沈線を巡らし、その位置に左右一対の牛角状把手を上向きに取り付けている。把手の上面には切り込みを入れ、下面側には、製作～乾燥時の支えとして使用した植物茎の痕跡と考えられる竹管文状のスタンプ痕が認められた。蒸気孔は中央に1個と周間に5個（推定8個）以上の円孔を巡らすタイプ。体部外面には縦方向の平行タキメ後に回転ヨコナデ、内面はナデ調整を施している。口縁部は内外面ともに回転ヨコナデ、底部下端の外面はヘラケズリ調整を施す。上師器甕（12）はカマドの支脚で、口径12.2cm、器高12.8cmを測り、口縁部～肩部にかけての外面は赤変している。出土遺物から遺構の時期は5世紀中頃と考えられる。

#### 豎穴住居D9（第362図）

D-1調査区の北西、A20d1区で検出した。掘立柱建物D16、ピットD940・944～946・948、溝D921に切られている。検出面の標高はT.P.1.49mで、床面までの深さ約10cm。主柱穴、カマドなどは未検出である。

平面形は方形で、長軸3.6m、短軸3.15mで、方位はN-26°-Wである。埋土から土師器の小片が出土しているが、遺構の時期を特定できるものや図化できるものはなかった。

#### 豎穴住居D10（第363図、図版83a）

D-1調査区の北端中央、A19c9～10区で検出した。北側は調査範囲外に伸びる。豎穴住居D11・25と重複し、これらを切っている。なお、豎穴住居D10の東側部分は、豎穴住居D24として調査していたが後に、同一の遺構であることが明らかとなる。検出面の標高はT.P.1.3m、床面の標高は1.15mで、床面までの深さ0.15mを測る。カマドは未検出である。

平面形は方形を呈し、長軸4.9m以上、短軸3.0m以上で、方位はN-65.5°-Eである。ピットD1413・1952は主柱穴で、柱間寸法は2.6mを測る。柱掘方の平面は梢円形を呈し、径は0.44～0.5m、平均0.47m、深さは0.3～0.37mで、平均0.335m。

#### 豎穴住居D10出土遺物（第416図14～16、図版191）

床面直下からII型式3段階（6世紀後半）の須恵器壺身（14）、土師器鉢（15・16）、埋土中から滑石製白玉1点が出土している。なお、土師器鉢（16）は豎穴住居跡D11から出土した土器片と接合している。

#### 豎穴住居D11（第363図、図版83a）

D-1調査区の北端中央、A19c10区で検出した。北側は調査範囲外に伸びる。西側は豎穴住居D10に切られ、豎穴住居D12・25を切っている。検出面の標高はT.P.1.38mで、深さ0.16m

を測る。主柱穴、カマドなどは未検出である。

平面形は方形を呈し、長軸 2.9m 以上、短軸 1.4m 以上で、方位は N -64.5° - E である。

#### 竪穴住居 D 1 1 出土遺物（第 416 図 17・18）

床面下から II 型式 1 段階の須恵器坏身（18）、埋土中から II 型式 3 段階の須恵器坏身（17）、滑石製白玉 1 点が出土している。出土遺物から遺構の時期は 6 世紀後半頃と考えられる。

#### 竪穴住居 D 1 2（第 364 図、図版 83a）

D - 1 調査区の北端中央、A19c10 区で検出した竪穴住居で、壁溝 D 1 5 8 6 をもつ。北側は調査範囲外に伸びる。掘立柱建物 D 1 の柱穴 D 1 8 1 0、竪穴住居 D 1 1 に切られる。検出面の標高は T.P.1.38m、床面の標高は 1.26m で、床面までの深さ 10cm を測る。カマドは未検出である。

平面形は方形（台形？）を呈し、長軸 5.3m、短軸 3.4m 以上で、方位は N -23° - E である。ピット D 1 3 2 7・D 1 8 1 1・D 1 9 8 8 は主柱穴と考えられ、柱間寸法は 2.45m。柱掘方の径は 0.4 ~ 0.58m、平均 0.48m、深さは 0.34 ~ 0.49m で、平均 0.42m。

#### 竪穴住居 D 1 2 出土遺物（第 416 図 19 ~ 24、図版 257-4）

埋土内から II 型式 1 段階の須恵器坏蓋（19）、坏身（20・21）、壺（22）、土師器甕（23・24）、鉛滓（図版 257-4）が出土している。出土遺物から遺構の時期は 6 世紀前半頃と考えられる。

#### 竪穴住居 D 1 3（第 364 図、第 365 図、図版 92a・b）

D - 1 調査区の北端中央や西寄り、A19c・d10 区で検出した。竪穴住居 D 1 2 に切られる。また、掘立柱建物 D 1 と重複するが、前後関係は不明。検出面の標高は T.P.1.48m、床面の標高は 1.31 ~ 1.38m で、床面までの深さ 0.11 ~ 0.16m を測る。西辺のほぼ中央にカマド D 9 3 5 を設けている。主柱穴は未検出である。

平面形は方形と考えられ、規模は主軸方向 4.6m、直交方向 3.5m 以上で、主軸方位は W -5° - S である。カマド D 9 3 5 は長さ 0.8m 以上、幅 0.5m 以上を測る。土師器鉢（第 419 図 19）を倒立させて支脚としている。カマド床面（炭層下面）の標高は T.P.1.38 ~ 1.4 m。

#### 竪穴住居 D 1 3 出土遺物（第 416 図 28、第 419 図 19、図版 192）

床面から II 型式 1 段階の須恵器坏蓋（28）、土師器把手付き鍋、甕の小片が出土している。土師器鉢（19）はカマドの支脚で、口径 13cm、残存高 7.6cm を測る。頸部があまりくびれないタイプの鉢形土器で、全体に赤変している。口縁部は横ナデ、内面は斜めのハケメ調整の後、下半部にケズリを加え、外面は縦方向の細かいハケメ調整を施している。（28）の外面ヘラケズリ調整の範囲は丁寧で、広い。出土遺物から、遺構の時期は 6 世紀前半と考えられる。

#### 竪穴住居 D 1 4（第 366 図、図版 82b・97a）

D - 1 調査区の北半やや西寄り、A19d10 区で検出した。掘立柱建物 D 1 に切られる。カマド

D 1 5 6 9 と重複するが、前後関係は不明である。検出面の標高は T.P.1.43m、床面の標高は 1.3 ~ 1.34m で、床面までの深さ 9 ~ 13cm を測る。カマドは未検出である。

平面形は方形を呈し、規模は東西 3.45m、南北 3.5m 以上で、方位は N -11.5° - W である。ピット D 1 6 6 4 · 1 6 6 5 · 1 6 7 3 · 1 8 0 6 は主柱穴で、平均柱間は東西方向が 2.05 m、南北方向が 1.85m で、東西方向の柱間がやや長い。

柱掘方の平面はほぼ円形を呈し、径は 0.48 ~ 0.56m、平均 0.51m、深さは 0.41 ~ 0.52m で、平均 0.457m。柱痕跡は柱穴 D 1 6 6 5 · 1 8 0 6 で確認され、径 0.13 ~ 0.16m を測る。柱穴 D 1 6 6 4 から韓式系土器平底鉢（第 416 図 25）が横位の状態で出土した（図版 97a）。

#### 豊穴住居 D 1 4 出土遺物（第 416 図 25 ~ 27、図版 192・194）

床面から土師器甕（26・27）、埋土中より須恵器直口壺の口縁部片、製塙土器、土師器の小片、柱穴 D 1 6 6 4 からの韓式系軟質土器平底鉢（25）が出土している。（25）は口径 10.2cm、器高 9.35 cm を測る。口縁部はヨコナデ、体部外面は平行タタキメで、下半部をナデ消し、下端はヘラケズリ、内面はナデ調整。底部外面にロクロのゲタ痕が見られる。出土した須恵器は小片で、遺構の時期を特定できるものはなかったが、韓式系軟質土器平底鉢（25）から 5 世紀後半以前と考えられる。

#### 豊穴住居 D 1 5 （第 369 図、第 370 図、図版 88）

D - 1 調査区の北半やや東寄り、A19d9 ~ 10 区で検出した豊穴住居で、壁溝 D 1 5 2 5 をもつ。豊穴住居 D 1 4 の約 2.0m 東側に位置する。6 世紀後半～末頃の溝 D 1 0 9 7 に切られ、豊穴住居 D 1 7 · 2 5 を切っている。検出面の標高は T.P.1.41m、床面の標高は 1.19 ~ 1.29m で東に傾斜し、床面までの深さ 0.12 ~ 0.21m を測る。西辺の中央からやや南寄りにカマド D 1 4 3 4 を設けている。

平面形は方形を呈し、規模は主軸方向 4.9m、直交方向 4.9m で、主軸方位は W -4.5° - S である。ピット D 1 0 9 0 · 1 3 0 9 · 1 3 1 0 · 1 4 1 4 は主柱穴で、平均柱間は主軸方向が 2.475m、直交方向が 2.59m で、直交方向の柱間がやや長い。

柱掘方の平面は円形、隅丸方形を呈し、径は 0.34 ~ 0.58m、平均 0.46m、深さは 0.4 ~ 0.67m で、平均 0.523m。柱痕跡は柱穴 D 1 0 9 0 · 1 3 0 9 · 1 4 1 4 で確認され、径 12 ~ 16cm を測る。柱穴 D 1 3 1 0 から 6 世紀後半頃の須恵器環身（第 417 図 10・11）が出土した。

カマド D 1 4 3 4 は長さ 1.3m、幅 0.75m を測る。土師器甕（第 417 図 3）を倒立させて支脚としている。カマド床面（炭層下面）の標高は T.P.1.28m。

#### 豊穴住居 D 1 5 出土遺物（第 417 図 1 ~ 11、図版 192）

柱穴 D 1 3 1 0 から II 型式 3 段階の須恵器環身（10・11）、床面下から II 型式 2 段階の須恵器環身（9）、II 型式 2 段階の須恵器環蓋（7・8）、土師器甕（5・6）。カマド D 1 4 3 4 内から II 型式 2 段階の須恵器環身（1・2）、土師器甕（4）、滑石製臼玉 1 点。埋土中から須恵器・土師

器の小片とともに滑石製白玉3点が出土している。土師器甕(3)はカマドの支脚で、口径10.3cm、器高13.9cmを測る。出土した須恵器から遺構の時期は6世紀中～後半頃と考えられる。

#### 竪穴住居D 1 6 (第371図、第372図、図版90)

D-1調査区の中央、A19d9～10区で検出した。竪穴住居D 1 9、掘立柱建物D 2に切られている。検出面の標高はT.P.1.4～1.21m、床面の標高は1.29～1.40mで、東に傾斜し、床面までの深さ4cmを測る。東辺の中央から南寄りにカマドD 1 0 5 1を設けている。主柱穴は未検出で、当初より設けていなかった可能性が強い。

平面形は南辺が短い方形を呈し、規模は主軸方向3.7m、直交方向3.5mで、主軸方位はE-10°-Nである。なお、北辺の中央部は幅1.15m、長さ0.2mほど北側へ張り出している。

カマドD 1 0 5 1は、南側が竪穴住跡D 1 9によって削平されているが、長さ0.8m、幅0.43m以上を測る。土師器甕(第417図12)を倒立させて支脚としている。カマド床面(炭層下面)の標高はT.P.1.3m。

#### 竪穴住居D 1 6 出土遺物 (第417図12、図版192)

土師器甕(12)はカマドの支脚で、口径10.6cm、器高12.5cmを測る。やや肩が張っている。支脚の周りから土師器瓶・甕片、埋土中より5世紀後半の須恵器坏身片、土師器の小片が出土している。

#### 竪穴住居D 1 7 (第350図)

D-1調査区、A19d9区で検出した。輪郭は明らかでなく、規模は東西軸方向4.6m以上、直交方向1.2m以上で、主軸方位はE-10°-Nである。竪穴住居D 1 5に切られる。埋土より須恵器の甕片、滑石製白玉2点が出土している。

#### 竪穴住居D 1 8 (第373図、第374図、図版89b)

D-1調査区の東半部ほぼ中央、A19d～e9区で検出した竪穴住居で、壁溝D 1 9 6 2をもつ。竪穴住居D 1 9・2 0、掘立柱建物D 2、土坑D 1 6 1 7に切られている。検出面の標高はT.P.1.24m、床面の標高は1.14mで、東にやや傾斜し、床面までの深さ約0.1mを測る。北辺の中央やや東寄りにカマドD 1 5 3 4を設けている。

平面形は方形を呈し、規模は主軸方向4.9m、直交方向4.2m以上で、主軸方位はN-8°-Eである。柱掘方ピットD 1 8 6 2・1 9 6 1・1 9 6 3・2 0 0 2は主柱穴と考えられ、平均柱間は主軸方向が2.15m、直交方向が2.18mで、直交方向の柱間がやや長い。柱掘方の径は0.3～0.6m、平均0.48m、深さは0.27～0.51mで、平均0.418m。柱痕跡は柱穴D 1 8 6 2・1 9 6 1で確認され、径0.15～0.24m。

カマドD 1 5 3 4は煙道部を含めて長さ1.2m、幅0.75mを測る。土師器甕(第417図13)を

倒立させ、支脚としている。カマド床面（炭層下面）の標高はT.P.0.93m。

#### 竪穴住居D 1 8 出土遺物（第417図13～18、図版191）

床面直上からI型式5段階の須恵器坏身（17）、土師器長胴甕（16）、須恵器高坏蓋・身の小片が出土している（図版89b）。埋土中から土師器甕（18）、カマド内から小型土師器甕（14）、土師器甕（15）、土師器長胴甕、須恵器大型甕形土器の底部片などが出土している。土師器甕（13）はカマドの支脚で、口径12.6cm、器高15.7cmを測る。

なお、土師器長胴甕（16）はカマドの西側の床面直上から半裁されたような状況で出土していた。その底部はカマドD 1 5 3 4内から出土していることから、遺構廃絶直後の資料といえる。遺構の時期は床面直上から出土した須恵器坏身（17）から、5世紀後半頃と考えられる。

#### 竪穴住居D 1 9（第375図、第376図、図版89a・90a・b）

D-1調査区の東半部ほぼ中央、A19d～e9区で検出した竪穴住居で、壁溝をもつ。竪穴住居跡D 2 0、掘立柱建物D 2に切られ、竪穴住居D 1 6・1 8を切っている。検出面の標高はT.P.1.29m、床面の標高は1.21mで、北側へやや傾斜し、床面までの深さ8cmを測る。北辺のほぼ中央にカマドD 1 1 0 3を設けている。壁溝上面もしくは床面直上から6世紀後半の須恵器坏身（第418図2）が出土している。

平面形は方形を呈し、規模は主軸方向4.45m、直交方向4.43mで、主軸方位はN-18.5°-Wである。柱掘方ピットD 1 5 1 1・1 6 3 7・1 6 6 8・1 9 6 0は主柱穴と考えられ、平均柱間は主軸方向が2.28m、直交方向が2.67mで、直交方向の柱間がやや長い。柱掘方の径は0.46～0.55m、平均0.5m、深さは0.17～0.3mで、平均0.243m。柱痕跡は柱穴D 1 9 6 0で確認され、径0.12m。

カマドD 1 1 0 3は長さ約1.0m、幅約0.8mを測る。土師器甕（第418図4）を倒立させ、支脚としている。カマド床面（炭層下面）の標高はT.P.1.17m。

#### 竪穴住居D 1 9出土遺物（第418図1～5、図版192）

埋土中より上師器甕（1）、上師器長胴甕もしくは瓶片、須恵器の小片、砥石（第639図5）、カマドD 1 1 0 3内から土師器鉢（5）、甕（3）、製塙土器、壁溝上面もしくは床面直上からII型式3段階の須恵器坏身（2）が出土している。土師器甕（4）はカマドの支脚で、口径11.2cm、器高11.3cmを測る。遺構の時期は床面直上から出土した須恵器坏身（2）から、6世紀後半頃と考えられる。

#### 竪穴住居D 2 0（第377図、第378図、図版89a・90a・90d・96g）

D-1調査区の東半部ほぼ中央、A19d～e9区で検出した。基本土層の第13層中に掘り方があるが、南半部は削平されているため南側の平面プランをおさえることができなかった。A19d9区とA19e9区の間に設けた土層断面の検討によって、竪穴住居D 1 8・1 9、土坑D 1 6 1 7との前後関係は明らかで、それらを切っている。また、柱穴の切り合い関係より竪穴住居D 2 3、掘

立柱建物D 2・8に後出する。検出面の標高はT.P.1.21～1.27m、床面の標高は1.18～1.23mで、北にやや傾斜し、床面までの深さ4cmを測る。北辺のほぼ中央にカマドD 1 1 1 4を設けている。

平面形は方形を呈し、規模は主軸方向約4.7m、直交方向約5.4mで、主軸方位はN-12°-Wである。柱掘方ピットD 1 2 2 0・1 4 2 2・1 4 2 3・1 5 3 8は主柱穴で、平均柱間は主軸方向が2.13m、直交方向が2.38mで、直交方向の柱間がやや長い。柱掘方の径は0.45～0.6m、平均0.55m、深さは0.6～0.7mで、平均0.645m。

カマドD 1 1 1 4は煙道部を含めた長さ0.82m、幅0.78mを測る。土師器甕（第418図9）を倒立させ、支脚として甕を据え置く際に、径0.21×0.26m、深さ7cmの穴を掘り込んでいる。カマド床面（炭層下面）の標高はT.P.1.15m。

柱穴D 1 5 3 8からII型式4段階の須恵器坏蓋（第418図7）、床面よりII型式3段階の須恵器坏蓋（第418図8）が出土している（図版96g）。

#### 豊穴住居D 2 0出土遺物（第418図6～9、図版192）

柱穴D 1 5 3 8から土師器片、須恵器坏身の小片とともにII型式4段階の須恵器坏蓋（7）、床面直上よりII型式3段階の須恵器坏蓋（8）、カマドD 1 1 1 4内から土師器甕（6）、滑石製白玉1点が出土している。（8）は天井部の一部に赤色顔料が認められる。上師器甕（9）はカマドの支脚で、口径10.2cm、器高11.9cmを測る。底部はやや平底気味である。遺構の時期は、須恵器坏蓋から6世紀後半～末頃と考えられる。

#### 豊穴住居D 2 1（第381図、図版83b）

D-1調査区の中央やや南寄り、A19e9～10区で検出した。豊穴住居D 3・5に切られ、平面プランをおさえることができなかった。検出面の標高はT.P.1.5mで、D 1 4 2 1は豊穴住居D 2 1のカマドと思われる。内部から土師器甕（第418図10）、滑石製白玉7点が出土している。カマド床面（炭層下面）の標高はT.P.1.45mを測る。遺構の時期は遺構の切り合い関係から、5世紀中頃以前と考えられる。

#### 豊穴住居D 2 2（第350図、図版83b）

D-1調査区の中央やや南寄り、A19e9～10区で検出した。豊穴住居D 3・5に切られ、平面プランをおさえることができなかった。豊穴住居D 2 1と重複するが、前後関係は不明である。遺構の時期は遺構の切り合い関係から、5世紀中頃以前と考えられる。

#### 豊穴住居D 2 3（第379図、第380図、図版92c・83a）

D-1調査区の東端、A19e8～9区で検出した。豊穴住居D 2 0に切られ、土坑D 1 6 1 7、掘立柱建物D 8の柱掘方ピットD 1 9 0 1を切っている。検出面の標高はT.P.1.16m、床面の標高は1.02mで、床面までの深さ約14cmを測る。北辺のほぼ中央にカマドD 1 4 8 4を設けている。

A19e8 区と A19d8 区の間に設けた土層断面上に煙道部の一部が遺存している。床面からの須恵器は II 型式 3 段階の須恵器坏身の小片が出土している。

平面形は隅丸方形を呈し、規模は主軸方向 4.9m、直交方向 4.6m で、主軸方位は N -14° - W である。柱掘方ピット D 1 2 2 4 · 1 5 8 3 · 1 8 8 7 · 1 9 8 9 は主柱穴で、平均柱間は主軸方向が 2.06m、直交方向が 2.20m で、直交方向の柱間がやや長い。柱掘方の径は 0.46 ~ 0.64m、平均 0.528m、深さは 0.45 ~ 0.75m で、平均 0.598m。

カマド D 1 4 8 4 は煙道部を含めた長さ 1.2m、幅 0.7m 以上を測る。土師器甕（第 418 図 12）を倒立させ、支脚としている。カマド床面（炭層下面）の標高は T.P.0.97m。煙出しの標高 1.18m。

#### 竪穴住居 D 2 3 出土遺物（第 418 図 11 ~ 14、図版 191）

埋土中より須恵器無蓋高环（14）、土師器甕（11）、柱穴 D 1 5 8 3 から I 型式 5 段階の須恵器坏身（13）、移動式カマド片、カマド D 1 4 8 4 内より土師器長胴甕もしくは瓶が出土している。土師器甕（12）はカマドの支脚で、口径 11.4cm、器高 12.1cm を測る。遺構の時期は、床面直上から出土した II 型式 3 段階の須恵器坏身片から、6 世紀後半頃と考えられる。

#### 竪穴住居 D 2 5 （第 383 図、第 384 図、図版 91）

D - 1 調査区の北半部やや東寄り、A19c ~ d9 ~ 10 区で検出した竪穴住居で、壁溝 D 1 6 3 3 をもつ。竪穴住居 D 1 0 · 1 1 · 1 5 、溝 D 1 0 9 7 に切られる。検出面の標高は T.P.1.38 ~ 1.20m、床面の標高は 1.1 ~ 1.2m で、東にやや傾斜し、床面までの深さは残りの良いところで約 15cm を測る。北辺の中央にカマド D 1 5 9 8 を設けている。

平面形は方形を呈し、規模は主軸方向 5.25m、直交方向 4.8m 以上で、主軸方位は E -14° - N である。柱掘方ピット D 1 5 2 4 · 1 9 5 5 · 1 9 9 3 · 1 9 9 4 は主柱穴と考えられ、平均柱間は主軸方向が 2.4m、直交方向が 2.35m である。柱掘方の径は 0.35 ~ 0.48m、平均 0.398m、深さは 34 ~ 51cm で、平均 44.3cm。柱痕跡は柱穴 D 1 9 5 5 で確認され、径 10cm。

カマド D 1 5 9 8 は長さ 1.3m、幅 0.8m を測る。土師器甕（第 418 図 21）を倒立させ、支脚としている。なお、支脚として甕を据え置く際に、径 25 × 28cm、深さ 9cm の穴を掘り込んでいる。カマド床面（炭層下面）の標高は T.P. + 1.05m。

#### 竪穴住居 D 2 5 出土遺物（第 418 図 15 ~ 21、図版 191）

床面直上から須恵器坏身（17）、土師器甕（15）、床面直下から須恵器甕（18）、埋土中から 5 世紀後半の須恵器坏蓋（16）、器台脚部片（20）、滑石製臼玉 2 点、柱穴 D 1 9 9 4 から土師器甕の底部片。カマド D 1 5 9 8 内から土師器長胴甕（19）、滑石製臼玉 2 点が出土している。土師器甕（21）はカマドの支脚で、口径 13.2cm、器高 16.3cm を測る。出土した須恵器は I 型式 3 ~ 4 段階に相当することから、遺構の時期は 5 世紀中～後半頃と考えられる。

#### 竪穴住居 D 2 7 （第 385 図、図版 93a）

D-2 調査区の西端中央、A19d～e8 区で検出した。竪穴住居 D 2 8 に切られ、土坑 D 7 4 0 を切っている。検出面の標高は T.P.1.25m、床面の標高は 1.17m で、床面までの深さは残りの良いところで約 8cm を測る。カマドは未検出である。

平面形は方形を呈し、規模は南北軸方向 6.5m、直交方向 4m 以上で、主軸方位は N-19°-E である。柱掘方ピット D 7 1 4・7 1 6 は主柱穴と考えられ、柱間は南北軸方向が 3.0m である。柱掘方の平面はほぼ円形を呈し、径は 0.59～0.62m、平均 0.605m、深さは 0.44～0.56m で、平均 0.5m。

#### 竪穴住居 D 2 7 出土遺物（第 418 図 22、第 631 図 20）

埋土中より、II 型式 2段階の須恵器坏身（22）、有孔円板（第 631 図 20）、鉛滓、滑石製白玉 1 点が出土している。遺構の時期は、須恵器の型式から 6 世紀中頃と考えられる。

#### 竪穴住居 D 2 8（第 385 図、図版 93a）

D-2 調査区の西端中央、A19e8 区で検出した。竪穴住居 D 2 7・2 9 を切っている。検出面の標高は T.P.1.2m、床面の標高は 1.08m で、床面までの深さは残りの良いところで約 0.12m を測る。カマド、主柱穴は未検出である。

平面形は方形を呈し、規模は南北軸方向 6.0m、直交方向 4m 以上で、主軸方位は N-26°-E である。埋土中より、須恵器、土師器の細片が出土したが、遺構の時期を特定できるものや図化できるものはなかった。遺構の時期は遺構の切り合い関係から、6 世紀中頃以後と考えられる。

#### 竪穴住居 D 2 9（第 385 図、図版 93a）

D-2 調査区の西端中央、A19e8 区で検出した。竪穴住居 D 2 8 に切られ、上部は削平されている。検出面の標高は T.P.1.1m、床面の標高は 0.97m で、床面までの深さは残りの良いところで約 13cm を測る。カマド、主柱穴は未検出である。

平面形は方形を呈し、規模は南北軸方向約 5.0m、直交方向 3.0m 以上で、主軸方位は N-35°-E である。埋土中より、須恵器、土師器の細片、馬の右上顎臼歯が出土しているが、遺構の時期を特定できるものや図化できるものはなかった。遺構の時期は遺構の切り合い関係から、6 世紀中頃以前と考えられる。

#### カマド

##### カマド D 1 1 4 0（第 382 図、図版 92f・94b）

D-1 調査区の北東、A19d9 区で検出した。竪穴住居 D 1 5 の約 4m 東側に位置する。規模は長軸 1.0m 以上 × 短軸 0.7m 以上で、主軸方位は W-3°-N である。床面（炭層下面）の標高は T.P.1.15m を測る。支脚の有無については不明で、周辺から土師器長胴甕（第 419 図 18）、滑石製白玉 1 点が出土している。

## カマド D 1 4 2 7 (第 367 図、図版 93b)

D - 1 調査区、A19d10 区で検出した。竪穴住居 D 1 4 の約 0.1m 南東側に位置する。規模は長軸 0.6m 以上 × 短軸 0.3m 以上で、主軸方位は N -3° - W である。床面(炭層下面)の標高は T.P.1.38 ~ 1.4 m を測る。カマド内壁幅は約 0.27m と小振り。壺(第 419 図 20)は口径 15.8cm で、支脚として使用されたものと考えられる。

## カマド D 1 5 6 9 (第 368 図、図版 92d)

D - 1 調査区、A19d10 区で検出した。竪穴住居 D 1 4 に重複しているが、前後関係は不明である。柱穴 D 1 3 4 4 に切られる。規模は長軸 0.8m 以上 × 短軸 0.65m 以上で、主軸方位は E -10° - N である。床面(炭層下面)の標高は T.P.1.32 m を測る。土師器の細片が出土したが、遺構の時期を特定できるものや図化できるものはなかった。

## 掘立柱建物

北西居住域で検出した竪穴住居は 16 棟で、5 世紀のもの 5 棟、6 世紀のもの 6 棟、時期不明 5 棟である。D - 1 調査区では掘立柱建物は 12 棟、D - 2 調査区では 4 棟検出している。

## 掘立柱建物 D 1 (第 386 図、図版 93b・96b)

D - 1 調査区の A19c・d10 区。梁間 3 間 (5.11m) × 衍行 3 間 (6.19m) で、主軸は N -1.5° - W。床面積は 31.60 m<sup>2</sup>。検出面の標高は T.P.1.48m を測る。竪穴住居 D 1 2 ・ 1 4 、溝 D 1 3 2 5 を切っている。柱穴 D 9 3 1 ・ 9 3 7 ・ 9 4 1 ・ 9 4 2 ・ 1 0 0 1 ・ 1 0 0 4 ・ 1 0 0 6 ・ 1 0 1 8 ・ 1 0 2 3 ・ 1 2 8 9 ・ 1 3 2 8 ・ 1 3 2 9 ・ 1 6 9 2 ・ 1 8 1 0 で構成される。

衍行の柱間は西側柱列で北から 2.7m・1.6m・1.89m、東側柱列は北から 2.66m・1.7m・1.93m である。梁間の柱間寸法は平均 1.70m である。なお、衍行の北側 1 間分の寸法は広いため途中に束柱(D 1 2 8 9 ・ 1 8 1 0)と考えられる浅い柱穴が設けられている。この柱穴を考慮すると衍行は 3.5 間となる。

柱掘方の平面形は円形、隅丸方形を呈し、束柱を除くと、一辺 0.44 ~ 0.6m で、平均 0.52m、深さは 0.37 ~ 0.74m で、平均 0.498m を測る。柱痕跡は柱穴 D 9 3 1 ・ 9 3 7 ・ 9 4 2 ・ 1 0 0 6 ・ 1 0 1 8 ・ 1 3 2 9 ・ 1 6 9 2 で確認され、径 0.12 ~ 0.18m で、平均約 0.15m。

## 掘立柱建物 D 1 出土遺物 (第 419 図 1・2)

柱穴 D 9 3 1 から土師器壺(1)、II 型式 3 段階の須恵器坏蓋(2)・坏身片が出土している(図版 96b)。柱穴 D 1 0 0 6 から須恵器、製塙土器の小片が出土している。これらの土器から、建物廃絶の時期は 6 世紀後半頃と考えられる。

## 掘立柱建物 D 2 (第 387 図、図版 94a)

D - 1 調査区の中央やや東寄り、A19e ~ d9 区で検出した。梁間 3 間 (4.6m) × 衍行 4 間 (6.41m)

で、床面積は $29.43\text{m}^2$ 。主軸方位はN-85°-Eで、検出面の標高はT.P.1.32m。平均柱間は梁間が $1.53\text{m}$ 、桁行で $1.60\text{m}$ を測る。柱穴D 1 0 4 9・1 0 5 6・1 0 6 2・1 1 0 1・1 1 0 6・1 1 0 7・1 1 0 9・1 1 6 5・1 3 4 9・1 6 9 9・1 8 0 0・1 8 3 0・1 8 3 5・1 8 3 7で構成される。竪穴住居D 2 0に切られ、竪穴住居D 1 6・1 9・1 8を切っている。

柱掘方の径は $0.5\sim 0.85\text{m}$ で、平均 $0.69\text{m}$ 、深さは $0.44\sim 0.73\text{m}$ で、平均 $0.61\text{m}$ 。柱痕跡は柱穴D 1 1 0 1・1 1 6 5・1 3 4 9・1 6 9 9で確認され、径は $0.15\sim 0.22\text{m}$ を測る。柱穴D 1 0 6 2・1 1 0 6・1 3 4 9では底に木片が確認され、柱材もしくは礎板の痕跡と考えられる。

また、柱穴D 1 1 0 6・1 3 4 9では柱痕跡が柱穴底面に沈み込む様子が観察された。

#### 掘立柱建物D 2 出土遺物（第419図3～6）

柱穴D 1 1 0 9から須恵器坏蓋（4）・坏身（6）、柱穴D 1 1 0 7から土師器甕片（3）・韓式系土器平底鉢（5）が出土している。掘立柱建物D 2の廃絶の時期はII型式3段階の須恵器坏蓋（4）から6世紀後半頃と推定される。

#### 掘立柱建物D 3（第388図、図版94b）

D-1調査区の北東隅、A19c～d8・9区で検出した。梁間2間（3.5m）×桁行2間（3.65m）の総柱建物で、主軸はN-0.5°-W。検出面の標高はT.P.1.10mを測る。床面積は $12.78\text{m}^2$ 。平均柱間は梁間が $1.74\text{m}$ 、桁行が $1.81\text{m}$ 。柱穴D 1 1 2 3・1 1 2 6・1 1 2 9・1 1 3 2・1 1 3 6・1 1 3 8・1 1 5 5・1 1 5 9・1 3 7 1で構成される。掘立柱建物D 4と重複するが、前後関係は不明。

柱掘方の径は $35\sim 73\text{cm}$ 、平均 $60\text{cm}$ 、深さは $36\sim 63\text{cm}$ で、平均 $49\text{cm}$ 。柱痕跡は柱穴D 1 1 2 3・1 1 2 6・1 1 2 9・1 1 3 2・1 1 3 6・1 1 3 8・1 1 5 9・1 3 7 1で確認され、径は約 $20\text{cm}$ 。また、柱穴D 1 1 2 3・1 1 2 9・1 1 3 2・1 1 3 6・1 1 3 8・1 1 5 9・1 7 3 1では柱痕跡が柱穴底面に沈み込む様子が観察された。

#### 掘立柱建物D 3 出土遺物（第419図7～9）

柱穴D 1 1 5 5からII型式2段階の須恵器坏蓋（7）、柱穴D 1 1 2 9の掘方から5世紀後半の須恵器坏身（8）、柱穴D 1 1 3 2の掘方からロクロ使用の須恵器系土器高坏（赤焼き系土器）の坏身片（9）が出土している。（8）は混入と考えられ、建物廃絶の時期は坏蓋（7）から6世紀中頃と推定される。

#### 掘立柱建物D 4（第389図、図版94b）

D-1調査区の北東隅、A19c～d8～9区で検出した。掘立柱建物D 3と重複するが、前後関係は不明である。梁間2間（2.68m）×桁行2間以上（3.8m以上）の総柱建物で、東側は調査区外に伸びる可能性。主軸方位はN-89°-W。検出面の標高はT.P.1.08mを測る。床面積は $10.18\text{m}^2$ 以上。平均柱間は梁間が $1.34\text{m}$ 、桁行が $1.90\text{m}$ 。柱穴D 1 1 2 5・1 1 2 8・1 1 3 1・

1134・1419・1496・1499・1596・1956で構成される。

柱掘方の径は0.25～0.53m、平均0.41cm、深さは0.29～0.59mで、平均0.389m。柱痕跡は柱穴D1596で確認され、径0.1m。各柱穴から出土した土器は、いずれも細片で図化することが出来ない。このため所属時期については明確に判定できないが、5～6世紀と考えられる。

#### 掘立柱建物D5（第390図、図版83b）

D-1調査区の中央、A19d～e10区で検出した。梁間3間（4.06m）×桁行3間（4.95m）で、床面積は20.07m<sup>2</sup>。主軸方位はN-90°-Wで、検出面の標高はT.P.1.48m。平均柱間は梁間が1.35m、桁行で1.65mを測る。柱穴D995・1040・1045・1053・1067・1068・1069・1071・1335・1343・1411・1514で構成される。柱穴D995に柱材が残る。柱材の樹種はヒノキ（芯持ち材）で、径15.4cm、残存長は43.4cmである。

柱掘方の径は0.4～0.7m、平均0.57m、深さは0.24～0.67mで、平均0.434m。南東隅の柱穴D1067は竪穴住居D3の主柱穴ピットD1658を切っている。

#### 掘立柱建物D5出土遺物（第419図10）

柱穴D1514から出土した土師器壺の口縁部片（10）以外は、細片のため図化できない。このため所属時期については明確に判定できないが、5～6世紀と考えられる。

#### 掘立柱建物D6（第391図）

D-1調査区の南東隅、A19e～f9区で検出した。掘立柱建物D7・8、竪穴住居D8を切っている。梁間3間（4.61m）×桁行3間（5.31m）で、床面積は24.48m<sup>2</sup>。主軸方位はN-5.5°-Eで、検出面の標高はT.P.1.25mを測る。平均柱間は梁間が1.54m、桁行で1.77mを測る。柱穴D1185・1186・1199・1205・1554・1555・1557・1578・1898・1915・1917・1927で構成される。

柱掘方の径は0.39～0.7m、平均0.57m、深さは0.29～0.59mで、平均0.41m。柱痕跡は柱穴D1927で確認され、径0.16m。柱穴D1205・1557・1578で柱材が残存していた。柱穴D1205の柱材（ヒノキで、二方正状）は径13cm、残存長33.1cm。柱穴D1557の柱材は残存不良。柱穴D1578の柱材は径10cm、残存長35cm。なお、柱穴D1199からは礎板（ヒノキ、板目、みかん割・削出）を検出している。

#### 掘立柱建物D6出土遺物（第419図11）

柱穴D1917から出土した土師器高环脚部片（11）以外は、細片のため図化できない。このため所属時期については明確に判定できないが、5～6世紀と考えられる。

#### 掘立柱建物D7（第392図）

D-1調査区の南東隅、A19e～f8～9区で検出した。掘立柱建物D6に切られている。梁間

2間(3.39m)×桁行2間(3.50m)の総柱建物で、東側は調査区外に伸びる可能性もある。主軸方位はN-13°-Wで、検出面の標高はT.P.1.24mを測る。床面積は11.87m<sup>2</sup>。柱穴D1192・1194・1204・1207・1253・1550・1848・1849・1875で構成される。

柱掘方の径は0.24～0.58m、平均0.39m、深さは0.3～0.61mで、平均0.415m。柱痕跡は柱穴D1192・1253で確認されている。

#### 掘立柱建物D7出土遺物（第419図14）

柱穴D1194から出土した5世紀後半と考えられる須恵器高环の脚部片（14）以外は細片のため図化できない。

#### 掘立柱建物D8（第393図、図版97d）

D-1調査区の西端、掘立柱建物D7の約1m北側、A19e8～9区で検出した。柱穴D1880は掘立柱建物D6の柱掘方柱穴D1205、柱穴D1832は豎穴住居D20の主柱穴柱穴D1538、柱穴D1901・1894は豎穴住居D23の主柱穴D1887・1224に切られる。

梁間3間(4.78m)×桁行3間(6.30m)で、床面積は30.11m<sup>2</sup>。主軸方位はN-74°-Eで、検出面の標高はT.P.1.21m。平均柱間は梁間が1.59m、桁行で2.10mを測る。柱穴D1212・1216・1446・1542・1545・1832・1880・1885・1891・1894・1900・1901・1974で構成される。

柱掘方の径は0.33～0.83m、平均0.549m、深さは0.34～0.59mで、平均0.44m。柱痕跡はD1894で確認されている。2つの柱穴で礎板が検出された。柱穴D1891では3個の板材（図版97d）、柱穴D1901では2個の板材を礎板として利用していた。

なお、柱穴D1542・1216については東柱もしくは間仕切りとしての機能を考えている。あるいは、西側に一間分拡張する以前の西側梁間部分に相当する可能性も考えられる。

#### 掘立柱建物D8出土遺物（第419図12・13）

柱穴D1891から土師器鉢（12）、柱穴D1545から製塙上器（13）以外は細片のため図化できない。時期は5世紀後半頃と考えられる。

#### 掘立柱建物D9（第394図、図版95a）

D-2調査区の北西、A19d～e7～8区で検出した。梁間2間(3.03m)×桁行2間(4.03m)で、床面積は12.19m<sup>2</sup>。主軸方位はN-42°-Wで、検出面の標高はT.P.1.23m。平均柱間は梁間が1.51m、桁行で2.02mを測る。柱穴D549・552・568・583・585・654・655・657で構成される。

柱掘方の平面はほぼ円形を呈し、一辺0.3～0.65m、平均0.42m、深さは0.2～0.43mで、平均0.31m。柱穴の切り合い関係から、掘立柱建物D9は掘立柱建物D10より後出する。